徳川家康
山岡荘八
18
関ヶ原の巻
講談社文庫

講談社文庫

定価480円

徳川家康(とくがわいえやす) 18 関ケ原の巻

山岡荘八(やまおかそうはち)

昭和49年8月15日第1刷発行
昭和57年8月31日第26刷発行

発行者　三木 章

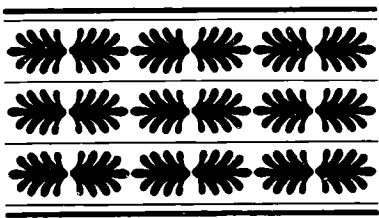
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112
電話　東京（03)945-1111(大代表)
振替　東京 8-3930

デザイン　亀倉雄策
製　版　豊国印刷株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社国宝社

ISBN4-06-131218-9

講談社文庫

徳川家康 18 関ヶ原の巻

山岡荘八

講談社

目次

挿絵　木下二介

徳川家康

18

関ケ原の巻

静かなること

一

家康は八月四日に小山を発って江戸へ入ると、そのまま暫く城内に腰を据えた。
小山を発する時になって、
「――そちも秀康に付いていてくれ」
鳥居新太郎忠政に、軽くいって残して来たので、人々は蒲生秀行や小笠原秀政だけでは心もとない、それで残して来たものと思っていた。
ところが江戸についた翌々日、八月七日の夕刻になって、それが何のためであったかハッキリとのみ込めた。
その時家康は料理の間で、鶴を煮ながら、本多正信と、板坂卜斎、全阿弥などのお伽衆相手に閑談していたのだが、そこへ八月一日に伏見は落城し、鳥居元忠は壮烈な戦死をとげたという知らせが届いた。
詳細をきわめたその手紙は、茶屋四郎次郎と本阿弥光悦の双方からだった。
家康は自から封を開いてそれを読むと、小さく何度もうなずいて、

「新太郎は殺さぬぞ。安心してくれ」
「何となされたのでござりまする？」
手紙の内容を知らない本多正信が問い返すと、
「この一日に、伏見は落ちていたぞ」
ポツンといって、あわてて席を立っていった。
眼のふちがまっ赤になり、いまにもこぼれそうに涙が盛り上がっていた。人々は顔を見合ってうなずきあった。
鳥居元忠が討死したのに違いない。それで、その子の新太郎忠政は殺さぬぞと……
「すると上様は、会津方面では、大した戦はないとご覧なされておわすので」
と、卜斎がいった。
「そうかも知れぬ。新太郎は殺さぬぞと、たしかに漏らされたからの」
正信は、これも暗然とした面持で、
「有難いお心じゃ。何よりの供養であろう」
そう呟いて、それなりしばらく黙りこんだ。
元忠と家康の、主従というより兄弟のような幼いおりからの結ぼれは、正信にもよくわかっているからだった。
「それではいよいよ上様も西へご進発なされまするなあ」
「そうでござりましょうとも。伏見が落ちては抛ってはおけますまい。大事な堰を切られたのでござりまするゆえ」

卜斎と全阿弥だけではなく、本多正信もそう思った。家康の胸中で当然悲しみがはげしい怒りに変ってゆくと判断したからだった。

すでに小山を先発した豊家の旧臣たちは、駿河を過ぎて、遠江から東三河へかかっている頃であろう。

(伏見が落ちたのでは一刻の猶予もなさるまい!)

敵もまた勢いに乗じて近江から美濃に進出して来るのは知れきっていたし、徳川家の家中でも諸将に続いて、本多忠勝と井伊直政はすでに西上している。

この両人は両軍衝突となれば当然軍監の任務を果たすことになるのである。

(到頭これで眉に火が点いたぞ!)

側近の者の予想は一つになった。

ところが、間もなく涙を納めて料理の間に戻って来た家康は、西上のことには一言もふれなかった。いや、その日だけではない。味方の諸将が清洲の福島正則の城に着いたという知らせが届いても、岐阜の織田秀信が敵方に呼応したと知っても、一向に腰をあげようとしなかった。

二

清洲城から何度か西上を促して使いがやって来た。しかし家康はいぜんとして動かない。

そうなると側近の間でもいろいろと家康の心事を臆測する者が出はじめた。

何れ深い思案があってのこと……とは信じながら、わざわざ敵に時を稼がすことの不利が、次第にみんなをいら立たせてくるからだった。

「――やはり上様は、治部少（三成）の武力よりも、上杉の武力を重く見てござるのじゃ」
「――そうかも知れぬ。実はの、小山までおいでの時に、采配をお忘れなされ、とある竹藪のわきをご通行のおり、細竹一本切らせて采配をお作りなされた」
「――それとこんどの事とかかわりあるのか」
「――いや、あとを聞け。そして小山にある間は、その細竹の采配をお持ちなされていたが、帰途またその藪のそばをお通りなされた節、思い出されて、その采配をお捨てなされた。治部少と戦うのに、采配などはいらぬと仰せられてな」
「――ほう、采配などいらぬと仰せられたか。では、やっぱり上杉を重く見て、その出方を見定めようとしておわすのじゃ」
「――おれはそうは思わぬ。上杉勢は守どの（秀康）に睨まれて動く気配はないではないか。守どのはあのご気性ゆえ、上杉景勝に堂々と正面から手紙をやられたそうな。お許も謙信以来の家柄を誇る武将ながら、われ等もまた、家康が子にして、太閤に養われ、いささか誇りを持つものなり、何時にても遠慮なく仕掛けられたい。若年ながら秀康、何時たりともお相手仕ろうと……それに対して景勝からも返書があったと聞く。上杉景勝は、ご尊父の留守を狙って戦を仕掛けるような卑怯者ではないと……それゆえ上杉を警戒しているのではなく、これは北国から九州のはずれまで、あらゆる人々の動きを見きわめ、叩くべきものは一挙にこれを叩く気であろうぞ」
「――いやいや、それもものの一面ながら、すべてではない。上様は凡人には測り知れない遠大な神謀のお方じゃ。伏見を落とされて凡人ならば必ず怒る。怒って出てゆくと却って敵の結束を

固くする。治部少は烏合の勢ゆえ、怒る時に怒らなんだら、拍子抜けして逆に疑心暗鬼のとりこになる。つまり敵の結束のゆるみを待っておわすのじゃ」
「——しかし、そのために、清洲の城にある味方の諸将が気抜けしたら何とするのだ。みなみな軍費に困って、短気な福島どのなど、何故ご出馬なされぬかと、怒りだしているそうな。やはりここは出てゆくべきじゃ。ものには汐時ということがある」
諸説は一応家康を信じながらも、心では西上を急いでいるのは否めなかった。
こうしてついに八月も半ばとなった。しかし家康は、いぜん腰をあげようとせず、却って逆に風邪気味で当分西上出来なそうだといいだした。
むろん、考え無くていい出したことではない。
はじめは家康も、江戸に一、二泊して、すぐさま出馬する気であった。すでに東国の手配にも、足もとの固めにも手落ちはない。それが小山からの帰途、ふっと一つの反省にぶつかって、
(これは急くまいぞ！)
自分で自分をもう一度きびしく見詰め直す気になったのだ……

三

それは側近の人々の話題になっている、小山からの帰途、手作りの采配を捨てたおりのことだった。
場所はたしかに栗橋の近くの、路傍の竹藪であった。小山へ赴くおりに、采配を忘れて来ていたことに気付き、采配も持たぬといっては士気にかかわる……ふと頭に泛んだままその藪から小竹を

切らせ、自分で紙を細く切って作ったものだ。その形ばかりの采配が、帰途もまだ自分の掌中に握られてあったのを見ると、

（これでよいのだろうか？）

家康はひやりと自分を振返る気になった。

采配が不安だと思ったのではない。今度の騒動に対する自分の態度が、私情私憤による汚れた野心の采配ではなかったかと反省したのである。

私情や野心の采配だったら、それは多くの「無理——」を含む。無理は一時の小康はもたらし得ても、何時かは崩れ去るものだった。

覇業の中途で倒れた信長の無理。

大陸遠征を企てて、それが死期を早める結果になった秀吉の無理……

いままた家康の思案の奥に彼等と同じ無理はないであろうか？　そう思った瞬間に、家康は手作りの采配をぽいと以前の藪に返したのだった。

それを誰かが、何うして捨てるのかといぶかったゆえ、

「——石治少に向うに采配は不要」

と答えたのだ。いい換えれば、戦場の指揮だけで天下の泰平は招来出来るものではない。実際に人々を心服させ得るだけの「徳——」と、自然の意志に叶う真理が背後に必要なのだという意味だった。

こうして采配を捨てた時から家康の心は一段とひらけて来た。

小山にあったおりも、善悪一切の情報はこれを諸将にかくさなかった。

て来た。
しかし、諸将がまだ家康を恐れているのは、その実力であり、過去の戦歴であった。
したがって、家康が、彼等に続いて西上し、もし陣頭に立って采配を振ったとすれば、彼等は否応なしに戦わせられる結果となる。否応なしに戦わせられたあとに何が残るかは、第二の朝鮮出兵で、家康が痛いほどハッキリと知らされて来ていることであった。
今度の騒動も、実はその第二の出兵の「無理――」が原因で引起されたものといってよい。戦う者同士の間に不和が生じ、更に、文治派と武断派の憎悪はこれで救いがたいものになった。
その上、戦功の報告、論功行賞への不満がからんで、太閤の生涯の功を一挙にみにくい派閥争いの泥沼へ引きおろしてしまったのだ……
(采配は、持たぬがよい……)
いや、この場合の「采配の持主――」は、家康個人ではなくて、どこまでも泰平を築こうとする万人の意志であり、歴史の流れの方向でなければならないと反省したのだ。
仮りに家康がここで不慮の病いに倒れたとしても、それはそれなりに時代の「力――」となり得るもの……それが実は眼に見えぬ采配をつねに振りつづけていたのだと悟ったのだ。
家康が、その反省に従って、敢えて出陣を急がず、清洲へ使者を出したのは八月十四日、使者には村越茂助直吉が選ばれた。

四

「清洲からの催促がしきりゆえ、村越を使いに出そう。呼んで呉れ」
そういわれた時に、本多正信も、その子の正純も顔を見合わせた。
催促しきりというよりも、すでに福島正則などは怒気を見せているという内報が届いている。
「――内府は、いまさらになって臆病風に吹かれておわすのか。さりとは情無いお方じゃ」
その筈だった。清洲を中心にして結集している諸将は、福島正則と池田輝政を先鋒にして、黒田長政、細川忠興、中村一栄、浅野幸長、堀尾忠氏、京極高知、加藤嘉明、田中吉政、筒井定次、藤堂高虎、山内一豊、金森長近、一柳直盛、徳永寿昌、九鬼守隆、有馬則頼、同豊氏、水野勝成、生駒一正、寺沢広高、西尾光教などのほかに、徳川家の本多忠勝、井伊直政が軍監格で加わって、家康の到着を今か今かと待ちかねているのだから……
（そうした状況の中へ使者として、人もあろうに、村越茂助直吉とは……？）
それが父子のおどろきだったのだ。
正信は、家康が出発をのばしている原因を、彼は彼なりに解釈していた。
用心深いうえにも用心深い家康はここでじっと前田利長や、毛利一族の吉川広家、肥後の加藤清正などの動向を見きわめようとしているのだと考えていた。
事実、江戸へ着いてから家康は、それ等の人々に、それぞれ手紙を寄せたり、連絡をとったりはしているのだが……
しかし、清洲への使者に村越茂助となると、正信の判断力の埒外へ大きくそれる人選だった。

村越は無筆無学というよりも、他人の前へ出て、満足に口の利ける男ではなかった。外交などには凡そ不向きな、頑固な愚直者で、もし敢えて美点を探せば律義さでもあろうか。この相手に喰いつけと命令されたら、ほんとうに噛みついて死んでも離さぬ男……いやそれは人違いだといったところで、いったん噛みついたら何うにもなるまいと思われるような男であった。

したがって、清洲へここで使者を送るとすれば、自分か、それとも伜の正純か、永井直勝では少し荷が……そう思っていたところだけに訊き返さずにはいられなかった。

「あの、村越茂助を清洲へ遣わされまするので……？」

「そうだ。こうした使者にはあれが向こう。呼んで参れ」

それから板坂卜斎を手招いて、先ず手紙を認めさせた。

本多正純は、父が村越を呼びに行っている間、

（ははあ、すべては手紙の中へ認めて、口上の要はないものとなさるお心か……）

口を利かせぬ気ならば、無口な村越は適任者に違いない。才気走って余計なことなどいおうとしてもいい得ない男なのだ。

そう判断してホッとした。

ところが卜斎が筆硯を構えて家康の口述を求めると、家康の口上はたった五行で終わった。

「其許の模様知りたく仕りて、村越茂助を以って申候。御談合候て、仰せ越さるべく候。出馬の儀は油断これなく候。お心易かるべく、委細口上をもって申候」

「これで終りでござりまするか!?」

思わず正純は、眼を丸くして家康に向き直った。

五

「委細は口上で申し候。手紙はそれだけでよかろう」
　家康が、そう答えて、宛名は、先手の福島正則と池田輝政の陣中とし、署名をして封をするように卜斎に返したところへ、本多正信は村越茂助を伴って戻って来た。
「村越か」
「は……は……はいッ」
　村越茂助は緊張してどもった。或いは本多正信に、あまり難しい使者であったらお断わりするようにとでもいわれて来たのかも知れない。
「そち、ご苦労ながら清洲まで参って呉れ。そちで無ければならぬ使者じゃ」
「あの、それがしでなければ……」
「そうじゃ。そちは余計なことはいわぬ男だ」
「はいッ」
「ただし、申せと命じられた口上は忘るるではないぞ」
　村越茂助はじろりと本多正信の方を見てから、
「はいッ」
　と、途方もなく大きな声で答えた。家康はニコリと笑ってうなずいたが、正信も正純も、いや、卜斎までが固くなって息をこらしている。
「よいか。忘れぬように肝に銘じておくがよい。そちが、この手紙を持って参ると、兵部（井伊

直政）や中務（本多忠勝）は心配してな、先に口上を聞かせよとか、手紙の内容を知らぬかとか申すに違いない。その折には正直にいえ」

「ははッ」

「手紙の内容はそちは知らぬ。知らぬゆえ知らぬ。口上はこれから申し聞かせるゆえ知っている。しかし、これは、福島・池田両将の前でなければ申し上げられぬといえ、他の者に聞かせることは断じてならぬぞ」

「心得ました」

「よし、口上じゃ。忘れるなよ。各ゝさま、数日のご在陣、まことにご苦労に存じまする」

「はいッ、おのおのさま数日のご在陣……」

「内府さまこの表へご出陣のこと、いささか遅れましたが、このほど、少し風邪気味ゆえ、しばらくご出馬なりがたし」

「すると、すると、上様には、まことお風邪でござりまするか」

「そうじゃ風邪じゃ」

家康はきびしい顔でうなずいて、

「つきましては諸氏が大軍を擁しながら手を拱いて時を過して居らるる事、まことに不思議千万でござる」

村越茂助は、反誦しながら、まさにその通りだと思った。

高麗で誰の指図も受けぬといって散々に戦って来た人々が、こんどだけは、家康が行かなければ戦いが始められぬという道理はない。第一、指図したとて彼等は、三成のいうことなど少しも

聞かなかった連中ではないか。

「この所に、何時まで晏如として居られるおつもりか。後詰は必ず致しましょうほどに、速かに木曾川を越えてお進みなされ。諸氏がさっさとご出馬なされば、上様もご出馬せねば済まぬところ、この儀、口上しかと申入れまする」

家康はそういって、じっと茂助を見つめてゆく。

「まことにその通りで！」

茂助は、わかりましたというべきところを感嘆共鳴の声で応じた。

「わかったの」

「わからいでか。なるほどこれはお道理でござりまする」

本多正信は、ホーッと大きくため息した。

六

「――使者を清洲へ」

というのだから、当然これは、家康の出馬の遅れを弁解するための慰問使だと、正信父子も思っていた。

ところが、今聞けば、それは全く逆であった。慰問どころか、何故木曾川を越えて、岐阜の織田秀信を早く叩かぬのかという詰問の使者ではなかったか……

これを聞いたら、短気な福島正則は、カンカンになって怒るだろう。

しかし、よく考えてみれば、これは村越茂助のいうとおり、まさに「道理――」であった。

戦は家康一人のためにするのではない。

いや、家康自身は今更、戦などせずに済めば、その方がずっと得な立場にあるのだ。

誰と争わなくとも、すでに家康の実力は日本一……

正信は家康と茂助を見比べながら、

(又一つ訓わったぞ！)

肚の底からしみじみと頭の下がる想いになった。

ほんとうに筋を通そうとするのだったら、家康が先に立って戦うべき理由はなかった。

家康は公平に、一段と高所にあって、三成一派と武将派とのあつれきを眺めている。

したがって両者の騒動が武力の激突になったおり、先ずその正邪の判断に従って、討つべきものを討ち、懲らすべきものを懲らす……それが、秀吉に後を託された指揮者としての、当然の見識でなければならぬ筈であった。

しかもこの筋を通しておくためには、使者は、なまじ才覚を弄ぶ智将である必要はなかったのだ。

村越茂助は、その意味では、全く申し分のない正直真ッ向の律義者……恐らく彼は、誰が何といおうと主命をそのまま果たしてゆくに違いない。

「わかったの村越、わかったら直ぐに用意して発たっしゃい」

「かしこまりました」

そういってから茂助はもう一度口の中で呟き返した。

「全くでござる。敵前で手を拱いているという話はござらぬ」

を繰り出した。
家康は笑いもせずにそれを見送って、茂助の姿が廊下に消えると、何を考えてか、しきりに指
こうして村越茂助直吉が江戸を発った翌日、即ち八月十五日には、西軍もまた宇喜多秀家が兵一万を引きつれて大坂を発し、続いて十七日には小早川秀秋が大坂を発って、近江の石部に着陣した。村越茂助が、三河の池鯉鮒で、柳生又右衛門宗矩（後の但馬守）に行き会ったのは十九日の早朝だった。
又右衛門は清洲から本多忠勝と井伊直政の密命を受け、馬を馳せて茂助が宿を立ち出ようとしているところへ駈けつけた。
「しばらく待たれよ。お話し申したい儀がござる」
柳生宗矩は、村越茂助の剣道の師にあたる。それだけにひと目宗矩を見ると、茂助は野袴の裾をたたいてニヤリとした。
「これは苦手の方が見えたぞ」
「何といわれたのじゃ。火急の用ゆえ、しばらく出発を延ばされたい」
「かしこまってござる。しかし、使者の口上ならば忘れました」
二人は出かかった宿をもう一度茂助の泊った部屋へ引っ返して向い合った。

七

「お身は清洲の空気をご存知あるまい。井伊どのも、本多どのも、殊の他にご心配なされての。われ等をわざわざここへ寄こされたのじゃ」

柳生宗矩は、家康からの密命で、伊賀甲賀の近辺に小山から先発して来ていたのだ。若しも両軍激突のおりには父の石舟斎を動かし、今日のゲリラ戦を展開して、西軍の背後をおびやかすのが彼の役割だった。

むろん彼はすでにその手筈を終って清洲へ来ていたのだが……この時宗矩は二十九歳、父の石舟斎宗厳は七十二歳。父子とも家康に心服し、諸将もまた彼等に一方ならぬ信頼を寄せている。

宗矩が精力的な眼を細めて、清洲の空気を語りだすと、村越茂助は、真剣な顔になって脇を向いた。若し、その話が、自分の胸にひびいて来て、何か洩らしそうになってはと、その警戒でいっぱいなのだ。

「よいかの村越どの、諸将は上様が直ぐにも西上なされて火蓋を切られるものと思うていた。ところが、すでに今日は十九日じゃ。お身が使者として西上され、上様はまだ腰をあげさせられぬ。いったい上様は、何を考えておわすのか……？　福島どのなどは、われ等を劫の立替になさるのかと、プリプリしておわす」

劫の立替というのは囲碁の劫で、見捨てるかとの意味である。

「そのようなことはないと、池田どのが押えようとされて、そうそうあれは十四日、もう少しで刃物三昧にも及びかねないところであった。それを井伊・本多のご両所が、とにかく双方なだめて納めたのだが、それから五日経った今日、若しお身の口上次第では、何事が持ち上るか相分らぬ。それゆえ、それがしに参って、どのような口上か、そっと訊ねて参れというご両所の仰せでの。どうじゃ。それがしの顔を立てて、少し洩らしては呉れまいか」

村越茂助は、虚空を睨んだままで一言も口を利かない。

「むろん使者の口上を洩らせというのは無理……無理は万々承知のうえで頼むのじゃ。それもこれも御家のためと思うての」
「柳生どの」
「洩らして呉れるか」
「洩らしたいは山々ながら、よく考えてみたところ口上はござらぬ」
「なに、口上はない」
「されば、ここに手紙がござる。これだけでござった」
「ふーむ」
宗矩は低くうなった。そういえばそうかも知れぬと思われたからだった。
無類の訥弁で、使者などには立ったこともない村越だった。それだけに、すべては手紙に認めて、口上の必要はないようにしてあるのかも知れない……と、思ったのだ。
「他ならぬご貴殿の仰せゆえ、手紙の封を切って見せとうござるが、封を切れば腹も切らねば相成らぬ。それで宜しかろうか」
「ふーむ。それは困る。それでは使者のこなたが清洲へ着かぬわ」
「残念でござる。では、封は切らせず、このまま身共を清洲へお連れ下され」
訥弁は時に、雄弁以上の迫力を持つものだった。さすがの柳生宗矩も、これで口上はないものと信じ込まされて、そのまま連れ立って清洲へ向かった。

八

村越茂助が清洲へ到着したときには、諸将はみな城内の広間に参集して、待ちかねていた。
柳生又右衛門宗矩は広間のただならぬ空気を警戒してひとまず茂助を井伊直政と本多忠勝に別室で会わせて、
「たしかに書面だけで、口上はござりませぬようで」
そういい置いて改めて、三人で村越茂助直吉をみんなの前に案内した。
宛名は先手の福島、池田の両将になっている。が、両将のうしろには細川忠興、黒田長政、浅野幸長以下の諸将が眼を光らして詰めている。
村越茂助はびっくりしたように、井伊と本多の両名を左右にしたがえて仔細にみんなの顔を見ていった。
「ご使者ご苦労に存ずる。して内府さまは、何時江戸をご出発なされたぞ」
福島正則が、茂助の発言を待ちかねて、小刻みに二膝すすんで、白扇を構え直した。
「ただいま」
と、茂助は答え、それからぐっと胸をそらした。気おくれしては一大事と、堅くなっている少年のような動作で、おもむろにふところの書状を扇に乗せた。
「これが書面でござる。とくとご覧ぜられよ」
「ふーむ。両名の宛名じゃ。ご免！」
池田輝政に会釈して、正則はちょっと不審そうに首をかしげた。

手紙があまり軽かったからであろう。
井伊も本多も、その時になってハッとした。いや、両人よりも末座に控えた柳生の顔いろが、見る間に蒼く硬ばった。
「ふーむ」
正則が上皮を開いた手紙は、誰の眼にも数行の短文と映じていった。それを正則はすぐさま池田輝政に渡して、もう一度低く呻った。
「――其許の模様知りたく仕りて、村越茂助を以って申候。ご談合候て、仰せ越さるべく候。出馬の儀は油断これなく候。お心易かるべく、委細口上をもって申候」
池田輝政は声を立てて読んで、それをうしろの細川忠興の手に渡した。
口上が無いどころか、委細は口上をもって……と、末尾の文は結んである。
「茂助！」
と、本多忠勝が、あわてて村越の膝を突いた。
「ご口上は、風邪が重いとあったな」
茂助はじろりと忠勝を見やってそのままぷいっと正面に向き直った。
「そうであったな。風邪が殊の他に重い……そ、それで、治り次第、急遽ご出馬遊ばさる……そうであったな」
もうその時には、正則の眼も、輝政、忠興の眼も、喰いつくように村越茂助にそそがれていた。茂助はゆっくりと首を振ると、
「風邪ではござらぬ！」

みんなびっくりするほど大きな声で答え、同時に正則の体が電撃に打たれたように前へすすんだ。
「風邪ではない。しかもまだまだご出馬ないとは奇怪千万、内府さまは、われ等を見殺しになさるお気か。いざ、ご口上を承ろう」
「た……た……ただいま申上げよう」
村越茂助は大きくどもって、それから、又、ぐっと胸をそらして構え直した。
柳生宗矩は、みんなのうしろで小さく肩をおとしている。

九

村越茂助直吉にとっては、恐らくこれは、彼の人生で最も大きな緊張と気力を要する場面だったのに違いない。
しかも、この峠を無事に越え得るか否かで、彼の器量ばかりか生涯の自信までが決定してゆくのだ。
「ではご口上を……」
彼はまた大声でいって、それからいちど構えた膝の白扇をぴたりと前に置き直した。
「おのおの様、数日のご在陣、まことにご苦労のことに存じます」
一瞬正則は、毒気をぬかれたようにポカンとなった。
怒号に近い発声から、いきなり、操り人形を思わすような律義な挨拶の姿勢に変ったからであった。

茂助はそうした反応など見きわめようとはしていなかった。彼は、幾十度となく胸のうちで繰返して来た口上を、順序を誤らず述べることだけでいっぱいだった。
「内府さまは、この表へご出陣のこと、いささか遅れましたが、これは風邪が重いのではござらぬ」
井伊直政が、あわてて脇を向いてため息した。彼等は諸将を押える口実に、再三家康は風邪といい立てて来ていたのだ……
「風邪が重いのではござらぬが、全然、風邪気味でないわけでもござらぬ」
茂助も、あまりハッキリ否定しては拙かろうと、ちょっと考え直してから、
「それゆえ、しばらくご出馬なりがたし」
と、声を張った。
「なに、何といわれる？　風邪は重くないが、ご出馬なりがたしと聞えたが」
「その通りでござる」
こんどは茂助は正則に噛みつくような視線を据えて、
「つきましてはおのおの様、ここに大軍を擁して来ていながら、何故手を拱いておわすや、まことに不思議千万でござる！」
「な……なにッ!?」
正則はびっくりして輝政を見やった。輝政はまだ言葉の意味を解しかねて、驚く以前の表情だった。
「おのおの様がご家臣ならば、上様はいちいちお指図下さろうが、おのおの様はご家臣ではござ

らぬ。お味方でござる。そのお味方が、何とてここで手を拱いておわすや。速かに木曾川を越えさせられてお働きなされたい。さすれば、上様も、出馬の儀は油断これなく、心易かるべくとご書面にある通りでござる。上様にご出馬を見合わさせてあるものは、上様の風邪でも御都合でもない。偏にこれはおのおの様方のお心柄でござる」

気負った表情でそこまでいうと、村越茂助は再び扇を取って膝に立てた。

額も襟あしも、玉のような汗になって、肩が小さく波打っている。

茂助はついに、家康の意志以上の手きびしさで、彼等の決心の曖昧さを責めてしまったのだ。

一瞬一座はシーンとなった。

井伊直政も本多忠勝も、彼等の常識の埒外に躍り出されて、突嗟にいうべき言葉を知らなかった。

と、突然、福島正則が、白扇をひらいて、眼の前の村越茂助を煽ぎだした。

「あっぱれな御諚！　見上げ申した！　いや御辺の申すとおりじゃ！　ごもっともじゃ！」

こんどは茂助が煽がれながらキョトンとなった。

十

茂助は諸将に断られるとは思っていなかった。

(それほどの勇気はあるまい……)

彼は彼らしく、家康の正しさと強大さを信じていた。しかし、肝腎の福島正則が怒らずに、自分を褒めようとは想像もしていなかった。

それだけに、正則から白扇で煽がれた時に、

(打たれるなッ！)
思わず観念の眼を閉じかけたのだ。
短気な正則だけに、怒りに任せて打つことはあっても、結局家康の言葉の条理に従うより他にあるまい。そうなれば、とにかく自分を使者に選んだ家康への申訳は立ったのだと……
ところが、正則は、三河者以上の単純さで、茂助の勇気に感服してしまったのだ。
「これは、まことにごもっともな御諚じゃ」
正則はもう一度肚の底から感嘆の声を投げて、
「宜しい！　直ちに進撃仕り、やがて戦況をご注進申そう。いや、御辺も二、三日逗留あって、犬山城か岐阜城を攻め落とす、われ等の手並みを御覧あれ」
茂助直吉は、その時になってはじめてハッとわれに返って平伏した。
「いや、ありがたき仰せながら、手前は、御口上の使者でござる。城攻めを御見届け申すなど、手前の役でござりませぬゆえ、ご免蒙りとうござる」
その言い方も場なれぬ少年の気負いに似た、ひどく硬ばった動作だったが、今度はそれが一層この場に似つかわしい冒しがたさを漂わすから妙であった。
加藤嘉明が横手を打って、びっくりしている正則の無聊を救った。
「なるほど福島どのの仰せの通り、これは面目なき次第でござった。われ等はご家中ではない。さすれば、内府さまご出馬までは、自分の判断で行動致すのが当然でござった。それに何ぞや、ここで時日を空費するとは……」
「いわっしゃる通りじゃ」

「それにしても、村越氏は、よく申されたわ」
「これでハッキリ致した。われ等が、出馬すれば内府さまもご出馬なさる。内府さまお一人の戦に援軍に参ったのでは無かった。ハハ……」
いったんわかると、黒田はむろんのこと、浅野も堀尾も釈然とした顔になった。
ただ細川忠興は、微笑しているだけで相槌は打たなかった。彼は深慮の人物だけに、或いは家康を、
（――ずるいお方！）
と、考えたのかも知れない。
若しそう考えたら、確かにここに列座している人々の単純さではまだまだ測り知れない、底深さを持って動く家康に違いなかった。
とつぜん又村越茂助直吉はみんなの前に手を突いた。こんどは諸将ばかりでなく、井伊直政や本多忠勝にも詫びる気の茂助らしい。
「実はそれがしも迷うてござりまする。おのおの様が待たれておわすとわかっているゆえ……しかし、おのおの様がお手紙をご覧なされているうちに決心仕った。知恵才覚の要る使者ならば、何で上様がこの茂助をお選びなさろう。ここはお口写しに上様のご本心を申上ぐべきところ……いや、そうせよとてわれ等を使者にお選びなされたのに相違ないと……失礼ご免下さるよう」
その告白は、更にみんなの心へ清風を送り込むに充分だった……

十一

村越茂助の到着によって、清洲城内の空気は一変した。
それまでは、家康西上の遅延にいら立つ集合体だった諸将が、俄然活気を取りもどし、西軍に襲いかかろうとする、真実の先手になりそうな空気になった。
これは軍監として先遣されていながら、両者の板挾みになって困惑しきっていた井伊直政と本多忠勝にとってはいいようもない救いであった。
「なるほど、人には使い道があるものじゃ」
大広間から引きさがって、村越茂助を別間で休息させると、井伊直政は感嘆していった。
「村越が、われ等の言葉に従って、上様はご風邪……とだけ申していたら、今ごろは、どのような騒ぎになっていたことか」
すると本多忠勝は、ひとりでフフ……と笑いだした。
どうやら諸将は、あれから城主正則の居間に参集して、何時攻撃を開始するかについて協議をはじめた様子だった。
「何を笑われるぞ、本多どのは」
「いや、太閤と上様のなされ方を比べてみていたのじゃ。太閤はお気が早かった。例の本能寺事件のおりにも、あっという間に、毛利と和を結んで引返し、山崎で光秀勢を打破られた。ところが上様は、その逆手、逆手と出さっしゃる。お気が長いこと、まこと天下無類じゃ」
井伊直政は、忠勝のいい方がおかしかった。

（気の長い短いの比較ではない……）
村越にいわれてみて気付いたのだが、家康にはここで先頭に立って戦を急がねばならぬ理由は全くなかったのだ。
三成方では家康を敵として喚きちらしている。が、家康はそれを子供の騒動として静観し、相手のわめき疲れた時を見計って解決すればそれでよかったのだ。
気が長いのではない。子供同士の興奮は、冷めるに従って結束をみだして来ると冷静に見抜いている。そして、利害得失の計算を相手にさせる時を与え、その時が必ず正を履む者に味方すると見抜いていたのに違いない。
「どうじゃ井伊どの、彼等のうちで誰が先陣を申出ると思うぞ」
また忠勝が、戦好きの老人らしく話しかけたが、直政は微笑したまま答えなかった。
恐らくこんどは最初に木曾川を誰が渡るかで、相争うのが諸将の話題の中心になろう。それほど空気は、ただ一ヵ所の急所の押し方ひとつで違って来たのだ。
（しかし、その急所は、われ等にはわからず、やはり上様に押されてしまった……）
「静かなお方じゃ」
と、直政はいった。
「武田信玄の風林火山の旗印にあった通り、まことに静かなること林のごとしじゃ」
「いや、生得お気が長いのじゃ」
忠勝はまた同じことを繰返して、
「それにしても上様は、何日ごろに江戸をご出発なさると思うぞ」

井伊直政はかすかに首を振って答えた。
「残念ながら、まだまだ上様のお心は読めぬ。われ等のうかがい知れぬ海千山千のお方におわすからの」
そこへ正則の小姓が、二人を呼びにやって来た。

戦端開かる

一

石田三成が計画にしたがって佐和山の居城から、兵六千七百を率いて大垣城に進出したのは八月十日であった。
ここで島津義弘、同豊久、小西行長等を招いて協議のうえ、総大将の毛利輝元を大坂から引出して、岐阜に進もうというのである。
彼にとって、すべてを投入して来たこんどの企ても、いよいよその結実か否かの岐路にさしかかって来たのである。
彼にとって当面最も大きな不安は、江戸出発の時機と、毛利輝元の大坂発向の時機の見合いであった。
静かに内側から観察してゆくと、西軍諸勢の家康への怖れは想像以上のものがあった。
伊勢路へ進出していた軍勢など、阿濃津城主の富田信高、上野城主の分部光嘉等が、江戸方面

から引あげて来た船影を見て、
「――家康がやって来た！」
ただそれだけの誤認で、或いは鈴鹿峠にはしり、或いは亀山にのがれ去るという醜態を演じたのだ。
それだけに、若し毛利輝元が大坂を発して来る前に、家康に着陣されたとなると、どのような動揺が味方に起るかわからなかった。
（果して安国寺恵瓊は、輝元を説伏し得て伊勢路へ向ったのかどうか……？）
その意味では、清洲に結集している東軍の諸将が、家康の到着を待ちわびている心理の、そのまま裏返しであった。
東軍諸将の、家康の到着を待つこころは、実は三成の不安を見抜いていたという皮肉に通ずる。言葉を換えていえば、家康の実力は、すでに東西諸軍勢の上に同じ比重でのしかかっていたのであった。
むろん三成も手を拱いてはいなかった。彼はその不安をかくし、家康の江戸出発を遅らせようとして、改めて諸方へ、味方の優勢を宣伝し、督励した。
佐竹義宣には「――真田父子も堀秀治も、前田利長も自分に味方してあるし、日本国中の侍の妻子はことごとく大坂表にとめ置いて監視している。そのうえ、奥州の伊達、最上、相馬なども、何れも当方と心を通じてあるゆえ、安心して江戸を衝くように……」と、申送った。
西軍の総数は、伊勢口、美濃口、北関口（北陸）、これに勢田橋東詰番衆から大坂留守居を加えると、十八万四千九百七十人……せいぜい四、五万しか動員出来ない家康が、この大軍をどう

しようというのか？

今ごろはすでに戦慄していることであろうが、若し万一血迷って西上して来るようなことがあれば、尾張と三河の境で討ち果す手筈を決めて待ち受けている……と、書き添えた。

いうまでもなくそれは、三成の内心の不安をかくした真偽抱き合せの宣伝で、人数にまでおびただしい水増しがしてあった。

一例をあげれば千五百ほどの島津勢を五千人もあるようにふれさせている。

真田父子に送った書状も同様の内容だった。信州はいうに及ばず、甲州まで真田家の所領にすること。そしてそのことは、すでに毛利輝元もハッキリ承諾していると書かせ、更に家康がきっと西上するという噂があるが、

「――あわれ上り候えかしと念願まで候こと」

などと、さながら歯牙にもかけぬといった衝天の士気を装った。

二

人間もまた吠える犬に共通する弱点をもつものだった。

窮地に立つほど、その宣伝は誇大になり、威嚇をふくみ、虚勢と空笑いを混えてくる。

豊太閤ですら、高麗の戦に手を焼くと、必要以上に豪奢な城飾りをしたり、醍醐の花見をしたりした。

弱点を見せまいとして、吠え立てると、それで結構おびえる者も出て来るからであったが、その吠え声の裏にからむ、哀しい凋落の気は必ず歴史に滲んで残る……

三成は大垣城に入ってから、いよいよ不安を大きくした。

(毛利輝元は、出て来ないのではあるまいか?　そして、逆に、輝元は出て来ないと、ハッキリ味方にわかってから、家康は悠々と江戸を発つ気ではあるまいか……?)

それは彼が戦陣に立ってみて、はじめて覚えた恐怖であった。

彼はかつて秀吉の軍監として参謀として、秀吉の命令を実戦部隊に、用捨なく伝えて来た。

その事への反感が、現在清洲の城に結集し、彼の行手をはばんでいる。

ところが今の彼は、秀吉の軍監ではなかった。真実の主謀者ではなく、指揮者であっても部将にすぎない……

そうした不思議な立場で戦場へ出て来てみると、彼自身もまた次第に家康が、動かすことの出来ない巨巌に見えはじめて来るのである。

(戦場のかけ引きは、世のつねの才能とは違ったものなのだろうか……?)

その不安が、一層あちこちへの宣伝や督励に姿をかえて来ているのだが、彼の不安は輝元に関する限りでは的中しかけていた。

輝元は、三成からのはげしい督促にもかかわらず、次第に大坂から出陣する気をなくしている。

安国寺へは充分承知したと答えたのだが、それと前後して、伊勢口へ向う養子の秀元から、手きびしい反対意見を投げつけられていたのだ。

「どうしても治部少にお味方なされてご出陣なさるならば、秀頼さまをお伴いあられたい。そうなれば、この秀元もお先手を仕り、内府が出て来ぬとあれば関東までも参りましょう。秀頼さまご出馬となれば、治部少に反感を持つ諸将も決してお手向いは致すまいと存じまするゆえ、或

いは内府と互角の戦が出来るかも知れませぬ。それでなければ勝味はござりませぬ」
これは輝元にとって、まことに手痛い反対だった。まだ数え年で八つの秀頼を、どうして戦場へ連れ出してゆけるものか。
しかも、そうしなければ三成に対する諸将の怨恨が、みな当家へ振り替えられようというのだから、動くに動かれない気持ちになった。
「――それではとにかくお許は伊勢口へ参って呉れ」
そして、安国寺が何か訊ねたら、程よくあしらっておくように……そうした黙契のうちに、秀元は伊勢口へ向ったのだから、輝元が簡単に出て来る筈はなかったのだ……
三成もまだそれを的確には知らずにいる。それだけ不安はつかみどころのない形で、じわじわ彼を締めあげて来るのである。
そうした三成の許へ、
「東軍が、いよいよ木曾川を渡って岐阜城へ攻めかかりまする。早急にご援軍を」
織田秀信から注進が届いたのは八月二十一日の正午ごろだった……

三

当時岐阜城には、織田秀信の手勢凡そ六千五百のほかに、六里ほど離れた犬山城には、石田三成の婿に当る石川備前守貞清が守っていた。
この犬山城へは、貞清の他に稲葉右京亮貞通(八幡城主)関長門守一政（多良城主）加藤左近大夫貞泰（黒野城主）竹中丹後守重門（岩手城主）などの援軍凡そ一千七百があり、岐阜から四里

距った竹ケ鼻城には杉浦五左衛門盛兼があって、毛利掃部がこれを助けている。
したがって総勢合わせて九千になるかならぬかの人数だった。
それに対して清洲にあった東軍諸将の兵力は三万を越えている。
その彼等が、村越茂助直吉のやって来る迄出撃を考えなかったというのは、たしかに不思議の一つであった。
いうならば、三成の宣伝する西軍総勢、十八万四千九百七十人という誇大な数字に呪縛をかけられていたともいえる。
ところが村越はその呪縛を解いて立ち去った。彼等がまっしぐらに進撃を開始すれば、決して家康は捨ておく筈がないではないかと……
諸将が進撃開始の決定をしたのは、村越が彼等に家康の言葉を伝えた翌日、即ち八月二十日のことであった。
しかも出撃を決定すると士気はいやが上にもあがり、福島正則と池田輝政の間に、先陣争いのはげしい口論がくり返された。
「——犬山や竹ケ鼻を破っても岐阜の本城は陥落すまい。ここでは速かに岐阜を衝こう」
正則がそういいだした時には、みなが口を揃えてこれに賛成した。
いうまでもなく岐阜は信長の手になる名城である。金華山の主峰を本丸とし、西南に瑞龍寺山、北は長良川の断崖にのぞんで、東南は谷の深い泥田を控えた不落の構えをなしている。
登り口は二つあった。追手は七曲とよび、搦手は百曲の他に水の手口と呼ぶ嶮岨な細道がつづいている。

「――やはり軍勢は二手にわけて木曾の巨流を渡るべきであろう」
「――それは当然のこと。よってそれがしは上流の河田より押し渡り、城の追手へまっしぐらにかかって行こう」
正則がそういい出すと、池田輝政は色をなして詰め寄った。
「――これは心得ぬことを仰せられる。それがしも左衛門大夫（正則）どのと共に、このたびの先鋒を承るもの……然るに、われ等が廻り道をして下流の尾越を渡り、搦手へ向わねばならぬいわれはござるまい」
そうなると頑固で鳴った正則も顔いろ変えて譲らなかった。
「――何をいわっしゃる。もともとわしは清洲のあるじ、この尾張を所領する正則が、どうして搦手などへ向かえるものか。ここは三左衛門（輝政）どのがわれ等に譲るべきところじゃ」
「――これはいよいよ奇怪なこと。ご貴殿はご領内を接してあることとなれば地理にくわしく、進撃も容易の筈、それを不なれな我等に、廻り道を強いるとは、武士にあるまじき……」
「――黙らっしゃい！　武士にあるまじきとは聞き捨てならぬ一言」
双方頑として譲る気配がないので、たまりかねて本多忠勝が割って入った。

四

「――ご両所ともまず待たれよ」
本多忠勝は、さすがに戦となると老巧だった。
「――まことに勇ましいお話で、われ等も久しぶりに血のたぎる思いでござる。しかしながら、

今までべんべんと上様を待ってあったものが、いよいよ進むとなったからとて、そう争うにも当るまい。いかがであろう、われ等にお任せ下さるまいか」

「――いや、他のことではない。先鋒が先陣を譲れといわれて、承引出来るものではござらぬ」

輝政がムキになって身をのり出すと、忠勝は手をあげて制した。

「――何もご貴殿に先陣を譲れなどとは申して居らぬ。いかがであろう、左衛門大夫どのはご所領に近い土地のことゆえ、舟や筏の用意も容易であろうゆえ、ここでは徳川家の婿にあたる、三左衛門どのに上流の河田口をお譲り下されまいか」

「――これはしたり、すると、お許は、この正則を押えて、三左衛門どのに加勢なさるお気か」

「――そうではござらぬ。しかし争うても詮なきことゆえ、ご貴殿は下流の尾越を渡って搦手へ向われる。そして、ご貴殿が渡り終ったところで合図ののろしをあげられ、それと同時に双方呼応して攻めかかる」

「――なるほど」

「――さすれば、何れが一番乗りということではなくて、一挙に岐阜を衝けると思うが」

人間というものはいったん呪縛を解かれると、今までの自分とは全然別人のように勢い付くものらしい。

先陣争いは忠勝の扱いで、下流をわたった一隊が、のろしを挙げるまでは合戦を差し控えるということで話がついた。

下流の尾越をわたったのは福島正則を先鋒として、細川忠興、加藤嘉明、田中吉政、藤堂高虎、中村一栄、蜂須賀豊雄、京極高知、生駒一正等……それに井伊、本多の手勢を加えた一万六千人。

上流の河田口から追手に向う軍勢は、池田輝政を先鋒として、浅野幸長、山内一豊、有馬豊氏、一柳直盛、戸川達安等で凡そ一万八千人。
そして八月二十一日には早暁から行動を起して木曾川の左岸にすすんだ。
ただ田中吉政と中村一栄は羽黒附近に出て犬山城の西軍石川貞清にそなえた。
三成のもとへ、こうした東軍の動きが報じられていったのは、諸勢が木曾川を渡りつつあるころだったのだが……
これに対して、岐阜城内では、家臣の木造具正は籠城を主張した。
「残念ながら敵の兵数が多すぎまする。ここでは籠城して、治部少輔はじめ、美濃口の本隊が到着するのを待つべきでござりましょう」
しかし秀信は聞き入れなかった。彼は信長の嫡孫に生まれていながら、戦術戦略では、世にいう不肖な三代目にすぎなかった。
「籠城などは、世の聞えもいかが。出でて戦うが総見公以来のわが家の家風じゃ」
そして、自らは本営を閻魔堂前の川手村に設け、佐藤方秀、木造具正、百々綱家等に三成の援助河瀬左馬助等を附して、その兵力の半数、三千二百がほどを、新加納と米野の間に配して夜を迎えた。

五

翌くれば八月二十二日——
すでに秋風の立ちそめた木曾川上流の渡河口、河田附近は、両軍の布陣をさえぎる一片の霧も

なく、明けはなれる前から、川をはさんで立ちならんだ東西の旗があざやかに見透かせた。
先に銃撃しだしたのは西軍の織田勢だった。
攻められる側と攻める側では心理の負担の差が大きい。この時にはまだ東軍先鋒の池田勢に、戦端開始の意志はなかった。
彼等は、下流の尾越方面に向かった福島勢から、渡河準備完了の狼火のあがるのを待って、いっせいに渡河するつもりだったのだ。
ところが、前面の織田勢は、早暁から銃撃を開始しただけではなく、応戦しなければ徒渉して来そうな気配に見えた。
「これは、思うたより、敵の士気が凄まじい。このまま待つは不利でござりまする」
池田輝政のもとへ、家臣の伊木忠正が駆けつけて、応戦の許可をもとめて来たとき、輝政は、はじめ首を縦には振らなかった。
「いや、先に渡っては福島どのがうるさい。暫く待つように」
しかし、敵の発砲を前にすると、味方の将士は次第に戦魔にとりつかれる。戦もまた群集心理の支配の埒外に立ち得ないものであった。
まだ決して身に危険のふりかかる位置ではない。西軍の間には木曾の流れが横たわって流弾は空しく虚空に炸裂してゆくのだが、しかし、その下に這って敵を睨んでいる人々の理性は爆発点へ押しあげられる。
「これでは、命令にそむいて押渡る者が出て参りましょう。相手から渡河を開始されたら、黙って居られるものではござりませぬ」

再度伊木忠正に促されて、池田輝政もついにその気になってしまった。
「よし、先方から挑まれた。それゆえ後へは退けなかったと、すぐさま使者を出しておけ」
そう命じておいて応戦を開始した。
一度命が下ると、それは憑かれたものの競技に似ていた。
伊木忠正の手勢がまっ先に上流に馬を乗り入れ、続いて一柳直盛が、対岸の光明寺めざして斜めに川を渡りだした。堀尾忠氏がそれに続いた頃には、もはや、対岸の射撃も必死のものに変っている。
はじめは銃弾を避けるために騎乗を禁じ、馬の平首にぴたりと躰をつけて渡っていたのだが、何時かはげしい叱咤と怒号をまじえた騎乗の渡河になってゆく。
池田輝政も、采配を振りながら水流に躍り込んだし、浅野幸長も、眼を血走らせて続いて渡河した。岸の近くで銃弾と人馬の怒気が交錯しだすと倒れ傷つく者の数は次第にふえた。
一柳直盛の老臣大塚権太夫が水ぎわに倒れ、織田方の武市善兵衛、飯沼小勘平等も、渡河を防ごうとして倒れていった。
こうなると、もはや福島正則との約束などは誰の頭にもなくなった。
有馬、山内、松下、戸川等の諸勢は、先を競って渡河し、織田勢の側面へ槍をそろえて襲いかかった。
平和を築くには尋常ならぬ努力の蓄積が必要だったが、いったん戦魔に跳梁を許してゆくと、それは一瞬にして空しい修羅場に一変する。
西側の織田勢が渡河口を破られて退きだしたのはまだ正午前であった。

六

下流に向った福島正則以下の諸勢は、二十二日の日暮れまでに、西軍の杉浦五左衛門、毛利掃部等の守備してあった竹ヶ鼻城を抜き、笠松の西北にある、太郎堤まですすんで来て夜営の用意にかかっていた。

彼等はまだ上流に向った池田勢以下の諸軍が河田を渡ったことを知らなかった。

竹ヶ鼻城では、正則の旧知であった毛利掃部と、梶川三十郎を招降し、ただ一人頑強に抵抗する杉浦五左衛門と、巳の刻（午前十時）から申の刻（午後四時）まで戦って、ついにこれを全滅させ、太郎堤にすすんだのだから、意気揚々たるものがあった。

「――今日はここで夜を明かし、明早朝岐阜に向おう。井伊、本多の両氏は、竹ヶ鼻城の勝利を早速、江戸の内府の許へお知らせ下さるよう」

正則はそう指図してから、更にその附近の村落に放火を命じた。

「――われ等の位置を、上流の軍勢に知らせておかねばならぬ。明日はいよいよ岐阜攻めだからの」

そして、何も知らぬ民家が、狼火がわりの放火にあって、薄暮の空へ不吉な焔をのばしかけた時になって、

「只今、池田三左衛門輝政どののもとより使者にござりまする」

かがり火を縫って駈けつけた側衆の言葉に首を傾げた。

「――なに三左衛門どのから、今ごろ何であろう。急いで通せ」

万一手違いが出来て、渡河点に進み得なかったというのであれば、すぐさま援軍を割かねばな

らぬと、自問自答しながら性急に床几を立った。
と、その使者は、今朝すでに上流勢は川を渡って、米野で戦い、岐阜に近づいたゆえ悪しからずという使者ではなかったか。
「――なに、われらとの約束をほごにして渡ったと!?」
「――いいえ、敵に挑まれて、止むなくでござりまする」
「――三左め！　裏切りおったな」
戦国武将の怒気は時に、闘犬そのままの単純さであった。むろんそれとて性格によることもちろんだったが、先鋒を命じられて、他人に先を越されたとなると、その武名に傷がつく。武名はそのまま封禄の高につながり、世間ばかりか部下や領民への威信にひびくのだから無理もなかった。
「――よし、そうなったらわれ等にも覚悟がある。早速諸将を呼び集め、ただちに行動を起こさねば相成らぬ。そうだ！　使者は立帰って、三左衛門どのにそう申せ。明日早朝われ等両人は決闘じゃと」
「――決闘と仰せられまするとか!?」
「――福島正則の名が立たぬ。首を洗ってお待ちあるよう、しかと伝えよ」
使者は呆れて引きあげたが、正則の憤怒は納まらなかった。
「――秀頼さまの御為めにわざわざ先鋒を買って出たわれ等が、おくれを取ったとあってはあとの諸将へのしめしが付かぬ。内府に武力で軽んじられるほどならば、死んだが増しの正則じゃ」
そこへ続々と知らせを聞いて、下流へ向っていた諸将たちが集まった。

七

戦場での理性は、みな幾ぶんずつ狂っている。池田輝政が約束を破って渡河を早めたからといって、下流へ向かった軍勢が、そのため迷惑を蒙ったわけではなかった。
いや、その反対に、戦局は却って東軍の前に大きく有利に展開しかけていた……
しかし、正則の野陣に駈けつける諸将は、みなそれぞれいい合わしたように怒気をふくんでいた。
武功という名の暴力が、まだそれほど大きく人心を支配していた時代なのだ……
「──売られた喧嘩は買わねばならぬ。諸将に迷惑はかけぬ。この正則が三左衛門と決闘するゆえ許されたい」
「──いや、しばらくお待ち下され」
これも頬をまっ赤にした加藤嘉明がまっ先に拳をふりながら口を開いた。
「──上流の諸将が、われ等を欺して先に岐阜城へ攻めかかる所存ならば、われ等は更に一歩をすすめて、ここから直ちに大垣城へ馳せ向っては如何であろう」
戦場での諸将の功を競う猛々しさは、まさにかくのごときものなのだ。それだけに、この猛獣を誤りなく指揮してゆくには、どれだけの威圧が必要か想像出来よう。
石田三成に果して、この猛獣と化した戦場の諸将の指揮がとれるや否や……？
ここで加藤嘉明の発言にみなが同じていったとしたら岐阜城は果して予定のごとく侵略し得たであろうか。高麗での戦でもこうした弊害の蓄積が、全軍の目的をつねに危殆にみちびいて行ったのだが……

「――なるほど、その手もござるのう」
すでに決闘を覚悟している正則は、すぐにこれに同じそうな気配であった。
「――しばらく」
口々に人々が賛意を表しそうな様子を見て、細川忠興がさえぎった。
「――加藤どののお言葉はもっともながら、それではわざわざ苦戦の道をすすむこととも相成ろう。それがしに別の思案がござる」
「――ほう、どのようなご思案じゃ。仰せられよ」
「ここでは、仮りにもみなの結束が、乱れて居ると見られては相成らぬところでござる」
「――というほど、岐阜は大した敵ではござるまい」
「――いや、忠興は岐阜を問題には致し申さぬ。内府を問題にしているのでござる。内府の出馬が遅延致して居るのは、われ等の結束いかんを秘かに案じての事かも知れぬ。されば、ここでは三左衛門どのの中条を一応信じて、われ等も岐阜へ急行致すことでござる」
この一言はふっとみんなを黙らせた。
(家康が、彼等の結束を案じて出馬を遅らせている……)
そういわれてみるとそれは充分みんなの肚にひびく言葉であった。
「なるほど、では徹夜で岐阜へすすめといわっしゃるか」
「そうしてあっさり岐阜を落としてみせてこそ、こんどの緒戦の意義は闡明いたすのではござるまいか」
忠興はさすがに考え深かった。

「よしそう決めた！　三左衛門への挨拶はそれからじゃ」
正則の同意によって、再び各隊の馬の腹帯は締め直された。

八

下流の福島以下の諸勢が、岐阜をめざして徹夜の行軍をはじめたころ、いったん岐阜城内に引きあげた織田秀信は、味方の敗戦を知って、木造具正、百々綱家等の老臣とともに昂ぶり切った表情で対策を練っていた。
清洲城内に集まった諸将は、家康が出馬して来るまで、絶対に木曾川を越えて攻め寄せることはあるまい。その間に、大垣城にある三成が、毛利輝元を迎えて、ここまで進出して来るであろう。さすれば、岐阜城は西軍の本陣となり、大軍を擁して尾張進攻の根拠地となってゆく……そう信じこんでいたところへ、突然、東軍の渡河を迎えたのだから、その狼狽はひと通りではなかった。
「――竹ケ鼻城を敵の手に渡すとは、何たる怠慢……明日こそその汚名をそそいで、総見公以来の武名を汚がさぬように」
明早朝を期して敵は追手口と、搦手口の両道から攻め寄せるに違いない。が、どのようなことがあっても、これは退けねばならぬというのが秀信の意見であった。
木造具正は、黙然としてそれを聞き終わると、
「――恐れながら、われ等は城を出て、戦うことはご同意申しかねまする」
沈鬱な表情で口を開いた。

「――なに、では、籠城して敵を待てと申すのか」

「――仰せの通り……ご当家の軍勢ばかりでなく、瑞龍寺山にある石田の援兵をも城中に合し、攻めかかる敵を当分相手とせず……さすれば、ここに二つの利が生じまするかと」

「――申してみよ。なぜ臆病らしく籠ってあれば利があるのじゃ」

「――はい。その第一は、岐阜城が落ちぬ限り、内府は江戸を出発すまいかと存ぜられまする」

「――わからぬ！　なぜこの城が落ちねば家康は進発せぬのじゃ」

木造具正は、いったん口を開くと、もう臆してはいなかった。彼は内心、主人の西軍に味方したのを御家の大事と悔いている。

その眼で見ると、家康の今日まで江戸を出発しない肚のうちが、彼なりに読める気がするのであった。

「――恐れながら内府は、早く出て来て、諸将と共にこの岐阜城へ釘付けられることを、最も警戒してあるやに思われまする。そこで、諸将が岐阜をほふり、大垣へ向うのを待って、東海、東山の両道を進んで来る気に相違ござりませぬ。それゆえご当家が健在ならば江戸は発たぬ。内府のやって来ぬ東軍ならば、さして恐るるには足らぬかと存じまする」

「ふーむ、して、第二の利は？」

「内府が江戸を発さぬと相成れば、治部少輔の手によって毛利・宇喜多の諸勢は楽々とこの地へ救援を送り得る……それゆえここでは籠城して敵をじらすが最上の策かと……」

そこまでいうと、秀信の怒りは爆発した。

「――だまらっしゃい！　おぬしは怯懦な二つの利を数えて、もっとも大きなものを見落してい

るわ、それでは織田家の武名はどうなるぞ、毛利・宇喜多の援けがなくば、何もなし得なかったという答えが出て、美濃・尾張二ヵ国の所領は主張し得ない破目になろうぞ」
秀信はまだ西軍の勝利を確信し、具正は東軍の優勢を信じている。所詮二人の意見は交わるところのないものだった。
「――かかる大事なおりの指揮は秀信自身が執る、みなみな城を出でて外廓を防守し、敵を蹴散らしてみせるのじゃ！」

九

木造具正も百々綱家も、秀信の激昂にあってついにそれに従うより他になくなった。
こうして、翌二十三日の明け六ツに、昨夜、商町の外にある桑畑までやって来て一息入れていた福島勢は、そのまま城下になだれ込んだ。
南をのぞむと、池田輝政の兵もまた気負い立って追手口へ向おうと行動を起している。
正則はこれに使者を飛ばして、昨日の違約をなじったが、すでにその事あるを予期していた池田輝政はあざやかに、正則の憤怒をかわした。
「――福島どのと決闘など、思いも寄らぬことでござる。われ等は敵に挑まれて止むなく川を渡ったもの……ではこう致そう。今日は福島どののご自身で追手口へ向われよ。われ等は搦手口で満足致す」
こういわれると、この両者の争いも、却って全軍を奮い立たせて、出発点に据え直す結果になった。

一方は面目にかけ、意地をかたむけて功を競う侵入者。一方は籠城を想いながらの防戦とあっては、両者の均衡は士気においてすでに開戦時から格段の相違となった。

新しい協定によって、福島、加藤、細川の諸勢は靫屋町から七曲口へ突進し、浅野幸長は、石田方の援軍、樫原彦右衛門、同内膳、河瀬左馬助、松田重太夫等の凡そ二千が守る瑞龍寺山の砦を攻めた。

もともと会津の近くまで出ていって、成すところもなく引返して来ている東軍の諸将である。ある意味では長い間鬱屈していた不満と怒りの、ハケ口が、流れる谷を見つけ出した今日の猛攻ともいえた。

まっ先に瑞龍寺山の砦が陥り、つづいて稲葉城の砦もおちた。

そして、一の木戸口が、細川勢に攻め破られた頃には、織田方の木造具正は、福島勢の松田下総が狙撃にあって傷つき、福島、細川の両軍勢が塀をのり越えて二の丸に攻め入り、中から門を開いて総勢がなだれ込んだのは正午すぎであった。

それから福島、細川、加藤の順で本丸へ迫ったのは一刻あまりしてから……

そのかみ斎藤道三によって地の利を選ばれ、信長が天下布武の旗印をかかげて築城したこの名城も、今日は群がる猟犬に引裂かれてゆく一羽の雉にすぎなかった。

福島、細川、加藤の順で本丸に迫ったとき、搦手からやって来た池田輝政は、いきなり城門に火を放ち、旗を本丸の中に投げいれて、

「――一番乗りは池田勢!」

と勝鬨をあげさせた。

城門は破られた。諸勢はなだれを打って侵入する。降る者、討たれる者、自刃する者、逃亡するもの……それは、どの時代の、どの戦にも共通する地獄図だった。
「――織田秀信どのは何れにあるや!?」
「――岐阜中納言は何れに……」
「――見苦しくかくれ給うか。出あえや」
放たれた火焔の上に何時か雨がふりだして、次第に勢いを加えて来る。
その雨の中を城から廓へ、廓から御殿へと走りまわるのは、何れも白刃をかざした侵入勢で、織田勢の姿は殆んど無くなった。
と、その時、奥庭の馬酔木のかげから一人の甲冑武者が笠をかかげて走り出して来た。
追いつめられた織田秀信の降参姿であった。

十

或る意味では、戦の勝敗は、戦術戦略以外に、人間生活のあらゆる面を加減し、乗除して得た微妙至高な計算の上に出て来る答えといえた。
その意味では、家康の計算と織田秀信の計算とでは格段の相違があった。秀信には眼先に迫る敵は見えても、その敵が、何に支えられ、何に煽られて出て来ているのか見破る力は全くなかった。
一方は、これに勝たなければ、家康は出て来まいという精神的な背水の陣であったというのに、一方は戦功に逸りながらも、つねに背後の三成の、無力な支援を待つという脆弱な構えで

あった。

若し秀信がもう少し精密な計算の出来る人物だったら、彼はここで両者の差に気付き、老臣たちの意見を容れ、名を捨てて実を取る籠城にふみきっていたに相違ない。

ところが二十一歳の秀信は、若さに任せて虚名をのぞんだ。その結果は信長以来の名城を一日も持ちこたえ得ず、雨中に笠を取って、敵の前にひざまずかなければならなくなった。

「――岐阜中納言秀信、本丸を明け渡し申そうぞ」

その容貌が、祖父の信長に生写しなだけに、先頭の池田輝政も福島正則も、躍りかかろうとする味方をおさえて、息をのんだ。

「――本丸はたしかにわれ等で受取ろう。が、中納言には、その後は何となさるご所存ぞ」

池田輝政は、信長を知っているだけに声がふるえた。

福島正則は、輝政以上に感情の強い猛将だけに、まだ感慨を制しきれず、わなわなと唇辺をふるわすだけで言葉もかけ得ない。

「――内府のご存分に……と、申したきところながら――」

「――申したきところながら何と仰せられる?」

「……ご存分にと申したきところながら……武士の情……」

後は言葉はかすれてよく聞きとれなかった。

「――自刃なさると仰せられるか」

「――いかにも」

その頃になって、あちこちから、手傷を負った者が秀信の周囲に集って土下座した。

その数はすべてで三十人にみたない。どうやらこれが本丸で生き残った人数の全部らしい。
「――戦は中止じゃ。戦は終わったと急いで全軍に布令させよ」
はじめて正則は大声で怒鳴った。そして、つかつかと輝政の前へ出て来て、
「――自刃とは、早まったお考えじゃ」
それは、父がわが子を叱る口調であった。
「――この度の戦は、みな、石治少と大刑少の野心に出でた謀略、中納言さまはお若いゆえ、それに見事に誑らかされた。その事がおわかりあればご自害には及び申さぬ」
「さりとて、このような恥辱の上塗りは……」
正則はそれには答えず、
「――雨がしきりじゃ。庇のうちへ床几を」
そう命じて池田輝政をうながして雨を避けた。そこへ、本多忠勝と井伊直政も走って来た。
何れも、この若い城主の面影に信長を連想するからであろう、先刻までの狂ったような殺人者から、憐びんと無常にめざめたしみじみとした人間の表情に還っている。
その意味では人間はまた神にも近い転身の妙を身につけた生きものだった。
「中納言にも床几を」
池田輝政が小声でいった。

十一

床几を与えられてからも織田秀信は、わなわなと震えつづけた。

容貌は祖父に生写しでも、胆の大小、鍛練の相違は蔽うべくもなかった。恐らく今度も眼さきの屈辱感だけで、織田の宗家の存続という、遠い将来の事など考える余裕がなかったのに違いない。

「――勝敗は兵家の常でござる」

到頭正則が妙なことを言い出した。見るに見かねての彼らしい脱線だった。

「――ご自害は思いとどまり、城をわれ等に明け放して、暫くご謹慎これあるよう」

すでに秀信は、自害する勇気も失くしている。それに向っての説教だけに、考えてみるとおかしな言分だが、誰も笑うものはなかった。

「――左様でござろう。ご祖父と内府とは、吉法師と竹千代の昔からご兄弟もただならぬ間柄、その嫡孫におわす中納言のことゆえ、この正則が、誓って内府に助命を乞い申そう」

「………」

「――おわかりでござるな。早まって家名を傷つけ給うことのないよう……」

そこまで言って、正則はまた好意の脱線をしてのけた。

「――そうじゃ。それも心苦しいとあらば、ここではひと先ず高野山へ難をお避けなさるがよい。さすれば内府はこれ以上ご追及はなさるまい。そして、騒動決着の後にわれ等がお取りなし申そう……そうじゃ、それがよい」

正則にすれば、自分の伜と同じ年齢ごろの秀信が、思慮をなくして茫然としている姿を見るにしのびなかったのであろう。

高野山――と聞いて、はじめて秀信は顔をあげて、池田、井伊、本多と順に見ていった。

そして誰の表情にも正則以上の憎悪があらわに無いのを知ると、無言で短刀に手をかけた。
「――ご自害はなりませぬぞ……」
「――心得てある」
呟くようにうなずいて短刀を抜きとると、自分で自分のもとどりを切り放った。
「――高野山へ参ろう。あとをよしなに」
正則はホッとして、差出す髪を受取り、
「それが宜しゅうござりましょう……」
とそれをみんなに示していった。
「――本多どの、井伊どの、この旨江戸へ早速ご報告を」
「――心得ました」
そのあとで、いったい池田と福島の何れがこの城へ先に攻め入ったかでまたひともめあったが、それは本多忠勝の発言で妥協が成った。
「――前後から同時に入ってこれを落したと致しましょう」
そして両家より旗二本ずつを軍士に添えて差出させ、織田勢に代ってここを守備することに決った。かくして東西両軍の間で切られた最初の火蓋は、見事に東軍の勝利に終り、降り続ける細雨の中で奮い立った東軍将士はいよいよその眼をきびしく大垣城に据え直して夜を迎えた。
江戸にある家康の、見えないところで振ってゆく采配が、村越茂助直吉の清洲到着四日目にして、敵の最重要な前線拠点岐阜城を見事に手中に納めさせてしまったのである……

見えぬ采配

一

岐阜城の陥落は大垣にあった石田三成にとっていいようもないおどろきであった。彼の手許からも、選りすぐった人々が出向いて行って瑞龍寺山の砦を固めていたのだし、どのような不利な条件が重なり合ったにせよ、三日や五日は微動もすまいと思っていた。

ところが、敵が木曾川の東までうごき出したという知らせと、渡った、落ちたという三つの知らせが手を打つ隙も与えぬ一本の糸のように矢継早であった。

むろんその愕きのために茫然と手を束ねてゆくほど三成は闘志のない男ではなかった。

いや、逆にこの緒戦の齟齬が、却って三成を三成らしい姿勢に返したといってもよい。

（これは甘かった！）

そう思うと同時に、もはや誰の助力がなくとも、彼は彼の素志を貫徹しなければならない立場に据え直されたのだと自覚した。

依然として毛利輝元は出て来る様子はなく、西軍諸将のうちにあった日和見のいろは、折あるごとに洗い出されて来る。

そうなればもはや三成は、自分をつつんだ温容気取りの策謀とは手を切って、いやでも正面へ躍り出なければならなかった。

（わが身に対する反感なぞ、何するものぞ！）
始めから、これは家康対三成のしのぎを削る一騎討ちだったのだ……改めてそう思い返す機会になった。
彼はもう一切の逡巡を振りすてて、垂井にある島津義弘を招いて、
「お身は、墨俣（大垣より一里半）に出でて、すぐさま美濃路の東西を扼されたい」
と、命令した。
義弘は年齢も石田三成よりはるかに上であったし、高麗では雷名をとどろかせた猛将だけに、
「して、御身は何れに出でられる？」
戦となれば自分の方が経験者だが……といった表情でき返した。
「それがしは、小西どのと共に大垣城を出でて沢渡に陣し、部下を合渡に出して中山道をふさぎ申す。ご貴殿はきびしく川の東をにらんであられたい」
三成は高飛車にいい添えた。
島津義弘も、すでに内心では三成に快からぬ感情を抱いている。それが、命令者の位置に立つとまざまざと感じ取れた。
「したが、ご貴殿とわれ等と小西どのだけでは、東海道、中山道の敵はふせぎ切れぬと思うが如何」
「お案じなさるな。伊勢路にある宇喜多勢一万が、もはや大垣に到着致す時刻でござるわ」
島津義弘はそれで漸く「フン……」と短くうなずいて墨俣に向っていった。
しかしその頃には、すでに、川筋に向って東軍の黒田長政、藤堂高虎、田中吉政などの軍勢が、

ひそかに行動を起していたのだ。

と、いうのは二十二日の夜を徹して福島勢とともに岐阜に向った黒田、藤堂、田中の諸勢が、払暁岐阜に着いてみると、先鋒の福島、池田両勢の小荷駄や雑卒が混み合っていて、殆んど兵を進めかねる状況だった。

そうなると、彼等もまた手を拱いて後塵を拝している人物ではなかった。

「——よし、われ等は川筋へ展開して、大垣からやって来る援軍を打ち崩そう」

そのまま岐阜を右にみて、合渡の附近に進出し、期せずして三成勢と長良川の東西で顔を合わしてしまったのだ……

二

合渡川（長良川）の向うには石田三成の部将舞兵庫、森九兵衛、杉江勘兵衛等が急派されて来ていた。

しかしその軍勢はせいぜい一千あまりだったし、将士はすでに岐阜の戦況の不利を聞かされている。

それに引きかえて黒田、藤堂、田中の諸勢には、岐阜攻めの功を池田、福島、細川等の諸勢に譲ったという気負いがあった。

いうまでもなく彼等の背には、家康の眼が光っている。ここで岐阜攻めに立向った諸将に劣る戦をしたのでは、面目が立たなかった。

「——よし、この川も押渡って、石田勢を蹴散らそう」

まっ先にそういって馬を乗り入れようとしたのはいちばん上流に向った田中吉政だった。
みると吉政のうしろに続いて来ている人数はわずか十八騎だった。川面には霧が深くたち込めて、味方の人数を対岸から見透されるおそれのない代わりに、敵の陣備えもわからず、川瀬の深浅も測りがたかった。
「――これは無謀じゃ。まずおとどまり下され」
汀に足を入れた馬のくつわに取りついて、吉政を諫めたのは宮川土佐であった。
「――ご覧なされませ。まだ十八騎しか着いて居りませぬ。この小勢で、川を渡っても戦にはなりませぬ。まず同勢をお待ち下され」
「――止めるなッ！　人数は敵に見えぬ。この場合は不意を襲うが第一じゃ」
「――いや、それは危い！　若し殿が、深みへ入って押流されたら何となさりまする？」
田中吉政は歯ぎしりして、馬の口取りの下人、三郎右衛門にあごをしゃくった。
「――三郎右、そち川へ入って瀬踏みしてみよ。そちが探った浅瀬をわしもついて渡ろう」
下人はゆっくりと首を振った。
「尋常の川ならば歩行渡りもなりましょうが、かような大川では……」
「――なに、そちまで逡巡するのかッ。瀬踏みは下人に相応の役目じゃ。早く渡れッ」
吉政はもはや完全に戦場心理の人になっている。三郎右衛門は、こんどは不敵な微笑をうかべて頷いた。
「手前、案内を知らぬこの川に、うかうか飛び入って、若し渡り損じましたならば、人の見る目も恥しく、また、大事な戦の前に味方の士気を損じてはと思いご辞退致しましたが、重ねてのお

言葉ゆえ入りまする」
いうと同時に、瀬の中へ入っていった。
「――よし、下人ながら思慮のある奴、吉政も続こうぞ」
そこへ六騎あまりで重臣の坂本和泉が到着した。
「――宮川どの待たれよ。殿の切ッ先を挫くべきときではない。急がねば一番乗りは黒田勢にさらわれようぞ」
土佐を押えて、吉政のわきに駈け寄り、
「――いざ乗り込ませたまえ」
二十騎あまりの同勢で川霧の中へ躍りこんだ。
これを知って黒田長政も又遅れるものかと、敵陣に近い湊村の川上へ乗り入れた。
家康はまだ江戸にあって動かない。が、その采配は、ふしぎな力で前戦将士を動かしている。
川向うの石田勢、舞兵庫の陣中が、急にさわがしくなったのはこの頃からで、川上の山と山の間の空が、霧の間にくっきりと青い帯をのぞかして朝を呼んでいる……

三

「――この川の先陣、黒田甲斐守！」
川瀬の中央で、若い長政が大声あげて吼え立てると、更にその少し上流を渡っていた兜武者が、挑戦するように声を張った。
「――今日の一番乗りは、黒田が家人、後藤又兵衛基次なり」

戦にも、たしかに陰陽二面の発露がある。いったん攻められる側にまわると、知らず知らず受身になって陰性が全軍を包んでゆくが、攻める側になると、多く陽気が陽気を呼び、活気は一兵の末に至るものであった。

もうこの頃に田中吉政の一団は、川を渡って茱萸の木原に着いていた。

「――見よ、まっ先に川を渡ったぞ。よし、三郎右、瀬踏みあっぱれ！　そちに苗字を許してやろう。今日からは合渡三郎右衛門と名乗るべし」

「――はッ。有難き仕合わせ」

三郎右衛門が雀躍して再び吉政のくつわに取りつき、下流へ向って馬首を立て直したときには、黒田勢も、そして、更にその下流から馬を乗り入れていた藤堂高虎も、すでに敵陣めざしてまっしぐらに馬を駆っていた。

こうなると石田勢は機先を制されて、それぞれ豪勇で鳴らした部将たちながら、受身の不利は避け得なかった。

舞兵庫はいわずもがな、もと稲葉一鉄の家臣で、姉川の戦に高名した杉江勘兵衛も、名だたる戦上手ながら誰が誰に当ろうとする暇もなかった。

そこへ東軍の三隊は切ッ先揃えて突き入った。

石田勢はせいぜい千人……それなのに次々に川を渡って来る東軍の数は未知数だった。

岐阜の戦況如何によっては、更にどれだけ後続部隊がやって来るか……？

その不安は攻める側の陽気さに比例してのしかかる。

石田勢はじりじりと後退しだした。

押す者と押される者の心理の差……それに加えて、戦場の空気にもっとも大きく影響する銃声が、東軍は次第にふえてゆくのに、西軍はまばらになった。
そこへ、部将三人のうち、いちばん勇名の高い杉江勘兵衛の討死が伝わった。
杉江勘兵衛の九尺柄の朱槍は、それが屹然と立っているだけで、味方の士気に磐石の重みを加えていたのだが、その勘兵衛も、槍の柄まで真赤に濡れた頃になって、田中勢の西村五右衛門に呼びとめられたのだ。
「――名あるお方とお見受け申す。返し合い候え」
戦場では疲労に対する労りはなかった。呼びとめられてそのまま退くことも戦国武将には許されない恥辱なのだ。
「――いかにもわれは杉江勘兵衛、してそこ許は」
「――田中吉政が家人、西村五右衛門」
「――よしッ。参るぞ」
もう尋常にわたりあっては槍先が下るほどの疲労であった。それを知って、勘兵衛はいきなり自慢の朱槍を五右衛門に投げつけた。
「――おう……」
五右衛門は、参るという相手の言葉に、大きくうなずいたのだが、それが、生死のわかれ目だった。唸りを生じて飛来した槍は一諾して下げた西村五右衛門の兜のひさしを抜き、頭上の皮を引き裂いてうしろに飛んだ。
と同時に、五右衛門の槍は深々と勘兵衛の脇腹を刺し貫いていたのである……

四

個人個人の運不運の網の目は戦場にも張られてあった。

杉江勘兵衛の万死に一生を賭けた投槍を、まともに喰っていたら西村五右衛門は声も発て得ず落馬して果てたに違いない。

それが僅かに大きく首を動かして頷いたばかりに全然賽の目は逆になった。

投げて素手になった勘兵衛が、投げられてわたり合おうと繰出した五右衛門の槍先に、われとわが身を投げかけるようにして突かれてしまったのだ……

「――杉江勘兵衛が討たれたぞ」

「――勘兵衛ほどの豪の者が……」

それは、ともすれば浮足立とうとしていた石田勢の敗勢を決定的なものにした。

そして逆に、田中勢、黒田勢の先を争う進撃を誘い出し、更に合渡川の下流をわたった藤堂高虎を、一挙に赤坂まで進撃させる結果になった。

赤坂と大垣は目と鼻の間であった。ここまで東軍に進出されては、いったん大垣城を出て、墨俣に陣取っていた島津義弘も、沢渡に出ていた石田三成の本隊も、急遽大垣城まで引きあげなければならなくなる。

うっかりしていて退路を断たれたらという不安が濃くなるからで、むろん藤堂高虎はそれを狙ったのだ。

「――合戦では田中、黒田に先を越された。赤坂はわれ等の手で……」

浮足立った石田勢の退路を斜めに切って、藤堂勢が赤坂をめざして進みだした頃には、沢渡の三成も墨俣の島津義弘も、もはや、ここでの決戦の無益を知って退きだした。

そして、その退却の知らせは、いよいよ東軍進撃の足を速める結果になる……

戦機のうごきは、個人個人の運不運を織りまぜながらいったん大きく動きだすと、それは襲来する台風や洪水と同じ性質の「勢い――」を帯びて来る。

退く者も進む者も、それがどうしてこうなったかなど考えてゆく暇もなかった。あっという間に位置を変えて次の静止の場を迎えている。

「――藤堂勢が、赤坂に向ったぞ」

「――おくれを取るな。今日の宿営は赤坂じゃ」

田中、黒田の両勢が、呂久川（揖斐川）に迫り、進路を赤坂へ向け変えたときには、もう彼等の前の石田支隊はおびただしい手負いと共に雲散霧消してしまっていた。

そうなると、岐阜城を落した福島、浅野、池田、細川の諸勢もまた、綽々とした余裕を見せてみなの後から進み得る。

こうして二十四日には、東軍は大垣を左に見る赤坂に結集し、その戦勝を堂々と江戸に報じた。

考えてみると、まことに奇怪な戦であった。いったん動き出すと、これだけの実力を持った豊臣恩顧の諸将が、つい五日前までは、家康が西上しなければ戦い得ないもののような錯覚に陥って、いらいらと口論を繰返していたのだから……

ところが彼等は眼に見えない采配に動かされて行動を起した。そして、ここまで来てみるともはやそれぞれが不退転の自信を持ちだしている。

（これは、われわれだけでも、結構勝てる戦ではないか……）

いったいこの采配の不思議は、どこに潜んでいるのであろうか……？

五

この采配を家康の打算と見れば、家康の老獪さはまさに神技というべきだった。

ついに徳川家の一兵も損ずることなく、豊家の旧臣だけを巧みに頤使して大垣城の前面まで味方を進出させ得たのだ。これで尾張は戦場圏外となり、美濃も大半はその手中に収めた。

こうなると、石田勢はもはや「伊勢路の戦――」などと、のどかな事はいっていられない立場になる。

三成一人に憎悪を燃やしきっている豊家の武断派が、牙をむいてことごとく眼の前に勢揃いしてしまったのだ。

三成はいやでも西軍の全勢力を大垣に結集しなければならなくなった。

むろんそれには時日がいる。

何として大坂にある毛利輝元を呼び出すか？

越前にある大谷吉継の軍勢の到着は何時になるか？

いや、それよりも毛利秀元を総大将としている、吉川広家、安国寺恵瓊、長束正家、長曾我部盛親などの三万の軍勢が、伊勢路から引返して来るとして、その兵糧は？　飲料水は……？

恐らく赤坂にある東軍と対峙したまま、その体勢を整え終るのでなければ、うかつに決戦はなし得まい……

と、計算して来ると、両軍の運命の決ってゆくのは九月中旬という答えが出る。
家康はそうした事を細く計算しているらしく、九月一日に、江戸を発つといって来た。
これも家康を老獪なりとした眼で見れば、まことにこの上ない狡さであった。
ただに江戸出発の時日の計算だけではない。
いよいよ出発の陣備えを見ると、徳川家の大切な家人たちはみな秀忠につけて中山道をすすませ、自分の手勢は出来るだけ手控えて東海道をやって来る。
いうなれば、豊家の旧臣だけを指揮して三成を片付けようという肚づもりらしかった。
いや、事実家康はそう考えていたのであった。
中山道は東海道とは比較にならぬ悪路であり、その進撃に、日数のかかることは知れてあった。
したがって、家康が戦場に到着したからといって、中山道をやって来る秀忠勢……というよりも、真正の徳川勢は果して間に合うかどうかわからなかった。
それも万々承知の上で、まず豊家の旧臣たちを戦わせ、これに自信を持たせたうえで出て来て、尚かつ、わが家の軍勢は温存し、豊家旧臣の犠牲で天下を掌握しようとする……
狡猾といったら、これほど狡猾な戦略は又とあるまい。
しかし家康の行動と心理の間に、そうした負い目は全くなかった。
少なくとも、徳川家の軍勢は、家康自身の「天下を預る……」という思想で練成して来た大切な軍隊だった。
したがってこれが到着する前に雌雄が決するものならば、当然それで決すべきであり、決し兼ねる事態を招いた時には、秀忠の到着を待って、更に強力な一戦を展開し、泰平招来の悲願達成

に備えるという責任ある者の用意であった。
（相手は人ではない。天なのだ。神仏なのだ）
その自信に支えられて来る家康のため、赤坂駅の南五丁、岡山（後に勝山）の頂上に、陣屋の構築をはじめたのは九月の初旬。
東軍の意気は日増しにあがった……

六

家康が九月一日に江戸城を出発すると聞いて、石川日向守は暦を繰り、あわてて家康の前へ出ていった。
「――本日のご出発は思いとどまられまするよう」
「――ほう、それは何故じゃ」
「――はい。今日の方位を見まするとと、西塞りでござりまする。西征の戦の門出に西塞りでは如何かと存じまするが」
家康は笑って答えた。
「――それは幸先がよい。その塞っている西を開けに参ろう」
むろん打つべき手は一ヵ月間の江戸在城でことごとく打ち尽した。
伊達政宗には軽挙を戒しめ、毛利一族との交渉は黒田長政をして内々に継続せしめた。
九州の加藤清正へも連絡してあったし、加賀の前田利長はすでに行動を起こして大聖寺の城を占領していた。

しかも関東の諸大名にはまだまだ江戸に在って、もし上杉景勝が出て来たならば、一挙に自分が出撃していって討ち果すと知らせてあった。
その周到な用意は更に、江戸に人質として送られて来ている前田利家の後室芳春院にも及んでいた。
家康はみずから筆を取って次のような手紙を芳春院の附人、村井豊後守に書送った。

――今度び肥前殿（利長）加賀の国のうち、大聖寺おもてへ御働きお手柄の様子申し来り、忠節と存じ、一入一入満足申すばかりに候。このうえ北国の儀、切り取りにこれを遣わすべく候。この由芳春院殿へよくよく心得、御申し候てたまわるべく候。その方もご苦労と存じ候。やがて上方切りなびけ、芳春院殿、迎えに参らせ候。かしく。

八月二十六日　　家康

村井豊後殿

尚お尚おわれ久しく文を書き申さず候得ども、あまり満足に候間自筆にて申入れ候。

これもまた芳春院を安心させ、前田利長を利用するためと考えれば、まことに人を喰った空世辞とも言い得よう。しかし信長時代からの利家の妻女……幾世代も共に生きて来た者への友情とみれば、極めて自然な人情の発露とも解し得る。
又岐阜城を落とし、更に大垣城の近くまで進出して、その進退を問い合せて来た池田輝政には、次のような手紙を書き送ってあった。

岐阜の城、早々に仰せつけらるる所、お手柄、何とも書中に申し尽しがたく存じ候。中納言（秀忠）まず中山道を押上るよう申付候。我等は、この口（東海道）より押し申すべく候。りょうじ（粗そう）なきよう御働き第一に候。われ等御待ちもっともに候。

八月二十七日　　家康

吉田侍従殿（池田輝政）

こうして九月一日に江戸を出ると、更に家康は、藤堂、黒田、田中、一柳の四名宛に出発を知らせると同時に、自分の到着まで、戦をさし控えるように申送った。

以前には早く攻めかかれと言い、いよいよ決戦となると、自分を待てという。これもまた狡猾な身勝手と言えないこともなく、それだけ慎重なのだと解せないこともない。とにかく、家康は彼等だけでは、西の総軍にあたる力はないと見ているのだ……

七

家康の引きつれて出発した人数は凡そ三万二千七百余人だった。

そして、一日の晩は神奈川にとまり、ここで、前記の手紙を、藤堂、黒田、田中、一柳の諸将に出したのである。

二日　藤沢泊。

三日　小田原に泊ると、小早川秀秋からの使者が、永井直勝の許を訪ねて来た。

小早川秀秋がすでに家康に心を寄せているのは家康自身よく知っていた。むろん彼自身の意志というよりも、伯母の高台院（寧々）の指教によることも明瞭だった。
しかし家康はこの秀秋の使者は相手にしなかった。
「——あれのせがれの申すことなど当てにならぬ。取りあうことはない」
それは一見甚だ冷淡に見える。が、ここで相手にすると、それが西軍側に洩れるおそれがあり、味方が彼をあてにする不利がある。その辺の計算の素早さは、これも永年の経験によるものだった。
次に加藤嘉明の使者が来た。これには家康は自分であった。嘉明は犬山城を守備している。このまま守備してあるべきか、それとも進出すべきかという問い合わせであった。
「——われ等の到着を待って動かれるがよい」
そういって使者を帰した。
四日　三島へ着くと家康は馬印を、先に熱田へ持参させてそこで待てと命令した。別に馬印奉行も付けず、小者がそのまま馬印をもって熱田へ向かった。
五日　清見寺泊。
六日　島田泊。
七日　中泉泊。
八日　白須賀泊。ここへ先手の藤堂高虎がわざわざやって来て、夜半まで家康と密談し、夜明けを待たずに帰っていった。同じ日に小早川秀秋からまた使者が来た。しかし、この時も家康は永井直勝に、宜しく申して帰せといっただけで会わなかった。

九日　岡崎泊。
十日　熱田泊。この日西の海辺に四、五ヵ所兵火が見えた。これは西軍側についていた水軍の九鬼大隅守が火を放ったという話であった。そういえば熱田の浜から五、六丁の沖に、紫に白く桐を染め抜いた幔幕を張った大船が一艘見えた。九鬼大隅守は、家康の西上にあって志を変えようとしていたのだ。家康はここで馬印を持って先行していた小者と会いながら、その大船を横目で見ていたが、何もいわなかった。
十一日　清洲着。
十二日　同滞在――
藤堂高虎が、また前線から馬を飛ばしてやって来たのはこの日の暮れ方だった。
高虎と家康のそもそも最初の会見は、家康が、秀吉の乞いを入れてはじめて上洛した時である。その時藤堂高虎は、秀吉の命で、家康の居邸を内野の聚楽第内に建てていたのである。
その時から彼等の関係は、譜代の主従もただならぬ懇ろさを重ねて来ている。恐らく豊臣恩顧の諸将の動静は、高虎が、軍監の本多忠勝や井伊直政より遙かによく知っていたに違いない。
この日も高虎は夜半に至って帰り、はじめて本多と井伊は家康の前に呼び出された。

八

井伊直政と本多忠勝は、家康と高虎の密談が長すぎたのでどちらも、少しばかり不満顔であった。
（われ等よりも藤堂佐渡をお信じなされてか）

二人が家康の前に呼び入れられた時には、すでに城廓までが眠りこけているような静けさだった。

「夜が長くなったようじゃの」

「はい。駈け通して来たこととて、睡魔を追いのけるに難儀致しました」

本多忠勝は無遠慮に家康の前へ胡坐すると、

「藤堂佐渡は、西軍諸将の寝返りをあてにし過ぎては居りませぬかな」

ぴしりと一本釘を打つ気で皮肉をいった。

家康は苦笑しながら、同席している永井直勝に、

「誰も近づけるな」

そういって、自分のわきの燭台から、自分で丁子を取った。

「日本中が寝返るのが、わしの理想であったが、まだ、徳が足らぬと見えてそうも参らぬ」

「上様！」

忠勝はそれを家康のやり返しと取ったらしく、

「中納言（秀忠）さまのご到着は、何日ごろに相成りましょう」

「されば、まだ相当かかろうな」

家康は小首を傾げたままで、井伊直政に、

「直政はどうじゃ」

と、無造作にいった。

「やはり、秀忠の到着を待って戦をするつもりか」

直政よりも先に、
「では、上様は、中山道から中納言さまご到着の前に敵に仕掛けられるご所存で」
もっての他ではないかという忠勝の語勢であった。
「中納言さまご到着の上ならば、大軍を見て敵は戦意を半減致しましょう。それ以前に攻めるのは、燃えさかっている火をわざわざ叩くようなものではないかと存じまするが如何？」
「まず待て忠勝、直政に訊いているのじゃ。直政も、中山道から来る味方を待つ気かと」
「申上げます」
井伊直政は忠勝の意見がわかったので、幾分固くなって身を乗り出した。
「それがしは本多どのとは意見が違いまする。待ちかねていた上様がご到着なされた……にもかかわらず、直ぐには攻めぬ……と、なりましては、上様のご思案に不審を抱き、味方の歩調が乱れまする。即座に行動を起されるが当然かと心得まする」
「しかしそれでは燃えさかっている火に……」
また忠勝が口を出すと、
「燃えさかっているのは敵ではのうて味方だと、この直政は見て居りまする。それゆえ上様ご到着の声で、ハッとしているところを速戦でゆくに如かずと」
家康は、黙ってうなずいた。どちらもまだ家康の思案の奥までは見ぬいていなかった。
徳川家の力で勝ったという勝利は、力で世間を圧迫はなし得ても、泰平の道へ歩ませる、理で将来を見透させる道ではなかった。まことの道理と権道とは、どのような場合にもあるものだった。

家康はすでに神仏から天下を預けられて出て来ているのだ……

「よし、速戦で参ろう」
と、家康はいった。秀忠の助勢が無くとも勝てる戦であったら、それで勝ってよい筈だった。

九

「上様のご決定となればやむを得ぬ。しかしそれが藤堂佐渡の進言に依るものならばご一考願わしゅう」
まだ忠勝はこだわった。
藤堂高虎は黒田長政とともに、それとなく西軍の内部の者と連絡を取っている。もしその連絡の結果が、敵を見くびらせてあるとすれば一大事だという忠勝の危惧らしかった。
家康にはそれもよくわかっていた。
「案ずるな忠勝。敵の寝返りなど、わしはさして計算には入れて居らぬぞ」
「それならば、中納言さまご到着を待ち、万全の備えを固めて叩くが利益では……？」
そこまで言われると、家康もまた、彼等の戦略眼まで自分を低く置き直して説明するより他になかった。
忠勝や直政すら説得出来ないようでは鉄の結束は期し得ないと思うからであった。
「忠勝、おぬしは、わしと中納言といずれが大切じゃと思うぞ」
「これはしたり、上様あっての徳川家、そのような問いは心外にござりまする」
「そうではない。わしはすでに六十になんなんとする。中納言はこれからじゃ。わしが戦死して

も、中納言は生かしておいて、あとの泰平を築かせねばならぬ身じゃ。わしが最初に戦うのは、天命を畏んでの事と気付かぬか」
「しかし、そのような」
「先ず待たっしゃい。よいかの……わしだけで戦って、不利を招けばとて壊滅するような愚はやらぬ」
「それは、上様ならば……」
「いったん不利と見れば進退はなれたものじゃ。そのうえ、わしだけで勝ったとなると、徳川勢の主力は手つかずに残ってゆこう。この利をお許は考えたことがあるか」
「………」
「世間では、わしは狡いと言うであろう。徳川勢は温存し、豊臣恩顧の諸将だけを働かせたと……それも無論覚悟のうえじゃ」
　家康はそういうと、井伊直政に視線を移して、
「ここがお許とも、いささか家康の思案の違うところじゃが……こんどの戦はのう、戦に勝つだけでは事の済まぬ戦なのじゃ」
「戦に勝つだけでは……」
「そうじゃ」
　家康は大きく頷いて、
「勝ったあとに、天下の乱暴者にビクとも言わせぬだけの余力を残し得るや否や……それだけの余力を残し得て、家康なり、中納言なりが、これをしっかりと握ってなければ、この戦の後始末

は、高麗の戦の後始末よりも、更に更に悪い結果を招こうぞ」
「なるほど！」
と、はじめて忠勝はため息した。
「わかるか忠勝。大きな戦の後では太閤子飼いの武将たちですら四分五裂ではなかったか……幸いわしがあった。それでも天下はこのような戦をせねば治まらぬ仕儀となった……よいかの、今度は、そのわしまでが一方の総大将じゃ。ここでうかつな戦をして、日本中がどん栗のせい比べになり下ったとしたらどうなるのじゃ。織田の右府の苦心も太閤のご苦労も、わしの生涯の悲願もみなうたかた……家康が、まこと泰平を願う者ならば、中納言に余力を残し、老軀を駆って陣頭に起つ！　それだけの覚悟をせねば済まぬところじゃ。いや、そうせねば神仏がお許しあるまい。要は後の天下の泰平のためなのじゃ」

十

もはや、忠勝も直政も一言もなかった。
まさに、この戦は並の戦ではなかった。
高麗の役では、まだ国内に家康という余力を残してあったが、こんどは国内の大勢力が真二つに割れてしまって戦をしているのだ。
龍虎共に傷ついて、それぞれ領国へ引きあげて割拠してゆくようなことになったら、それはまさしく信長出現以前の乱世への逆転だった。そのような大事な時ゆえ、自分よりも前途のある秀忠を残して、家康みずから陣頭に立つと言う……

そう言われると、武辺者の忠勝にも、まだ円熟の境には遠い直政にも、ぴたり一度にのみ込めた。
「これは、恐れ入ってござりまする。そう聞けば、忠勝など、進んで御馬前に屍をさらす覚悟をせねばなりませぬ。では、すぐさまご進発なされまするか」
忠勝の言うあとから、井伊直政はもう起ちあがって、
「とにかく、みなにこの旨伝えておきまする」
「それがよい。藤堂佐渡にもそう申した。今日一日は風邪がぬけぬゆえ思わずも人馬を休息させたが、明十三日は岐阜に入り、十四日には前線へ到着すると知らせておくよう」
こうして、家康の急戦実行は決定し、予定の通り、彼等は翌日清洲を出発して岐阜に着いた。
岐阜では家康は降伏してある織田家の家老、百々綱家の邸に泊った。そしてここで北陸路の丹羽長重と土方雄久に手紙を与え、長重や青木一矩が、前田利長と講和するよう手配した。
土方雄久はさきに常陸の太田に流されてあったのを、家康は秘かに許して北国へ使いさせていたのである。
そして、翌日はいささか廻り道ながら、大垣に近い渡河点を避け、長良の渡しを越えて赤坂駅南の岡山に到着した。ここから南をのぞめば大垣城は五十余町の眼下に見える。
「いまあの城の内にあるは、宇喜多中納言秀家、小西摂津守行長、石田治部少輔のほかに福原右馬助等が入ってござりまする」
そう言う直政の報告にきっとした表情で頷きながら大垣城の方へ、馬印の金扇をはじめ、紋所の入った大旗七流れ、白地の二田町、折掛け二十本を並べ立てさせた。

すでに夜半に発って来ていた鉄砲衆、使番衆などは、家康よりも一足先に到着して、陣の前後は、きびしく固められている。

この家康の到着はいったい西軍にどのような影響を与えていったか……？　当然大垣城からもまた、この岡山の陣営は望見出来る筈なのである。

いや、彼等は、家康の到着以前から、あたり一帯に大きく翼をひろげて見せた東軍の士気はくわしく探り得ていたに違いない。

先海道の北の山手には、加藤嘉明、金森長近、黒田長政、藤堂高虎、筒井定次と展開し昼井村には細川忠興が陣を張り、同村の東、大墓には福島正則。勝山の北の手には榊原康政、井伊直政、本多忠勝、京極高知。西牧方には堀尾忠氏、山内一豊、浅野幸長。荒尾村には池田輝政、同長吉。長松村には一柳直盛。東牧野には中村一忠、同一栄、有馬則頼。磯部宮には田中吉政……その他が、見渡す限りに翼をひろげてあった東軍の布陣のうちへ、いよいよ指揮者の姿が現われたのだからその動揺が小さい筈はなかった……

十一

石田三成は、大坂を発つおりに、

「――たとえ十人の家康がやって来てもいささかも恐れるものではない」と、豪語していた。

むろんそれには味方鞭撻の意味もあったが、さりとて決して口先だけのものでもなかった。

内心では絶えず家康が、何時目の前に出現するかを警戒しながら、一方では、逆にそれをあり得ぬことにしようとして心胆を砕いていた。

上杉景勝、佐竹義宣、真田昌幸等が東にあって挑戦してゆく限り、家康は西へは向い得まい。その間に毛利輝元を誘い出して東軍を混乱におとし入れる……

それは、彼の希望でもあり策戦の基調でもあった。したがって、彼は、東軍が俄かに行動を起して岐阜を攻め、赤坂に迫ったときも、狼狽はしながらも、まだそれが、見えない位置から振られてゆく家康の采配であろうとは思っていなかった。

その三成の思惑を自信づけるように赤坂とその周辺に進出して来た東軍はそこで進撃を中止した。

八月二十四日から今日――即ち、九月十四日までの二十日間の静止期間は、

「――家康来らず！」の三成の希望観測をいよいよ深めて来つつあった。

（東軍の武将どもは、上杉、佐竹、真田等が戦闘を開始したので、家康が江戸を離れ得ぬと知り、その弱点を察知されまいとして、ここまで進出して来たのに違いない……）

家康の振る「見えない采配――」はみごとに三成にそう思い込ませる結果になっていた。

ところが、今日になって、江戸にある筈の家康の馬印が、いきなり岡山に立ったのだから大垣城内の意見は当然二つに割れていった。

「――あれはニセの旗印に違いない」

「――そういえば金森法印の白い旗が家康のによく似ているぞ」

「――とにかく斥候を出すように」

そして、それが真正の家康とわかったときには、城内の空気は一度に秋霜のきびしさを加えた。

考えてみれば、何という情報蒐集上の手ぬかりであったろう。家康が江戸を発ったのは九月一

日――それを十四日、目前に馬印を立てられるまで少しも察知し得なかったとは……
何故赤坂まで進出して来ていながら、東軍がぴたりとここで戦闘を中止していたか？
原因は戦に不なれなためばかりではなかった。西軍の結束未だ全からず……その不安が、三成ほどの鋭敏な感覚をも曇らせていたからに他ならない。
「――家康に違いございませぬ」
斥候がその報告をもたらしたときには、三成の前へ血相変えた人々が続々と詰めかけていた。もはや好むと否とにかかわらず、決戦の機は目睫の間に迫ったのだ。
籠城か？　夜襲か？
それとも出でて野戦で勝敗を決してゆくか？
大垣城主の伊藤盛正はいうまでもなく、宇喜多秀家、小西行長の両将に続いて、島津義弘も一文字に唇を結んでやって来た。
しかし――
ここでの軍議のさまを記す前に、作者はいったん筆を西軍の配備とそれぞれの内情描写に向けなければならない。
東軍が赤坂周辺に結集した八月二十四日から今日の九月十四日までの間に、西軍の間には、どのような動きと変化があったであろうか……？

松尾山の眼

一

松尾山は関ヶ原の西南、松尾村から南へ向けて坂道一キロあまりのぼった二百九十メートルほどの高さの山である。

その上に、織田信長が、浅井長政と戦ったおりに、不破河内守光治に築かせた砦跡が残っている。

頂上の平地は東西十間、南北十二間の狭さながら、その中腹にも数段数ヵ所にわかれて平坦な場所がある。

ここへのぼって四方を展望すると、関ヶ原とその周辺はいちばんよく見透せる。

東には桃配山（後の家康の陣屋）北には天満山（小西行長の陣屋）が見え、垂井から関ヶ原を通って西へ通ずる街道と、その両脇にひろがる平地を見おろすには、最上の場所であった。

その松尾山に、九月十四日、当然大垣城に来会し、三成等とともに軍議を経て、配備につく筈の小早川秀秋が、八千の手勢とともにさっさと陣屋を決めてのぼっていった。

小早川秀秋は、高台院に愛育された彼女の甥で、伏見城攻めのおりには、兄の木下勝俊が城内にあるというので、鳥居元忠に籠城を申入れて断わられた。

まだ二十四歳で、毛利輝元がやって来ぬ限り、西軍の総帥にあたる宇喜多秀家よりは同じ中納

言ながら五歳の年少だった。
しかし、五歳の差で宇喜多の頤使に甘んじるのは、彼の気位と若さがこれを許さなかった。
改めていうまでもなく、彼は三成を憎悪している。
高麗で勇戦して、勇ましすぎるという三成の告口によって所領を奪われ、
「――大将の器ではない!」
はげしく秀吉に叱られた屈辱感は、それが二十代当初の出来ごとだけに、骨肉にしみついた、忘れ得ないものになっている。
それを安泰ならしめて呉れたのは秀吉の死と家康の取なしだった。
したがって彼は今日までに何度も家康に密使を送って、自分が、三成よりも遙かに家康に好意を抱いていることを告げて来た。
しかし、家康からは、伏見のおり同様、直接には確かな手応えはなかった。
「――わしを警戒している内府は……」
それは一途な若者にとって、いいようもない淋しさであり不満であった。
高台院は、家康に味方しなければ、天下の泰平も、豊臣家の無事な存続もあり得ない。それでは太閤のまことの希いにそむくことゆえつねに家康と連絡を断たないように……会うたびごとにいうのだったが、若い秀秋には、その真の意味までは汲みとれなかった。
「――高台院さまは、わが身にとって母同様のお方……」
その高台院にもっとも大きな屈辱を与えた者は、淀の君……そして三成はその淀の君側の人物なのだと解してゆくと、三成への憎悪は二重になり、更に家康に信じられない不満も孤独も倍加

した。

それゆえ、彼は、宇喜多秀家が、伊勢路へ出陣するおり誘ったが、そのすすめに従わず、八月十七日に近江に入って石部にとどまった。

次第に彼の虚無感は深まって、出来ればどちらへも味方せず、この争いを皮肉な嘲笑で見物したくなっていた。

そうしたところへ八月二十八日に、家康に味方している親友の浅野幸長と黒田長政の手紙が届けられて来たのである。

その手紙が再び彼に動きのめどを与えたのだ……

二

浅野幸長と黒田長政連署の手紙は、秀秋が家康側に立つことを既定のこととして次のように認められてあった。

「――（前略）先書をもって申入れおき候えども重ねて山道阿弥のところより、両人これを遣わし候条啓上致し候。貴様いずかたに御座候とも、このたび御忠節肝要に候。二、三日中に内府公御着陣に候えば、その以前にご分別、このところに候。政所さま（高台院）へ相続きご馳走申候わでは叶わざる両人に候間、かくのごとくに候。早々返事示しまいらせ候。くわしくは口上をもって御意を得べく候。恐惶謹言――」

この手紙は、浅野、黒田の両人が赤坂の陣地から、石部、鈴鹿を経て、近江、愛知川の高宮にとどまって、病気保養と称して、遊猟に出ている秀秋の許へ届けられた。

その行間にあふれているものは、浅野、黒田の両人もまた、秀秋を味方と信じきっているということの他に「政所さまへ引続きご馳走候わでは叶わざる両人……」であることを告げている。この点が最もつよく秀秋の心を揺ぶった。

この手紙の文面の持つ意味は、

「――高台院の心を安じようとしている両人だから申上げるのだが、家康の着陣も近いことゆえ、その前に、去就をハッキリしておくように」

と、いう意味になり、家康は、高台院の意を受けて三成を征伐するのだという解釈を前提にしている。

高台院と家康とが同じ考えに立っていることは一点の疑いもない。それゆえ、われわれ両人も忠節を尽しているのだから、貴様もここで高台院に忠節を尽せというのである。

そういわれると、これまで小早川秀秋が、家康に相手にされなかった不満は霧の晴れるように消えてゆくから妙であった。

秀秋が家康に味方するのではなくて、高台院や秀秋に味方して、家康は戦っているのだ。それゆえ秀秋よ！　もっとしっかりして呉れと激励している意味にとれる……

この主客の顚倒は、若い秀秋の懐疑の雲をふき払った。

と、いって、むろん今迄三成や宇喜多秀家の味方を装って来ている関係から、すぐさま旗色を鮮明にして東軍の許へ馳せ参ずるわけにはゆかない。

もしそれを知ったら西軍は全力を挙げて小早川勢を叩くだろう。

そうした前後の事情を考え、両軍の会戦近しと見ると、秀秋の拠るべき陣地は、松尾山より他

になかったのだ。
ここに陣取って機を見て、浅野、黒田を介して東軍に合流する。
「――若し万一東軍が不利を招いて敗退したときには、そのまま山を下りずに傍観していればよいのだ」
彼が松尾山に陣を取ると聞いて、流言蜚語は西軍の中に乱れ飛んだ。
「――やはり金吾中納言は戦う意志がないらしい」
「――いや、すでに家康に内応しているのかも知れぬぞ」
そこで、直ちに大垣城から使者が秀秋のもとへ出された。みなみなお待ち申してあるゆえ、直ちに城内に入られて、評定の席に列されたいと。しかし秀秋は応じなかった。
「――いま、病癒えたればここまで参ったが、世上とかくの流言もあり、いろいろ嫌疑のかかっている身でもある。先ず東軍と一戦し、諸氏の疑惑を解いた上でお目にかかろう」

三

まず東軍と一戦してから大垣城の軍議に加わろうというのでは、家康の着陣を知って、籠城か、野戦かで論議をしている人々を一層大きく動揺させるばかりであった。
小早川勢八千は、決して小さな戦力ではない。
これが戦場へ到着せず、明日の戦に間に合わないというのならばまだ事は簡単だった。
しかしすでに到着しているのである。
しかも、それは何を考え、何を見詰めているのかよくわからぬとあっては、無気味なことこの

うえない。
いったい戦う気があるのかないのかというだけの不安ではなくなった。若しそれが戦の最中に寝返ったら何うなるのか？　首すじに白刃を突きつけられたような不安に変った。
大谷刑部（吉継）が憂慮して、
「――これは捨ておきがたい」
わざわざ自身で秀秋の陣営に赴いたのは十四日もすでに夜であった。
寡黙な吉継は三成の前では多くをいわなかったが、その決意は固かった。もう全く視力のない身に鞭打ってわざわざ松尾山に輿にゆられてのぼってゆくのだ。万一秀秋に寝返る心があると見たら、その場を去らせず刺す気であった。
幸い病気のために顔は繃帯で包んでいる。表情を相手に見られるおそれはない。
家康の着陣が事実でなければ、むろん吉継もこのような決心はしなかったであろう。
しかし、家康はすでに眼の前へやって来ているし、逆に毛利輝元は出て来ていないし……そうなると、小早川秀秋の本心を確めなければこの近くではうかつに戦い得ないという答えが出るのだ。
吉継はまず三成に誓書を書かせ、これに評議出席の諸将に連署させてそれを持参した。
その誓書には、次の四ヵ条が認められてあった。
一、この度び忠義を尽すにおいては、秀頼公十五歳にならせられる迄、関白職を秀秋殿に譲りわたすべきこと。
一、上方の御賄料として、播州一国相渡すべきこと。もちろん筑前、筑後の両国は以前のまま

なること。
一、江州において十万石。並に、同国にて、家老稲葉内匠、平岡牛右衛門に、秀頼公よりそれぞれ十万石ずつ下さるべきこと。
一、当座の御音物として、金子三百枚、並びに、稲葉、平岡に下さるべく候こと。
これに署名した者は、宇喜多秀家、小西行長、長束正家、石田三成、安国寺恵瓊、それに大谷吉継の六人だった。
むろんこれは実行出来るや否やの問題よりも、どうしてニヒルな一人の駄々ッ子をこの場だけでもうまくなだめようかという思案に出でた文字の餌であった。
大谷吉継としては、やりきれない気持であったろう。しかし、このままではうかつに戦も出来ないとあっては、何とか手を打たねばならぬ焦眉の急だったのだ……
吉継は無事に新しい柵門をくぐって、秀秋の陣営に到着した。
しかし、出て来たのは秀秋自身ではなくて、予期したとおり、稲葉、平岡の二重臣だけであった……

四

「金吾さまにお目にかかりたい。そして、直々この誓書お渡し申そうかと思うが」
大谷吉継がそういうと、稲葉内匠頭正成は、平岡牛右衛門頼勝をかえりみて、
「それが、ただいま、散々にわれ等を叱りつけまして、ようやく御寝なされたところでござりまするが」

稲葉のいうあとから、平岡頼勝も口を添えた。
「近ごろ、ご病気のせいか御酒が乱れまして、ほとほと閉口致して居りまする」
大谷吉継は、すでに彼等が、秀秋に会わせる気のないのを察した。
といって、このままあっさり引きあげたのでは、彼等の心は一層西軍を離れてゆく。
「すると、ご風邪はいまだ快気に向わせられぬと仰っしゃるか」
「はい。世間で、いろいろ取沙汰されておわすことが気にかかると見え、少し熱が下りますると、すぐさま馬に召されて狩をなさる。そして、又ぶり返すという事の繰り返しでござりまする」
「するとこんどの戦の采配は、お許等でお取りなさるご所存か」
「はい。いいえ……そうなっては士気にも影響致しまするゆえ、とにかく今日はご静養をすすめましたので」
「それでは、わざわざお起し申すに及ぶまい。軍議の結果はすでに通達あったことと存ずるが、そのあとで、大坂から増田どのの飛札がござっての」
「あの、増田さまから……どのような？」
「いよいよ毛利輝元は、秀頼公をお伴い申して明日大坂を出発なさるということじゃ」
これは全くの嘘であった。
大谷吉継は、北国にあって大坂の細い事情は知り得なかったが、毛利輝元がやって来まいという推測はなし得ていた。
どのような策士が、どのような手順で撒き散らした噂かわからなかったが、大坂城内へは、い

ま、一つの奇怪な流言が人々の耳から耳へ伝わりだしている。
それは増田長盛が、ひそかに家康へ内通しているという噂であった。
(全然、あり得ないことではない……)
大谷吉継はそう思っている。
増田長盛は、三成ほど抜きがたい憎悪を家康に抱いているわけではなかった。ただ三成の強引さに引きずられて、思わずも深入りしてしまったというのが増田長盛の立場なのだ。家康の方へもそれとなく色目を使うことはあり得ることであった。
しかし、そのことが大坂城内で囁かれだしたということは、西軍にとって致命傷になりかねない。
というのは、安国寺恵瓊にすすめられて、西軍の総帥に祭りあげられ、いささか進退を持てあまし気味の毛利輝元にとっては、この噂を無視して、大坂城を出ることなど思いも寄らないことになる。
若し秀頼を連れて大坂城を出たあとで、増田長盛に叛旗をひるがえされるようなことがあったら、秀頼はいったいどうなるか?
大坂城にあれば故太閤の遺児であったが、城を出ずれば何の力もない八歳の童児にすぎない。
それで、大坂城や佐和山城を落とされたらそれこそ居るべき城も持たぬ流浪の孤児になり下がる。したがって、増田長盛内応の噂は、毛利輝元の足を大坂に釘付けする決定的な意味を持つのだ……

五

（輝元はもう出て来まい……）

大谷吉継がそうした事情を知っていながら嘘をついたのは、小早川家の老臣どもが、果たして、輝元と連絡あるかどうかを探ってみようという肚からだった。

吉継は、輝元が明日出発するといってから、じっと全身の神経を集中して相手の反応を待った。

「さようでござるか。では毛利中納言も、いよいよご出陣なされまするか」

それは聞きようによっては、

（そのような事があるものか）

という否定にもとれ、事実、おどろいているようでもあった。

「そこで、この誓書を認めさせて、来たのだが、お目にかかれぬとあれば是非もない。ご両所で披見なされて、お眼ざめの節お取り次ぎ願うとしようか」

吉継は静かに持参のふくさ包みを稲葉正成の前においた。

書中に、稲葉、平岡の両人にも、十万石ずつあて行うという餌がある。その餌にはどのような関心を示して来るか……？

「では、拝見致しまする」

「どうぞ」

稲葉はこんどはハッキリと愕いたようであった。そして、それを黙って平岡頼勝の手に渡した。

「ほう、秀頼さま十五歳まで関白職をわが殿に……」
吉継はそれをわざと軽くかわして、
「とにかく金吾さまは秀頼公の御連枝なれば、これには何人もご異存はござるまいでの」
平岡頼勝はかすかに笑ったようだった。
「ご勝利のあとの話でござるが……しかし、これは有難いご誓書、決して主人に、おろそかには致させませぬ」
吉継はそれだけでグサリと胸へ短刀を突き込まれたような気がした。
「——ご勝利の後の話……」
小早川家の老臣どもは、西軍の勝利をすでに危ぶんでいる。期せずしてその不安が口をついたのだ。
したがって、余程戦局が好転しない限りは、この山頂で日和見する気と見ておくべきだった。
「では、用事は済みましたゆえ下山致すが、金吾さまはまだお若い。呉々も老臣衆で、軽挙なきようご注意下されし」
「それはもう、充分に心得てござりまする」
「仮りに、ここで老臣衆が去就を誤らせると、秀頼公まで、捕虜になり、豊家を取り潰したは、金吾さまという不評も買いかねぬ。明日は軍議決定の通り、必ず山を下られてご勇戦あるように」
「はい。今迄の噂の恥辱をそそぐはこの時と、それだけは主人も繰り返し申して居りまする。何とぞ明日の戦をご刮目下されたい」
「それ伺うて安堵致しました。では」

そういって吉継は手をひかれて立ち上がったが、その心の中は逆であった。
（どうやらわしの死ぬ時が来たような……）
彼の案じていたとおり、三成には実戦統御の信望はなかったのだ。
吉継が輿に乗り込むと、老臣二人は引返して来て、こんどは声に出して笑った。
「われ等のご主人を関白にして、毛利や石田は何になる気であろうやら」
そして、連れ立って秀秋の前へ出ていった。

六

秀秋はまだ酒を呑んでいた。
彼にとっても今日はそう易々と眠ってなど居られる日ではなかった。
伏見では鳥居元忠の挨拶に腹を立て、ついに一方の攻撃を敢えて買っては出たものの、その心中は重苦しいものであった。
何彼といえば高台院は、家康と連絡を断つなという。
秀吉の本心は、日本の統一と天下の泰平にあったのだ。その志を継ぐものは家康……家康こそ秀吉の事業を生かす真実の後継者なのだと会うたびごとに説教した。
はじめは秀秋も素直にそれに耳を傾けた。しかし、それは家康が、あまり秀秋を近づけようとしないのと、逆に、三成や秀家の側の話をより多く聞かされてゆくうちに次第に一つの迷いに踏み入り、更に深い虚無感におちいった。
（いったい高台院の話を、すべて真理と考えていいのであろうか……？）

いや、それより以前に、秀吉の本心は、果たして高台院のいうように、日本の統一とか、天下の泰平とかいうような、立派な希いに貫かれていたのか何うかという疑問であった。

そうではない。自分の出世と栄耀のために働いて来ただけなのだ。それを高台院は、自分の良人であるがゆえに、殊更美化して貴いもののように錯覚して来ている。

そう思うと、家康とて秀吉と大差はない。この方は秀吉よりも謙虚であった。堪忍強く、辛抱づよく、その代わりに陰険に天下の権力を自分の方へ引き寄せようと計っている……ただそれだけの事なのに、自分だけが、清らかな心で家康を助けてみても無意味ではないか……

ある時機には、秀秋は、家康と高台院の仲にさえ、ある種の猜疑をさしはさんだ。

淀の君が、ひそかに大野修理と密通していたように、高台院もまた家康と何かあるのではなかろうかと……

しかし、その事に関する限り今では、自分の想像の誤りを確め得たが、

(果たして人間は、高台院のいうように、美しく高い理想を追って生きているものなのか何うか？)

そうした人間不信の疑惑はいまだに消えうせてはいなかった。

その前へ、平岡頼勝と稲葉正成が、三成たちの誓書を持って現われたのである。

「帰ったか刑部は」

「はい。斯様のものをおいて参りました」

正成の差し出す誓書を受け取って、秀秋は蒼白く笑った。

「これが人間の正体よ。見たかこの盛沢山な描いた餅を」

「はい。いよいよみな狼狽して居ります証拠かと」
　秀秋はもう一度フフンと笑って誓書をその場に抛り出し、
「三成はもう軍費もない。財布の底が空になった。それゆえ、増田長盛にも、持てるもののすべてを出せと強要しているそうな」
「はい。それで長盛が内府に内通しそうだなどという噂でござりまする」
「噂だけではあるまい。人間は自分が裸にさせられると、他人も裸にしたくなるもの。高台院さまの一番わるいお癖もそれじゃが……」
　秀秋はちょっと虚空を見る眼になって、
「あのお方も、さっさと裸になって大坂城を出られた。それから後に仰せられることは、いつも強いご理想ばかりじゃ……」

七

　秀秋が、高台院を非難するような言葉を洩らすのは珍らしかった。
　それだけに稲葉正成も平岡頼勝も、不安そうに眼まぜをした。
　事ここに至って、もし秀秋に気が変られてはそれこそ収拾のつかない混乱を招いてゆく。すでに彼等は、浅野、黒田の両将のもとへ、手紙の趣きはしかと承知してある旨の返事を出してあるのだ……
「それはそうと、大谷刑部に、われらの思案を見破られは致さなんだであろうな」
　両人はホッとして、

「はい。それは、充分に心致しましたれば」
「刑部に見破られてあると、何時西軍から発砲されるやも知れぬ。ここでは東軍よりも、西軍の方が怖いぞ」
「殿！」
と、稲葉正成は陣屋の内を見回して、
「それは殿のお心深く……」
「ハハ……口に出すなと申すのか。よいよい。わかっている。しかし、世の中とは醜いものよのう」
「それはそうかも知れませぬが……」
「一方では、このように成りもせねば出来もせぬ餌を突きつけ、一方は、勝つと見ゆるゆえ味方せよと迫って来る」
「殿！」
「ハハハ……もう運命は決まったわ。天下など誰が取ってみたとて、そこに生きる人間どもがこのように醜いものでは、美しくもきれいにもなりようがない。誰が取っても泥は泥じゃ」
「もう、ご酒を遠ざけましては」
「酒か。そう毛嫌いするな。酒だけじゃ。呑めば必ず酔わして呉れるものは……」
「いいえ、ここでお働きなされば、必ず御運は開けましょうほどに……」
「ハハ……先ず一つ呑め。小早川秀秋は一段高いところに居るのじゃ」
「それは、この陣地のことで」

「陣地ばかりではない。泥と泥の争いゆえ、勝つ方へ味方する。世間の者は、わしを笑ってゆくであろうが、わしは世間を笑ってやる」
いいながらまず正成に盃を突きつけて、自分の手で酌してやった。
「呑うだら、牛右衛門に回してやれ。よいかの、どちらが天下の主になっても、さして変りばえはせぬとあれば、何を好んで敗れる方に味方するか……わしはな、鈴鹿峠で放鷹をしながら、つくづく人間の愚劣さに気がついたぞ」
「はい。有難く頂戴致しました」
秀秋は、大谷刑部が帰ったと聞いて、急に酔いが発したらしい。そして、その発した酔いは、やはり彼の本性に格闘を挑んで来るらしかった。
（美しく生きたい！）
そう念じながら、次第に人生の汚辱面に眼を奪われる若者の、一度は通らねばならぬ懐疑の枯野であった。
彼はいまその枯野の利己心をひっさげて松尾山にのぼっている。
信じているのは家康でも三成でもなかった。いや、彼自身をさえ嘲笑しながら、彼は、この戦の勝敗をながめている。
「──これが愚劣な人間どもの踊りなのだ」
双方が相討ちにでもなったら、彼は、
天に向って大声あげて笑いながら、山を下りたいところであった……

八

「殿、この辺で盃はお納め下さるよう、次の軍議を知らせに、大垣城からまた人が上がって来るやも知れませぬゆえ」
平岡頼勝が貰った盃を伏せてゆくと、秀秋は案外おとなしくうなずいた。
「よしよし、ではそう致そう。それにしても、江州において、そなた達に十万石宛、秀頼さまから下さるという……欲しくはないかのハハ……」
「ご冗談はお慎しみを。われ等に十万石宛どころか、治部少どのご自身の領地も危いのでござりまする」
「ハハ……怒るな内匠、人間というものはおかしな計算をするものだということじゃ。近江の国にそのような余った米がどこにあるぞ。ない米まで呉れるという、これでは自分が裸になるより他にあるまい。ハハハ……そのような計算をするものが、この秀秋は愚かじゃ、大将の器ではないなどと太閤殿下に告口しくさった」
やはり秀秋はまだ、高麗での戦のおりの不快な怨みを捨ててはいない。
彼は盃を高坏の上に伏せて立ちあがると、
「もう一度陣地を見廻って休むとしようぞ。ついて参れ」
足許に酔いを見せながら起上った。
たぶんに自分の存在を老臣たちに示威しておこうとする劣等感の裏の動きらしかった。
「見廻りならば、われ等両人が……」

「そうではない。愚かな大将が、賢い大将を笑うてやるためには、入念な備えが要るものじゃ」
ふらふらと幔幕の外へ出てゆくと、改めて馬廻りの者を叱咤した。
「これでは篝火が足らぬ。どしどし焚かぬか。金吾中納言秀秋の戦意を示すに足るほど……今夜は、徹宵夜空をこがしておくのじゃ」
手にした鞭で、柵門をたたきながら東の峰にまわって、
「あれは何じゃ!?　あの動きは……」
街道沿いに、北に動いてゆく一団の火影に瞳をこらした。
「あれに移動して来る人数がある。敵か味方か、すぐにもの見を出してみよ」
そういってから、また皮肉に笑っていった。
「敵か味方か……というても困るのう。わしには敵も味方もなかった筈じゃ。ハハ……」
「シーッ。お戯れが過ぎましょう」
「よしよし、誰の軍勢か、それだけ確めておけばよい。あのあたりではさして多くの人数もおけまいからの」
その言葉で稲葉正成はすぐさま斥候を出してやったが、それは、山を下った大谷吉継が、秀秋の去就を気づかって、見張りに街道沿いの山裾に陣取らせた彼の部将、脇坂、朽木、小川、赤座等とはまだ秀秋は気がつかなかった。
とにかく松尾山に陣取った、一人の懐疑主義者の進退は、ここでは諸刃の剣となって無気味に、東西両軍の陣営を睨んでゆく颱風の眼になった。
「よし、これでよかろう。あとはおれの知ったことではない。どちらが、どのような戦をする

か、愚かな大将は黙ってじっと見てゆくまでじゃ。ハハ……さ、帰って休もうぞ」
その頃から、いったん雲が切れて星影をのぞかせていた空は、また、暗く細雨を含んで来た。どうやら明日は霧の深い夜明けになりそうな関ケ原近辺の天候だった……

石田草

一

大谷吉継が、ひそかに小早川秀秋を説きに松尾山をめざしている頃――
大垣城内では、敵の手応えを探りにいった前哨部隊が、相当の手傷を負うて薄暮の中を帰って来たのでごったがえしていた。
この城の主は伊藤盛正。盛正は東軍の諸将が赤坂へ布陣した時から、敵との通謀をおそれて、城下の主だった町人達からまで人質を徴して城へ入れていた。
それ等の人質が、家康の到着を知って武士以上に狼狽したのはいうまでもない。中には、いっそ死ぬならばこの城に火をかけて……などといい出す者さえあるほどで、
「――とにかく、敵情を探りながら、出来得れば一泡吹かせて、味方の士気を盛上げておかねばならぬ」
三成が、戦巧者の老臣、島左近に前哨戦を命じなければならないほどの事態であった。
島左近は、三成が、こうした日のために二万石という大禄を給して抱えてあった筒井家の浪人

で、当時兵法日本一と称されていた柳生石舟斎宗厳などとも親交があり、野戦の駈け引きでは達人の噂が高かった。
その島左近が、同じ石田家の老臣蒲生備中と共に東軍の中村隊に誘いかけ、前哨戦では互角以上の戦をして引揚げて来たのであったが、城内の不安は去らなかった。
「――全滅させて来ると豪語して出てゆきながら、あんなに負傷者を出して戻って来たではないか」
「このありさまでは籠城になろうぞ」
「――町を焼かれたうえ、ここで蒸し殺されるのか。島左近、蒲生備中といえば、石田家の両翼といわれるほどの侍大将、それがあの有様では……」
「――これは巧々と内府の謀略に乗せられたのじゃ」
「そうらしい。みな、内府はいま、奥州で上杉勢と戦っている。それに佐竹、真田が兵を挙げて攻めかかって行ったゆえ、こちらへなど来れるものではないと、たかをくくっていたからの」
「――これは、飛んだことになったぞ」
そうした雑閙の中を、あわただしく宇喜多秀家や小西行長などが眼を血走らせて出入りするのだから、町人たちの不安と狼狽はそのまま下士に伝染する。
「――いったい評議はどう決ったのであろう。籠城か、それとも城を出でて戦うのか」
「――騒ぐな。わし等が騒いでみたとて何うなるものぞ。とにかく軍勢の数では味方がずっと多いのだ」
「――すると案外明日は戦にならぬかも知れぬな。まだ、江戸中納言秀忠の旗は立ってはいまい」

そうした混乱の中で、とにかく西軍の軍評議は「野戦――」に決った。
籠城といってみても、これははじめから無理であった。
第一松尾山にのぼった小早川秀秋が、山を下って城に入る様子はなく、長束正家も安国寺恵瓊も、南宮山の南に陣取って、明らかに日和見を決めこみそうな気配なのだ。
と、その雑鬧の中へ馬を飛ばして、島津義弘の代理として、甥の島津豊久がやって来たのは、もうすっかり夜になってからであった。
彼は、篝火の間を縫って大玄関に馳せつけると、
「島津豊久、治部少輔どのに御意を得たい！」
赤鬼のような表情で呼ばわった。

二

島津勢は、街道の北側に、大谷、宇喜多、小西と横に並んだ天満山の北に陣を割当てられている。そこから豊久が駈けつけたと聞いて、三成はすぐさま、広間に案内させた。
広間ではいま、前哨戦をやって来た島左近、蒲生備中などを囲んで、石田勢の移動の打合せ最中であった。
籠城が不可能となれば、石田勢もまた、今夜のうちに城を出て、野陣を張らなければならない。その場所は関ケ原から北国街道を小池、小関の方向へ出外れた、島津勢の更に北側になる筈だった。
「おお、島津どのか。ずっとこれへ」

今更何の用談かと、審んで向き直ると、三十歳の豊久は、草ずりの音をたてて三成の前に坐った。

「明日を期して野戦に勝負を賭けると承りましたが、これはもはや動かぬ事でござろうか」

「いかにも」

三成は、まだ豊久が何をいいに来たのか察しがつかず、ちらりと島左近をかえりみながら、

「今夜中に配陣をおわり、運命は明日に待つ……東軍よりは地の理に明るいこの関ケ原、敵が大垣城に攻めかかっている間に、必ず殲滅の機会を掴む所存でござる」

「と、仰せられると、敵が動かねば味方は、そのまま待つのでござるか」

「これはしたり……」

脇から島左近が口をはさんだ。

「戦は生きもの、動かねば誘う手もござれば、そのまま引ッ掻きまわす手もござる。したが、島津どのには何か他に、妙案がおありなされてのことでござりまするか」

島津豊久はギロリと鋭く島左近を一瞥しただけでその方には答えなかった。

「今日までの味方の情報、まことに言語道断に存じまする」

「言語道断とは?」

三成の額にサッと表情が固定した。言葉は柔かかったが、出方によっては許すまじき気色である。

「われ等は当然内府の来るべきを察知してあらねばならぬ筈のところ……それを昨日まで、上杉や佐竹と戦うてあるように信じこんでござりました。うかつ千万！　見事内府に不意をつかれた

のでございまする」
今度は三成が答えなかった。実は三成は、東軍の諸将が赤坂までやって来て、何かひそかに待つ気配に変ったのを、知らずにいるほど鈍感ではなかったのだ……
しかしそれは口にし得なかった。
「――家康がやって来る……」
そういったら、それでなくとも歩調の揃わぬ西軍各自の胸算用が、どのような形で表面化するか……それを怖れたのだ。
「戦の駈け引きは、敵の機先を制すにありと、われ等はつねづね心掛けて参ってござる。しかもその機先を、ここでは見事内府に制されました。ここで先手を取り戻して見せねば、全軍の士気にかかわる大事と心得まするが如何？」
「して、そのご思案は」
「夜襲でござる。今宵のうちに夜襲して、内府をこの戦場から追い落す……それ以外に先手をとる方法はござりますまい」
豊久は、ぴたりと視線を三成の額に据えて詰め寄るようにいいきった。

三

三成はすぐには答えなかった。出来得れば三成とて、夜襲敢行に反対であろう筈はなかった。
しかし、島津豊久のこの思いきった献策に、果たして西軍の諸将が同意するほど激しい戦意を示すや否や……？

何よりも三成が心外に思っているのは、どのような事があっても毛利輝元をこの戦場に呼び出してみせるといっていた安国寺恵瓊が、長束正家とともに南宮山に陣取って、日和見をきめ込み始めたことであった。

恵瓊が保身を考え出したとすれば、当然その裏で、吉川広家や、輝元の代理として出陣して来ている毛利秀元の思惑が影を曳いている……と考えるより他にない。

いや、そればかりでなく、長束正家が恵瓊と接近しているのは、大坂城にある増田長盛の内通云々の噂とも関連ありそうな気がして堪らなかったのだ。

小早川秀秋ははじめから信を措けず、いま、三成と共に、水火を辞さずに戦うであろうと期待出来るものは、大谷吉継を除けば、宇喜多秀家と小西行長だけだといってよかった。

そうした情勢の中で、何うして夜襲が実行出来よう。島津豊久の献策は涙の出るほどうれしかったが、三成にはそれに応える自信がなかった……

「如何でござろう。内府は本日着陣したばかりであり、他の諸勢も前哨戦のあとでホッとしてござろう。されば今宵が先手奪取の絶好の機会と存じまするが」

豊久が、また面をおかしていい出すと、

「それは無用のあせりでござろう」

又しても島左近が口をはさんだ。

「なに、先制の好機を、無用のあせりといわっしゃるか」

「いかにも。そもそも奇襲というものは、小勢をもって大勢に当たる時のやむない手段。いま味方は遙かに東軍をしのぐ大勢力でござる。何を好んで奇道を用い、わざわざ危険を冒す必要がご

ざろうや」
「これはしたり！」
豊久は額にぐっと癇筋を這わせて、
「われ等とて戦の駈け引きを知らぬ者ではござらぬ。ここへ馳せつけるまでには、充分敵情も偵察してのことでござる。今夕の小ぜり合いの後、敵勢はホッとして、みなみな帯をゆるめて休息すると見てとってのこと、このまままっしぐらに夜襲をかけなば、岡山の内府の本陣は、たちまち蜂の巣をこわしたような騒ぎに変わる。ご再考願わしゅう存ずる」
豊久は話の中途から再び島左近を無視して、喰いつくような視線を三成に据え直した。
三成は、おだやかに一諾してから、
「貴殿のお心入れ、身にしみてござる。しかしながら……」
口を切って、思わず涙がこぼれそうになって来た。
もはや、最初の決意の通り、誰が味方せずとも、三成だけは断じて男の意地を貫こうと決心してあった身が、不覚にも切ない人情の風にゆらいだ。
（太閤が生きておわさば、わが身も九州探題として、もっと大きな威令を持ち得ていたであろうに……）
「しかしながら、軍議は一決し、それぞれ配備につきつつあるところ……ここで命令が変わっては、却って不満の徒も出ようかと存ずるゆえ……」
いいながら、到頭三成は豊久から顔をそむけた。

四

三成のただならぬ表情に気付いて、豊久はハッと次の言葉を呑んだ。
どうやら三成は、夜襲の成功を危んでいるらしい。それならば、島津勢だけで決行するが、それでもよいかと、念を押そうとして……ひやりと冷たい理性の雫に打たれたのだ。
(三成は、指揮者としての、自分の威令の行なわれないのを怖れている……)
若しそうだとすれば、島津勢のみが火の玉になってみても、むしろそれは滑稽だった。
夜襲で敵を攪乱しても、あとに続く者がなければ、その先は何うなるものでもない。
「では、すべては明日の野戦にかけまするか」
「そう決定して、それぞれ手配にかかってあれば……しかし、島津殿のご戦意はあっぱれ！　三成ほとほと感じ入ってござる」
豊久はそのあとの言葉を聞いてはいなかった。
「では、これにて御免を！」
ジロリと島左近を睨みつけ、そのまま全身に不満を見せて立ち去った。
「殿！」
しばらくして左近は低く笑った。
「好機を逸したとお考えなされまするか」
「そこ許は？」
「さすがに島津！　これほどの味方が一万あったら、と、それが口惜しゅう……」

三成は、手を振って左近を制した。
「そこ許も、夜襲がしたかったのであろう」
「御意！」
「明日は、明日は……晴天であろうかの」
「晴れさせねばなりませぬ。晴れて勝つ！　その事以外はお考えなされまするな」
「いや、わしは少しも案じて居らぬ。わしは、わしの信ずるところに殉ずるまでじゃ」
島左近はもう一度低く笑って、灯火の中に油を添えた。
「人間というものは、性来臆病なもののようで」
「いかにものう」
「その癖ひどく慾張りで……その慾に意地の箍がかかった時だけ滅法強うなりまする」
「ハハ……ところが、その意地の箍が、みなゆるみ出しているようじゃ」
「大きな慾よりまず身の安全を……これも、慾の一つには違いございませぬが。そうそう、柳生石舟斎めが、おもしろい便りを呉れました」
「柳生但馬は、家康方で働いているそうな」
「いや、あれには、世の常の敵味方の観念はございませぬ。いよいよ決戦の日が近づいたが、負けたら宜しゅう頼むとありました」
「なに負けたら……？」
「はい。その代わり勝ったら、わしが引き受けると。あの男には慾より意地が先にある。殿も、いうならばその口で……」

「慾より意地か……？」
「はい。その意地もまた、一つの慾かも知れませぬが」
そこへ老臣の舞兵庫がやって来て、
「準備が出来ました。すぐさまご出立を」
「よし、では先ず作兵衛から先に参れ」
いわれて、これもその場にあった氏家作兵衛が、三成と同じ服装で、一礼して広間の外に出ていった。
いうまでもなく三成の影武者……城内のあちこちで、又ひとしきり人馬の声がかしましくなっていった。

五

大坂を出発してこの大垣にやって来てから、三成の心境は二転し三転した。
いや、それは変わったというよりも、春日の若芽のようにぐんぐん伸びた……といった方がよいかも知れない。
始めはよく読みきれなかった人々の胸中が、いまははっきりと自分のこころの鏡に映じて来る。
彼は曾つて、上杉家の直江山城守と、毛利家由縁の安国寺恵瓊の二人を掌握しさえすれば、充分家康を狼狽させ得ると信じていた。そしてその二人を握るためには、先ず大谷吉継を味方に引入れることが大切と考えて、それを実行した。

大谷吉継だけは、いまだに彼の信頼を裏切らない。しかし、その他の人物は、すべてが、彼の思惑違いであった。

彼に、それだけ「人物——」を見る明がなかったのだといえばそれ迄だったが、はじめ彼が諸侯に豪語した、

「——十人の家康がやって来ても、たちどころに蹴散らして見せてやる」

そういったのは、決してただの宣伝だけではなかった。人間は慾望の前には小児のように無力なもの……そうした人間観に立つと、家康の魚籠にある餌よりも、自分の餌の方が数倍魅力をもった上等な餌に思えた。

上杉には関八州の餌をあてがい、毛利には執政の餌をつける。奉行どもは大谷吉継に監視させ、織田秀信は濃・尾二国で釣る。

小西行長には加藤清正という宿敵があり、宇喜多秀家には近畿侵領の夢がある。

彼自身さえ露骨に野心を示さなかったら、これで充分みんなを操り得ると計算していたのだ……

ところが蓋を開けてみると、それは次々に崩れ去っていた。人間が慾望以外のもので動き出したからではなくて、その慾望の規模が、彼の想像を裏切っていたのである。

言葉を変えていえば、彼が考えていたほど、人間は、慾望のために大きな冒険を試みる生きものではなかったのだ……

餌につられる弱点はみな持っていながら、冒険の前では、まことに臆病そのものだった。

彼がそうした自分の誤りに気付いたのは、この十日ごろだった……

すでに敵は赤坂まで進出していながら、ジーッと動きを制している。
彼は、それを逆に解し、彼等が大垣城を攻めず、一気に三成の本拠佐和山城へ向うものと錯覚して、急いで佐和山城に密行した。
しかし敵は相変らず動こうとしなかった。そのおり、佐和山で感じた慄然とした恐怖は、いまもなお彼の脳裏に灼きついている。
(家康にしてやられた!)
彼等は家康の到着を待っているのだ! そう気付いたときは、正直にいって全身が総毛立った。
家康がやって来るということは、上杉景勝が、彼の予期に反し、彼の下げている餌に飛びつかなかったという証拠なのだ……
しかし、その恐怖のあとで、三成は一つ悟った。
その悟りはしかし、彼を明るい道へ置き直すものではなくて、逆に彼の過誤が、この世では改めようのない、人間として最も大きな過誤であったと悟らせる絶望の悟りでもあった……
いま、三成は、影武者を先発させて、もう一度それをゆっくりと考えてみるのであった……

六

(上杉景勝は餌にかからず、毛利輝元は保身の城に籠って出ようとしない……)
何故であったろうか?
自分の餌の魅力が、彼等に冒険を強いるに価しなくなった原因はどこにあったろう……
はじめはみな、勢い込んで立ち上がった彼等ではなかったか……

三成がただ凡俗な野心家だったら、恐らくそれは、自分と家康の差がこうしたのだと簡単に割り切ったに違いない。
しかしそれでは三成は凡愚以上の妄動者になりさがる。
はじめから、家康の戦力の優っていることなど、万々承知の上の企図だったのだ……
三成が悲しい悟りの仄めきを感得したのはその瞬間だった。
(わしは人間を、あまりにいやしめていたのではなかろうか……？)
この疑問は、疑問であって同時に切ない反省でもあった。
彼は人間は餌で動くものと冷厳に計算して、心から相手を尊重したことがないのに気付いた……
(秀頼は？)
太閤の遺児として愛おしい。憐びんは感じ同情はしているが、彼が無上のものなどとは信じられなかった。
(淀の方は……？)
小賢しい勝気な一人の女性に過ぎない。恐らく彼女の眼には、自分も大野修理も、同じ男としか映じまいと思っている。
そう反省して来ると、上杉景勝も、毛利輝元も、決して第一級の人物とは思えず、宇喜多、小西に至っては、ただのありふれた利用価値しかない人間……とより他に思いようはなかった。
その中で、彼は大谷吉継の信義に厚い性格だけは、ひそかに尊敬していたし、島津義弘の戦闘力にはそれとない畏敬をおぼえていた。

よく考えてみるとそのわずかに尊敬していた人々だけが、いまでも自分のほんとうの支えになっているのだと気付いたのだ……

これを逆説すれば、彼の信じていたものは彼を助け、彼の心で卑しめていたものは、ことごとく彼を裏切ってゆくのに気付いたのだ……

（これは、大変な過誤を犯していたらしい……）

人には人それぞれの長所がある。それに眼が届かず、他人の短所と自分の長所を見比べてゆくところから相手への不信と卑しめを湧かせていたのだったら何うであろうか……？

そう思うと、すぐ眼に浮ぶのは、七将に追いかけられて伏見城へ遁げこんだおりの家康の顔であった。

（あの時家康は、本気で三成をかばい七将たちを叱っていた……）

その叱られた七将が、今日まっ先に立って家康のために働いている……

三成は愕然として、おのれを恥じた。

毛利輝元にも、上杉景勝にも、彼は人を介して策を弄していっただけで、直接、会って真情を吐露することをしなかった。大谷吉継にしたように、何故彼等を尊重しながら、説きつけようとしなかったのか……

それが、今日、彼等に、三成の実力を疑わせ、保身の逡巡に追い込んだ最大の原因になっているのではないか……

（信じ得ないものは裏切られる……）

そして、それを悟った時には、もう四囲の事情はきびしい結氷状態に入っていた……

七

三成の成長は、同時にそれまでの彼の信念を、根こそぎ揺ぶる風になった。
曾つて彼は自分の才覚を叡智と誇り、自分の立策を、破綻のない賢明緻密な意地の発露と自負していた。
ところが、彼自身の内部の生長が、その価値判断の規準を大きく覆してしまったのだ。
彼は人間としてあまりにも未熟であった。
人それぞれにある長所を伸ばして、活用すべきところを、卑めてこれを封ずるという不信の道を歩いて来てしまっていた。
彼がそれを悟って急遽増田長盛に、真情を吐露した長い手紙を認めたのは、家康が彼の前に現われる二日前、九月十二日のことであった。
（この手紙は長盛の許に届かず、東軍の手に落ちたが……）その手紙の中では彼は自分を虚飾しなかった。
——素直に大垣城内の混乱を伝え、長束正家も安国寺恵瓊も南宮山に営して、戦うためよりも身の安全を計っていると書き送った。
それまでの強がりを一擲して、味方は敵をおそれ、刈田に兵糧を取りには行かず、いちいち近江から米を取り寄せているとも書いた。
——敵方の妻子（人質）を五十三人も成敗したならば味方の士気はもっと引きしまり、敵に内応など考える者は現われまい。大津の京極高次など、弟が東軍の中で画策しているのだから、厳

罰に処さねば軍規は保ち得まいと愚痴をもらし、更に、小早川秀秋の進退を憂えたのち、長盛自身ももはや持てる金銀米銭は、みな吐きだすべき最後の時だとも書いた。
——頼みになるものは、宇喜多秀家と島津義弘、小西摂津守などだけで、このままでは、味方の内に必ず「不慮——」(内応者)の儀が出来るのが、目に見えるような気がするとも書いた。
恐らく三成の書簡で、これほど赤裸々に自分の苦悩を告白したものは他にあるまい。
(失敗だった!)
はっきりそれを悟りながら、今になっては志をひるがえすことも、和議を計ることも不可能になった追いつめられた悲劇の中の人間の苦悩が、何も気付かずに戦い得る者の二倍三倍に及ぶことをまざまざと行間に滲ませている。
むろんその手紙でも末尾では毛利輝元の出陣を促した。しかし、輝元がやって来るとは考えられず、長盛が、この手紙を見て、彼も三成と生死を共にする気になるであろうとも思っていなかった。ただ何か書かずにいられなかったのだといってよい……
そしてそれから二日後の今日、彼は到頭家康を目の前に迎えたのだ……
(決戦には無心で臨もう……)
燭台の丁子を除るのも忘れて、三成は凝然と胡座したまま身動きもせずにいる。今となっては勝つも負くるも考慮の他であった。ただ最期の一瞬まで、自分自身の伸びの結果を確めてゆきたかった。
(誰がどのように戦うか?)
それにも第三者に似た興味があったし、家康はどのように攻め、豊臣恩顧の諸将がどう動くか

も見ておきたい。誰が内応し、誰が逡巡し、誰が華々しく勇戦するか？　それ等はもはや、何うして勝とうかという曾つての彼の執念とは大きな距離を持った、解脱者の客観に変りかけている。その中で、ただ一つ、

「――この戦は、人間観の戦であった。人を卑しめた自分と、人の活用を知っていた家康との……」

そう思えることが、三成には慚愧に耐えない悔いであった……

八

大垣の城廓内は次第に静まり、秋雨が、ひっそりと軒を打って降りだした。

諸将の人数はあらかた城を出払ったと見える。恐らく松明も点けず、馬舌を縛した夜の移動は、この雨のためにいよいよ困難を加えてゆくに違いない。

関ヶ原付近の道路はさまで泥濘化せずとも、新しい野陣はそのまま泥田に変わるおそれがある。

（雨までわしを見限ったか……）

ふと軒の雫に耳を傾けて、三成は自分で自分を笑っていった。何時か、恐怖もいら立ちも遠退いて、自分で不審に思うほど、悲壮感の埒外に立っている。

そのせいか、暮方からこの城で決定していった明日の戦の策戦が、他人ごとのようにハッキリと思い返された。

――家康は、殊更進路を秘匿しようとしていない。彼は三成側の抵抗如何にかかわらず、関ヶ原を罷り通って西へ進路を取ろうとしている。

それに対する西軍の備えとしては、その進路を扼して、先ず最初は南北から、次に東西から二重に挟撃しようとする三成側の布陣に何の手落ちも感じられない。
問題はその手落ちのない布陣が、そのまま手落ちなく実行され、善戦されてゆくかどうかにかかっている。
若し万全の行動をして呉れたら、明日の夜の彼我の状況は逆転している筈であった。
家康側の先手は大関から山中の間で殲滅される。南側から小早川勢と大谷吉継の部将たちに進路をふさがれ、北側からは大谷、朽木、宇喜多、小西、島津、石田と次々に急襲を敢行する。されば進路をふさがれた家康勢は、もはや正常な進撃は断念して引返すより他に道はない。しかし、その折には退路は見事に遮断されてゆく筈だった。
敵を関ヶ原へ誘い入れて、南宮山から垂井、府中の線へ毛利秀元はじめ、吉川、安国寺、長曾我部等の大軍が押し出すと、家康勢は完全に袋の鼠になり下る。
そこで今度は東西からの総攻撃へ移るのである。人数に不足はない。士気如何では、明夜はすでに家康はこの世の者では無くなっている……手筈であった。
東軍の総勢は七万五千と推定されたが、西軍の数は届出あるものだけで十万八千を超えている。
したがって士気が互角であるとすれば凱歌は当然三成にあがる筈であった。
三成は、ふとまた笑った。
(後世の史家は何というであろうか……?)
恐らくこれを天下分け目の大戦と見るに違いない。人数からいってそれはまさに空前の規模で

ある。
（しかし……）
と、考えて又三成は首を振った。結果はもはや考うべきではなかったのだ……
三成は、小姓を呼んで、大垣城に七千五百の兵とともに残ることに決まった福原長堯を呼びにやった。
そして長堯がやって来ると、
「雨が段々はげしくなるようだが、諸将の発進は終りましたか」
そう訊きながら、自分の心が、次第に澄みきってゆくのを確めた。

九

結局、人間は死の瞬間まで、何か一つ宛学んでは伸び、伸びては学んでゆくものらしい。
ただそれは皮肉なことに、必要な時に伸びているとは限らないことであった。
いま三成は、彼が事毎に家康を敵視し、反抗して来た頃とは全く別人の境にある。
人数や術策をそのまま「力――」と信じて行動した過去の自分の幼稚さを、自分でしみじみと憐める気持であった。
今彼の味方に数えあげている十万八千人が、もし士気において家康側の半ばに及ばぬものとすれば、それはただに戦力において半減するだけではなくて、人間の引起し易い騒擾や不平の芽を、十万八千持って、貴重な糧食を十万八千人分費消する五万四千になり下るのだ……
いや、五万四千人分の力しか持たない人間が、十万八千人も集ると、その不平や慾望から起る

騒擾は手のつけられぬほど尨大なものにのし上る。

過去の三成にはその計算が出来なかった。

彼は質を選ばず、人間そのものを尊重せず、一片の術策で人を集めた。

その意味では彼の望みは達されている。

敵の七万五千に対して十万八千と……

しかし、その中で真に信じ得られる数は幾らあったというのだろう……？

が、その計算は、もはやこの場では死児の齢を数える以上の愚であった。

三成は福原長堯の表情にも、明日の戦いの不安を見てとると、

「この雨は、朝までには晴れる雨じゃ」

微笑を見せて言わずにいられなかった。

「移動の途中で気の毒ではあったが……」

「はい。それがしも晴れると見て居ります。雨があがらず、敵の進発が日延べになっては、味方の難儀は加わるばかり」

「みな、城は出たのでござるな」

「仰せの通り、第一に石田隊、第二に島津隊、第三に小西隊、第四に宇喜多隊の順序で出払いました。これほどまだひどくは降って居らなんだので……」

「それで安堵、ではそれがしも発つと致そう」

「でも、この降りでは……」

長堯は三成が、雨を避けて夜明けに発つものと思っていたらしく、

「すでに寝所の用意は致してござりまするが」
と、小声でいった。
「福原どの」
三成は依然微笑を消さずに、
「三成は頼れぬ者であったような。今まではの」
「は？　それは、何のことでござりまする」
「おわかりなさらねばそれでよい。しかし、今日はみなに、最後の詫びして廻らねば相成らぬ」
「詫び……でござりまするか？」
「詫び……そうじゃ。別の言葉でいえば督戦……とにかく諸将の陣屋を訪れて、家康が関ケ原へさしかかり、狼火があがったら躊躇なく攻めるよう頼んで廻るが、わしの勤めじゃ」
その言葉の意味は、福原長堯にはそのまま通じた様子はなかった。
三成はすでに長束正家と安国寺恵瓊には会って来ている。したがって、これから訪れるのは、小早川秀秋と大谷吉継の陣屋であった。
（今更、何のために……？）
そうした長堯の視線を浴びながら、三成は席を立って、秋雨の中へ黙々と馬を曳かせた……

東軍進発

一

石田三成が、小早川秀秋の陣屋を訪れ、秀秋の老臣平岡頼勝に面会して、明日の戦略を告げ、烽火を合図に東軍の腹背を衝くよう固く約束して、山中村にある大谷吉継の野陣に向った頃から、雨脚はようやく細くなった。

すでに子の刻（零時）はまわっていたが、大垣を発した諸勢はまだ行進の途中であった。

最初に大垣を進発して、北国街道を扼すべく、小関村に向った石田勢は、九ツ半（午前一時）に関ケ原駅を過ぎ、着陣を終ったのはすでに八ツ半（午前三時）であった。

三成自身は、小関村の北方の笹尾に陣したのだが、その右手に織田信高、伊藤盛正、岸田忠氏、それに秀頼麾下の黄母衣衆がならび、島左近と蒲生備中はこれ等の諸将の前衛となって、矢来の前に弓銃手とともに伏せていった。

その更に右手に、一丁半ほどの間隔をおいて島津隊であったが、これが小池村で東南に向って陣を布きおわったのは七ツ（午前四時）すぎであった。

小西行長の部隊は島津隊に右接して寺谷川に向い、天満山北方の丘を背にして、島津隊と前後して配備をおわった。

その右の宇喜多隊と大谷隊は中山道を扼すべき重大な任務のゆえに、夜が明けるまであわただ

しく人馬の動きは止まなかった。

脇坂安治、朽木元綱、小川祐忠、赤座直保等は、その兵を大谷の陣と中山道を隔てた平野に、小早川秀秋の裏切りに備えておかれたことはすでに記した。

大垣からいちばん遠い陣地で約四里。

その間、城を出る頃から降り出していた雨が、陣地へ着くまで降り続いていたのだから、敵にさとられまいとする闇夜の進軍は困難をきわめた。

旧暦の九月十五日……冷たい秋雨に全身をさらしてあると、夜明けの寒さは肌に迫る。しかし案外士気は旺盛だった。

中には、全軍あわただしく大垣城を出て来たのは、城内に裏切者の出そうな空気があったからではないか？　そんな臆測をする者もなくはなかったが、大半は勝利を信じて張り切っていた。

夜中に布陣を終って、張りめぐらした網の中へ進んで来る敵を捕捉、殲滅する……その作戦が、ひどくみんなにわかりよかったためと、味方の数が、東軍よりも二万以上も多いという安心感とが、彼等を勇気づけている。

それにしても、雨は西軍にとってどこまでも皮肉な贈物であった。

彼等が、ようやく陣地にたどりついてホッとするとあがったが、それは、東軍の進発をそのまま助ける結果になった。

家康は岡山の陣屋で、その雨のあがる音で眼を覚した。いや、雨音のとだえた静けさが、久しぶりに戦場にのぞんだ老将の睡りにピリリとさとくひびいてきたのだ。

家康は、起き出すと直ぐさま枕辺の地図を取って、耳を澄ました。

前夜の評定にしたがって、すでに全軍は行動を起しかけている。
立ち上ってつかつかと物見台に出てみるとあちこちで松明が点じられ、曳き出された馬のいななきが、まだ明けやらぬ闇の中に、聞えだしている。
その声を聞くと五十九歳の家康の血は、若々しくときめいた。
「やくたいもない！」
家康は苦笑して、又地図の前へ戻った。

二

子供のおりから数えきれぬほどの戦を経験して来ている故で、戦は呪うべきもの、避けねばならぬものと思っていながら、戦場に立つと全く違った昂りが五体にあふれて来るのであった。
（いったいこれは何であろうか……？）
正直に言って、清洲城に着いたおりの家康はひどく健康に自信がなかった。
彼の医学の智識によれば、それまでの道中を輿に揺られたせいであろう、中風が発しそうでたまらなかった。
肥満した躰のそこここが知らぬ間に痺れて、躰全体が妙に気だるく、時々舌がもつれそうな気がした。
そして、清洲へ着いて暁方まで諸将と会い、床に入った時にクラクラッと眩いがした。
（来たなっ!?）
その時のゾーッとした緊張をいまでも家康はハッキリと覚えている。中風は発病すれば半身か

全身が不随になる。もしそれで舌が動かず、筆談も出来ないとなれば文字通り廃人だった。
これが十年前の家康だったら、恐らく、その夜、狼狽して声を限りに人を呼んでいたに違いない。
しかし、今の家康は、自分でびっくりするほど狼狽はしていなかった。
（すべては神仏に任せてある！）
人事は尽したのだ。そして、人事以上のものが大きく人間を支配している……武田信玄は、三方ケ原で散々自分に勝ったあとで、笛吹川のほとりで何故倒れなければならなかったのか？
そのような事は、他人の身の上だけに限って起る筈はなく、いつか一度はわが身の上をも訪れる。
（訪れた時には、訪れた方に従って最善を尽すこと……）
その覚悟がどこかで定着していたと見え、
（来たな!?）
そう思うと、わざと静かに動かなかった。
秀忠は別の道をすすんで来ていたが、その弟の忠吉はいま一緒に父の側にあるのだ。半身不随の程度ならば、立派に采配はふれるだろう。
自分でそれと計算しながら、誰にも言わず、板坂卜斎だけを呼んで、自身の処方になる万病円を服して休んだ。
恐らくその時、狼狽して騒ぎ立てていたら、疲れた血管は寸断され、それこそ大事に立到っていたかも知れない。

それほど冷静な家康だったが、戦場に起つと全く別の昂奮が甦って来るのである。
昨日の夕方もここで彼は、諸将と盃をかわしながら、中村隊と島左近たちの最初の衝突を観戦していた。
そうしていると兵の動きというよりも、そこにわき立つ空気の渦で、勝敗も士気も駈け引きの巧拙も、手に取るように感受出来るから不思議であった。
中村隊の中村一栄は家康の側に来ていて、指揮は一氏が執っていたのだが、一氏が島左近の誘いに乗って深入りしだすと、
「危い……早く引かせよ。今迄の戦は見事であったが、これから深入りさせてはならぬぞ……」
わざわざ本多忠勝を出馬させて一氏に兵を引かせたのだ。事実、家康が、こうして陣屋の二階で観戦していなかったら、中村勢の犠牲は三倍五倍に及んだろう。戦場に立つと家康の六感は理性を越えて働き出す。
(今日は味方に活気があるぞ……)

三

家康は地図をのぞきながら、おかち、おえいという二人の女房に運ばせた湯づけを食べ終ると、すぐさま具足をつけて陣屋を出た。
陣屋の前には、黒の四半に金の五の字を付けた旗差物を背にして、ずらりと使番が馬を並べて待っていた。
この使番は戦場では最も重要な意味を持つ。家康の命令をそれぞれ馬を駆って先遣部隊に通ず

るのだから、時には通信隊であり、時には参謀であり、時には家康の偵察智能そのものでさえなければならない。
　それだけに人選は慎重な粒よりであった。
　安藤直次、成瀬正成、城織部、初鹿野伝右衛門、米沢清右衛門、小栗忠政、牧野助右衛門、服部権太夫、阿部八郎右衛門、大塚平右衛門、大久保助左衛門、山本新五左衛門、横田甚右衛門、小笠原治右衛門、山上郷右衛門、加藤喜左衛門、島田治兵衛、西尾藤兵衛、中沢主税、保坂金右衛門、真田隠岐守、間宮左衛門、小栗忠左衛門の二十三騎が、その家康の手足となるべきお使い番であった。
　何れも後日、徳川家の柱石となって働いた人々ばかりである。
　家康はつかつかとその前に出てゆくと、安藤直次と成瀬正成をさし招いて、
「敵の配備は、この地図と相違していることはないか？」
と、軽くたずねた。
　三人はかがり火のそばにこれを拡げて、いちいち仔細に点検していった。
　大垣城を発した西軍の行先きを、雨の中でいちいち斥候に確めさせて記入してあるのだが、もしそれに誤りがあったら、お使番は家康の命を奉じて出たおりに、敵陣も味方の陣も発見し得ない場合が出て来ることになる。
「相違ござりませぬ。この通りでござりまする」
「そうか。では、それぞれ敵を追って青野ヶ原へ発進したのじゃな」
　誰の軍勢に誰が当たるかはすでに夜前の評議で打ち合せ済みであった。

したがって、この本陣の周囲にあった山内、有馬、藤堂、京極、福島、田中と先発して、その他のものも続々行動を起している。

夜が明け放れた時には、それぞれ敵の前面へ出ていて、すぐにも火蓋の切れる態勢を整えておく手筈であった。

「はい。連絡も手落ちなく」

「そうか。では馬を曳いて貰おう」

わずかに対話は数語であった。まだ陣屋の中からは小姓たちも姿を見せない。おそらく、彼等は自分の身支度に宿舎へ帰って、あわてて具足を着けているのだろう。

馬を曳かせて家康は、肥った躰でひらりとそれにまたがった。馬上の人になった姿を見て成瀬も安藤もびっくりした。

家康はふだん着の小袖の上に鎧の胴をつけている。鎧は胴ばかりで、その上に黒広袖の羽織を着け、塗笠をかぶっただけの軽装ではなかったか。

しかも、その姿で馬に乗ると、誰にも何ともいわずにトコトコと西をめざして馬を駈けさしだしたのだ。

「あ、上様！　何れにご出陣なされまする!?」

あわてて成瀬正成が問いかけると、

「敵の方じゃ」

家康はそういっただけで、さっさと馬を駆ってゆく。旗本の誰かが叫んだ。

「ご出陣じゃ！　旗！　槍！　鉄砲！」

そのあたりの呼吸は、三十代の家康と全く同じ気負いに見えた。
家康は中山道を垂井に着くまで立ちどまろうともしなかった。旗手がまず追い着き、槍持ちが馳せつけた。

四

すでに時刻は八ツ半（午前三時）に近い。
家康は再び使番を八方に走らせた。抜け駆けを禁じ、所定の位置についたら、そこで夜明けを待つように厳命した。
命じ終わったところへ、最右翼を前進した黒田長政の部隊から毛屋武久が、北国街道の右に布陣した石田勢の前まで出おわったことを報告にやって来た。
「どうじゃな。そちの見たところ、敵の数はいかほどと見たぞ」
報告をきき終わって家康は馬上からたずねた。
「されば……」
毛屋武久は胸をそらして、
「二万内外と見てござりまする」
「なに、二万内外……？　他の者はみな十万から十四、五万と申して居るぞ」
毛屋武久はニヤリと松明の火に笑って見せて、
「十万以上でござりましても、山上の敵にござれば、平地の戦の役には立ちませぬ。これは不利と見れば山は下らぬ構えでござりましょう。それゆえ、夜明けと共に働く敵はせいぜい、二万内

外……と、心得まする」
　家康は鞍壺をたたいて笑った。
「ハハ……その計算に叶うた。二万と七万ならば戦は勝ったぞ。行けっ」
　家康は、むろんまだ誰にも告げてなかったが、垂井の左、南宮山に陣取っている吉川広家や毛利秀元の軍勢は、うかつには動かぬものと見てとっていた。
　黒田長政の父の如水が、
「――三成に味方してあれば、毛利氏の祀りは絶えましょうぞ」
しばしば吉川広家に申送ってあり、広家も秀元も、それとなく家康に心を寄せていると知っているからだった。
　恐らく彼等は、今度の輝元の決定に不平満々なのに違いない。
と、言ってむろんそれに備えを怠ってよい道理はなかった。そこで、池田輝政と浅野幸長、それに駿河、遠江、三河の諸勢をして、きびしく監視させることになっている。
　すでに、池田輝政も、浅野幸長も垂井に着陣を終わっていたが、街道はまだ諸隊の人数が西へ向ってあわただしい流れを作っていた。
　家康が更に西進して中山道と北国街道の交叉している関ケ原の近く、桃配山に到着したときは、そろそろ夜が白みかけていた。
　雨はすでにやんでいたが、こんどはひどい霧であった。大粒のこのあたりの霧は小雨といってよいほどあらく、額や頬は拭うあとからすぐ又濡れた。本陣が決ると、すぐさま家康は各隊へ目付を出した。

小早川秀秋はすでに家康に味方するものとして、奥平貞治を派遣した。恐らく三成側では思いも寄らないことであったろう。

先遣の一番隊福島正則以下の陣へは伊丹兵庫、村越直吉、河村助左衛門を遣わし、細川等の二番隊には小坂助六、尼子十郎、稲熊重左衛門、兼松又四郎を遣わし、井伊直政等の三番隊には佐久間安政、同孫六、舟越五郎衛門が配属された。この目付は、お使番によって伝えられる家康の命令が、どのように実行されてゆくかをきびしく監視してゆくのである……

五

目付の配属が決った頃には、本陣の備えも終った。

桃配山には金の七本骨の扇に、日輪をえがき、そのもとに銀の切割（革を切り割き、銀漆をもって塗り固めたもの）をつけた大馬印を押し立てその前に総白の源氏の旗十二本立てならべた。そして家康の床几のかたわらには四幅半の白布に「厭離穢土・欣求浄土」の八字を大書した大のぼりを飾った。

思えば、この厭離穢土欣求浄土の旗を最初に押立てたのは家康が十九歳のときであった。

今川義元の先手として大高城にあり、義元が田楽狭間に倒れた後、はじめて岡崎の土を踏んで大樹寺に遁げ込んだ時、

「――ご傷心はさることながら、ここで崩おれて何と致しまする。この世に浄土を招来するため、さ、勇気を出してお戦いなされ」

そういって、登誉上人に与えられた旗にこの八文字があったのだ。

家康はそれを生涯の心の戒めとして戦場にのぞんだ。
（この戦、果して欣求浄土の戦なりや否や？）
それは家康が戦うたびに、自分に問いかける言葉であり、彼の勇気の源泉でもあった。
十九歳にして立てたその旗は、いま、五十九歳の家康に同じことを問いかける……
ただ、かつて十数人で立てたこの旗は、いま堂々万を超える旗本の、魚鱗の陣にまもられているのだが……
前備えは奥平信昌、牧野康成、大久保忠佐、高力清長、丹羽氏次、内藤信成の精鋭ぞろい。
次の大番三組は、中央に松平重勝、松平親正、水野忠高。右に酒井重忠、永井直勝、青山忠成。左に西尾吉次、阿部政次、酒井忠利の九人であった。
又後備えには、本多康俊、本多重政をおき、それをおびただしい遊軍備えが助けている。
家康の馬前には西郷家貞が、かりに武者奉行として控え、旗所の床几代（時として主将の代理をする）には本多正信の子の正純がえらばれた。
遊軍備えの中には、酒井家次、本多忠政、安藤長松、松平忠明、高木正次、神谷忠緑、山本頼重、稲垣長重等がならび、金森法印長近、遠藤慶隆などの小人数の大名は後備の両本多の指揮下に配属された。
恐らく旗に声があったら、
「――よくぞこれまで！」
と、三嘆したに違いない。
家康はそこで再び地図をひらいた。

そして床几代の本多正純に、着陣の終った者から、その名の上に朱の丸を付けさしていった。
関ケ原一番隊は福島正則の家老福島丹波が西大関にあって、明神の森を後にして控え、これは西軍の宇喜多秀家の天満の陣に対し、次に加藤嘉明、筒井定次、田中吉政、藤堂高虎、京極高知と、中山道の南北にわかれて布陣を終っている。
第二番隊は、細川忠興、稲葉貞通、寺沢広高、一柳直盛、戸川達安、宇喜多直盛と、中山道の北に備えを並列し、黒田長政、加藤貞泰、竹中重門は、石田勢の笹尾、小池と天満山の敵に対して、これも着陣を終了した。
第三番隊は、秀忠の弟松平忠吉を主将とする旗本部隊で、本多忠勝、井伊直政がこれを左右から助ける隊形をとって本陣の正面に位置し終った……

六

陣型は、どこまでもこのまま関ケ原を突破して、三成の本拠佐和山城を衝き、更に長駆大坂をめざして進軍する備えで、少しもその意図を敵にかくそうとはしていなかった。
むろん万一突破出来ないおりの備えも充分に出来ている。大垣城の押えには、西尾光教、水野勝成、津軽為信、松平康長を残してあったし、赤坂、岡山の留守は堀尾忠氏をあててあった。
家康がいちばん苦心したのはいうまでもなく、後方南宮山の押えにあてる部将であった。
ここが弱体ならば吉川、安国寺などを含む毛利勢は、どう考え方を変えてゆくかわからない。
家康は、垂井の西南御所野においた池田輝政、更に駅の西一里塚に配備を終った浅野幸長と、采配の柄でさして、

「手落ちはあるまいの」
　と、床几代に念を押した。
「ござりませぬ。浅野の陣に続く野上村までの道筋には、中村一栄、小出吉辰、生駒一正、蜂須賀豊雄、山内一豊、有馬豊氏、水野清忠、鈴木重愛……と、みな、改めて見廻らせてござります る」
　家康は大きく頷いて地図を巻かせた。
　地図の上では東軍はわざわざ進んで敵の包囲の中に乗り出した形になっている。
　西軍はその東軍を網の中でしぼり切ろうというのだ。
　しぼり切られたら東軍は全滅し、西の正面を突破されたら、西軍は三成の本拠佐和山城を衝かれる形になって、収拾出来ない混乱におちいろう。
　しかし、それはどこまでも配置図の上の両軍の態勢であった。
　恐らく三成もまたこうした図面の上に眼を光らせて、
「――包囲は終った！」と、会心の笑みを洩らしているかも知れない。
　これで双方とも肚腹裏の作戦からいよいよ千変万化の生きた戦に変ってゆくのだ。
　霧はいよいよ濃く見える。ということは、次第に夜が明けかけたということでしっとりと雨露を吸って踏みしだかれた秋草が、蕭条とした地殻の肌で紅葉しかけている。
「申上げます！」
　と、家康の前へ肩まで濡れた侍が片膝ついた。家康はその侍をすかしみて、
「伊奈図書か。何事ぞ」

「はい。味方の旗の上を青鷺が静かに飛んで敵の方へ行きまいた。御吉例の鷺！　今日の御一戦ご勝利必定にござりまする」

「よし、旗下どもに聞かせてやれ」

家康は、戦というものは妙なものだと、ふと思った。冷静に考えると、九分九厘まで勝敗を予想出来る能力を人間は持っている。にもかかわらず、双方が勝てるという、ふしぎな計算に迷い込んで無用の血を流してゆく。

それも屈強な男たちが鷺一羽に悲喜交〻の感情を滲ませて、少しも異様に感じなくなって来るのだ。

（この謎がとけたら人間の正体もわかるのだが……）

戦がふしぎなのではなくて、それをする人間がふしぎなのだ……そう思いながらも、一方ではきびしく、この本陣から、各隊までの距離の計算を胸にたたみ込んでいる。

家康もやはりその、ふしぎな謎を身につけて戦う人に変っているのだ……

七

この桃配山の家康の本陣から、

石田三成の笹尾まで　二十八丁

小早川秀秋の松尾山まで　一里三丁

井伊直政の茨原まで　十五丁

本多忠勝の十九女池まで　十六丁

藤堂、丹羽の藤川まで　二十九丁
そして、背後になっている、
池田輝政の垂井まで　三十二丁
毛利、吉川の南宮山まで　一里
堀尾忠氏の赤坂まで　一里十二丁
戦場で的確に戦況を掌握し、刻々の変化に応じるためには、指揮者は特にきびしく距離を脳裏にきざんでおかねばならない。
進撃を命ずるにも、退却を命ずるにも、救援を命ずるにも、地形距離の無視があっては実行出来ない命令で部下を苦しめ犠牲をふやすからであった。
家康は一方で青鷺の飛翔を喜び人間の稚拙さに苦笑しながら、一方ではそらんじている距離を胸で反覆している。
（やはり獲物を狙う鷹になっているわ……）
この霧では、敵も味方もおそらく視野は全く利くまい。と、すると、気負い立っている部隊からそろそろ霧の中で手探りに行動を起しかけている頃であった。
もはや時刻は六ツ半（午前七時）近い。晴天だったら敵味方の旗幟は風になびき、兵器は日に輝いてまばゆい頃であったが、まだ、あたりはほとんど見えなかった。わずかに山上から毛利一族の陣している南宮山をふり返ると、ここでも山上の旗はじっとりと霧をふくんで動かない。
家康は床几を立った。
「使番三人。小姓だけでよい。馬を曳け」

そのまま桃配山をおりて、十六丁離れた本多忠勝の十九女池のそばの陣屋まで出て行った。
忠勝はびっくりして家康を出迎えた。
「忠勝、南宮山の様子を見たか」
「はい。少しも気配はないようで」
「お許の眼にもそう映るか」
「南宮山は動かずに、治部少の先手が動き出すかに見えまする」
「治部少が動いても、南宮山が動かねば挾撃にはなるまい。どうじゃ、毛利や吉川は山を降りると思うか」
本多忠勝は、わかり切っていることをここまでわざわざ訊きに来た家康が憎かった。
(用心深いお方じゃ)
そうも思え、これは、逆にわしを励ましに来たのかも知れぬぞ……とも思った。
「いま降りて居らぬのでは、午前の戦に間に合いませぬ。もし又降りて来たとて、池田や浅野が待っていたとばかりに挑みかかりましょうでな」
「そうか。では、わしは本陣を前進させるぞ」
家康はそういうと、そのまま使番の小栗忠政をかえりみて、
「白旗十二旒を、先ず関ケ原の東の端まで進めよ」
そういってから、ちょっと首を傾げて考えて、
「そうだ。ここまで十六丁か……よし、……正確に十二丁すすめるように床几代に伝えよ。それから、旗をすすめ終ったら、桃配山の隊列をそのまま移して、それから戦じゃ」

「心得ました」
本多忠勝は、フフッと笑った。
（若い！　到頭、陣頭に乗り出して来たのだわい）

八

もともと桃配山の本陣は両軍配備のほぼ中央に当り、東軍を指揮しながら、敵の動向を見きわめてゆくには、最も地の利を得た格好な場所であった。ここに堅陣を敷いてあれば、先ず総大将としての家康の身に危険はない。
しかもここからすれば背後の南宮山の毛利部隊も、左前方の松尾山の小早川隊も充分に監視し得るのだ。
ところが家康はその桃配山からすぐさま本陣を関ケ原の東端まで進めよと命を伝えた。
この事は考えようによれば軽率とも受け取れ、逸りきった若さとも評されよう。
しかし五十数度も、家康と共に戦場を馳駆して来ている本多忠勝の眼には、これは家康の決意を知るよすがとはなっても無謀な軽挙とは映らなかった。
（いかにも上様らしい……）
いや、上様といわれるような身分になる以前からの家康の一面を、計らずもここに露呈したものといってよかった。
家康の生涯は忍耐でつらぬかれ、その政治は決して急激なものではなかった。じっくりと腰を据えて八方を睨みながら辛抱づよい漸進主義に終始した。

ところが戦場での家康は文字どおりの猛将に変ってゆく。

熟考は戦場にのぞむ前の用意であって、いったん戦場に立つと、時には全く無謀とも見える神出鬼没の行動がしばしばあった。

(今日は、徹頭徹尾自分から仕掛ける気なのに違いない)

いったん桃配山に陣したことは、もはや敵方にも知れわたっている。それをすぐさま又前進せしめて、霧が晴れ、火蓋が切られようとした時に、

「――あ、もう出て来ている!」

と敵の斥候の度胆をぬく気と受け取れる。

恐らく、ようやく辿りついた泥濘の陣地を、この霧の中で、前進移動せしめているのは、敵味方の中で家康ただ一人であろう。

(上様らしい……)

忠勝の微笑は、その家康の断への餞けであり、断の裏に秘められた老いを知らぬ気魄への感嘆だった。

「上様、今日の戦でいちばん目ざましい働きをする者は、誰でござりましょうかな」

霧の中の床几にかけて、前進して来る旗本を待ちながらじっと何か見詰めている気配の家康に、忠勝は又、そっと一言話しかけてみた。

家康はギロリと忠勝を見返って、フンと小さく鼻を鳴らしただけであった。

「わしは敵方では、やはり老巧な島津義弘……と存じまするが」

家康はそれにも答えようとしなかった。もう一度前とおなじように、うなずいたとも嘲笑し

たとも取れる薄笑いで、
「午前中に勝負はつこう」
間(ま)をおいてから吐き出すようにいった。
「時じゃ！　今日の勝負の鍵(かぎ)を握るものはな。昨夜からの行動で、午後にはドッと疲労が出る。兵に疲れたと思わせた方が敗(やぶ)れるわ」
忠勝は笑いながら一礼して自分の陣屋に戻っていった。もう本陣の先手が、続々と霧の中を床几の周囲に着きだしている。あと十二、三分で、陣容はととのい、整ったときが火蓋の切られる時になろう。
家康はいぜんとして床几で宙(ちゅう)を見据えている。
一触即発(いっしょくそくはつ)の機をどこで掴(つか)もうかと、見えない獲物の前で身づくろいしている猛虎(もうこ)の眼であり姿勢であった……
本多正純が前進完了を告げて来たのはその直後であった。

火(ひ)蓋(ぶた)切らる

一

戦の巧拙(こうせつ)は名人同士の試合に似ている。
何(い)れが、どれほどの間合をおいて、何時、どのようにして仕掛けるかで、先手(せんて)・後手(ごて)の差が生

じる。
家康は、本陣の隊型が整った瞬間に使番の小栗忠政を井伊直政の陣に走らせた。
井伊直政は、本多忠勝と並行する形になって中山道のすぐ右に進出している。そしてその井伊と轡を並べているのが、井伊の婿であり、家康の四男である松平下野守忠吉だった。
忠吉は武州忍十万石の城主で、今日の戦が初陣だった。そのため舅の直政が、介添えとして陣をつらねているのである。
家康は直政がやって来ると、
「兵部大輔、時刻は!?」
ほとばしるような声で訊ねた。
「霧は晴れかけました。かれこれ辰の刻（午前八時）かと心得まする」
言葉はただそれだけだった。が、直政にはこれですべてが了解出来た。
「よし！　やれッ」
「心得ました。では……」
直政が馳せ帰ると、今日も先手の福島左衛門大夫正則の陣地からバラバラと豆を煎るような銃声が一度聞えた。今日の敵味方を通じての第一声で、本多忠勝の前面、藤川の岸の線まで出ていた福島正則が、その右前方の天満山にある西軍の将、宇喜多秀家の陣地めがけて発砲したのだ。
この頃の発砲は、そのかみの戦の鏑矢に相当する。
「――仕掛けて行くぞ。用意はよいか」
の名乗りであり合図である。

その第一声に続いて、ワーッと両陣営に鬨がわき立ち、大貝がとどろき出した。
しかしまだどちらも、晴れてはまた視野を覆う霧の流れにさまたげられて、それ以上には動こうとしなかった。
動けば当然白兵戦闘に移行する。それにはまだまだ霧が多すぎるからの逡巡だった。
と、その霧の中を、疾風のように駈け出したせいぜい二、三十騎の一隊がある。その一隊は井伊勢と松平勢の間から駈け出して、まっ先に進行している東軍の、京極、藤堂の陣地のわきを疾走し、最先頭の福島部隊の右に出て来た。
「誰だ！　停れッ！」
いま第一弾を発したばかりの福島勢の中から、可児才蔵が躍り出て、その前面に立ちふさがった。
「今日の先陣は、われ等の主人福島左衛門大夫と決っているのだ。いまだ戦の始まる前に、ぬけ駈けなどは断じて許さぬ。一人も通ることはまかりならんぞ」
可児才蔵は、福島勢のうちでは聞えた剛勇の士であった。
「おおこれは左衛門大夫どのがご家中か。われ等はぬけ駈けの者ではない」
「そういうおぬしは何者じゃ。旗印は井伊家のもののように見受くるが」
「いかにも、井伊兵部直政、松平下野守忠吉の供をしてここをまかり通る」
「いや、たとえ何誰なりと、戦の始まる前は通すことは相成らん。強って通りたくば、当家一番槍のあとになされ」
先陣争いは武将の面目を賭けた競いであった。可児才蔵は顔をゆがめて喚くとともに、いきな

りすらりと太刀を抜きはなって井伊の前に立ちふさがった。

二

岐阜攻めのおりにも、約束を守らずに織田勢へ先制攻撃を加えたからといって、池田輝政に決闘を申込んだほどの福島正則だった。

その家臣だけに可児才蔵も、身を挺して井伊直政と松平忠吉の一行をさえぎる覚悟らしかった。

「これは迷惑な。貴公は、たったこれだけの人数で、ぬけ駈けが出来ると思うてか。知ってであろう。忠吉朝臣は今日が初陣、いまだ戦場を知らぬ若年のお方ゆえ、直政連れ立って斥候し、敵陣の配備をお見せ申さんとするものじゃ。その斥候までをさえぎって、味方の不利をもたらしたら何といいわけなさるぞ。無用のとめだてめされず、われ等を通して、すぐさま貴公等もお手柄あれ」

直政のその一言は、相手の抗弁を強くおさえる力があった。

「では、先駈けでは無うて、斥候でござるか」

「人数をご覧あれ。この小人数で、大切な忠吉朝臣に何で戦をすすめられるものじゃ」

「ご信用申そう。お通り下され」

「ご免!」

いうや否や、直政と忠吉の一行は、福島勢の先頭を駈けぬけて、藤川近くでくるりと大きく右へ旋回した。

恐らくまだ福島正則も、その先手の老臣福島丹波も、直政や忠吉の意図は察知し得なかったに違いない。

彼等は右に方向を転ずると、西軍の宇喜多勢と対峙している味方の加藤嘉明と筒井定次の野陣の間を駈けぬけ、あっという間に、更に田中吉政勢の先頭をよぎって、今日の戦でいちばん強敵と目されている島津勢のまん前へまっしぐらに馬を駆った。

いや、もうこの頃には、味方の福島勢も、

「これは先を越されたぞ!」

あわてて宇喜多勢に攻撃を仕掛けていった。

というのは、先頭の三十騎が駈けぬけると、続いて井伊勢、松平勢の主力が、

「主君に続け!」

「主君を討たすな」

まなじりを裂いて前進に移ったからであった。

井伊直政は、島津勢の前まで来るとはじめて手綱をしぼって忠吉にいった。

「下野守どの、上様は、武略では日本一のお方じゃ。太閤も手が出なんだ。その子の下野どのとわれ等とで、豊家の者どもに戦で先んじられてよいものではござらぬ。前面の敵は、その勇名を高麗まで轟かせた西国第一の強将島津義弘じゃ。これを蹴散らさいでは名が立ちませぬぞ」

「心得た。思うさま戦うて見せてやるわ」

この進出には三つの大きな意味があった。

恐らく彼等が、こうして味方の間を疾駆してみせなかったら、開戦の時刻が無為に移ること……

そしてもう一つは、霧が晴れてみると、東軍の陣型はガラリと変ってそれが敵にあたえる心理的な効果は計り知れぬものがあること……

すでに家康は桃配山にはなく、徳川勢の中の最精鋭もまた、あっという間に島津勢の前面へ立ちふさがっているという神速果敢な機動効果だ……

第三には家康が、最強の敵と目される島津勢の前面へ、初陣の愛児を立たせているという、並並ならぬ決意の宣布である。

井伊、松平両勢のこの挙によって、戦場はいちどに火を噴く活火山に変貌した……

三

島津勢の先手は兵庫頭義弘には甥にあたる島津豊久だった。すでにこの時、大将の義弘は六十六歳、家康よりも七つ年長で、尋常ならば、野戦の労に耐え得ぬ老齢だったが、

「井伊と松平忠吉勢が押しかけました」

そう報告されても、ただ一語、

「そうか」

そう答えただけで格別立とうともしなかった。

島津の陣は寺谷川と北国街道の間にあり、その小高い丘に義弘はむしろを敷かせ、毛氈を重ねてその上に目を半眼にして坐禅していた。

前方数丁の甥の豊久の陣では、すでに金鼓を打鳴らして兵を繰出している。かかられては応戦しないで済む筈はなかったからだ。

しかし、義弘はそれさえ耳に入っているのか入らぬのか、わからぬほど寂然とした姿で打坐を続けている。
義弘のその日の身なりは始めから軽装だった。十文字の紋をつけた陣羽織に二尺二寸の太刀をおび、持出してある脇息に白い旗を立てさせただけで、何を考えているのか近侍にも見当のつかない静けさだった。
すでに霧は霽れている。
いや、霽れる前に、彼も家康とおなじことを二、三度たずねた。
「――南宮山の旗はうごいているか」と。
そして動く気配がないと知ると、
「――南宮山の旗が動かぬようでは……」
そう洩らしたのが最後で、それからまるで僧堂にでもいるかのような坐禅に入ってしまったのだ。むろん義弘ほどの驍将が、はじめから無為にここで打坐している筈はなかった。
彼は甥の豊久を遣わして昨夜のうちに大垣から家康の本陣へ夜襲をすすめてみたがきき入れられず、更に、今日の未明に、長寿院盛淳と毛利覚右衛門元房を秘かに三成の陣屋にやって、次の献言をしてみたのだが、これも三成の容るるところとならなかったのだ……
それは、松尾山の小早川秀秋への先制攻撃であった。
小早川秀秋の叛心はもはや疑うべくもない……と、義弘は見てとっていた。したがって、敵味方が、西軍の包囲圏内で乱戦になったおり、若し松尾山の小早川秀秋から、味方の背後を突かれたのでは、それまでの戦のすべてが無駄になる。

「――若し小早川勢をそっくり誅伐することが叶わずば、策をもって、彼だけなりと刺させておき、それから屈強な監視をつけたら、安心して戦い得よう」

そう進言させたのだが、三成は、承知しなかった。

今更そのように味方を疑うのは本意でないといったそうな。それより、西軍の旗いろが優勢に展開すれば、秀秋も必ず降りて来て戦うゆえ、せいぜいご奮闘ありたいと……

しかし、義弘の戦場馴れた勘では、それでは危険で戦い得なかった。包囲陣形は整えてみたものの、東の口を締むべき南宮山の毛利勢と、西の口を締むべき松尾山の小早川勢が信じられないのでは、底も蓋もない桶に水を汲むような徒労に思える。

たぶん島津義弘は、とんだ相手に味方してしまったと、内心ひどく後悔しているかも知れない。

そこへ家康旗下の最精鋭が、霧を衝いていきなり決戦を挑んで来たのだ……

四

義弘には家康の肚がよくわかった。

最初霧の中で見た島津勢前面の敵は、岡崎城主の田中兵部大輔吉政だった。

しかし吉政の構えは、島津勢とその右手の西軍小西勢を半々に睨んでいた。

その背後には加藤貞泰、細川忠興、稲葉貞通、寺沢広高、一柳直盛、戸川達安、宇喜多直盛と横一列に旗をならべていたが、これは島津に向う田中吉政の後詰めというよりは、その左手の石田勢に向う気配が濃厚だった。

更にその東、相川の先に、黒田長政と竹中重門が進出して、これはハッキリ石田勢に決戦を挑

む隊勢をとっている。
（すると、この義弘の真の相手には、いったい誰を立ち向わせて来る気なのか？）
これは火蓋を切ると同時に目まぐるしい陽動が考えられているに違いない。
その推測は見事に的中した。恐らく家康の譜代では井伊と本多の両勢が最精鋭であろう。その一方の強将井伊直政がまっ先に島津勢へかかって来たのだ……
ところが、その井伊直政が、家康の子で初陣の松平忠吉と共に来たのは意外であり、瞠目すべきことでもあった。
（さすがに家康！）
その決意に感嘆すると同時に、いい知れない不気味さも含んでいる。
初陣というのはつねに二様の未知数だった。戦に馴れぬ若輩ゆえ、歯牙にかける要もない……という場合と、初陣を飾ろうとして若さに任せて何をやるかわからぬという、実力を予測しがたい暴れ方の謎であった。
むろん甥の島津豊久も、三十歳の男盛り、戦場では人後におつる者ではない。したがって金鼓ははげしく打ち鳴らしたが、そのあとすぐに発砲はしてなかった。
充分に敵を引きつけて、射程内に入って来てからつるべ打ちにする気であろう。
（まだ動けぬ……）
じっと打坐したまま義弘は、次に現われる敵の変化を待っていた。
「申し上げます！　松平・井伊の両勢のうしろから、細川、加藤、稲葉の三隊が加わり、われ等の方へ向けて動きだしてござりまする」

「して、田中兵部が軍勢は？」
「はい、わが備えの前をよぎって、そのまま石田勢へ向って居りまする」
義弘はコクリと小さくうなずいた。
やはり家康は曲者だった。最初の備えは、ものの見事に流動し変化する見せかけだったのだ。当然石田勢へかかるものと思っていた、細川、加藤、稲葉の三隊が自分の方へ向きを変え、自分に備えていると思った田中吉政は、さっさと島津勢の前をよぎって石田勢にかかってゆく……すると、細川や加藤と並んであった一柳や戸田、宇喜多（直盛）などが、小西行長にかかってゆくに違いない。
（まだまだ動くときではない……）
今日の戦で、大垣籠城を考えていたらしい小西行長が、どう動くかも義弘の大きな関心の一つであった。これも三成に簡単に意見をしりぞけられている。その不満が、勝味なしと見てとると、さっさと陣地を捨てさせそうな気が、朝鮮以来の戦ぶりを見て来ている義弘にはしているのだ……こうして開戦半刻、島津義弘はまだ微動もしない。その義弘と正反対の性格をもった福島正則は、すでに宇喜多勢めざして猛烈な白兵戦に突入しているというのに……

五

福島正則は、この日の戦の主導権は是が非でも自分が握らねばならぬものと決めていた。
ここで彼が、どれだけの手柄を立て得るか？　それはそのまま豊臣家の将来と運命にひびいてゆく。若しその働きで徳川家譜代の諸将に劣ったのでは「福島正則――」の面目も発言権もぐっ

と縮小されてゆくのだ。
その覚悟で自から最前線へ進出すると同時に、祖父江法斎を斥候長に立たせて敵の間をコマ鼠のように駈けめぐらせ、情報の蒐集につとめた。
誰がどの方面に何刻に着陣したか。
誰のもとから、誰の陣屋へ、誰が使いしているか?
祖父江法斎は、時にそれら西軍間の使者の脱糞までいちいち手で握りつぶして、その温度によって往復時刻の報告の正確さを期したという。
そして、まっ先に第一砲を放って戦機をうかがっているときに、井伊直政と松平忠吉に前進されたのだ。
むろん彼としても、直政や忠吉の先駆が、何を意味しているかわからぬほど平静を欠いてはいなかった。
彼は可児才蔵に直政が忠吉を伴って斥候に出たと聞かされたときに、
「――それが斥候であるものかッ――」
床几を蹴って起ち上がった。怒髪天を衝くという言葉が、ぴったりあてはまる正則の憤怒であった。
「――それは……それは、敵というよりも、われらへの挑戦じゃ。早く戦を始めぬかという催促じゃ」
彼の野陣は大関まで進められて、関の明神の杜と森を背にしておかれてあったのだが、その怒号でその場を飛び出すと、再びそこへは戻らなかった。

「馬を曳け！　貝を鳴らせ。それから丹波が陣に人を走らせ」
怒号すると、まだ甲冑もつけていない、団九郎兵衛に馬を曳かせて、そのまま自身で、前衛の家老、福島丹波の陣屋に走った。
使番と大将が一緒に着到するという正則流の陣頭指揮で、ここへ大きな波紋を残して進出した井伊直政と松平忠吉が、島津勢の前面に現われ、鬨の声をあげた頃には、福島勢もまた冑を傾けて宇喜多秀家の天満山の前衛の中へ突撃を敢行していた。
福島正則をまっ先にして、家老の福島丹波、福島伯耆、長尾隼人、それに正則に預けられて従軍して来ていた淀君の寵臣大野治長もそれに加わっていた。
まっ先に、正則の馬を曳いて走って、具足もつける間のなかった団九郎兵衛が、この日の戦で事実上最初の首を挙げているのだからその出撃のさまは想像に余りある。
続いて敵陣に突入すると、こんどは大野治長が槍をふるって宇喜多の兵、河内七右衛門とわたりあってこれを刺した。
といって、むろんすぐに壊滅出来る宇喜多勢ではない。
総勢二万余……旗鼓堂々と天満山麓を埋めつくしている大部隊なのだ。
性急な福島勢の突撃にはじめはわずかにひるんだ宇喜多勢も、すぐさま、二十九歳の秀家自身旗をすすめ、陣頭におどり出て先手五隊の指揮にかかった。

六

戦場心理は常識では計り知れない。といって、その計り知れない爆発が、充分に計算されてい

なければ又充分な指揮も出来ない。
とにかく井伊直政を使っての家康の挑発は成功した。
家康は今日の戦を人間の躰力の限界で考えている。昨夜からほとんど満足に眠っていない戦なのだ……
それも東軍と西軍の間にはすくなからず差があった。東軍はしばらく赤坂周辺にとどまって時機を待つという態勢にあったのに引きかえて、西軍は、家康の出現からあわただしく作戦を変更し、攻城戦を避けて、急いで関ヶ原へ移動して来ているのだ。
その間の動きを検討すると、兵の疲労の度合いでは、西軍の方に遙かに無理が重なっている。
そこで家康は、相手の疲労の回復しない間に決戦を挑むが有利と計算したのに違いない。
そして、それ以上に大切なことは、平地の戦の様相が、そのまま南宮山と松尾山の去就を決定してゆくという事実であった。
彼等は家康に内応するような様子は見せてはいるのだが、若し東軍に敗色濃しと見た場合は平気で山を下って家康を叩ける立場も保持している。
そうした危険な観戦者が、この関ヶ原の戦場の東西の出口を扼している。したがって、これを東西両軍の戦場と見るのは当らず、これこそ今日（昭和）の世界と同じ、東西と中立の三つ巴の戦場と見るべきだった。
つまり敗色濃厚と見られた時には、見られた方が全部を敵に廻して叩かれるという悲運から遁れられない宿命を背負わせられているのだ……
さて、そうした戦場で、猪突していった福島勢ははたして松尾山上の観戦者の眼に、どう映じ

ていったであろうか？
福島勢に襲いかかられた宇喜多秀家は、部将の、本多正重、明石全登、長船治兵衛、宇喜多太郎左衛門、延原土佐等を叱咤してこれも若さに任せた猛烈な反撃を敢行させた。
斬る者、斬られる者、退く者、進む者……しばらくは宇喜多の太鼓丸の旗と、福島の山道の旗とは入りみだれて一進一退をくり返していたが、やがて宇喜多の太鼓丸が優勢に変った。
じりじりと撃ち合い、斬りあいながら、天満山の山麓から寺谷川の方向へ福島勢が押されだしたのだ。
これを見て東軍の加藤嘉明と筒井定次の両勢が動きだした。
このあたりの配備も進退もなかなか巧妙だったといえる。
もし、これが宇喜多勢の隣に陣取っている小西行長の軍勢に襲いかかっていたら、福島勢は五、六丁の敗退では済まなくなっていたかも知れない。
福島正則は、また陣頭へおどり出て、声をからして怒号しだした。
「今日先鋒にありながら退くとは何たる腰抜け！　還せ！　還さぬ卑怯者は、この正則が叩っ斬るぞ」
これでいったん立ちどまってまたじりじりと福島勢は押し返しだした。
時に開戦後半刻（午前九時）、曇天だったが、もはや霧は彼等の戦の妨害者ではなくなっていた……

七

中山道にいちばん近い位置で福島勢と宇喜多勢とが、一進一退の戦を続けているころに、いちばん北の笹尾に陣取っている西軍の石田勢はいったいどのような戦を展開していたであろうか？笹尾が北国街道の北に位置し、それを最初から狙っていたのは黒田長政の軍勢と竹中重門の軍勢であったことはすでに書いた。

そして、更に田中吉政が、島津勢の前を素通りして石田勢の方へ進みだしたことも記した。

石田三成は、自分の位置する笹尾の本陣と、前衛部隊の島左近勝猛、蒲生備中郷舎の間に二重に柵を構えて、島、蒲生の両部将をその柵の前面に出していた。

この柵は三成が敵の来襲に備える意味だけではなく、ここに鉄砲を掛けおいて、その命中率を的確ならしめようという用意でもあった。

そして、ここでも東軍は、隣に陣取った島津勢と井伊勢の間に戦闘が開始されると、直ちに田中吉政に続いて、生駒一正と金森長近をして石田勢に向わせた。

したがって最初の火蓋は、石田勢の先鋒、島、蒲生の両隊と、東軍の竹中、田中、生駒、金森の四将の間で切られた。

黒田長政だけはその頃まだ戦列に加わっていなかった。

黒田長政の三成に対する憎悪は並大抵のものではなかった。長政もまた幼時は秀吉のそばにあって、寧々夫人に親しんで来た一人であったが、三十三歳の長政と、四十一歳の三成とは年齢の差もあって、若いおりから事毎に感情の反撥を重ねて来ている仲であった。

双方とも太閤の子飼いながら、長政の眼に映った三成は、陰険で、年長の威を鼻にかける小意地のわるい男だったのだ……

それが高麗の戦で反目し、帰って来て反目し、ここでは遂に敵味方として戦場で見えることになったのだ。

彼がわざと相川の北に離れて陣を構えたのは、すでに深い考えがあってのことであった。

石田勢の二重に構えた柵門から射ち出される鉄砲をまともに喰ったのでは犠牲が大きい。

恐らく彼は肚の中で三成の戦法を嘲笑っていたのに違いない。

「――戦になってみよ。うぬとおれでは腕も経験も格段の差があるのだぞ」と。

彼は昨夜のうちに屈強な特別鉄砲隊を十五人選りすぐって、それにきびしい内命を与えていた。

「――どのようなことがあっても、わしのそばから離れては相成らぬ。わしの身辺にあって、わしの指揮に従うのだ」

そして、彼は、今暁開戦までじっと石田の陣を睨み続けた。

石田の陣は前面に柵を二重に構えさせただけではなく、右手の北国街道には、吉継の子の大谷大学と、秀頼の旗本で大坂城から連れて来ている弓銃隊、黄母衣隊をおき、北方は相川山というどこまでも厳しい備えであった。

その秀頼の旗本を身辺におくのも、長政にとっては片腹痛い僭上に想えた。

(万一のおりには北国街道を遁げる気らしい……)

遁がすものか、きっと首はこの手で挙げてみせてやるぞ……そんな気負いで待っていた長政

は、前面で両軍の間に撃ち合いが始まると、相川の北からそっと行動を起して石田勢の側面にまわっていった……

八

石田勢の先鋒、島左近勝猛と蒲生郷舎とは共に今日の戦のために三成が高禄を惜しまず抱えてあった猛将だといってよい。

島勝猛には二万石、蒲生郷舎には一万石。

島勝猛は家康が兵法の師範としている柳生石舟斎宗厳と交りの深い知友であり、蒲生郷舎は以前に蒲生氏郷に仕えてその勇名をうたわれ、氏郷に蒲生の姓を許された剛の者。戦場の駈け引きでは彼等は、三成の両腕というよりはむしろその師であったといってよい。

それだけに、彼等は最初の寄せ手などはさして問題にしていなかった。

おそらく田中吉政父子も、生駒も金森も、軽くあしらいながら二重柵に引きつけて、そこで鉄砲のつるべ打ちを喰わせて全滅させるつもりだったに違いない。

黒田長政はそうした彼等の意図を充分に察知していた。それなればこそ遠く右手を迂回して、いきなり青塚にある島勢の左脇腹を衝こうとしたのである。

「まだ撃つな。そして離れるな。わしの側を離れて、敵将の首を挙げたとて手柄とは認めぬぞ」

相川の向うから、充分に島勢に接近して、引添えてあった十五人の中から鉄砲頭の白石庄兵衛と菅六之助を呼んで命じた。

「鉄砲は、いま何程？」

「はッ。百五十挺はござりまする」
「よし、そのうち五十挺を選りすぐって島の本隊を狙え。一弾必ず一人を倒すつもりでかかれ」
この時島左近勝猛は、前面の浅堀からかかっては退き、退いては押し返している田中吉政勢の執拗な駈け引きを微笑をうかべてあしらっていた。
この青塚の左手は、相川の上流を距てて伊吹山系の木立深い山になっているので、この方面からまだ敵がやって来ようとは思っていなかったのだ。
そこへダダダーンと曇天の山気を引ッ裂いて銃声がとどろいた。
「あっ！」
島勝猛は、一瞬虚空へおどりあがるようにしてその場へ昏倒した。
むろん黒田勢の位置から、その詳細は見きわめ得なかったが、鉄砲頭菅六之助の放った一弾が、彼の躰のどこかに命中したことは疑うべくもなかった。
急に島の陣内はざわめき立った。
右に左に人々が走りだし、やがて負傷した左近勝猛をかつぎあげた一団が、次の射撃を警戒しながら柵の中へ退くのが望見された。
「今だ！　斬り込め」
黒田勢は鬨をあげて進みだした。
いや、それよりも、この思いがけない敵の混乱に勢いを得て、田中、竹中、生駒、金森の諸勢がいっせいに柵の前の浅堀を越えだしたのである。
そうなると、島勢と並んであった蒲生勢も一人突出したまま止まることは出来なくなる。彼等

もまた、じりじりと柵に押しつけられて後退する。同時に、奥に控えていた三成の本隊と、三成の部将、舞兵庫の部隊とが、島、蒲生の両隊と交替するため、急いで前面に移動しだしたのはいうまでもない。

この頃から、いよいよ関ケ原の風雲は急を告げ、戦は互いに相手の作戦を手探る緒戦から、いよいよ実力で押し合う中盤戦に入っていった……

戦の皮肉

一

石田三成にとって島左近勝猛の負傷はいいようもない打撃であった。

彼は、如何なる宝にもまして左近勝猛を信頼し、時には師父の礼さえ取っていた。

それが開戦幾ばくもなくして黒田の銃玉に倒れてしまったのだ……

しかしこの島左近勝猛は、この負傷を契機にして、この戦場からも戦史の中からもこつ然として姿を消してしまっている。諸説紛々、彼はその後も三成を助けて戦っていたという者あり、いや、撃たれた時は生きていたが、間もなく絶命したであろうという者あり、最後まで生き残って、何処かへ身をかくしたという者あり……

とにかく彼の遺児は、その後旧友柳生石舟斎宗厳の嫡孫で、尾州家柳生の祖である利厳の妻となって、剣聖連也斎と如流斎利方の兄弟を産んでいるのだから、彼自身はこつ然と戦場から消え

うせても、彼の血筋はこの世に残ったのだが……

さて、島左近勝猛の負傷に愕然としている石田三成のもとへ、続いて一つ不快な情報がもたらされた。

それは、西軍中の一主峰をなすべき小西行長勢が、殆んど戦意らしい戦意を示さず、そのため隣の島津義弘、島津豊久両人も、守勢をとって動かないという知らせであった。

小西摂津守行長は、その与力衆を合わせると七千人に近い兵数を持って戦場にのぞんでいる。当然ここでは、石田勢、宇喜多勢と同様に懸命の働きを期待されている西軍の一大主力なのだ。

それが東軍の寺沢、一柳、戸川、宇喜多（直盛）の四隊が襲いかかると、先手は熱心に防戦しているのだが、肝腎の行長の馬回りには、更に戦意が感じられない。

むろん行長は、これだけの東軍に辟易するような怯懦な将ではない。高麗では、加藤清正と共に先鋒として功を競った勇略ともに第一流の人物の筈であった。

事によると、大垣城に籠城して、毛利輝元の到着を待とうとした主張が、三成によってしりぞけられた事に憤懣を覚え、はじめから戦う気がなかったのかも知れない。

三成は、みずから東軍の寄せ手の前へ馬をすすめながら、使番を四方へ急派した。

「――いよいよ戦機は熟したり。至急打って出でられたし」

第一の使者は島津豊久へ、第二の使者は小西行長。第三の使者は大谷吉継。第四の使者は小早川秀秋と……

当然この頃には、柴井に陣した東軍の藤堂・京極勢もまた軍をすすめて大谷吉継、木下頼継等の隊に向けて発砲しだしていた。

しかし藤堂高虎は福島正則のようにすぐに肉迫戦には持ち込まず、双方で矢と鉄砲を射ち合いながら、その間に、次々と、松尾山の下、中山道の左にある脇坂、朽木、小川、赤座の諸陣へ使者を密行させていた。

いうまでもなく、東軍の有利を説いて、彼等に寝返りをすすめているのである。

かくて関ケ原は今や、問題の南宮山と松尾山を残しては、完全に決戦の坩堝と化した。

しかも、各部隊に一進一退の優劣はあっても、全体としての空気はまだ全く未知数だった。そこで当然作者もまた、この戦の勝敗の鍵を握る二つの山、松尾山と、南宮山の状況に筆を転じてみなければなるまい……

二

小早川秀秋の陣取った松尾山は、彼の予期したとおり、この決戦の観戦場としてはまことに申分のない絶好の眺望台であった。

朝霧の晴れた瞬間から、手にとるように両軍の動きが見えた。

誰がどのような士気をもって進出し、誰がどのような思惑で進退しているかまで、はっきりと見てとれる。

したがって、小早川秀秋は、充分に自分の先見を誇り、鞍壺をたたきながら、一次元下の、下界の人間どもの無智な死闘を嘲笑し得る筈であった。ところが、現実は必ずしもそうではない。

ここから見ても、双方の勢力は互角に見えるということが、すでに何という皮肉な中立主義者への餞けであり贈物であったろう?

事実巳の刻（午前十時）すぎになっても、彼にはまだ、何れが勝利をつかむのか見当もつかなかった。
しかしいま、彼の顔面は蒼白となり、額には戦場にある者以上の苦痛をにじませた膏汗が光っている……
すぐ眼の下に備えた西軍の脇坂、朽木、小川、赤座の諸勢はまださして動こうとする気配はない。
いうまでもなく、彼等は大谷吉継の旨を受けて、山上の秀秋を監視しているのである。
この監視は秀秋もはじめから覚悟の前であったし、彼の家老たちも充分これを知っていた。
しかし、その監視の他に、いま彼の身辺には、全然彼の予期しなかった、もう一つの監視者が白刃を擬して来ているのだ……
その一人は家康が家人の奥平藤兵衛貞治であり、もう一人は、黒田長政の家臣の大久保猪之助であった。
小早川秀秋は黒田長政のすすめに従って、伯母の高台院を裏切るようなことはないと申送った。したがって小早川秀秋東軍内応の仲介責任者は、いま、三成勢に向って必死の攻撃を繰返している黒田長政ということになっていく。
その長政が約束を違えられてはと、監視の刺客を陣中に送り込んで来ようとは、狡猾に考えぬいた中立主義者にも及ばなかったのだ。
それも監視の刺客は、黒田長政の派遣して来た大久保猪之助だけではなく、家康のもとからも、奥平藤兵衛貞治が連絡係という名目で乗込んで来てしまっている。

考えようによれば、これは皮肉きわまる人生の教訓ともいえた。
両者の死闘を傍観しながら、唇辺に嘲笑をうかべて勝者の側に生き残ろうと考えた小早川秀秋は、ここでは完全に三方から不信を買って白刃を擬された、みじめな窮鼠の立場へ追いやられてしまっている。
下からは西軍の脇坂、朽木、大谷から、そして、陣屋のうちでは大久保猪之助と奥平藤兵衛から……
それを悠々と戦機を眺めている賢者のように見せかけなければならないところに二重の苦痛がひそんでいた。
さすがに秀秋の重臣平岡牛右衛門頼勝と、稲葉内匠頭正成は、この両人を秀秋の床几側にはおかなかったが、幕一重距てたところから遠ざけることもできなかった。
そして、この秀秋とおなじく、下界の戦況を眺めていた二人のうち、黒田家の大久保猪之助が、血相変えて秀秋のそばに進もうとしたのは四ツ半（午前十一時）近くだった。

三

二人の招かざる客のうちでは、黒田長政の許から派遣されて来ている大久保猪之助の方が短気らしかった。
家康の許から寄こされた奥平藤兵衛貞治は、どこか掴みどころのない茫洋とした表情で、小早川秀秋は当然東軍に味方するものと信じ込んでいる様子であった。
或いはそうして安心させておき、若しもの時には、躍りかかって一刀両断する気かも知れな

い。この場合、家康とて、相当人選には慎重を期している筈なのだから……
黒田家の大久保猪之助は、都合のわるいことに、以前から小早川秀秋をよく知っていた。秀秋が推挙して黒田長政に抱えられたといってよい人物だったのだ。
それだけに彼は二重の責任を感じている。
若し秀秋が東軍に内応しなかったら、それが直接平地の戦の勝敗にかかわるだけでなく、黒田長政は戦に勝っても、家康はじめ東軍の諸将に対して面目が立たなくなるのだ。
そのあせりが、いきなり彼を秀秋の床几に走り寄らせようとした。
「これは、何となさるぞ」
あわてて猪之助の具足の袖をおさえたのは小早川家の家臣平岡頼勝だった。
「お離し下され。金吾さまに掛合わねばなりませぬ」
「それは、われ等がお取次ぎ申そう。血相変えて何となさる気ぞ」
「血相も変ろうぞ！」
取次ぐにも取次がぬにも、その声は、幔幕一重の秀秋には筒抜けなのだ。大久保猪之助も、むろんそれは承知の上でわめきだしたのに違いない。
「このままでは戦は正午を越えましょう。何して金吾さまは打って出られぬ。今こそ山を下って大谷勢を蹴散らし、勝敗を決する絶好の時機、それをあしてのうのうと観戦なさるは、われ等が主人、黒田長政をたばかったのに相違ないわ」
「お静まり下され。陣中でござるぞ！」
「ええ、お止めあるな。われ等も武士じゃ。金吾さまの約束は嘘であったと、のめのめ生きては

戻られぬ。離さっしゃれ。掛合うのじゃ」
「お静まりなされ！　誰が約束にそむいたぞ、打って出るおりの下知は主君に代って、この平岡牛右衛門が仕る」
　さすが平岡頼勝は、三成が十万石の餌で釣ろうとしたほどあって、いきなり前へまわると猪之助の胸を突いて立ちふさがった。
「さればといって、このまま時刻を……」
「黙らっしゃい！」
　頼勝は大きく胸を叩いて、
「打って出ずべきときには、誰の指図が無くとも打って出る。この頼勝にお任せあれ」
　その時になって、もう一人の監視者ははじめてぽそりと口をはさんだ。
「大久保どの、ご家老衆にお任せなされ」
　それから奥平貞治はニタリと笑った。
「立派なご家老衆がついてござるのじゃ。まさかに甲斐守（黒田）や内府をだましもなさるまいて。ハハハ……」
　この場合どちらが脅迫の効果があるかはわからなかったが、これを聞いている小早川秀秋の立場のみじめさだけはよくわかった……
　事実彼は、わなわなと震えながら戦場を睨んでいる……

四

「奥平氏までそういわるるのならばお任せ申そう」
大久保猪之助は、そういったが、それで口を噤む男ではなかった。
「われ等も、数多い黒田の家臣の中から、この役目は汝でなければならぬと、わざわざ選ばれて来た身でござる。いったんはお任せ申すが、万一の時には、奥平氏、ご貴殿とてただではおかぬぞ」
こうなると、これはもはや、両者が互いに肚を合せての秀秋への脅迫といってよかった。
「フフ……」
と、奥平貞治は笑った。
「われ等とても同様でござる。下にあれば、今ごろは兜首の五つや十は挙げていたであろう。それをこうして無為に戦見物、万一のおりにただ引下る男ではござらぬ」
こうした脅迫者が東軍から送り込まれて来ていようとは、西軍の智将大谷吉継も、石田三成も気がついていなかった。
これをもし西軍から先に秀秋の側近へ送り込んであったら、いったい何うなっていたであろうか……？
いや、ここでは吉継や三成の手落ちを責めるよりも、いちばん賢く、日和見にまわったつもりの中立主義者が、その実、どのような皮肉なみじめさを味わうものかを記しておけばそれで足りよう。

さて――

同じ時刻に南宮山とその近くの状況はどうであったろうか。

南宮山の山頂には、北から垂井をのぞんで吉川広家、毛利秀元、宍戸就宗、福原弘俊の順で布陣してあり、その東の山裾には、長束正家、安国寺恵瓊、長曾我部盛親と横に並んであった。

山上の吉川・毛利と、毛利の家老たちが全然動かないのはいうまでもない。

ところが東軍側では、すでに池田輝政と浅野幸長とが、山裾の長束、安国寺、長曾我部の陣をめざしてじりじりと進出して来ている。

そうなるといちばん気が気でないのは安国寺恵瓊であった。

彼の陣屋へはすでに、何度となく三成の許から督促の使者がやって来ている。それは彼自身に戦を促すというよりも、狼火を見て、なぜ吉川や毛利は動かぬのか？　と、責めて来るのだ。

責められるのは当然だった。そもそも三成がこの挙を決行したのは、恵瓊が責任をもって毛利を動かすと請合ったことにあったのだから……

恵瓊は、この朝自身で南宮山の本陣に秀元を訪ねていた。

その時にはまだ彼は充分自信を持っていた。戦場では平時に考えられない戦場心理のうごきがある。若い秀元は双方で打合いが始まれば、きっと応戦せずにいられなくなって来る。いちど応戦すれば、あとは坂道を下る車輪とおなじであった。負けたおりの惨めさを、想像するだけで……というよりも、降りかかる火の粉を払わずにいられなくなって、全力を出しきるものなのだと……

ところが秀元は恵瓊の顔を見ると、妙に悄然とした様子で、

「――わが身はまだ、毛利の全軍を指揮するには若すぎる。それゆえ指揮は一切、吉川広家に任せ申したい」

と、いうのであった。

恵瓊の皮肉な苦悶はそれから始まった……

五

眼の前に山海の珍味を飾っておいて、空腹をこらえている者が、それを食べてはならぬぞといわれた時にどんないら立ちを感ずるか?

今朝の安国寺恵瓊はまさにそれであった。

しかも彼の場合は、その盛上げられた珍味の価値を、思いきり価高く三成に売り込もうとして、逆に珍味に裏切られた感じであった。

毛利勢を南宮山上に陣取らせたのは実は彼なのである。彼は、たとえ輝元が出て来なくても、この戦の勝敗を決するものは毛利勢と踏んでいた。

むろん簡単に家康が西上して来るとも思っていなかったが、さりとてやって来ても負けるとは思っていなかった。

(戦になれば、戦わせてみせてやる……)

その自信を持って出来得る限り彼は三成をじらしておくべきだと計算した。

そのためには狭い大垣城へ入ったり、あわてて東軍の赤坂を攻めたりして、貴重な珍味の価値を損傷すべきではないと思っていた。そこで彼は、この戦の勝敗を決定する毛利勢という山海の

珍味を、みごとに南宮山上に盛上げてみせたのである。
或る意味ではそれは成功だった。三成はじりじりしだしたし、西軍の諸将も、山頂を見上げて、今更ながら毛利勢の偉大さを認識した。
こうする事に依って彼は、毛利輝元の戦後における権力の座を一段と高めてやり、
「――さすがは安国寺！」
といわれるつもりであった。当然そうなれば、彼自身の地歩も又、政僧にして将器、将器にしてすぐれた聖と、一段高まる筈であった。
ところが、その山海の珍味がもはや盤台からおろされて、実用に供されなければならない今朝になって、
「――わしは軍事は吉川に任せた」
と、いい出したのだ。吉川広家は、はじめから安国寺の苦手であり、毛利一族の間では親家康の一方の伏龍ではなかったか……
「――これはおかしな事を仰せられる。君の今日陣中にあるは、ただに中納言（輝元）さまのご名代であるだけではなく、故太閤殿下のご遺子として、秀頼さまご名代をもかねた西軍の総帥ではござりませぬか。それが、いよいよ決戦という時になって、軍事は吉川に任せたとは何事でござりまする。万一そのため敗れを取るようなことがあったらそれこそ君ご自身の自殺ではござりませぬか。秀元は怯懦にして指揮を他人にゆだね、そのまま敵の手に落ちて斬に処せられた……そのような恥辱をうけたら何となさりまする」
能弁は恵瓊の最も得意な一芸だった。理に詰められて秀元は一も二もなく、出撃を承知した。

「——なるほどこれは私がわるかった。すぐさま兵を発して東軍の背後を襲おう」
「——それが当然でござりまする。すでに家康は関ケ原へ乗り出して居りまする。君が背後を襲い、金吾中納言が松尾山上から脇腹を突く、それで今日の勝利は決定するのでござりまする」
理論ではまさにその通りで、恵瓊の言葉にはみじんの偽りも紊れもなかった。
ところが、その正しい理論も、一向に実践はされなかった。松尾山の小早川秀秋も山を下らなければ、南宮山の秀元も動かず、逆に自分たちの眼の前へ、池田輝政と浅野幸長の軍勢が押し寄せて、ついに発砲しだしたのだ。
（こんな筈はない……こんな筈は……）
恵瓊は、眼のいろ変えて床几を立った。

六

世の中に「口舌の徒——」という言葉がある。安国寺恵瓊ほどの人物が、それだと言っては余りに苛酷にすぎよう。彼の見透しも計算も、そして毛利家に対する誠意も、豊臣家に対する好意もみなそれぞれに立派であって、かくべつ誤っているところはない。
にもかかわらず、彼の今日までの努力も権威も、いま池田、浅野両勢の発砲で、一瞬にして水泡に帰そうとしている。
この大きな皮肉の原因はいったいどこに根ざしていたのであろうか？
いや、その説明がつくほどだったら、彼はあわてて床几を起って、隣の長束正家の陣屋へ走り込みはしなかったであろう。

彼はもともと長東正家などを大して認めていなかった。従来の三百六十坪一反歩を三百坪一反歩に改変して、日本の領土が広くなったなどと言う算盤の上の小細工は出来ても、人間としても武将としても、二流、三流のものと思っていた。

その長東正家のもとへ走って、彼は、至急秀元に山から下るようすすめて呉れと切願した。恵瓊の危急は当然正家の危急なのだから、正家がこれを拒む理由はなかった。

すぐさま正家は、家臣の小西治左衛門を山上に走らせた。

秀元は、この時も相変わらず悄然としていた。彼も決して恵瓊を偽ったのではなかった。彼は直ちに、全軍山を下るべき旨を吉川広家に申渡したのだが、吉川広家がそれを拒んだのだ。

その理由もまた整然としていた。

「――われ等は大垣城の近くで東軍を防ぐ約束でござった。その約束を破って三成は、自分の居城佐和山を守ろうとして、勝手に関ヶ原へ出向いたもの……われ等の関知しない戦に大事な兵を殺せましょうや」

言われてみれば、その通りであった。全軍が関ヶ原に出でて戦うという決定の場に、毛利一族は列席していない。

「――都合のよい時には総大将、総大将すら相談にあずからぬ戦に、兵は殺せますまい」

そう言われると秀元は、返す言葉がなかったのだ。

その秀元に、長東正家の使者は、またはげしく訴えた。

「われ等はみな、あなた様を信じて戦に来ているもの、それを見殺しになされまするか。もはや浅野、池田の両勢と白兵戦になりまする」

秀元は、次第に癇立った顔になり、ぐるぐると幕舎の中を歩きまわって、それからぷいっと外へ出ていった。

小西治左衛門はそのあとを追いかけようとして思いとどまった。

(誰かを呼びに行ったのかも知れない……)

それをあまり急ぎ立てて、怒らせてしまってはと自重したのだ。

秀元は、幕舎を出ると、まだ濡れている山上の草の上を、ぐるぐると歩きまわった。決して空を見ようとせず、足許ばかり睨み続けて……

そして、出て行く時と同じ歩調で幕舎の中へ戻って来ると、

「心得た。ただいま兵に弁当を食させて、すぐに山を下ると言え!」

「あの弁当を!?」

「そうじゃ。それを済ましてすぐに参るぞ……」

これが後に「——宰相殿のカラ弁当」と噂に残った秀元苦心の応答だった……

七

生きている人間の動きは時々刻々に変化する。打算と感情の波のうねりが、予めの決定や約束の堤を超えて動きまくるからであった。

毛利秀元はもともと三成に好意を持たなかったが、しかし、豊臣家のために働く意志は充分にあったのだ。したがって、安国寺恵瓊に説かれたおりには、まだ山をくだる気はあった。

が、……長束正家の使者がやって来たときには、もうその気持は無くなっていた。彼自身がど

のように躍気になっても、吉川広家はじめ重臣たちが動きそうにもないことがわかったからである。

事実、動く筈はなかったのだ、……というのは、吉川広家は、秀元には秘密裡に、福原弘俊、宍戸就宗等毛利家の重臣たちと相談して、すでに前夜のうちに、井伊直政、本多忠勝、福島正則、黒田長政の四名あてに、和議の申込みをして、誓書を送ってあったのだ。

その誓書はいま恐らく井伊直政の手中にあろう。直政がそれをどのように家康に取次いであるか……そこまではわからなかったが、毛利一族が山をくだって攻めかけない限り、この方面の東軍の主力、池田輝政や浅野幸長は南宮山を攻撃しないであろうと言うことはわかっていた。

誓書の内容は、吉川広家が、毛利秀元に言った言葉と同じであった。

「――三成は、約束を違えて大垣城から関ヶ原に進出し、自分の居城の佐和山ばかり案じて、われ等の関知しない戦いを企てて居る。したがって向後毛利に戦う意志も責任もない」

と、言う意味のものであった。

恐らくこれは、はじめから家康に味方したかった吉川広家が、毛利家の存続のために、苦心して考えだした秘策であったろう。

そして、それはもはや秀元にも薄々わかっている。そこで「――宰相のカラ弁当」という苦しい言いわけになったのだろう。

長束正家の使者は、それ以上押し返せないので山をくだった。と、続いて山上から、こんどは秀元の使者が、安国寺と長束の陣屋をおとずれた。

むろんこれも吉川広家の意見によって派遣されたものに違いない。

「——自分はすでに山を降る気で、しきりに下知をしているのだが、吉川も、福原も、宍戸も動く気配が更にない。何か理由があるのだろうが、それは私にはわからない。この上迷惑をかけては済まぬゆえ、戦機を見て駈け引き、自由になさるよう……」

世の中にこれほど冷酷な絶縁状があるであろうか。

秀元は、彼等一軍の指揮者の筈ではなかったか……

安国寺恵瓊の頭の中に描かれた自信にみちた野心図は、最後になって、ついに吉川広家の打算の鞭で引裂かれてしまったのだ……

すでにその時は、敵は彼等の目前にあって、はげしい銃撃をあびせかけて来ている。

この狼狽は、長束正家にとっても、長曾我部盛親にとってもおなじであった。

もはや彼等は寄手が、時々山上の気配をうかがっては攻撃の手をゆるめてみる事にすら気づく余裕はなかった。

寄手は、この頃、まだ山上の毛利勢の去就を計りかねて、決して十二分に実力を出しきった猛攻に移っているのではなかったが……

八

強いものが勝つ……と、決った戦場で、強いものが戦わないとなっていったら、勝敗を計る物指はいったいどういうことになるのであろう……?

いま正午を迎えようとして、この関ヶ原を埋め尽した乱戦の中で、誰と誰とが、そうした事を考え得る立場にあろうか?

とにかく、枯草を血に染めた殺戮と狂気のこの戦場で、平常の理性の中に身をおいている者が、毛利や小早川の他にもまだ確に何人か居る筈だった。
その一人は、いまだに陣中で、黙然と打坐し続けている島津義弘であり、もう一人はいまだに前線に出ようとしない小西行長であった。
島津義弘はいったい何を考えているのであろうか？
あれからも引っきりなしに三成のもとから催促の者がやって来ていたが、彼自身はその応対に出ようとせず、甥の豊久や重臣がやって来ても、ほとんど口を利かなかった。
或いは彼もまた、南宮山の吉川や毛利が動かぬ限り、動かぬ覚悟を決めて坐っているのだろうか。
それにしては、吉川や毛利の立場と、彼の立場はあまりに大きく違いすぎている。
吉川や毛利は山さえ下らなければ一兵も損傷せずに、戦争そのものを傍観し得るのだが、彼の場合はそうではなかった。
彼はすでに戦火の渦の中心にあった。彼自身の動不動にかかわりなく、彼の軍勢は次々に傷つき倒れて、減少することはあっても増援されることは無さそうであった。
したがってここに坐っている限り、当然彼は、無抵抗のまま敵に倒されて落命しなければならなくなろう。
それなのに依然として坐っている……
無抵抗で死んでいったら、島津家が安泰とか、他の者が助かるとかいうのではむろんない。彼の部下は奮戦している。頑強に攻めては退き、退いては攻めて戦っている。今のままでは彼は不

機嫌に、黙りこくって忠烈な部下を見殺しにしているとしか見えないのだ。
何を考えて……？
小西行長もまた、三成にまで、充分期待させてあった戦力を発揮するような努力をしているあとはほとんど見えない。
彼の背後は山である。
彼の右手も山である。
前面は敵でいっぱいであり、左手は、いま記した島津勢の陣地である。
と、すれば、彼は、いったい何を考えて、ひとり奥に引っ込んでいるのであろうか。
引揚げようとして引揚げ得る戦場ならばとにかく、ジリジリと山の端に押しつめられて、持てる戦力を減殺しているだけなのだ。
三成に大垣城籠城の意見を蹴られた不満はあったにせよ、これではあまりに腑甲斐ない。
何が彼の強さを封じているのか？
とにかく戦場の皮肉はまだまだ無数にありそうだった。
が、すでに時刻は正午に近い。
このあたりで又、筆を転じて、この戦場の勝敗を決定してゆく鍵のありかを求めてゆかなければなるまい……
もうそろそろおのが体力の限界にゆきあたり、泥をつかんで倒れる人々が出だしている……

勝敗の鍵（かぎ）

一

家康は、あれから又本陣を二度すすめた。
左手の松尾山の小早川勢を睨（にら）みあげるようにして、関ヶ原の東端から、更に中央の陣場野に床几場をおいて、
「あの山の上の伜（せがれ）めはまだかッ」
本多正純に叱るような声をかけたときには、額（ひたい）にくっきりと癇筋（かんすじ）が浮きあがっていた。
「はッ。只今（ただいま）黒田甲斐守陣中より、大音（おおと）六左衛門と申す者を、また督促（とくそく）に……」
「大音というは何者じゃ」
「以前金吾さまに仕（つか）えていた者の由（よし）にて、金吾さまが動き出すまで、見張って居れと……」
「フン」
それから暫（しばら）くして又怒鳴（どな）った。
「何刻じゃ」
「はッ。正午にござりまする」
「うぬッ。伜めが……」
伜というのは小早川秀秋のことであったが、家康はそういうと、すっと床几から立ち上がって、

はげしく右手の指の爪を噛み出した。
「——爪を噛みだしたら、お側を離れよ。何時お太刀を抜くかわからぬぞ」
本多忠勝がよく冗談まじりにいって聞かせた、若いおりからの陣中の家康の癖であった。
そういえば、家康は、今日の戦の大勢は正午で決するといっていた。それまでに兵の体力の限界が来ると。
ところが、地上ではその限界に近づきつつあるというのに、朝から観戦している松尾山の小早川勢は、まだ山をくだる気配が見えない……
もはや、石田勢もじりじりと退りだしているし、宇喜多勢も浮足立っている。いまここで小早川勢が山を下って大谷勢の横腹を衝いてくれたらいちどに西軍は崩れ出す……それがわかるだけに家康はじれきっていた。
小早川秀秋の側には、奥平貞治と大久保猪之助がついていて、しきりに内応を迫っている筈。そこへ更に黒田長政の許から大音六左衛門という者をつかわしたというのだから、もう火蓋を切って下山して来るのは時の問題、……そうは思っているのだが、これ以上暇どって、味方の犠牲をふやすのが家康は堪らなかったのだ。
「伜めが……何という決断のつかぬ奴か」
家康は唇をゆがめて爪を噛みながら、ぐるぐると床几のまわりをまわってゆく。
本多正純は、それをそっと避けるようにして、
「まだ、南宮山の斥候は戻らぬか」
家康の気を南宮山の毛利秀元の方にそらそうとして声をかけると、

「はい。只今立ち帰りました」
あわてて床几の前へ駈け出して来たのは久保島孫兵衛という旗下の斥候だった。
「どうじゃ毛利の挙動は!?」
「はい。怪しい者が、安国寺、長束等の陣と、しきりに往復致して居りまする」
本多正純はギョッとして家康の方を見やった。ここで南宮山の気配も怪しい……と、なっては、家康の機嫌はいよいよ険悪になるであろうと気が気でなかった……
案のごとく家康はぴたりと立ち止った。
「毛利の挙動が怪しいか」
「はい。しきりに山下と使者が往復して居りまする」
「ふーむ。みな、伜めが動かぬせいじゃ」
そう怒鳴ると、しかし家康はふっと冷静な顔に返って床几にかけた。
大事な時だと思って、自重したのに違いない。正純はホッとした。

二

「孫兵衛、ちょっと待て」
床几にかけると、家康は視線を虚空へ据えたままで、立ちかけた久保島孫兵衛を呼びとめた。
本多正純は息をころして家康を見上げている。
彼にも、家康の、いまの気がかりがよくわかるからであった。
小早川秀秋がまだ山を下って内応しないというのは、秀秋の性格からする優柔不断さであって

も、それによって南宮山の毛利一族が錯覚を起すおそれは充分にあった。
「――金吾どのが動かぬようでは、東軍の旗色はよくないのだぞ」と。
若しそう判断したら、彼等は安国寺や三成に責められて山を降るおそれが皆無ではない。
小早川秀秋が山をくだるのは家康のために戦うということだったが、毛利秀元が南宮山をくだる場合は、間違いなく三成の乞いを容れて、家康の背後を衝くということだった。
そして、若しも毛利秀元の下山が先になれば、小早川秀秋もまた黒田長政との約束などは無視し、三人の監視を斬り捨てて敵にまわるという、東軍にとって最悪の事態になりかねない。
家康はそれを敏感に計算して、
(これは拙いぞ!)
と、考えだしたのに違いない。
「たしかに毛利のもとから使者が出ているのだな」
「はい」
「よし！　それでは孫兵衛、布施孫兵衛の許へ参って、もはや堪忍ならぬゆえ、山の上の伜めに、筒口向けて射てと申せ」
布施孫兵衛は、久保島孫兵衛と同じ名の、家康の旗下では腕自慢の鉄砲頭であった。
「すると、あの山上の金吾さまを狙いまするので」
「たわけめ。おどすのじゃ。死んだ馬は役に立たぬわ」
「はッ」
「待てッ孫兵衛、そうじゃ……わしの鉄砲だけではおどしが足りぬ。福島のところへ参って、双

方の旗を並べて射てこませ！」
「かしこまりました」
「いうまでもないことながら、応射したら許すなよ。福島勢に、すぐさま続けて攻めよといえ」
「心得てござりまする」
「正純！」
「はいッ」
「孫兵衛に馬をやれ。それ、小林源左衛門が呉れた葦毛をな。孫兵衛はそれに乗って、布施が鉄砲を放ったら、伜めの動きをよく見きわめて、すぐここへ走って来い。おどろいて山を下るか。それでもおどろく気配はないか。そこらが、こっちの心の決めどころじゃ」
　本多正純は心得て孫兵衛とともに馬繋場へ駈け出した。そしていわれた葦毛の替馬を与えて、それが走り去るのを見届けてから床几のそばに戻って来た。
「久保島孫兵衛、出発致してござりまする」
　しかし家康は小さく頷いただけで、又癇性に爪を噛みだした。
　全身の神経を集中して、眼に見えないものの一切を読み尽そうとする、五十九歳の家康の闘志が、戦場にムキ出された殺気立った姿であった……

三

　戦場での計算は平時の思慮とは全く異質のものであった。
　平時の思慮を戦場に持ち込むと、それはそのまま優柔不断となり怯懦となる。逆に戦場の「断

──」をもって平時のことに当ったら、手のつけられぬ暴君と烙印されよう。
信長はその好個の例であったが、戦場では家康も決して信長に劣らぬ決断を持った猛将だった。
家康は、万一こちらから松尾山めがけて発砲しても、小早川秀秋が動かなかったら、自分の旗本で援護しながら、本多忠勝と福島正則に命じて、一挙にこれを攻め落させる決意だった。
いや、そうした決断が、
(──今が潮どき!)
そう感受した瞬間に、本能的に計算され、計算がそのまま発令されているのが、戦場における家康の性格であった。
むろんそうした家康の「断──」は、旗本の久保島孫兵衛にも血肉化されている。
恐らく家康は、孫兵衛の乗って走る自分の替馬の速力と、ここから鉄砲組までの距離、更に福島勢の位置と、指を繰って数えているに違いない。
それがわかるだけに久保島孫兵衛は、馬を鉄砲組のそばに乗りつけると同時に馬上で叫んだ。
「孫兵衛孫兵衛!」
「なんだ。孫兵衛!?」
「松尾山だ。二十挺連れて来い」
「松尾山か。わかった!」
「爪を噛んでござるぞよ」
そして、もう疾風のように福島正則の本陣をめざしていた。

二人の会話は、三十秒にも足りない。それで充分意志も通じ、士気振興の鞭も当っているのが、旗本の強みであった。

福島の本陣に着くとそう簡単にはいかなかった。正則に会って、まず家康の命令を伝えてゆかなければならない。しかもその言葉遣いひとつで、正則は一諾もし、臍も曲げる難物なのだ。

福島正則にとっては、戦場も平時も「正則の面目――」は、同じ比重で頑固に胸へあぐらをかいている。

しかし、この場合は案外早くて済んだ。正則自身、カンカンに秀秋に腹を立てていたからだ。

「よしッ、射てといわれたのか。堀田を呼べ！　勘左衛門を呼べ！」

そして、鉄砲組頭の堀田勘左衛門がやって来たときには、もう、旗本の布施孫兵衛も、プンプン火縄の匂いをさせながら駈けつけた。

「鉄砲二十挺。松尾山の本陣めがけてぶっ放せ。行けッ」

当時の鉄砲鎧は牛皮数枚をうるしで塗りかため、胸に、折り伏しすると頭をまもる方五寸ほどの狙い台をかねた鉄楯がついていた。むろん頭にはこれも南蛮鉄にうるしをかけた笠をかむっている。したがって敵方の弾丸は殆んど恐れるに足りず、太刀や槍の襲撃にも胴体両断の懸念はない。

それだけに、四十人の鉄砲組はノコノコ甲虫のように隊列を離れてゆくと、山上めざして横隊に折り敷いた。

「十挺ずつ、射てッ」

布施孫兵衛と堀田勘左衛門は傲然と突ったったままで命じた。

四

ダダダーン。
ダダダーン。
十挺ずつ十匁玉を二度発砲したときには、あたりの注意はこの筒音に集中されていた。
ダダダーン。
ダダダーン。
そしてそれが、松尾山の小早川の本陣に向けて放たれた鉄砲とわかったときには、福島勢はむろんのこと、藤堂勢も、西軍の大谷、戸田、赤座、朽木、小川、脇坂の諸部隊もシーンと襟を正したようだった。
銃声は四度びでやんだ。
むろん家康は、依然として本陣で爪を噛みながら、じっと時の刻みを数えているに違いない。
この一瞬が、平地の戦の勢力伯仲している混戦の均衡を、どう破るかの岐路なのだ。
恐らく見えない目で手輿を乗りまわしている大谷吉継などは、全身の神経を次の動きに集中して静止したことであろう。
いや、それ以上にこの筒音で愕然としたのは当の松尾山の本陣の筈であった。
小早川秀秋はすっと床几を立ったが、すぐには物をいい得なかった。
彼の考えぬいた中立主義が、どのように惨めなものであったかは、彼の脇にもう三人の監視者が憤怒をおさえて殺到しているだけで充分にわかっていた。

そこへこの家康の決意を知らせる発砲なのだ。
「わが君、いよいよ打って出ずべき時が来ましたようで」
平岡頼勝が、震える声で取り繕うのと、幕一枚隔てて奥平貞治が、大声で笑い出すのとが一緒であった。
「ハハハ……いよいよわが上様も、旗本衆を動かすお気になられたようじゃ。何しろ、まだ三万の旗本衆は、そっくりそのまま少しも戦って居らぬのだからの」
黒田家から遣わされた大音六左衛門と、大久保猪之助とは、笑う代りに舌打ちした。
「到頭、内府を怒らせたぞ」
「どうする気なのじゃ。この始末は」
小早川秀秋が、平岡頼勝にはげしくどもったのは、それから数秒してからだった。
「つ……つ……使番を出せ……い……今じゃ」
「と、仰せられると、いよいよ内府と一戦なされまするかな」
平岡頼勝よりも先に、又、奥平貞治だった。しかしさすがの頼勝も、この皮肉には答え得なかった。
「かしこまりました。使番を！」
ついに松尾山上の観戦者は、怜悧な利己の座から泥の中へ引きおろされねばならなくなった。
稲葉正成が駈けて来て、平岡頼勝と二人で、テキパキと、使番に命を伝えた。
「いっせいに山を下って、大谷勢を蹴散らすのじゃ」
その間、小早川秀秋は立ったまま殆んど一語も発しなかった。決断の遅さを悔いているのか？

それともまだまだ勝敗の前途が見きわめつかないままなのか？　とにかく額の汗は小豆をはりつけたように粒になっている。

と、そこへ、血相変えて秀秋の先鋒、松野主馬が駈け込んで来た。

「殿！　味方を裏切って大谷勢にかかれとある……いったいこれはご本心でござりまするか。それで、殿の武士道は立ちまするかッ」

五

「裏切りとは言葉が過ぎましょうぞ」

平岡頼勝が、あわててさえぎったが、松野主馬はひるまなかった。

「これはしたり、昨夜大谷どのが、わざわざお越しなされたおり、おのおの方は何といわれた。狼火のあがり次第、山を下って内府の陣を突くとあった。それが、大谷勢を襲えとは……そのような表裏常ないご態度で、末代まで殿を世間のもの笑いにさせてよいのでござるか。殿！　ご再考願わしゅう」

いきなり主馬は秀秋の足元にひれ伏した。

「お控えあれ松野どの、裏切りではござらぬ。これは始めから……」

平岡がまたいいかけたが、

「ええ、黙られよ。お身に申しているのではない。殿！」

松野主馬は秀秋の草ずりに手をかけてはげしく揺った。

「殿は、太閤殿下に養われ、武門の誉高い小早川家をお継ぎなされたお身……それが……裏切り

をなさるとは浅ましい。せめて、この山に、じっとおとどまり下されて……」

そこまでいった時だった。

「たわけめ！」

秀秋は狂ったように松野主馬の胸を蹴った。

「あ……」

主馬がひるむと、

「うぬが何を知ってじゃ。小早川家がなんじゃ！　太閤が何んじゃ。みなわが身可愛さに、戦ばかり繰り返して来た、ただの欲張りどもじゃ。この秀秋は、もちっとましな生き方をして見せる。命にそむくとあれば斬って捨てるぞ」

それは秀秋としては、摑みにくい自分の本心をまさぐりながらの怒号であった。

「松野どの！　陣中でござるぞ。陣中のご諫言はご諫言になり申さぬ。軍律をみだられて何となさるぞ」

物事のはずみというものは奇怪なものだった。恐らく松野主馬が、こうした抵抗をして来なかったら、小早川秀秋は、自分の感情を持て余したに違いない。

彼は、まだ、山をおりて戦わねばならなくなった……とは感じていながら、更に戦意を燃やし得ないで困っていたのだ。

それが、松野の抵抗で、いちどに狂った火になった。

（他にも家中に、松野のような考え方の者がたくさんいるに違いない……）

そう思うだけで、彼は、彼自身を千切って捨てたいほどのニヒルな怒りを爆発させ得る人間な

のだ。
「右兵衛！　主馬を退らせよ。軍律を何と思うぞ」
「かほどまでに申しても……」
「松野どの、主命でござる」
村上右兵衛が、あわてて松野主馬を幕舎から連れ出した。そのままにしておくと、本当に秀秋は刀を抜いて斬りかねない。
主馬が引出されると、秀秋は地だんだ踏むような声で命じた。
「貝を鳴らせ！　そして馬を曳け！　もはや、ここへは戻らぬぞ。一挙に大谷勢を蹴散らして、宇喜多の背後を襲うのじゃッ」
そういうと秀秋は、自分の心の矛盾をふり切ってはじめてその気になりきれた。
先頭の鉄砲隊が、筒先を山下の大谷勢へ向けて切ってはなったのは、それから間もなく……
松尾山へは正午になって、はじめて、敵味方をおどろかせる鬨の声があがったのだ……

六

松野主馬は、村上右兵衛にさとされて、自分の陣屋に戻ってゆくと、そのまま兵を率いて山は下ったが、彼だけは大谷勢に発砲はしなかった。
そしてこの戦の終わった後は、さっさと京の黒谷に引きあげ、熊谷直実の故事にならって落飾隠棲したのだが、そうした小さな個人の行為などは、関ケ原の勝敗の決定には何のかかわりも持ち得なかった。

小早川勢は、六百挺の鉄砲を所持している。しかも、それは他部隊のように雨中移動の必要がなかったので、火縄や煙硝は少しも濡らさずにすんでいる。

その優勢な鉄砲隊が筒先をそろえて、いっせいに射撃を開始したのだから、不意を衝かれた大谷勢の混乱は想像に余りあった。

味方が敵に寝返っただけではなく、その敵が最も優秀な武器をかざして大谷吉継の旗本に襲いかかって来たのだ……

大谷吉継はその時、小早川勢の鉄砲の数とおなじ六百人の兵を従えて中山道の北側にあった。

彼は、家康側から松尾山へ筒先を向けて発砲したと知ったときから、

（これで秀秋は裏切ろう……）

秀秋の立場もまた哀れなものだ……そう思おうとつとめて来た。

所詮人間の背負わせられて来ている運命の荷には、さして大きな開きはない。自分が癩という業病を背負ってこの戦場に立たなければならなかったのと同じように、秀秋もまた、秀頼と家康、淀の方と高台院、三成と毛利一族などの間に立って、苦しい締木にかけられて来ているのだと……

ところが、その秀秋が、自分の本陣へまっしぐらにかかって来たとなると、その理性はいちどに憤怒に激変した。

考えようによれば、大谷吉継ほどの武将が、この大事な決戦場で、小早川秀秋のために戦力を封殺され、全く身動き出来なかったといえそうだ……

疑いながら信じようとし、信じようとしながら疑念を捨て切れずに。

それが最後に、自分に数倍する兵力で、自分の上にのしかかって来る敵になろうとは……

どう考えても勝味はなく、勝味がないだけに口惜しさは格別だった。
秀秋さえ無くば、吉継は、業病の身の最後の一戦を、家康の本陣に斬り込んで華々しく飾ってゆけたものを……いや、始めからそうする気で、三成の友情に殉ずる覚悟を決めた吉継だったのだ……
ところが今日の戦は目の見えない彼の肉体同様、一度も彼に思うような攻勢を取らせなかった。彼が攻勢を取って動き出すと、秀秋が寝返る……秀秋を寝返らせぬためには、まだまだ動いてはならないのだと……
(その自重の果てが、動かぬままに秀秋の餌食に供されることになった……)
そう思うと、彼の怒りは火を噴きだした。
彼は四方を取放した手輿に乗り、練絹の小袖を重ねたうえに、白羽二重に墨で群蝶を描かせた鎧直垂を着て、朱の佩楯に朱の頬当をしていた。甲冑をわざとおびず、浅黄の絹の袋で、顔は例のごとくつつんでいる。
そのつつんだ首を傾げて、
「金吾が旗印は何れにあるぞ」
近侍に訊く声は鬼気そのものであった……

七

「はい。まっすぐに山を下って、寄せて参りまする」
答えたのは、盲目になって以来、吉継の眼となり触角となって、片時も側を離れない湯浅五助

の声であった。

「来るか、金吾が」

吉継は袋の中で歯がみをした。

「みなに伝えよ。無道の秀秋を首にせずば、我が恨みは七生までも残るであろう。他部隊は歯牙にかくるな。切っ尖揃えて秀秋が旗めざして斬り込むのじゃ」

輿を叩いて命じながら、吉継は自分で自分の敵が、はじめてハッキリとわかった気がした。

彼が本心から憎んでいるのは、家康でもなければ、東軍の諸将でもなかった。この世にはびこる愚かな無智と不信であった。

それなればこそわざわざ昨夜も山をのぼって、信義を尽しているというのに、秀秋の重臣どもはぬけぬけと自分を偽った。

「かしこまりました」

五助は勢いよく輿わきを離れていった。敵の射撃は猛烈をきわめているが、まだ味方は、火蓋を切ってはいない。

大谷勢は、吉継の本陣の他に、平塚因幡守為広と、戸田武蔵守重政父子、それに吉継の二人の息子、大谷大学と木下頼継の五隊にわかれて布陣していた。

鉄砲の数は五隊合わせると四百挺に近いのだが、それがそれぞれ各隊に分散しているので、六百挺筒先揃えた猛攻に、無駄な応射は出来なかったのだ。

吉継は、輿の上で、全身を耳にして湯浅五助の戻りを待った。

「五助、立帰ってござりまする」

「伝えたか」
「はッ。すでに平塚因幡守さま、戸田武蔵守さま、左右から小早川の旗本めざして進みだしてござりまする」
「そうか。動き出したら、そちは、わしの側を動くな」
「心得てござりまする」
「斬死じゃ！　よいか。万一敵が輿わきに迫ったら、すぐさまわしに合図せよ」
「はッ」
「逡巡して時機をはずすな。わしが切腹すると同時に介錯、決して首級を敵に渡すな」
表情のない顔……というよりも、目も鼻もない顔に朱いろの頬当が無気味なほどあざやかに浮いてみえる。その奥から洩れるかすれた殺気が五助の胸に錐のように突き立った。
ドドーンと、味方の応射が始まった。
「近いの、距離は!?」
「はい。いまの応射で因幡守が斬り込み……」
そこまでいった時に、ワーッと天地をどよもす鬨の声が語尾を奪った。
味方も喊声をあげたであろうが、関ヶ原に充満している他部隊も、ここでいっせいに戦局の新展開に目をむけたものらしい。
「小早川勢の他にかかって来るか」
「はいッ。藤堂、京極がまっ先に出ました」
「その次は？」

「蜂須賀、山内、有馬と続いて居りまする」
「味方は、伜どもは、何としてあるぞ」
「まっしぐらに小早川勢へ斬り込み中にござりまする」
「そうか。斬り込んだか」
「はいッ。あ、小早川勢が引きだしました。味方優勢にござりまする」
「よし、輿をすすめよ。急げッ！」

八

戦場はもの凄じい白兵戦になっていった。
大谷吉継にもしこれを見る視力があったら、恐らく莞爾として鞍壺をたたくところであったろう。
平塚為広は十文字槍をふるって、群がる敵を突き伏せながら阿修羅のように進んでいるし、戸田重政も最先頭に立って自慢の太刀をふるっている。
大谷大学や木下頼継は、父の心を知っているので、はじめから生還などは考えていない筈であった。
その猛反撃にあって、小早川勢が、じりじりと退きだすと、藤堂勢も進出を中止した。
「五丁……五丁ほど、小早川勢は引きさがってござりまする」
「よし、輿をあげて輿をあと一丁すすめよ」
吉継は、敵味方の叫喚の中から、戦場の様相を聞きわけては命を下した。

「近づく敵があったら、輿とそちだけ残って余の者は懸り合え！　さすれば、必ず若い秀秋、まっ先に出て来る筈じゃ」
「あっ！　仰せの通り、金吾さまの旗印が、退く者どもをおさえました」
「そうであろう。次には自身でまっ先に出て来る筈……どうじゃ気配は見えぬか」
「退き足が止りました。あっ、金吾さまが采配を揮って馬廻りの者を叱咤してござりまする」
「そうなる筈よ。わが輿をもう少しく……」
「あっ、お……押し返しました。じりじりと敵が押し返して参りまする！」
湯浅五助はそこで大きく手を振った。吉継の輿を命令とは逆に少しく退かせようとしたのである。
「退くなッ五助！」
気配を察して吉継は輿を叩いた。
「五丁がほども退いた敵というはな、盛り返してもせいぜい二丁、再び浮足立つと決ったものじゃ。鬨をあげよ。鉦を鳴らせ。そして押すのじゃ。押し返すのじゃ」
と、その時だった。
又新しい喊声がドッ！　と大きく盲目の吉継の耳朶を打って来たのは……
「あれは、あの鬨は、誰じゃ!?」
しかしそれを、五助はすぐには告げ得なかった。
彼はその眼でハッキリ見ていたのだ。
いったん進撃の足をとめた藤堂勢の本隊で、高虎の旗印が大きく左右に四、五たびふられた。

（何かの合図に相違ない……？）

そうは思ったが、五助には、その意味が解きれなかった。藤堂勢の左前面には小早川勢に備えて動かさなかった脇坂安治、小川祐忠、赤座直保、朽木元綱の大谷指揮下の四隊が、枚をふくんで控えているからだ。

「いまの鬨は何じゃ五助！」

「は……はいッ。脇坂、朽木以下の……」

「なに、脇坂や朽木も、小早川勢に向ったか」

「はいッ。そ……そ……それが」

「それが、どうしたと申すのじゃ!?」

「それが、藤堂の合図の旗にしたがって、鋒を逆さまに……」

「何という!? ハッキリ申せ！」

「はッ、味方に、わが方に……襲いかかってござりまする」

一瞬、大谷吉継の躰も舌も凍りついたように動かなくなっていた。

彼が小早川勢の監視においた部隊まで、ついに味方を裏切って来ようとは……

ワーッと又新しい鬨が天地を揺った……

九

大谷吉継には、もはや何を訊ねる必要もなかった。脇坂、朽木、小川、赤座の兵力はあわせて五千……

これが藤堂高虎の合図に従って六百あまりの自分の旗本めざして動きだしたとなれば何のような手の施し方があるというのか……？
家康の本陣への反転も不可能ならば、小早川秀秋の首級に賭けた執念も滑稽な夢になった。
その計算は吉継だけではなく、輿わきへはりついている湯浅五助にもハッキリとわかったものと見え、彼もまた息をころして押し黙っている。
「五助……五助は居るか」
暫くして、手さぐるように呼びかけた吉継に、
「は……お……お側に」
答えはあったが、その声は絶望に泣いているのがよくわかった。
「よし、勝敗は決したようじゃ……」
吉継は案外平静な呟くような声で、
「そちの眼で見た味方のさまを知らせてくれ。斬込んだ武蔵や因幡は何としたぞ」
「は……はい。それが、何時か……」
「乱戦で、姿は見えなくなったというのか」
「は……はいッ」
「よしッ、輿を退かせよ。そちの判断で少々退かせよ」
「かしこまりました。一、二丁……」
手をあげて合図しながら、
「あっ！」

と、また五助の口から悲鳴に似た声がもれた。
「なんとしたぞ!?」
「はい。戸田武蔵守さま討死仕ってござりまする」
「見たか」
「はッ」
答えはしたが、五助が見たのは、当の戸田重政の討たれる姿ではなくて、その首を誇らかにかざして馳せ去る一隊の姿だったのだ。
むろんその時は、誰に討たれたのか知る由もなかったが、これは織田河内守信成の家臣、山崎源太郎に一槍つけられたあと、その主人の信成ともわたりあい、そのあとで源太郎に首を掻かれたものだったのだ……
すでに、敵が、小早川勢、小川勢、大谷勢と入りみだれた大混戦になっている証拠であった。
「五助、また退くは、負けかッ!?」
「いまだ!」
「平塚因幡の姿は、見かけぬか」
「はッ、何れにも……」
答えながら五助はまた横なぐりに涙をはらった。
戦局が絶対不利になった場合は、平塚因幡守為広が、まず五助に知らせて来る……その上で、主君吉継の介錯をせよと、五助と為広の間にも打合せがあったのだが、その為広がついに姿を見せないのだ。

見せない筈であった。

すでに為広も小早川秀秋の近侍横田小半助に一槍つけられ、小半助は突き伏せたが、疲れきって、小川祐忠の家臣、樫井庄兵衛に首と自慢の十文字槍を与えてこの世を去ってしまっていたのだ……

「あたりが静かになったぞ。伜どもの様子はいかに」

「はいッ。大学さま山城さま、ご両人で生き残った者どもをあつめ、田の畔で何か下知をなされて居られまする」

五助が答えるとはじめて吉継は、

「輿をとどめよ」と小さくいった。

十

もはや大谷吉継には、すべてが終ったことがハッキリとわかった。

それにしても、何という惨澹たる吉継の生涯であったろう。急にあたりが静かになったと感じたのは、すでに大谷勢は全滅と見てとって、みんなの鉾先が宇喜多勢へ向けられていったためなのか？　それとも吉継の肉体から聴覚が奪われていったのかすらわからなかった。

「五助……」

吉継は、その何れであるかを確めようとして、ふと耳を澄ます気になり、それから、その執念を払いのけた。

何となく自分の全身に薄陽が射しかけているような気がする。

それはどこまでも（何となく……）であった。

曾ては太閤翼下のキリン児といわれ、太陽は彼のために大空に懸っているかのような得意な日が続いた。

それが一朝癩という業病に取り憑かれてからは晩秋の落日のような速度で彼を闇の中へ引きおろした。

そして、その闇の中でも、彼自身はつねにどこまでも清廉に信義を貫いて来たつもりなのに、幸運の光りはカケラも彼に射しかけては来なかった。

三成の友情に殉ずる気になったのも、今にして思えば心の底にその絶望の手引きがあったからかも知れない。とにかく彼ははじめ幸運の祝宴に招かれて、その華やいだ席上からそのまま今度は、永遠に光りのない闇の底へ案内されて来てしまったのだ……

（いったいこの不運の手引きをしたのは何者であったろう……？）

仏教の説く因果応報の理からすれば、彼は前世に事理を超えた悪縁の根をおろしていたことにもなろうか……

三成はかつて彼の次に座して、業病人の口にした濃茶の茶碗をさりげなく啜ってくれた……誰もが茶席で、彼と同席するのを極度におそれた頃に……

その時の心にしみ入るような嬉しさが、あるいは吉継を、今日のこの戦場に駆り出す大きな原因になっていたのかも知れない。

（とすれば、……それもこれも、生への執着の不用意な報いであったといえるのだが……）

しかし今日の吉継は、いま、すべてが終ったと感じ取った瞬間に、ふしぎなほどあっさりとそ

の執念の輪の外に立ち得ている。それで、どこからか薄陽が射しかけているような気がするのではあるまいか。
「五助、陽が当りだしたようだな」
「は……はい。また、降って参りました小雨が」
「よし、その陽に当たりながら相果てよう。介錯を頼むぞ」
「か……か……かしこまってござりまする！」
「よく申聞かせてあるように、首は泥の奥深く埋めて人手に渡すな」
「は……はいッ」
「自分の醜さを人眼にさらしたくない……というだけの用心ではない。わかるか。醜いものを見せて、他人を不快にしてはわるい……その遠慮じゃ」
「は……はい」
「では、討て」
そういうと、顔も表情もない大谷吉継は手さぐりで小刀の鞘を払って、
「静かになった。戦はすんだわ」
まだあちこちではじけるように鳴っている銃声の底で、従容と切尖をおのが腹に突き立てた……

老虎若豹

一

大谷吉継の首級が、再び降り出した秋雨の中で、湯浅五助の手によって討ち落された頃には、もはやこの戦の勝敗は完全に決していた。

五助が介錯した首は、その場にあった三浦喜太夫が羽織につつんで駈け去った。

しかし、その三浦喜太夫も、湯浅五助も、その後みな敵の中で斬死しているので、吉継の首級は、どこの、どの泥田の底に埋められたかもわからずじまいで戦局は次に移った。

松尾山をくだった小早川勢と、藤堂高虎の勧降を容れて東軍に寝返った脇坂安治、朽木元綱、小川祐忠、赤座直保等の諸勢は、そのまま天満山下の宇喜多勢に殺到し、更に、その北の小西行長の残兵に襲いかかった。

そしてその頃には、いちばん北に陣取っていた石田勢もまた、長駆していった藤堂、京極勢をはじめとし、織田有楽、竹中重門、吉田重勝、佐久間安政、金森長近、生駒一正など、先を争って馳せ加わった東軍に最後の攻撃をかけられて、見る間に伊吹山から相川山の方向へなだれを打って四散しだした。

そうなるとはじめから動かなかった石田勢の隣りの島津勢の前は、東西両軍入りみだれての乱戦場に一変する。

もはや動くも動かぬもなかった。

誰がまっ先に今日の戦場の老猛虎、島津義弘の首級を狙って殺到するかの問題だった。

六十六歳とはいえ、島津義弘はまだ気力では壮者をしのぐものがある。それが始めからじっと動かなかったのは、おそらくその体力の一片も無駄にはすまいとの戦場なれた用心からだったに違いない。

「申上げます。いよいよ西軍は、伊吹山に向って総敗北、わが陣の前を通るは逃ぐる敗兵ばかりになってござりまする」

川上左京亮の報告を聞いて、

「何刻ぞ」

と、彼もまた時をたずねた。

「すでに未の刻（午後二時）かと存じまする」

「よし、馬を曳け」

味方の陣前をのがれる敗兵はすべて西軍ばかり……と聞かされて、始めて腰をあげたのだからその覚悟は知れてあった。

むろん無傷で残ってあってもニ千に足らぬ島津勢なのだ。勝つ見込みは全くない。そのようなことも、始めから万々承知の筈であった。

「ふーむ。巧々と治部少にはめられたわ」

馬を曳かせると、義弘はひらりとそれにまたがって、いままで坐ってあった場所の右手の小さな丘にのぼった。

成る程旗本の報告どおり、敗兵が左手の伊吹山めざしてなだれを打っている。誰も返し合せて戦う者の姿はない。

「よし、中書と盛淳を呼べ」

中書というのは、甥の中務大輔豊久のことであり、盛淳は長寿院盛淳のことであった。

二人がやって来るまで、じっと眸をこらして義弘は五、六丁の距離にせまっている家康の本陣を睨んでいた。

晴天だったら、勝ちほこった家康の金扇の馬印が、眉を焦す近さに光って見えたに違いない。秋の小雨で埃も立たぬ代りに、模糊として捕えがたい一抹の淋しさが大気にしみ込んでいるようだった。

「フン、戦では、誰にも負けぬつもりであったに……」

そこへ、豊久と長寿院が泥をとばして駈けて来た。

二

「中書か」

「はッ」

「敵の中で、いちばん勢い猛きは？」

義弘に、投げつけるような声で聞かれて、甥の豊久は一瞬問いの意味が、つかめなかった。

「いちばん勢の猛きとは、戦功第一の意にござりまするか」

「そうではない。いま、現在……一番強そうな奴は誰だと訊いているのじゃ……」

「これはしたり。それならば、いうまでもなく内府が本陣……本陣の敵は井伊、本多等のほか、まだほとんど戦っては居りませぬ」

「そうか。わかった」

義弘は一諾してから指をあげて北をさした。

「ご先祖義朝公の敗北や、頼朝公の七騎落はみな、みずから戦うて敗れたものなれば詮もない。しかし、今日の戦は無念のきわみじゃ。弓矢取る身に生まれ、高麗国まで渡海して、いちども敗れを取らぬわれ等が、老後に至って今日のうらみを残すとは……みなみなも許して呉れるよう。われ等はこれより、内府の陣に斬入って、せめてものいちばん猛き敵を求めて討死する……」

そこまでいって義弘はふっと地上の豊久を見直した。

豊久が、いきなり草の上で鎧の紐を解きだしたからであった。

「中書！　何とするのじゃ」

「はい。討死のお覚悟と承りましたゆえ、その用意を致しまする」

「これは異なことを!?　わしはこれより内府の本陣へ斬入って討死……と、申した筈じゃ。ここで切腹するとは申さなんだ。聞き違えるなッ」

「聞き違えは致しませぬ。いよいよ決死のお覚悟で斬込まれる……それゆえ、その前に、甲冑をお取替えおき願いとう」

「なに、何のために、わしとお許が甲冑を替えるのじゃ」

豊久は、その間も紐を解く手をゆるめず、

「さ、すぐにお取替え願わしゅう……殿が討死の覚悟で斬込みを敢行なさるに、われ等が、万一

にも殿を落させ申す用意も怠り、のめのめ斬られてあったといわれては末代まで、もの笑いになりましょう」

「豊久、お身は、わしにさからうのか」

「さからいませぬ！　万一敵が道を開いたおりの用意にござりまする」

豊久は薄笑いをうかべて草の上に鎧をおいた。

「遮二無二斬込んで、万一敵が道を開いたおり、わざわざ討死する要はない。そのおりには、豊久、その甲冑を頂戴してしんがりをつとめまする。それをせずに戦うては、島津は、はじめから負ける気であったといわれまする」

「ふーむ。ほざき居ったぞ。中書めが」

「ご合点が参りましたら、少しも早よう」

「ハハ……」

義弘はとつぜん顔をうわ向けて、腹の底から雨空へ笑いを放った。

「ハハ……そうか。はじめから負ける気で斬込んだ……といわれてはなるほど恥辱じゃ。よし、突破する気で本陣へ斬込もう。島津は逃げもかくれもせぬ。如何なる大敵の中へも堂々と斬込むのだ……それだけでよい。ワッハッハッハ……中書めが、面憎いことをほざいたわ。よし、その気で参る。しかし甲冑の取替えはまかりならぬ。急いで着直せ！」

三

豊久はギロリと義弘を見上げたが、案外おとなしく鎧を着け出した。

いったん言い出すと聞き入れない義弘の気性のはげしさをよく知っているからであろう。
さっさと鎧を着直すと、
「では、お約束のその羽織を」
こんどは澄して義弘の前へ両手を出した。
「なに、約束じゃと」
「はい。その羽織だけは下さる。鎧は着直せと仰せられました」
「中書！」
「はっ」
「この場におよんで小悧巧なことを申すと許さんぞ」
「小悧巧……？　これはおどろきました。豊久にもし些かでも悧巧さがござりましたら、たとえお手討ちになろうと、殿を、このような詰らぬ戦場へは立たせなんだでござりましょう。豊久が愚かなばかりに、殿を石田ずれの口車に乗させてしもうた……その償いにも、羽織だけは頂戴致さねばなりませぬ！　ま、もう暫くお聞き下され。殿は討死なさると仰せられる。しかし、われ等の立場は違いまする」
「どう違うと申すのじゃッ」
「殿のお覚悟がどうあろうと、豊久や盛淳は、殿を助けて是が非でも敵中突破を致さねばなりませぬ。もしそれをせず、殿を討死させてしもうたら、若殿忠恒公にとって、内府は不倶戴天の仇……それがもとで後日和議は不調となり、御家滅亡なさらぬと誰が保証出来ましょうや。ここで殿を討死させるか、敵中突破を成功させるか、それがそのまま島津家興亡のわかれみち……それ

ゆえその羽織、頂戴致さねば、豊久、忠恒公に合わせる顔がござりませぬ」
島津義弘は、はり裂けそうな眼をしてじっと豊久を睨んでいたが、
「そうか。そこまで考え居ったか」
小雨の粒を鬢の毛にとまらせて喰い入るように自分を見上げている豊久の前へ、はじめて羽織を脱いで突きつけた。
「ありがたく頂戴致しまする」
続いてこんどは左から長寿院盛淳が、
「そのお旗頂戴致しとう」
「旗もか」
「はい。おついでに軍扇も頂けますればなお幸い」
その軍扇は三成が大垣城内で諸将に配った軍扇だった。
義弘はもう何も言わなかった。乞わるるままに背の旗と軍扇をぬいて盛淳に渡すと、
「よしっ、行くぞ」
腰に帯していた太刀をすらりと抜いて高くかざした。
一同それにならった。雨あしは次第にまた太くなり、抜きかざした白刃の林の上へ蕭々と降りそそぐ。
「おう！　えい！　おう！」
高麗以来の鬨であった。と、同時に、島津勢は三人の「義弘――」を先頭にして、いきなり家康の本陣の先列めざして殺到した。

西軍はもはや殆んど北国街道の北から、伊吹山方面へ追い込んだと思っていた東軍の先鋒は思いがけない南へ向けての逆流に、いきなり二つにわれて道を開いた。

行手をさえぎっていたのは旗本の酒井、筒井勢だったが、彼等はまだそれが敵か味方かよくわからぬ様子だった。

四

どんな場合にも意表を衝かれると人間の頭脳は混乱する。

東軍はいきなり南に向って、阿修羅のように猛進しだした一団の軍勢が、丸に十の字の旗をかざした島津勢であることを納得するまでに、意外なほど手間どった。

事実家康の先鋒は、すでに北国街道の西、寺谷川の線まで進出していたのだから、島津勢にとってはまことに見事な敵中突破であった。

「島津だ。味方ではない、島津だぞ！」

「島津勢が、上様の本陣へ斬込みをかけているぞ」

いちどそれと納得出来れば、兵力では比較にならなかった。事実この時まで、家康の魚鱗の備えは、まだ一枚の鱗の損傷もなかったといってよい。

ワーッと島津勢を引きつつむと、島津勢の鉄砲はそこここから街道の行手行手と援護する。

もはや関ケ原の町を目の前にしたときだった。

いちど石田勢の面前まで出て引きあげて来ていた井伊直政の陣から、思わぬ強敵が島津勢の引きあげようとする街道めがけて行動を起していた。

「やはりやったでござりましょう。島津め、きっとこう来ると思っていました」
そういったのは、井伊直政であり、
「よし、義弘を討取ろう」
事もなげに頷いたのは、まだ戦のこわさも知らぬ初陣の、家康の四男松平忠吉だった。
忠吉は直政に連れられて、すでに戦場をひと駆けして来ている。それが、この若者をいよいよ大胆にしているようだった。
「義弘の首でも貰わぬと、あとでオヤジに叱られるわ」
「あせってはなりませぬぞ。島津の抜刀隊は粒よりの剛の者ぞろいゆえ」
「フン、承知の上じゃ」
「まず、関ヶ原の南まではおやりなされ。本陣を騒がせてはなりませぬ」
「それまで待ってかかるのか」
「その方が追いよいと申すのでござりまする」
関ヶ原の南になると、寺谷川、藤川の合した流れが牧田川となり、その川沿いの道は牧田道と呼ばれている。
その牧田道に出たところで追いすがり、有無をいわせず討取ろうというのが老巧な井伊直政の作戦らしかった。
直政が馬を寄せて来て離さぬので、松平忠吉は、むずむずしながら敵のあとをつけている。
彼一人であったら、追う方法の代りに、前へ立ちふさがって大乱戦をやってのけたに違いない。

と、この頃になって、本陣からの命を受けた本多忠勝勢が、鬨の声をあげて島津勢の後尾に左から突入を敢行した。
「おお、忠勝じゃ。忠勝に手柄を取られるぞ」
若さだけではない。この、秀忠と同腹の弟は、兄の几帳面で律義な性格とは反対に、怒ったおりの父そっくりの荒武者で、その点、結城秀康によく似ていた。
彼は、本多勢の鬨を聞くと同時に、いきなり馬にひと鞭くれて、あっという間に島津勢の中腹へ斬り込んだ。
「しまった！　下野さま、下野さま」
直政と馬回りの者どもが、狼狽してあとを追った。

五

この頃すでに島津勢の蹴散らして通った軍勢は三隊に及んでいた。
最初に不意を衝かれた酒井家次勢は、島津勢がそのまま家康を突きそうな勢いだったので、道を開いてこれが擁護にあたり、西貝墓では筒井定次の家老、中坊飛騨守が父子三人、手勢を率いて敵の前面へ立ちふさがった。
ともすれば斬立てられて、誰も居ない伊吹山の方をめざしそうな東軍の中で、この中坊飛騨守父子の奮戦はめざましい限りであった。
ついに飛騨守の三男三四郎はここで討死し、危かった飛騨守も、追いついた井伊、本多の両勢によって危機を救われ、更に、福島正之勢も突破されてしまっていた。

最初の陣地神田から、ここまで凡そ十七丁。
牧田村の烏頭坂に出ようとするところで松平忠吉は直政と離れて、まっしぐらに敵の中へ馬を乗り入れたのだ。
むろん眼ざす敵は老雄島津義弘だった。
義弘ほどの猛将を討取ったとなれば、諸将ばかりか家康にも鼻が高い。平素ともすれば「お伜さま――」扱いの旗本どもに目にもの見せて呉れようというのだから、いったん駈け出すと制止の声など耳に入ろう筈はなかった。
彼が狙っているのは背に島津の旗を立てた老将……これは実は義弘ではなくて、長寿院盛淳だったのだが、彼はその盛淳の馬上姿が眼に入ると糸を絶たれた凧のように追いすがった。
「待てッ、松平下野守忠吉、参るぞ」
これはいかに戦場馴れぬとはいえあまりに乱暴な名乗りかけであった。
「なに、松平下野守じゃと!?」
「それならば内府がお伜さまではないか」
黙っていたら、引きあげに忙しい島津勢の中から、これを聞いては引きあげられぬという、垂涎の猟師が馬を返して彼を囲んだ。
その中の二人を、忠吉はものをもいわずに斬っておとした。
彼等が目的ではないのだから、暇どることが無性におしく腹立たしかったのだ。
「退け！　うぬ等に用があるのではないわ。島津義弘！　返せ、遁ぐるかッ」
三人目を、また忠吉は馬の頸をないで追いすがった。

と、そのとたんに次の騎馬武者の繰出す槍を錣籠手の上から受けた。
「かすった！」と、忠吉は叫び返した。
しかしこれは袋竹刀や稽古試合ではない。右腕にジーンと熱鉄の痛みが走り、ポロリと太刀が手から離れた。
「松井三郎兵衛継、松平下野どののお相手申す」
いいざまいきなり第二の槍を繰って馬を乗りかけた。
一度太刀を取りおとした若豹にとって、これはもはや絶体絶命の場であった。
「うぬッ。来るかッ」
乱暴といってこれほど乱暴な応対の仕方は又とあるまい。大手をひろげて敵の槍まで抱き込むような形で敵に立向った。
槍は紙一重の差で左の脇をぬけ、松井三郎兵衛はそのまま躰ごと忠吉の胸の中へ飛び込んで抱え込まれた。
当然のこととして、二人の躰は馬の間に落ち、野獣の嚙み合うようなはげしい怒号が濡れた草の上でもつれ合った。
上になり下になった。と、またそれがくるりと一転したときには乱暴無類の若豹は、松井三郎兵衛に組敷かれ、三郎兵衛の手には、雨をはじいて黒々と短刀が光っていた。

六

忠吉は自分の咽喉もとにジリジリと迫って来る白刃を見て、夢中でこれをはねのけようと試み

た。しかし、傷ついた腕は思うように動かなかった。
相手の肘をつかんで切ッ尖をはずそうとするのだが、あがけばあがくほど自分の躰は泥の中に埋もれて身動き出来なくなりそうだった。
「うぬっ、こんなところで討たれてなるものか」
松井三郎兵衛は、もう完全に忠吉を押えこんでいるのだが、彼もまたあせればあせるほど手がすべって、目標を的確につかみ得なかった。むろん彼に助勢しようとする島津側の兵も近くにはいない。
とつぜん忠吉が下から叫んだ。
「おお甚右衛門か、討て、こ奴を」
忠吉は、もはやこれで終りかと、絶望の目を放ったところに、思わぬ味方の姿を見出したのだ。
父の使番横田甚右衛門であった。甚右衛門は組敷かれているのが忠吉と知ると、あわててそばへ駈け寄った。そして、馬乗りになっている松井三郎兵衛のえりがみに手をかけようとした時に、別の声がこれを止めた。
「甚右衛門、下なるは下野さまじゃぞ。手を出すな」
甚右衛門はあわてて出しかけた手を引っ込めた。
忠吉はカーッと頭が熱くなった。見ると甚右衛門のそばに、これも同じ使番の小栗大六忠政が澄した表情で突っ立っている。
「大六！　こやつを討てッ」
すると、忠政はまた甚右衛門にいった。

ない。
九死に一生の自分を眼の前にして父の家臣は手を出さぬ。平素からおれを憎んでいたのに違い
「お伜さま――」育ちの忠吉にとって、これほど口惜しく腹の立つことはなかった。
「手を出すなよ甚右衛門」

「頼まぬ！　だ……だ……だれが頼むかッ」
渾身の力をふるって、跳ね返すと、ぐらりと松井の躰がかたむく。
もうその時には、忠吉は小栗や横田の方を見やる余裕は全くなかった。傾きかけて又立ち直る相手に、二度三度と必死の抵抗を試みるだけでいっぱいなのだ。
三度目に泥の中でエビのように跳ねたとき、
「あっ！」
と、松井三郎兵衛はうしろへのけぞった。
見るともうその首は胴体に付いてはいなかった。
「殿！　ご無事で」
そういったのは、ようやく彼に追いついた家来の亀井九兵衛であった。
「九兵衛逃がすな。小栗大六と横田甚右衛門が……」
いったとき、あたりにもう二人の姿はなく、続いて引きあげて来た島津勢の一団が、彼の周囲をとりこめていた。
ただこの一団は、そこに泥まみれになっている徒歩の侍が、松平忠吉とは知らないで、斬りかかりはしても、執着はしなかった。

彼等は少しも早く前を行く義弘に追い付こうとして夢中なのだ。

それ等の兵と斬り合いながら忠吉はまだ口の中で、小栗忠政に対するはげしい怒りを喚き続けていた。

「うぬッ、よくもわしを見殺しにしくさって……」

殺されるどころか、生きている自分が、阿修羅のように暴れ狂っているのを忠吉は忘れていた……

七

井伊直政が駈けつけて来たときは、忠吉はまだ泥まみれになって敵の中で暴れていた。右手で太刀をとれないので、左手で愛刀左文字をふり廻しているのだが、必ずしも刃は敵に向っていなかった。むろん戦場で峰打ちなどと洒落ているわけではない。どう摑んでいるのか、自分で自分がわからなくなっているのだ。

直政は馬上から叫んだ。

「弥五右衛門、その方の馬を下野さまに」

「はッ」

「六太夫、弥五右衛門と一緒に下野さまを引き退らせよ」

身をもんで下知すると、直政の側衆隈部弥五右衛門は心得て馬をおりると自分の手綱を忠吉に握らせ、武藤六太夫が有無をいわさず馬の上に押し上げた。

「返せ！　おれはまだ義弘を討たぬ。追うのじゃ義弘を」

「主命でござりまする。その傷の手当てを致さねばなりませぬ」
「黙れッ。追うのじゃ。追え！」
しかし二人は取り合わなかった。さっさと馬首をうしろへ向けて曳き出した。
井伊直政は、それを見届けて、すぐさま義弘のあとを追った。
もう彼の周囲は、おなじように島津勢を追う本多忠勝の先鋒でいっぱいだった。
直政はそれを駈けぬけた。
本多勢が、義弘を討取ったという声を、彼は二度聞いた。しかし、最初は義弘よりもずっと若かったし、二度目に討たれた首も義弘ではなかった。
どちらが先に討たれたのかせんさくしている暇はない。しかし若い方の首は島津豊久らしく、年配の首は長寿院盛淳らしかった。
先を行く島津勢の数は見る間に減って、せいぜい八十騎ほどしか残っていない。戦い馴れた直政の眼にはその中に義弘があることは掌を指すようによくわかった。
おそらく島津勢の退口を受持つ直政の背後になった者どもは、これも戦上手の本多勢のために全滅させられるに違いない。
直政はそれを的確に計算していた。そして出来得れば自分の手で義弘の首級をあげ、婿の忠吉が、その勝利の端緒を初陣で作ったのだと披露してやりたかったのだ。
もう道の行手に牧田川の渡しが見える。それを越えさせては伊勢路へ落すことになる。あとに続く自慢の井伊の赤母衣隊の人数を確めて、直政は馬を川原に近づけた。
もうあたりは一面の薄が原で、島津義弘らしい人影は前方二、三十間に迫っている。

島津勢の川上四郎兵衛の家臣、柏木源藤の狙って放った一発だった。

直政は、棒立ちになった馬の背から振り落されると、そのまま地べたで気を失った。

「ウーム」

股を貫いた銃玉が、そのまま馬の背に喰い入ってしまったのだ。

左股にジーンと熱鉄をあてられたような痛みを覚え、同時に馬が竿立ちになっていた。直政の

「あっ！」

すぐ左手のすすきの株のかげから、轟然と一発、敵の鉄砲が火を噴いた。

そう思った瞬間だった。

（しめた！　これで遁さずに済みそうだぞ）

八

直政の後を追って来た赤母衣の武者数騎が、あわてて直政の周囲を固め、すぐさま直政を助け起して、近くの民家へ運び込んだ。

この間、わずかに数分ながら、気を失った直政を助け起してみると、左の肘にも負傷しておびただしい出血だった。

急追の矢はここで止った。すでにあたりは暗くなりかけ、島津勢の先頭は、牧田筋を多羅山めざして糸ひくように雨霧の中を遠ざかっている。

「討ちもらした」

しかし、それは無念さとか口惜しさとかいう感情とは全く違った一種の爽快さであった。

追う者もよく追ったが、引揚勢の働きもまた敵ながら天晴れと賞讃したい敢闘ぶりであった。

助け起されて気がつくと、直政はひとりで大きく頷きながら、

「手傷は浅い。が、もう追うな」

きびしい表情で命じて、傷の手当ても早々に下野守忠吉の身を案じて引きあげた。

こうしてついに老雄島津義弘は前代未聞の戦場離脱に成功した。

そして、このさまを放してあった斥候の口から聞いた南宮山下栗原村にあった長曾我部盛親が、伊勢路めざして退却を命じたのが、関ケ原戦の終末の合図になった。

盛親は、池田勢と浅野勢にじりじりと圧迫されながらも、この時まで山上の毛利勢の去就を判断しかねていたらしい。

ところが、関ケ原に放ってあった家臣の吉田孫右衛門が、島津勢の退却によって、西軍の影は関ケ原附近になくなった、という報告をもたらして来たのである。

同じころに長束正家の陣屋へも西軍完敗の知らせが入った。

正家が徒歩で三成の許へ連絡にやった使者が、もはや石田勢の本隊はどこにも存在しなかったという報告をもたらして来たのである。

長曾我部勢が先を争って退きだし、長束勢がこれにならって崩れだすと、皮肉なことにはじめて山上の毛利勢はいっせいに鬨の声をあげていった。

この鬨の声が、何を意味したものかは知る由もない。

毛利勢の中には東軍の勝利をよろこぶ者の数が、西軍の勝利を希う者より遥かに多かったのだから、これで戦は終ったという歓呼であったのかも知れない。

むろん鬨の声だけで兵は動かさなかった。
その前に安国寺勢は逃走をはじめていて、伊勢路への山道にはそこここにおびただしい武器や武具が捨ててあった。
ただ安国寺恵瓊だけは、何を考えていたのか後に一人で南宮山の秀元の本陣へ戻って来た。或いは、敗戦の責を負って、秀元と一緒に切腹するつもりだったのかも知れない。しかし毛利家では、すでに東軍との間に和議が出来ているからといって相手にしなかった。そこで恵瓊は武装をといて一人の沙門として又そうそうに身をかくした。
戦場はおびただしい血潮と悲喜を冷たくつつんで暮れかけた。
その薄暮の中を、家康の濡れた金扇の馬印が、整然と藤川を渡って西の高台に進められた……

勝者の陣

一

慶長五年九月十五日――
未明から行動を起した東軍の総帥徳川家康は、予定よりも二刻半おくれて、申の下刻に関ケ原の戦を勝利のうちに終息せしめた。
藤川台に陣を移した家康は、もう爪を噛んではいなかった。
この藤川台の仮本陣は、今日の午前まで大谷吉継が未知の将来に想いをひそめて陣取っていた

場所であった。
その吉継はすでに亡い。いや、吉継だけではなくて、日本中に勇名のとどろいた島津豊久も、石田三成が右腕とたのんだ、島左近勝猛も死んだものと思われる。
まだ報告は届かなかったが、石田三成にしても、小西行長にしても、宇喜多秀家、長束正家にしても、今ごろは生きた心地もなく山路の雨に打たれている筈であった。
「かがり火をふやせ。そしてその後の首実検の用意をするよう」
家康は自分のかたわらに立っている「厭離穢土・欣求浄土」の旗を見るのが辛かった。
勝って嬉しくない筈はない。負けるなどとは考えてもみなかったが、まだ勝者の心にはなりきれなかった。
(何のために人間はこのようなむごい事を繰り返さねばならないのか……)
次々に戦場に派してあった使番が戻って来て、それぞれの受持区域の敵味方の情況を報告する。
三成の家老蒲生備中と、その子の大膳、大炊助ともに戦死。
小早川の陣屋に使者として派遣されてあった奥平貞治、大谷勢と戦って討死。
藤堂高虎の従弟、玄蕃討死。
織田有楽斎負傷。
井伊直政負傷。
松平下野守忠吉負傷。
それ等を無表情にきき流して、大局を誤ることのない指図が指揮者の心得だった。

戦場から真先に駈けつけて来た先鋒の大将は、黒田長政だった。

長政も左手の指を砕かれて血のにじんだ布で乱暴にしばっている。兜をぬいで肩にかけ、乱れた髪に泥の飛沫がついていた。

家康はその長政を褒め千切った。褒めながら、吉光作の小脇差を取って与えた。

その頃からようやく一人の人間としての感慨をふり切った、指揮者の心を取りもどした。

「いかがでございましょう。諸将も続々戦勝祝賀に着到致しますれば、このあたりで勝鬨をあげましては」

本多正純がそういったときには、本陣の幕舎の外には、福島正則、織田有楽、同河内守信成、本多忠勝、その次男の内記忠朝などが続々と詰めかけていた。

「なに、勝鬨じゃと」

「はい。もはや、南宮山下の敵も壊滅、戦場に敵影はござりませぬ。今までの戦死者の数は三万近く、鞍をおいたままの放し馬が千五、六百……まことに前例とてない大勝利と存じまするが」

すると家康は黙って、かぶっていた茶縮緬の頭巾をぬいだ。

「兜を持て。そうじゃ、その裏白の兜でよい」

人々は顔を見合わせた。家康が改めて兜をかぶりだしたからである。

「戦は、これからじゃ、勝鬨は大坂へ着き、質になっている妻子を無事に取戻してから……わかったか。勝って兜の緒をしめよ」

それは道化ているようで、同時に、グッと諸将の胸にせまる人情の機微をきわめた一言だった。

二

不意にポロポロと泣きだす者があった。
常軌を逸して昂り続けて来た戦場だけに、紙一重下の人情にふれられると、子供のように純粋な感情に呼びさまされて来るのである。
「恐れ入りました」
「まことに、戦はまだ終ったのではございませなんだ」
「たしかに、大坂方へは、諸将の人質が残っている。明日はすぐさま佐和山へ向わねばならなかったのだ……」
それにしても、ここで勝って兜の緒を締めよとは、何というわかり易い鼓舞であり、戒めであり、そして硬直している心気を解きほぐす妙薬であったろう。
こうした微妙なところに戦国の指揮者の諸将を押える秘訣と苦心が大きくひそんでいる。
そっと涙をぬぐった本多忠勝が、すぐさま声高に、次の参賀者の名を呼び立てた。
「福島正則どのご着到」
忠勝はここでは徳川家切っての古老なのだ。その忠勝に名を呼ばれ、家康に戦功を賞されると、諸将はみな生死の間を駈けぬけた労苦を忘れて、おかしいほど無邪気な童心に還ってゆく。
「おお、正則どのか。ご辺をはじめ、おのおのの今日の働き、家康、目を驚ろかせたぞ」
家康が身をのり出して声をかけると、
「中にも、中務どの（本多忠勝）の戦の駈け引き、つねづね承り及ぶところながら、まさに

至妙のものでござりました」
　と正則は忠勝をほめ千切った。忠勝は小鬢を掻いて、
「いやいや、われ等の差向った敵が思いのほかに弱かったのでござる」
　それから声を張って、
「織田有楽斎どのご着到」
　織田有楽は、石田三成の家老蒲生備中の首を郎党に持たせて入って来た。河内守信成も同道している。
「やあ老人、高名をせられたの」
　家康はすかさず扇を開いて有楽を煽る。
「老人に似合わぬ殺生を仕りました」
「あっぱれあっぱれ。蒲生備中は家康も弱年の頃より存じて居たものゆえ不憫な至りじゃ。首は老人に差上ぐる。然るべく葬っておやりなされ」
「かたじけのう存じまする」
「聞けばお伜、河内守どのは、大谷の勇将戸田武蔵守を討取られたとのう」
「はッ。その折武蔵守を突きましたる槍、兜の左より右へ貫きましたが少しも損じませなんだ」
「ほう、その槍がそれか。ちょっと見せよ」
　そして信成の手から槍を取ると、
「作は、千子村正じゃな」
　上機嫌でそれを返した。一人一人にそれぞれ変った言葉をかけ、みなに過不足ない喜びをわ

かってゆく。諸将と同じ感情ではなし得ないことであった。
そこへ本多忠勝の次男内記忠朝が、あまり烈しく働いて太刀がそり、四、五寸鞘に納まりかねたのをそのまま手にしてやって来た。
家康はそれも褒めた。褒めながら、これが負けていたら……ふっと三成の顔を思い出したときに、わが子の松平下野守忠吉と、井伊直政が繃帯だらけの体で槍を杖にして入って来た。
忠吉の眼はまだ不平にギラギラと光っている。
「お父上、小栗大六めは不埒にござりまする」
家康の眉がサッと曇った。

三

「お父上、小栗大六は……」
再び忠吉がいいかけたときには、家康はもう眉を開いて床几を立ち、井伊直政に近づいて、
「兵部、傷を負うたと聞いたが、何とあったぞ」
「はい。ほんの薄傷にござりまする」
「そうか。それはよかった。正純、その薬を持て」
忠吉を無視したままで、本多正純に自分の手で練りあげた陣中膏を持たせ、
「これがよう効く。大事にいたせ」
「はッ。ありがたき仕合せ」
「待て待て。わしがその肘の傷だけにはつけてやろう」

そういうと首につらせたままの繃帯をとらせ、みずから薬を塗ってやった。
「痛むか」
「いいえ、一向に……」
「そうか、股の傷も大事に致せよ」
また誰か鼻をすすりだした者がある。
しかし家康は、必ずしも井伊直政の傷だけを案じているのではなかった。
初陣の忠吉に、この戦勝の宵の空気を滅茶滅茶にされまいとしてひそかに心で祈っていた。
「おお、下野も手傷を負うたか」
はじめて家康は、わが子の前に立って声をかけた。
思いなしかその眼はきびしい凝視に変っているようであった。
「なあに、ほんの薄傷でござりまする」
忠吉は口惜しそうに、直政の口調を真似た。
「そうか、それはよかった」
家康はそのままさっさと床几に戻って、
「小栗忠政」
と、自分のうしろに控えている使番の中へあごをしゃくった。
忠吉はギクリとし、かけかけた床几の前に立って小栗を睨んだ。
「お召しでござりまするか」
小栗大六忠政は、いくぶん頰を硬直させて家康の前に片膝ついた。

「横田甚右衛門の報告によると、そなた、下野守が敵に組伏せられているを見て、手を下すなと申したそうじゃの」
「はい。たしかに申してござりまする」
「その所存を、ここでみなに聞かせてやれ」
「かしこまりました」
　小栗忠政は一礼してから、
「下野守さまは本日が初陣にござりまする。その初陣で単騎先駆けなされ、島津勢の剛の者松井三郎兵衛なる者と先ず馬上ではげしくわたり合い、それから組んで馬の間に落ちました」
「なるほど、単騎で先駆けしたか」
「はい。まことに勇ましい限り……さりながら松井三郎兵衛の力がまさりましたか、組打ちの最中に下になり、泥に鎧の袖をとられてはね返そうと必死のご様子……」
「そちはそれをつぶさに見て居たのじゃな」
「仰せの通り、それを見兼ねて横田甚右衛門が助勢致そうと致しましたるゆえ、下なるは下野さまじゃ。手出しは無用と止めてござりまする」
「なぜ止めた。その所存は？」
「下野さまは大将にござりまする。大将が単騎先駆けなさる以上、何時も味方が見ているとは限りませぬ。そのお覚悟は充分あっての先駆けと心得ましたるゆえ止めました」
　小栗忠政はうそぶくようにいいきった。

四

家康は、チラリとわが子忠吉を見ていった。

忠吉は父が小栗忠政を調べだしたものと思って、鋭い凝視を小気味よげに忠政に浴びせている。

「なるほど、大六は、下なるが下野守ゆえ、助力は無用と申したのじゃな」

「その通りにござりまする」

「それが、もし名もない味方であったら何としたぞ」

「むろん止めは致しませぬ。いや、甚右衛門が手出しする前、この忠政が助けていたに違いございませぬ」

「そうか。下野守」

「はい」

「聞いたか、小栗大六は、下なるがお許とわかったゆえ、助けたいを我慢したと申して居るぞ」

「助けたいを我慢した……そ、そのようなことが……」

「黙らっしゃい！」

「は……」

「お許は大六が、お許を、憎んで助けなんだなどとは思うまいの」

「…………」

「そう思うような者であっては、こなたに軍兵は任されぬ。が、そのような者ではない。お許はただ島津義弘を取逃がしたのが口惜しゅうて、それで大六に当り散らしてみているのじゃ」

家康はそういうと、再び小栗忠政に向き直って、
「乱戦そう忙の間に、その方の心掛けまことにあっぱれであった」
「は……!?」
こんどは忠政が目を白黒した。
「組伏せられているのが下野守と知ったときには、そちも胸がドキリとした筈じゃ。助けたかったであろう。しかし、助けては後日の不為めじゃ。今日は初陣、その方たちに助けられたのでは、下野守は戦のまことのきびしさを知らずに過そう」
「は……」
「過失は決して小さなものではない。まことの戦を知らず、更に次の戦場にのぞんであらば、必ず用兵を誤って多くの部下に泣きを見せよう。いや、ただそれだけでは納まらぬ。その過誤が全軍の勝敗を決する場合もなくはない。要は、戦の実態をよく知らしめて分別させることじゃ。その方の今日の心掛け、まことに下野の身を想うもの、あっぱれであった」
そういって、又チラリと忠吉の方を見やると、忠吉は深々とうなだれて涙ぐんでいた。
家康はホッとした。
諸将もみなこの訓戒に納得したようであったが、それ以上に、忠吉のわかって呉れたのが家康にとっては嬉しかった。
家康が以前に嫡男の信康を失ったのは、こうした切々とした父の真情を示さないところにあった……と、つねに悔いているからだった。
家康はその安堵の表情を井伊直政に向けて、

「兵部、どうであったな、今日の下野守の、その他の戦ぶりは」
「はいッ、鷹の子は、やっぱり鷹の子にござりました」
直政はそう答えてニコリとした。
「そうか。お許にもそう見えたか。よし、下野守、これへ来い」
家康は改めて忠吉を招いて、
「手の傷に、父が薬を塗ってやろう。解け」
怒っているような声であごをしゃくった。

五

下野守忠吉は再び表情を硬わばらせた。しかしそれはもはや父や小栗忠政への反抗ではなくて、自分が誰にも憎まれていたのではないという、きわめて当然のことを知り得た感動からであった。
家康は右指のつけ根を砕かれているわが子の傷あとから乱暴に布をはぎとった。
そして黒く乾いた血のかたまりの間にまた新しく噴き出してくる茱萸の実のような血潮の玉を見ると、何の躊躇もなく、唇をつけてそれを吸いとり、そのあとへ膏薬を塗ってやった。
「兵部」
「はいッ」
「鷹の子は鷹であったのでは無うて、お許という鷹匠の餌飼いがよかったのじゃ」
その一語は直政よりもその場に居合わす人々の胸にひびいた。

（いわれなく勝ったのではない……）
爪を噛みながらはげしくみなを叱咤してゆく家康は鬼神であったが、陣屋の家康はどこまでもよく気のつく一人の人間に還っている。
雨はまだ止まなかった。
おそらく戦い終って炊爨にかかろうとしている雑兵たちは、空腹をかかえて火を焚くことも出来ずに困っているであろう。
下野守が井伊直政ともつれるようにして仮陣屋を出てゆくと、家康は本多正純をさし招いて、
「雨がまだ止まぬ。しかし、生米は食べるなと皆に伝えよ。生米は腹をこわす」
「はッ。かしこまりました」
「是非ない場合は、水につけておいての、いまから一刻ほどしてから食べよ。さすれば腹はこわさぬものじゃ。それまでには雨も止むかも知れぬしのう」
正純が心得て出てゆくと、こんどは家康は村越茂助をさし招いた。
「中納言（小早川秀秋）がまだ見えぬ。前非を恐れて来かねているのであろう。そち案内して参れ」
「かしこまりました」
村越茂助よりも黒田長政がホッとした。
秀秋に今日の内応の交渉をした直接責任者は黒田長政だったのだ。
恐らく村越茂助が迎えに来て呉れたと知ったら、小早川秀秋は泣きだすかも知れない。
彼もまた今日の戦で、彼の考えていた小さな利己心からの虚無が、どのように危いものであっ

たかは、骨身にしみて思い知った筈であった。
　後になって聞くと、村越茂助を迎えた小早川秀秋は、嬉しさのあまり、黄金百枚をその場で手ずから茂助に与えたという……
　やがて茂助に迎えられた秀秋は、本陣の前で黒田長政に引きつがれ、近臣二十人ほどを連れて家康の前にやって来た。
　雨あしは細りだしている。
　しかし大谷吉継の残していった仮屋の屋根はさして広くはない。
　すでに諸将が参着しているので、秀秋は仮屋の前の雨の芝原に立って挨拶するより他になかった。
「金吾中納言どの、戦勝のお祝い言上に参られてござりまする」
　黒田長政がそう取次ぐと家康は、かぶった兜の忍びの緒だけを解いて床几を立った。
　と、その瞬間だった。芝原の上に、小早川秀秋が崩れるように坐ったのは……

六

　かりにも中納言の秀秋である。
　諸将の眼もあり、当然年齢から来る見栄もある筈だった。
　それゆえ家康も兜のままではと思って忍びの緒だけは解いて出たのだ。
　それが二人の視線の合った瞬間に、ヘタヘタと雨の芝原へくず折れて、そのまま両手を突いてしまった。

「中納言どの、戦場のことゆえ、かぶったままでお許しあれ」
家康が取りなすようにいったのだが、秀秋はそれすら耳に入らぬようすだった。
「それがし……それがし、不肖にしてお敵対申し……先に伏見の城攻めに馳せ加わるなど、罪浅からず……かれといい、これといい、ご……ご容赦願いあげまする」
おろおろとそういったあとで、又思い出したように、
「こ……このたびは、ご勝利、大慶至極に存じあげまする」
と、つけ加えた。
家康は笑わなかった。おかしさよりも哀れさがこみあげて、誰か笑う者があったら叱りつけてやりたい気がした。
「いやいや、お詫びには及び申さぬ。今日の大功、まことに神妙でござった。向後に遺恨などあるべきではない。ご安堵なされ」
「かたじけのう存じまする。つきましては……」
「つきましては……?」
「明日の佐和山への討手、先手の大将を承りとう存じまする」
おそらく、それで秀秋は、今日までの彼の不逞に、良心のけじめを付けたかったのであろう。
「それは殊勝な申出……さりながらまだ軍議も済まぬことなれば、何れ諾否は、使番をもってお知らせ申そう。先ず引取って休息なさるがよい」
「はッ、かたじけのう……」
それは見栄も外聞も捨てて、まっ正直にむき出された若者の恐怖と歓喜の姿であった。

秀秋が去ってゆくと、福島正則は黒田長政をかえりみて舌打ちした。
「金吾どのは中納言、その身分も忘れて芝生にぬかずいて両手を支えるとは、何という笑止千万ななさり方か」
長政は笑って答えた。
「まるで、鷹と雉の出あいそっくりでござりましたなあ」
「それはご辺の贔屓目じゃ。あれでは鷲と雉ほどにも、違うていたわ」
家康はそうした私語を聞き流して、ゆっくりと床几へ戻ると、はじめて采配をおいて、
「雨は止みそうじゃの。方々もご食事なさるがよい」
そういって土間を区切った野営の膳所に入っていった。
膳所から少し離れた地点に、細い竹を渡し、渋紙を張って屋根にした家康の食事の支度所が出来ている。鍋二つに水桶三つ、湯沸しの薬罐が一個そこにはあり、先刻から包丁人二人と下僕五人が一町ほど下の谷からせっせと水を運んで用意にかかっていた。
せいぜい三千石ほどの知行取りの野陣でも、これより立派な支度所がある。弁当箱はせいぜい三人前しか入るまい。
しかし、それが摂れるというのも、勝ったればこそ、家康は合掌して弁当の蓋をとった。

七

(雨脚は細っている。この分では間もなくあがるであろう……)
箸をうごかしながら家康は、又しても山中に遁れた石田三成の身を思い出さずにはいられな

かった。
　三成は果たして、今日の戦がこうなることを予測し得たかどうか。今ごろは、岩につまずき、荊に傷つきながら、草の葉で饑えをしのいで闇の底をさまよっているのではあるまいか……?
　そう思うと、敵としての憎しみよりも、人間としての未熟さに舌打ちしたいほどの歯痒ゆさを覚えて来る。
　機会は家康の方から幾度となく与えてやった。
　高麗から全軍引き揚げのおりには、わざわざ諸将を博多まで出迎えさせてやってあったし、前田利家との気詰りな交渉中にも反省の機会は幾度もあった。
　それを敢えて掴もうとはせず、ついに七将に追われて大坂を捨てなければならなくなった。
　そして、七将が伏見へ追って来たときにも、家康は懐中の窮鳥を責めはしなかったのだ……
（それなのに三成は一度も振り返ろうとはしなかった……）
　自分でまっしぐらに悲劇の淵へ歩行をゆるめず、大切な味方すべてを抱いたままでその淵に飛び込んでしまったのだ……
（いったい、どこに彼の計算違いの原因がひそんでいたのか……?）
　勝ったので、味方の諸将は小早川秀秋を気軽く嘲笑った。しかし、彼のような立場にあったら、誰が昂然と胸をそらして家康の前に立ち得ようか。
（若し三成が、生きて捕われて来ていたとしたら、どんな態度で……）
　ふとそんなことを思ったときに、板囲い一枚の隣の床几場で、細川忠興の、誰かをたしなめている声が聞えた。

「ただいまご夜食中らしい。それが待てぬといわれるのか」
「いや、待てぬなどと、申しているのではござりませぬ。ただ一刻も早くお詫び申し上げねば心が済まぬ……それゆえおとりなしをとお願い申しているのでござりまする」
相手の声に聞きおぼえはなかった。
が……二人の対話から、誰かが細川忠興にとりなしを頼んでいるらしいとは想像出来た。
「朝からの戦じゃ。むろん途中で食事など摂っては居られまい。お夜食の済み次第お詫びの口添えを致そうほどに、しばらくそこへお控えあれ」
「お願いでござる。越中どののお口添えがあれば内府もお許し下さろう。とにかくわれ等は大谷刑部どのの采配下にありながら、脇坂中務殿（安治）とひと手になって、大谷勢から宇喜多勢に馳せ向い、少しは心中を示したつもりでござりまする。その辺を、特に宜しく申し上げてお怒りをお解き下さるよう……」
聞いていて、家康は、それが朽木元綱らしいとわかった。朽木元綱ならば、藤堂高虎の合図によって味方に内応した脇坂、小川、赤座等の組であった。
「相わかった。とにかくお夜食が済み次第……」
また困ったように答えている細川忠興に、
「越中どの、誰じゃ」
家康は哀れを覚えて、板囲いの向うから声をかけてやらずにいられなかった。

八

家康に声をかけられては忠興も黙っていられなかった。
彼は板囲いのそばにやって来て片膝つくと、
「朽木河内守どの、御敵になり申すこと、今更後悔身に沁むとて、それがしを頼み、いろいろ陳謝致してござりまする」
「ほう朽木河内が……」
家康が苦笑して答えかけたときには、もう当の朽木元綱は、いきなりさっと板囲いの中へ飛込んで来て、家康の前に土下座していた。
勝者と敗者が決定したということは、敗者の側に立った者をこのようにみじめな狼狽に追い込むものであろうか。
「何とぞお許しを……それがしは止むなく……大谷刑部のすすめには従いましたが、心中では、決して、御敵になろうなどと、存じては居らなんだのでござりまする。何とぞ、お許し願わしゅう……この通りでござりまする」
家康は見ているのがつらかった。腹立しく、おかしく、やりきれない感情がもつれ合った。
（いかに狼狽すればとて、このように取乱した詫びが出来るものであろうか……？）
家康には想像もつかない位置に、朽木元綱の境涯はあるらしい。
「河内守どの！」
見かねてさえぎる細川忠興を、

「その方などは小身なれば、俗にいう草のなびき、自分で自分を決めかねる場合があろう。それゆえ家康は、敵対されたとて格別痛くもなければ憎くもない」

「は……はいッ」

「本領安堵を申付くる。退って家人を安心させよ」

「ありがたき御恩徳……元綱……元綱……決して忘却仕りませぬ」

「退ってよい。越中どのも大儀であった」

相手が意地をもった人間だったら「草のなびき……」といわれた一言に、激怒か赤面か、とにかく声を呑む筈だったが、朽木元綱にはそれだけの気概はなかった。

もっとも気概があったら、大谷吉継に殉じていたに違いない。

家康は元綱が去って行くと、箸をおいて、再び床几場へ戻って来た。

もはや諸将はそれぞれの陣屋へ引取って、側近だけが本陣に残っている。家康自身も全身の節が抜けるような疲れを覚えた。

家康は本多正純をかえりみて、

「まだ、来る者があろうかの」

そういったが、正純はその意味を解しかねて、

「よいよい」

家康の方から制した。

「河内」

「はいッ」

「そろそろ、竹中重門どのを、お迎えに……」
と、小声でいった。
表面家康はこの藤川台に仮泊することになっている。だがその実は、関ヶ原から少し北にある宝有山瑞龍禅寺に泊る手筈になっていた。
瑞龍禅寺は竹中重門の兵站部になっていて、このあたりで秘かに屋根の下に休もうとすれば、ここより他に雨露をしのぐ所はなかったのだ。
むろんこの藤川台へは身代りがおかれる。家康の健康を案じた医者の板坂卜斎の計らいによるもので、家康は馬で移る手筈であった。
「そうか、ではそろそろ来て貰おうか」
と、そこへ又一人、あわてて助命の駈け込みがあった。

九

こんどやって来たのは一柳監物直盛に連れられた小川祐忠だった。
小川祐忠も朽木元綱同様、最後のギリギリのところで大谷刑部を裏切って行動した一人なのだ。
「申し上げまする。それがしと小川祐忠とは縁者にござりますれば、是非ともお取りなしをと乞われ、深夜をもかえりみず罷り出ましてござりまする」
一柳監物のいうあとから、小川祐忠もまた床几の前へ土下座した。
そして、くどくどと陳謝するのを家康はもう聞いてはいなかった。

(許そうか許すまいか……?)
朽木元綱と小川祐忠の場合は少しく事情を異にしている。元綱が大谷刑部を裏切ったのはとにかくとして、小川祐忠は石田三成とも親類だった。
したがって今日あのような苦境に大谷刑部を立たせた責任を、幾らかでも感じている者ならば黙って沙汰を待つべきだった。
「その方は、朽木元綱に会って来たな」
「は……はい。朽木どのは寛大なご恩徳に浴しましたる由、この祐忠も、前非を悔いてご合力申し上げましたものゆえ、何とぞご同様に……」
「祐忠」
「はいッ」
「大谷刑部は敵ながらあっぱれであったの」
「は……はいッ」
「三成との義を守り、あの体で手輿の中から全軍を叱咤して果てた。惜しい武将であった……そう思わぬか」
「は……はいッ」
家康はそこで暫く言葉を切ってじっと祐忠と監物直盛を見比べた。
家康の皮肉を浴びて、祐忠よりも一柳直盛の方が、まっ赤になってうなだれている。
恥を知る者と、知らぬ者との差があまりに歴然としているのが、首を傾げたくなるほどだった。
(神仏は、どうしてこうも各自の荷に差別をつけておわすのか……)

家康は、一柳直盛の方がいとおしくなってこれも黙っていられぬ気になった。
「祐忠」
「は……はいッ」
「その方は三成と縁ある者で許しがたいが、監物の今度の武功に代えて助命してやる」
「ありがたき仕合せ……」
「まだ礼は早い！　助命はしてやるが、身柄(みがら)は監物に預くる。さよう心得さっしゃれ」
「はい……ありがたき、仕合せに存じまする」
やはり斬られるものと思っていたらしい。彼はまた続けさまに頭を下げ、直盛に促(うなが)されて出ていった。
またバラバラと雨がおちだした。
今夜は降ったりやんだりのままらしい。
そこへ連絡してあった竹中重門のもとから迎えの人数がやって来た。
むろんこの人数も、自分たちの迎えに来た相手が、家康であろうとは知らないのだ。病人が出来て野営は困難、そのため、病人だけを竹中家の兵站、瑞龍禅寺に運んで休ませる……そう信じて来ているのだ。
「では、ご用意を」
家康は再び板囲いの中に入って、誰ともわからぬように、すっぽりと頭から桐油(とうゆ)の頭巾(ずきん)をかむって現われた。

た。

竹中重門は、秀吉の軍師として天正七年、播州三木の陣中に没した竹中半兵衛重治の子であった。

彼が父を失ったのは七歳のおりで、これも豊家恩顧の者であったが、この合戦には家康の側に立ってよく働いた。

このおりの手柄を認められて、その後江戸に常住し、旗本に準じて交代寄合衆に列しているのだから、家康がその人物をどのように認めていたかは想像出来よう。

さもなければ、こうして彼の兵站所への仮泊を聞き入れる筈はない。

迎えの中には重門自身が、さりげない蓑笠姿でまじっていた。重門だけは、自分がこれから宝有山瑞龍禅寺へ伴う者が誰であるかを知っていた。

病人を装った家康は鳥居新太郎忠政の弟、久五郎成次以下の若者十余名と、これも装い直した御使番の者六名を従えて、藤川台の本営を雨の中へ出ていった。

馬の口取りはいうまでもなく竹中重門自身であった。戦に勝ったとはいえ、病人の正体を知る人々の配慮と苦心は並々ならぬものがあったに違いない。

まだ戦場には累々と死屍が横たわり、主を失った放れ馬が、人足におどろいて時々行手をかすめて疾走する。

どの藪陰に、どのような落武者がひそんでいまいものでもなかった。

道のりは僅かだったが、松明をかざして先導に立った重門の家来たちは、声高に話合いながら

近づく者の有無を確かめて通ってゆく。

しかしその頃には家康は、ともすれば馬上でうとうとしそうになった。晩秋の深夜の冷えが、却ってわずかな体温を意識させ、それがそのまま疲労と繋って来るのである。

考えてみれば合掌せずにいられない今日の首尾であった。

十三日までは中風の再発を想い、ここで斃れるのが、自分の運命かと危んだほどの身であった。それが、すべてを忘れて二日間の采配に、快い疲労を残すだけで何の支障もなかったのだ。

（確かに神仏が加護しておわす……）

家康は快い睡魔の中で、はっきりと自分の身辺に神を認め、仏を感じた。

「厭離穢土・欣求浄土――」

彼の希いがその一点を正しく視てある限り、加護の手は自分を掴んで離すまい……

家康は夢うつつの間で、祖母や大叔母のお緋紗の方とともに、無心に唱名している夢を見だしていた。

急に馬が坂道へかかった。安定していた鞍がはげしく波打ったと思うと、そこはもう山門の前であった。

藤川台の仮陣屋とは違ってかがり火に照し出された伽藍の姿は、古びてはいたが金殿玉楼のように眼に映る。

「ご到着にござりまする」

重門と鳥居久五郎が小声で寄って来て家康を馬から抱えおろした。そしてまだ桐油合羽は、そのままにして奥の客殿に抱え込んだ。

すでにここへは夜具が敷かれ、赤々と火桶に炭火がつがれてあった。
「御意には召しますまいかと存じまするが、充分警備は致してござりますれば……」
住持を従えた竹中重門がいい出すのを家康は軽くさえぎった。
「みなに済まぬ。もったいない事じゃ。お許も退って休むがよい」

十一

人々を退がらせて、しかし家康はまだ具足を解いて休もうとはしなかった。
鳥居久五郎成次がいぶかしんで休息をすすめると、
「まだ二人やって来るわ」
と、家康は笑った。
その一人が間もなくやって来た。お使番の安藤直次であった。
「ご苦労。待っていたぞ」
家康が声をかけると、直次は側近く寄って来て、
「みなみな出発致してござりまする」
と、小声で告げた。
「そうか。して軍監には？」
「はい。本多どのと井伊どののお話合いのうえ、井伊どのが参られることとなり、これも出発致しました」
これだけの会話では傍で聞いている鳥居久五郎には何のことやらわからなかったが、これが翌

日の佐和山攻めの指図であった。
依然として三成の行方はわからない。何れからか、城に入ろうとして苦心しているに違いないのだが……
したがって三成を城に入れぬよう、早急に佐和山城を囲ませておく必要がある。
そこで安藤直次を小早川秀秋の陣に派して、小早川、脇坂、朽木の内応勢で今夜のうちにここを発ち、明十六日は佐和山を囲んでおくように命じさせたのだ。その軍監として、井伊直政は負傷の身を鞭打ってついて行ったものらしい。
「そうか。兵部が参ったか。よし、退って休め」
安藤直次が退ってゆくと、入れ違いに黒田長政がやって来た。黒田長政と家康の問答は久五郎成次には、安藤の時よりも更にわからぬ会話であった。
「秀元自身参向して戦勝を賀すべきところ……」
長政がいいかけると、家康はさえぎるようにうなずいた。
「父の輝元は大坂にある。それゆえ、父に和議を告げ、その後挨拶するが順序じゃ。それでよい」
あと二、三、短い言葉を交換しただけで長政も早々に引取った。
どうやら長政は、南宮山の毛利秀元と家康の間のあっせんに当っていたものらしい。
「久五郎、これで済んだぞ」
黒田長政が引取るとはじめて家康は鳥居成次をかえりみて具足だけを取らせた。
「総手で討取った首級の数は三万二千余りという。味方も四千近くは死んでいよう」
久五郎成次は、家康の述懐の意味を計りかねて「は……」とはいったが、あとはうかつに続け

得なかった。

「――どうじゃ。大勝利であろうが」

そういっているようでもあり、戦場のむごさをしみじみと詠嘆しているようにも聞えた。

「夜があけたらすぐにわしを起すよう」

「はッ」

「何れも妻子のある身……雨にうたせておいては不憫じゃ。早朝から戦場の仏を集めて塚を建て、その供養を、この寺の者どもによう頼んで行かねばならぬ」

久五郎成次はホッとした。うっかり「大勝利――」などと浮いた返事をしなくてよかった。

「南無阿弥陀仏……南無……」

夜具を着せかけると、家康は小さく唱名しながらやがて疲れた大きな寝息になった。

雨はまだ降っては止み、止んではははげしく軒をたたいている……

敗者の点睛

一

九月十六日の朝は、まだ雨があがりきっていなかった。

家康は瑞龍禅寺で眼覚めると、すぐに藤川台へ戻って、戦場の掃除を命じ、戦死者の塚を築かせ、正午近くになって佐和山へ向った。

佐和山城は彦根の東、琵琶湖をのぞむ丘の上にあり、すでに先着している小早川秀秋と脇坂、朽木、それに田中吉政など諸勢がこれを包囲している。
家康は佐和山の南、野波村に本陣を移してここにとどまった。
ここも粗末な小屋で、二間に四間ほどの藁葺きで入口には戸もなかった。入口の脇に窓と中格子があり、小屋のうちは半分は畳、半分は藁を敷き散らして、小屋の外の芝生に畳を三十枚ばかり並べてあった。そこへお目見得以上の旗下が入れ代り立ち代りやって来る。
ここには弓、鉄砲も飾らず、武器や旗指物を持つ者もいなかった。みな一里も離れた百姓家に宿を取らせたのだ。
したがって、総大将の家康だけが「厭離穢土・欣求浄土」の旆と一緒に野営する形になった。家康は戦に出る時、野営の道具は持たせなかった。それでお伽衆の全阿弥が、もし入用のこともあろうかと、一切合財を馬一頭の背につけて、秘かに従わせてあったのだが、それもまだ荷解きされていなかった。
むろん関ケ原の勝者にとって佐和山城の留守勢などはものの数ではない。その故もあったが、これが家康の戦場における見えないものへの慎みでもあった。
佐和山城には三成の父、隠岐守正継、兄の木工頭正澄、その子の右近朝成、三成の子の隼人正重家、妻の父の宇喜多下野守頼忠などが籠っている。が、その運命は知れきっていた。
家康は到着と同時に使者を遣わして降伏をすすめようとした。
ところが、大坂から援けに来ていた長谷川郡兵衛守知が、小早川秀秋の家老平岡頼勝を通じて裏切って来たことから事情は急転していった。

先ず大手口が敗れて、小早川勢が城内に侵入してしまったのだ。
そこで井伊直政は一存で城内に使者をやり、籠城の利害を説いた。城内からはすぐに三成の兄の正澄から返事があった。
「——われ等と、父の隠岐守、舅の宇喜多下野守の三人が城外に出でて切腹仕る。残る者どもは、ご助命下され」
直政はそれをすぐさま家康に取次いだ。
家康ははじめから攻める気はなかったので、
「——それでよかろう。村越茂助に城を受取らせよ」
そう命じたのが十八日の朝であった。
ところが、その決定がまだ全軍に知らされない間に、小早川勢の大手口侵入に遅れまいとして、田中吉政の一隊が、水の手口の門を破って侵入した。
木工頭正澄はこれを見て切歯した。計られたと思ったのだ。そして、村越茂助が駆けつけた時には、城はもはやいっぱいの火であった。正澄が、城内に火薬を撒きちらして放火したうえ、一族の妻子を引きつれて天守閣にのぼってしまったのだ。
焔につつまれた天守の上では、一族の自刃がはじまった。妻を刺し、子を刺して……遁げまどう婦女子は南方の崖をめざして羽虫のように身を投じる……それはもはや、どう手の下しようもない、地獄図絵であった……

二

後世の人々が、女郎堕——と名づけたほど、焔に追われて、南方の崖にとびおりた婦女子の数は多かった。

そして、当時の人々が「佐和山見物踊りの歌」の中で次のように歌いはやした、石田三成の居城も、一挙に灰燼に帰してしまった。

おれは都の者なれど
近江佐和山見物しよう
大手のかかりを眺むれば
金の御門に八重の堀
先ずは見事なかかりかよ
かかりかよ
御門入りてこの又かかりを眺むれば
八つ棟造りに七見角
裏の御門を出て眺むれば
裾は湖、やあ見事やあ見事
よい城よ、見事な城よ
堀ほりあげて関所をうえて

関所に花が咲きしならば
この堀々は花ざかり花ざかり

同じころに大垣城も水野勝成に攻められて、すでに陥落寸前の危機にあった。
したがって石田三成の虚空に描いた計画の一切は、おびただしい人命の犠牲と、醜い人間の打算の爪あとを残して消滅してしまったことになる……
が、この大悲劇の主人公石田三成は、関ケ原から何処へのがれ、何を考えていたのであろうか……？
十五日の夜、三成が伊吹山に逃げ込んだおりには、まだ従う者は二十人を超えていた。
すでに記したように十五日の夜の雨は、この敗戦の主従を間断なく打ちのめした。
ようやく止んだと思うと、又以前に数倍するはげしさで、用捨なく具足の奥の肌にせまる。従者の一人が、三成のためにどこかの百姓家から蓑笠を見つけて来て着けさせたが、そうしたもので凌げるほど安易な雨ではなかった。
十六日の夜の白みそめる頃まで、一行は山中を雨に向ってさまよい続けた。むろん正確に方角や道を知っての彷徨ではない。とにかく発見されまいとしての無目的にひとしい戦場離脱であった。
かつて朝鮮での戦では、戦場を離脱する者は、その郷国にある家族まで厳罰に処するであろうと高札を立ててまわった軍監の三成が、自分でその離脱者の位置におかれることになったのだ……
寒さと饑えと疲労と睡魔と……あらゆる経験をいちどになめさせられて、夜がほのぼのと明け

かけた頃には、義理にも見得にも、もう立ってはいられなかった。
「これから、何となさりまするので」
ついて来た小幡助六郎にたずねられたとき、三成は、
「訊くまでもないこと。大坂じゃ」
そう答えて、自分で自分がおかしくなった。すでに佐和山城は囲まれて一族妻子は生かされることはあるまい――そう知っているもう一人の三成が、佐和山へ行くといわせず、大坂へといわせたのだ。
大坂まで無事に行けるなどとはむろん思っていなかった。
「よし、ここでみな休むとしよう」
三成は歩けなくなったという代りに、松の古木の根方を見つけて腰をおろすと、途中で抜いて来た稲穂をとって無言でもみ殻をむき出した。
家康の禁じた稲穂からの生米が、ここでは三成の饑えを救うただ一つの食糧だったのだ……

三

しばらく三成は無言で生米を嚙み続けた。むろん三成だけではなく、従者たちもそれにならって真剣な表情で籾をむいている。
ふしぎなことに誰も、自分のむいた生米を三成に献じようとはしなかった。
人間の生命がギリギリの饑えの前では、どのように利己的になるものか、その限界をしめしている。

はじめはむろん、三成を守護しなければという律義な意志で来ている筈であったが、その意志を果すためには、先ず生きなければならなかったのだ……

三成は五勺近い生ごめを噛み終って、急に下腹部の冷えを覚えた。と、その頃になって、あちこちから生米を差出すものが出はじめた。

「どうぞ、これをお召上り下さるよう」

「ここにもござりまする」

三成はまたおかしさがこみ上げた。彼等は三成よりも手ぎわがよく、満腹とまではゆかずとももうそろそろ切実な饑餓感からは解放されかけたのに違いない。

（自分の生命が保証されると、みな善人に還るのだ……）

その感慨が、はじめて三成に理性らしいものを甦らせた。

（おれはいったい、これから何をしようというのか？）

いや、それよりも、いったい何を成し得るかという自問の方が先でなければならないことに気がついた。

どこかで誰かと一戦しようというのであれば、一人でも人数は多い方がよかった。しかし、人目にかからず、遁れるのが目的だとしたら、身軽になって四散した方がその目的に沿って来る。

「ここで別れよう」

三成がそういい出したのは、下腹部の冷えと、執拗な睡魔がぐいぐいおのれを締めつけだした頃であった。

雨脚は細くなり、山には霧が流れて、視野は殆んど利かなかった。それだけに、一人、二人

と、どこかに具足を捨てて装い直せば百姓にも樵夫にもなれそうだった。

「わしは大坂をめざす。大坂城には、毛利輝元が、秀頼君を擁しておわす……その前途をお見届け申すが三成の責任……さりながら、このように大ぜいでは人目について目的は達し難い。ここで別れて、志ある者はひそかに大坂へ集るよう……いや、来れぬ者も出来ようが、それは責めぬ」

いっているうちに、次第に三成は自分の行先がわかって来た。確に自分は、着けるか否かは別にして、大坂をめざさなければならないのだと……

「さあ、ご主君があぁ仰せられる。みなみな相わかったな」

そういったのは渡辺勘平だった。彼は、いかにも自分は別格で、主君の傍は離れないのだという口吻だった。

「勘平、お許もじゃぞ。わしは一人でよい。いや一人でなければ却って人目につき易い」

「そ……そんなことはなりませぬ」

「そうじゃ。殿を一人にして、何でわれ等が落ち得ましょう。両三人選りすぐってお供とし、他はひとまず……」

野平三郎が、得たりとばかりに口を出すと、

「ならぬ！」

三成は強く叱った。

「わしは一人がよいのじゃ。供はならぬぞ」

きっぱりいいきると、忘れかけていた闘志が、はじめてむくむくと胸の奥で活き返った。

一人になって考えたい……そんな小さな自我ではなかった。事実、関ケ原に出て来るときの三成は、すでに勝敗は度外視していた。若し失敗や後悔があったとすれば、それは、それ以前の三成であって、その後の三成は、もっと大きな「永遠——」をめざして挑戦する気になっていた。

敵は家康でもなければ、豊臣恩顧の七将でもなかった。いわんや小早川秀秋や毛利秀元などではない。この世のありように服従出来ない人間の、ギリギリまでにする反抗の姿を、自分でハッキリ確めておきたかったのだ……

その意味では、大谷吉継はさすがに立派であったと思う。彼は彼の器にしたがって、戦場での死を選んだ。

四

しかし三成は戦場での死を欲しなかった。

戦場で死んだのでは、彼は常識の中の武将でしかあり得ない。彼はもっとどんらんに、常識から喰み出して来る人間の、素ッ裸の姿と世界を見聞してゆきたかった。

常識からする批判や非難はもう取るに足りない問題で、群山を圧してそびえる富士の高さから、白雪を身につけた冷く澄んだ心境で下界を見おろす気であった。

そうなれば、当然戦場で討死などとは低劣な自己満足にすぎなくなる。戦はまだ終ったのではない。まず大坂をめざすのも戦ならば、そこで捕えられるのも、首を斬られるのも、梟首されるのも、みな闘争の続きに思えた。

その途中で「石田三成——」という男が、果して相手に屈服するや否や？

（もしこの男を屈服させるものがあるとすればそれは何であろうか？）
それ等を冷厳に見てゆくのが、三成という男を見まもる、もう一人の三成の希いであり意地であった。
三成はその性根が、腹中へ納まった生米とともに、大きく眼を開いて瞬きだしたのを感じた。
「ただ供はならぬとだけでは納得出来ぬ……と、いう者があらば申出てみよ。その理由を聞かせてやろう」
三成のいい方があまりに強かったので、誰もすぐには口を開けなかった。
「よいか。わしはこの山中へ難を避けた。それは屈服を意味するものではない。生きてある限り戦いぬくという誓いのためじゃ。さりながら……敵もまた手を拱いては居らぬ。このあたりの地理にいちばんくわしく、わしの顔も知り尽している田兵（田中兵部大輔吉政の略称、三成は吉政をこう呼んだ）が、草の根をわけても探し出せと命じられ、もう方々へ高札を立てている頃じゃ」
三成はそこでフフンとみんなにわかるように笑っていった。
「その高札には、金子百枚位の褒美はかかっているであろう。よいか。これが戦場ならばとにかく、わが首を狙って集まる百姓どもを、みなと一緒に在れば斬らねばなるまい。いや、その方たちが斬らずにはおけぬ筈……無益なことじゃ。それよりも一人であれば、それが治部少とは気がつかず、それだけ大坂行きの難儀は減ろう。相わかったか。わかった者から、順に一人宛、ここからそっと消えてゆけ。もはや物はいわぬぞ」
人々はそっと顔を見合して頷き合った。いい出したらあとへ退かぬ三成……
「では、お名残惜しゅうござりまするが……」

最初に口を開いて立った小幡助六郎信世の顔は、雨と涙でいっぱいだった。

五

小幡助六郎が立去ると、続いてポツリ、ポツリと立つ者が出はじめた。
みな無量の感慨をこめた短い挨拶を残して、濡れた山路を消えてゆく。
三成はその一人一人にやさしい微笑で頷き返してやれるようになっていた。
それだけ彼の意志はおだやかな余裕と溶け合ってゆきつつあったのだ。
「生命もあらば、又お目に……」
「呉々も訴人をご警戒なさるよう……」
「大坂で、必ずお目にかかりまする」
挨拶の言葉はそれぞれ違っていたが、全身に打ちしおれた絶望を滲ませている点では同じであった。
三成はふと自分に問いかけながら、あたりを見た。
（ひとりになって淋しくないか……？）
それに応えるように、頬へ微笑がうかんで来た。淋しくないばかりでなく、ようやく一人になれてホッとしている。
（三成の歩もうとする道は、はじめから他人を誘い、他人に強いてはならない道だった……）
それを誰よりもよく知っていながら、他人を語らい、集団と集団の争いに持込んだ自分の立場の皮肉さがかえりみられた。

雨は止んだ。光りはまだどこからも射してはいない。しかし霧が薄らいだ証拠に、杉の葉末にたまった雨滴が、青くチカチカ光っている。

三成は立上って、はじめてゴロゴロと鳴っている腹部の異常さに気がついた。冷えと生米のため、どうやら腹をこわしたものらしい。

三成は思わず声をたてて笑った。

徳川家康を相手にし、天下分け目の戦をやってのけた西軍の総帥がたった一人になったとたんに腹をこわす……いや、その総帥が幼年時代から仰いで育った伊吹山中の方々に、裸の尻をむき出して下痢の糞便をひり散らして歩いてゆく……その姿を想像すると、たまらなくおかしさがこみあげた。

「申上げます」

もう誰もいないと思っていたのに、いきなり三成の行手へ出て来た者がある。

「誰だ」

「はい。われ等だけは何としても立去れませぬ。われ等三人だけは……まげて、お供をお許し下さりまするよう」

三成は唇をゆがめて人影を見ていった。

渡辺勘平、野平三郎、塩野清介の三人だった。彼等はいったん西へ去りかけて、そこで又相談し直して戻って来たのに違いない。

常識からいえば、彼等こそ主想いの情誼に厚い美談の主である筈だった。

しかし三成は笑顔の代りに、ぐっと大きく眉根を寄せて睨み返した。

「理由はさっき申し聞かせた筈、大坂で再会しようぞ」
「と、仰せられましても、この山中へただ一人ご主君を置去ったとあっては、われ等の一分が相立ちませぬ」
「ならば、三成を斬ってゆく気か」
「これは……何と仰せられまするやら……!?」
「斬る気はない。フン、それならば、この三成が下痢の糞ひる姿を見て、みなで笑いたいと申すのか。たわけ者どもめッ」
三成は息もつかせず叱りつづけた。

六

三成のはげしい叱声は、三人にとって心外きわまるものであった。
戦場の野糞などは、不利な戦になれば誰も彼もがしてのけることであった。
(三成はそれに羞恥を覚えてこだわっている……)
そう解釈すると、それに続くものは、文官育ちでほんとうの野戦を知らないらしいということだった。或いは更に、勝気な見得が加わって……という解釈になったのかも知れない。
三人は顔を見合わせ、呆れたように瞬き合った。
「わしはな、一人になりたいと申した筈じゃ。その方が、目的に忠実な所以も説いて聞かせた筈じゃ」
塩野清介は軽く舌打ちして、

「それではどのようにお願い致しましても……」
「大坂で会おう」
「やむを得ませぬ。ご大切に」
渡辺勘平は、まだあきらめ切れない様子で、
「たとえどのような事がござりましょうとも、ご主君を、笑おうなどと思う心は……」
「大坂で会おうと、申しているのじゃ」
「やむを得ませぬ。それならば、ここでお別れ申しましょう」
野平三郎が勘平をさえぎった。
その頃から三成はキリキリと腹の痛みを覚えだし、あわてて三人の間を通りぬけていた。
うしろを振り返ってやりたい気もした。手を振って別れるのが、彼等の律義に答えてやる自然な姿のようにも思えた。
しかし、それよりも、腹の痛みが便意に変りそうな気がして、その暇がおしまれた。
「これはおかしな伏兵があったわい……」
笑いながら足を早めて、熊笹の繁みに入り、両足で笹の根を踏みわけて、うしろを見たときにはもう三人の姿は視野にはなかった。
「ハハ……許せよ三人とも。人間というはまことに厄介なものよのう」
三成はあわてて具足をとって、その場にしゃがみ込むと、大きな声で自分自身に話しかけた。
「喰っては出し、喰っては出しか……しかも喰わねばならず、出さねばならぬ……と、思うていたら、これはしぶるばかりでよう出ぬわい……ハハ……まだまだ人生はわしの知らぬことばか

り……面白い！　下痢よ、下痢よ、思うさま石田三成をからこうてやるがよいぞや」

もう聞いているのは山の精と流れる霧だけに違いない。

その妙な安堵が、やがて時刻を計らせ、方角を考えさせた。

喰わねばならぬ生き身では、とにかくこの山からは出なければならなかった。

ここには生米すらもない。

出るとすれば、山続きに近江をめざすより他になく、近江はまた自分を探しているであろう田中吉政の育った土地でもあった。

「面白いことになったぞ……」

熊笹の繁みを離れたときには、三成のめざす先はほぼ決まった。近江の伊香郡に出て、高野村から古橋村へ入ってゆく。

古橋村の法華寺三珠院には、三成の幼時の手習いの師匠であった善説が住んでいる。

その善説が、田中吉政に味方するか、それとも三成をかぼうて呉れるか、今となっては、それも興味深い一つの未知の世界であった。

（よし、善説を口説いてやろう……）

足を早めると、また意地わるく便意であった。

七

山の中の流浪は三日にわたった。まず浅井郡の草野谷に出て、大谷山に身をかくした。

このあたりの村々には、三成の予期したとおり、田中吉政の高札がこれ見よがしに立ってい

る。おそらく従者があったらめざす伊香郡までは辿り着けなかったに違いない。

　　　急度申遣こと
一、石田治部、備前宰相（宇喜多秀家）、島津両三人捕え来るにおいては、御引物となし、永代無役下さるべき旨御諚に候こと。
一、右両三人捕え候こと成らざるに於いては、討ち果すべく、当座の引物として、金子百枚下さるべき旨仰出され候こと。
一、その谷中、差送り候においては、路次有ように申上ぐべく候。隠すにおいては、その者のことは申すに及ばず、その一類、一在所、曲事に仰せつけらるべく候こと。
右の通りに候間、追々御注進申上ぐべく候也
　九月十七日　　　　　　　　　　　田中兵部大輔吉政（花押）

　高札で見るとどうやらまだ捕われないのは島津義弘と秀家と三成の三人らしく、小西行長や、安国寺恵瓊はすでに敵の手中におちたものと想像された。
三成が単身伊香郡に入り、古橋村の法華寺にたどり着いたのは十八日の夜であった。
この日佐和山城では、父の隠岐守はじめ、一族すべてが屠腹して、火中に果てたことはすでに述べたが、むろんまだ三成はそれを知らない。
　久しぶりに晴れた空では星が瞬き、山門を入ると雉子の群が飛び立った。
「誰じゃ」

すでに予期していたらしく、雉子の羽音で庫裡から顔を出したのは方丈の善説だった。
三成はつかつかと近づいた……いや、足どり軽く近づいたつもりであったが、善説と視線の合った瞬間に、いきなりその足許に躓き倒れて、すぐには声も出なかった。
善説の表情に、いいようもない苦渋のいろが浮かんだ。
「これは、やはり……」
「三成じゃ。善説……なつかしゅう……」
善説は闇をすかして、三成をかばうと、物もいわずに庫裡の土間へ抱え込んだ。
「ご存じで御座りまするか。ここから目と鼻の井ノ口村に、兵部大輔が出張られてござりまする」
「なに、井ノ口村に!?」
「はい。木ノ本から長浜の間は蟻の通る隙もないほどきびしい固め……いいや、木ノ本から八里先の敦賀まで、通行人は一人一人、みな調べられてある由にござりまする」
うしろ手で入口の戸を押えて、善説は、まだ、あがれとも、匿まうともいわなかった。
（この寺では隠しきれまい……）
その困惑が体中に滲み出ている。
「善説、とにかく粥を恵んでくれぬか。腹をこわしてのう……困っているのじゃ」
三成は笑顔を見せたが、まだ善説は別のことを考えているようだった。
「お殿さまはご存知でござりましょうなあ。今日佐和山では、ご尊父さまはじめ、奥方さまも若さまも、みなご自害してお果てなされたことを……」
そういってはじめて気がついたようにあわてて三成を囲炉裏のそばに抱え入れた。

八

「そうか、今日、城が落ちたのか……」
三成は囲炉裏のそばで、再びキリキリと痛み出した腹をおさえて呟いた。
「ふしぎなものだ。見て居らぬ故であろう。自分の事のようには思えぬ」
それは半ば真実であり、半ばは嘘であった。曾つて七将に追われて懐中に飛び込んだ三成をすら家康は許したのだ。兄の木工頭正澄や、その伜の右近太夫には詰腹を切らせても、婦女子はあるいは助けるかも知れぬ……そんな期待が三成の胸のどこかにひそんでいた。
「そうか。みな、殺されてあったのか……」
「殺されたのではござりませぬ。天守にお籠りなされ、火をかけて、立派にご自害なされたのでござりまする」
「立派にご自害……」
三成は、善説の言葉にギクリとした。善説は自分を憎んでいる。いや、父も兄も子も妻も自害したのに、汚れきったみじめな蓑笠姿で、逃げまわっている三成を感情の上からも、道義の上からも非難しているのに違いない。
三成は低く笑った。
「そうか。それでこそ三成が肉親、よくやった……しかし、わしはまだまだ死なぬぞ善説」
善説は答える代りに、自分の手で粥鍋を自在にかけ、黙って飯に湯をそそいでいる。
「そうじゃ。下痢どめの薬はないか。永く迷惑はかけぬ、とにかく急いで大坂をめざさねばなら

ぬ身じゃ」

善説はこくりとうなずいて薬をとりに立った。高野山の「ダラニ」らしい。それを黙って三成の前に差し出すと、改めて大きく嘆息して、その後は殆んど物をいわなかった。

飯からの粥はすぐに煮えた。それに焼味噌の冷えたのをそえて出されると、三成の腹はグウグウ鳴った。

三成はその鳴り続ける腹がそのまま善説の非難の声に思えた。

「おお、これで腹もあたたまろう。かたじけない」

(若しここで村人たちに発見されたらどうしようか?)

匿もうた者は一郷同罪、善説はいまその事しか考えられないのに違いない。

じっと何かに耳を澄す形で居すくんでいる善説に、

「誰も姿を見せぬようだの。寺男も小僧も居らなんだのか」

「はい、みな使いに出しておきました」

「わしが来そうな気がしたのじゃな」

「はい……みなの眼にとまっては、もはや終りと存じましたゆえ」

そういってから善説は急に両手を合して三成をおがんだ。

「人情知らずと思うて下さりまするな。ここは寺ゆえ、誰がやって来ぬものでもござりませぬ」

「食し終ったら出てゆけと申すのか」

「いいえ、この村の与次郎太夫を呼んで参りまするほどに、あれの家に見張りのとけるまで……」

「百姓与次郎の許へのう」

「はい……与次郎太夫だけはつね日頃からお殿さまのご恩を口に致して居りましたゆえ、万一のときには匿まうかと問いましたるところ……」
「匿まうと申して居ったか」
「はい。このあたりでは、彼をおいてはほかに人はござりませぬ」
三成はそっと箸をおいた。
「よし、与次郎を呼んで来てくれ」

九

善説和尚が入口にしまりをしたまま出てゆくと、三成は、ふと眼を瞑って屋の根をわたる風音に耳を澄した。
久しぶりに粥にありつき、腹の虫はまだグウグウ鳴っている。然し、ここで二椀以上の摂取は慎しむべきだと自戒した。
「ほう、風はもう賤ケ岳から吹きおろしているようじゃ」
考えてみると、この北近江の地は、三成の生涯にさまざまな夢と苦節を恵んで見せた。
この地に産まれた三成は、この地で秀吉に見出され、この地で出世の端緒をつかんだ。
賤ケ岳を血で彩った秀吉と柴田勝家の一戦が、秀吉に天下掌握の機会を与え、同時に三成自身にもまばゆいほどの幸運へ道をつけて呉れたのだ……
ところが、二十余年の後、再びこの地は彼をさし招いた。荒涼とした冬の近さを思わす賤ケ岳の風音を、彼の脳裏に甦らせようとして……

秀吉は「——浪花のことは夢の又夢」と辞世をのこしてこの世を去ったが、三成はいったいこの風音を何と聞き、何と観じてゆけばよいのか……？

三成は又ひとりで低く笑った。

もはや、父もなければ妻子もない。長い人生の生命の繫がりの中で、自分だけがブツリと一節断ち残されて執拗な下痢と対面している……

（ここで善説に、刀を貸して呉れといったら、善説はどんなに喜んで呉れることか……）

たぶん、殿さまは、あっぱれなお方、村人の難儀を救おうとして、わざわざここまで落ちさせられておわしながら、見事にお腹を召されました……そう吹聴して、ひそかに墓も建てて呉れよう。

（ところが三成はそうはせぬ……）

そんな安易な虚偽が三成に許されてよいものか。三成は闘うのだ。生命のある限り、世俗を無視した真実のおのれと対決してゆくのだ……

「もしお殿さま……変ったことはござりませぬか」

ホトホトと入口の戸が外から鳴った。善説が百姓の与次郎太夫を伴って戻って来たのに違いない。三成は這うようにして土間へおり、戸を開けた。

「あ、お殿さま……」

与次郎は手に一枚の布子をさげて呆然と立ち尽した。

見すぼらしい身なりは善説に聞かされて来たのに違いない。それなればこそ着替えも用意して来ているのだ……

「急いで与次郎どの」

「は……はい」
二人で三成を助け起こして、また入口は厳重に締め切った。
「お殿さま、おなつかしゅうござりまする」
与次郎太夫は、百姓の中では人望はあったが庄屋ではない。それゆえ、万一の時の事も考えて善説が白羽の矢を立てていたものであろう。
「与次郎、わしはむごい男じゃ、恩あらば返せというぞ」
「もったいない。私めは、お殿さまのご難儀をこのまま見すごせるような者ではござりませぬ。わが家の裏手は山続き……その山の中に誰も知らぬ岩屋がござりまする。はい、盗賊や戦のおりに、食べものを隠す岩屋で……どうぞ、急いでそれへお移りを」
単純な与次郎太夫は、はじめから泣く気で来ているようであった。

十

善説は与次郎太夫の泣いてゆくのを、黙ってじっと見詰めている。その眼のいろは、危惧と不安におののいていた。
（与次郎どの、大丈夫であろうな？）
口に出せる事だったら、もう一度ハッキリ念を押したいところなのだろう。与次郎の口から善説に頼まれたなどと洩れるようなことがあったら、善説ばかりか、村人たちもそのままには済まぬのだ……
三成は与次郎の手からふくれた布子を受け取ると、ムッとした表情のまま着換えていった。

「――かたじけない」ということも知っていたし、一緒に涙も出そうであった。しかし、今の三成は、敢えてそれをしなかった。善説と与次郎太夫の心の動きを正確に見ておくことに専念したかった。
　善説の体に潜む利己と厚意の比率は？
　与次郎太夫の理性と感傷の比率は……？
　そうした人間の姿を、どこまでも冷厳に見詰めてゆくのが、これからの三成の人生の点睛であった。
(並みの人間には見られぬ世界だ……)
例えば敵の手に落ちて、首をはねられるとしても、斬る者と斬られる者の、恐怖や嫌悪の微妙なかげりまで、しっかりと胸に畳み込んでゆきたいのだ。
「よし、支度は出来た。参ろうぞ」
「は……はい。では、方丈さまに裏口をそっと開けて頂きまするゆえ……」
「その岩屋と申すは、そちの家とは離れて居るのか」
「三、四丁ほどの距離でござりまするが、他人は通らぬわが家の山畑にござりまする」
「すると、そこまでその方が、自身で食事を運ぶ気か」
「はい……家族の者にも知らしとうござりませぬ。万一のおりには私一人で……」
「どうじゃ、怖ろしくはないか？」
　いったあとで三成はチラリと怖えきっている善説の方を見やっていい添えた。
「万一の時にも、方丈の名は出してはならぬぞ。寺を訪れようとするわしの姿を見つけて、こな

たの一存で連れ込んだと申せ。いや、わしに脅迫されて、やむなく案内したというてもよい」
「もったいない！　寺の名は出しまするが脅迫されたなどとは口を裂かれましても申しませぬ。さ、ご案内を」
三成の言葉で、善説はホッと大きくため息して、あわててまた腹薬を持って先に立った。
「ご用心のために、これをどうぞ。では、呉々もおいといなされて」
「ハハ……世話になった。善説、わしが無事に大坂城へ入ったら、その時にはこの寺に、七堂伽藍を寄進しようぞ」
「ありがとう存じまする」
寺の裏口は、そのまま山に続いている。
戸を開くと、風音がぐっと冷たく、星の光りが荒んだキラメキを投げてくる。
(やはり賤ヶ岳の近く……)
間もなくこの地方を訪れる冬の香がすでに身近に歩み寄っている感じであった。
「ではご大切に」
「体をいとうて長生き致せよ」
そうはいったが三成はもう善説を振り返ろうとはしなかった。
闇の中で小さく動く、与次郎太夫の踵と足半の動きに全神経を集めて歩いた。

十一

岩屋へたどりつくまでに、三成は二度路傍へしゃがんで用を達した。もう以前ほど腹はしぶり

はしなかったが、足の疲れと便意とが断ちがたいものになって、暫く歩くと休まずにいられなかったのだ……

そのたびに与次郎太夫はすこし離れてじっとあたりを警戒していた。

「野良犬でも出て来まして、吠え立てまするると困りまする」

「与次郎太夫」

「は……はい」

「そなた、悔いては居らぬか。これから探索はいっそう厳しくなると思うが」

「何の悔いなど致しましょう。私はお殿さまには……」

「大恩受けたと、真実、いまでも思うて居るか」

「は……はいッ」

「いったいわしに何の恩を受けたのじゃ」

「これはしたり、私と隣郷の太十郎が柴山の境界で訴訟を致しましたおり、お殿さまはわざわざ私のために太十をこらしめて下さりました」

「それが大恩か?」

「はい。あのおりの正しいお裁きがなければ、わが家は、山林のすべてを失うて五反百姓になり下っていたのでござりまする」

「そうか。正しい裁きが、それほどの大きな恩なのか……」

話しながら山裾をめぐって岩屋の前にたどり着いたとき、与次郎太夫は、何を見たのか、

「シーッ」

と、三成をその場にしゃがませ、急いで二、三十歩桐畠の中に駈け込んだ。
「どうしたのだ。誰か居ったのか？」
「いいえ、ゴソリと音が致しましたが、何も見えませぬ」
「このあたりへは、他人は入らぬのだと申したな」
「は……はい」
「すると、いまそなたの家人は？」
「はい。娘に婿養子を貰いまして、それに孫が二人、都合六人家内にござりまする」
いいながら与次郎太夫はもう一度背のびをしてあたりをうかがい、それから岩屋の入口に下げたむしろをそっとめくった。
「灯りが洩れては一大事でござりまするゆえ、このままご辛抱下さりませ。ここに藁が厚く敷いてござりまする。それから、食事は必ず私が運んで参りまするゆえ、決して他の者をお呼び下さりませぬよう」
「わかったわかった。これはよいしとねじゃ。地獄で仏に出会うとはこの事であろう。わしもすぐに休む。こなたも早よう戻って家人に怪しまれぬよう心するがよい」
「では、お殿さま……」
「造作をかけた。忘れはおかぬぞ」
どうやら岩屋の内は、中に長く掘りひろげて、八畳ほどはあるらしい。その左片側に抛り出した態にして、藁がいっぱい敷き散らされている。
与次郎が出てゆくと、三成は又低い声で笑いだした。もはや彼は悲劇の中の人ではなくて、完

全にそれを見ている傍観者になっている。
「三成よ。何とこれは面白いではないか……」
自問自答しだしたときに、今度はたしかに掛けむしろの近くでザラザラと土の崩れる音であった。
「誰じゃ。与次郎太夫、まだ居ったのか?」

十二

三成の声に返事はなかった。
(空耳ではない……)
立って外をのぞこうとして身を起したときに外からすーと冷い風が中に通った。入口の下げむしろを、誰かがあけて入って来たのだ。
「誰だ」
三成は、自分でも意外なほど静かな声が出た。
「は……はい。与次郎太夫が家の者で」
「与次郎が家の者……というと、伜どもか」
「はい。婿にござりまする」
「その方、ここへ入るのを見ていたのか」
「実は……寺から、後をつけて参りました」
「何の用じゃ」

「お殿さまにお願いがあって参りました。その前に、これをお受取り願いとう存じまする」
相手は手さぐりで寄って来るのだが、不思議に殺気は感じられない。
三成は藁の上に上半身を起したままで、
「ここじゃ。ここに居るぞ」
「あ、これがお手で、……冷いお手でござりまする。さ、これをお受取り下されませ」
まっ先に渡されたのは柔い感触からまだ温い握り飯の包みだとすぐにわかった。
「私が、実家へ参って握らせて参りました。キナ粉がつけてござりまする。それをまず一つお召上りのうえ、あとはしっかりとお腰につけて頂きとうござりまする」
「わかった。こなた、子供は二人と申したな」
「はい……それから、これをお受取り願いとう存じまする」
「これは何だ。銭ではないか」
「はい。万一のおりには、お役にも立とうかと……どうぞ。お受取り下さりませ」
「受取れとあれば、受取らぬものでもないが……こなた、これを受取ってわしにここを出て行けと申すのか」
「は……はい。何とぞそう願わしゅう存じまする。と、申しまするのは、婿の口から申すもおかしな事ながら、私の舅は、無類の善人にござりまする」
「それはようわかっているが……」
「私のようなものでも、神仏が恵んで呉れたよい婿じゃと、それはそれは大切にして呉れます。それを想うと、あの善人の舅御を、大それた罪人に致しとうないのでござりまする」

三成はふっと黙った。相手の声が泣き声に変っている。嘘を言っているのではなく、これはこれで必死に何か思い詰めてのことらしかった。
「お殿さま、人の善い舅御は、お殿さまを、ここにこうして匿しおわせると思うて居ります。この岩屋を誰も村人が知らぬものと信じこんで……はい、すでに私が知っている……庄屋さまも知っている……いいえ、めいめい食糧の隠し場所を持っている者は、どこかにこのような岩屋があると、みな知っているのでござりまする」
「………」
「それに、今夜も庄屋さまからお布令がござりました。誰も匿もうて居るまいが、明日は念のためお役人を連れて各自の家を見廻るぞと……はい、これは決して村人をいじめようとての言葉ではござりませぬ。もし匿もうてあったら、明日は見廻るゆえ他へ移すか、お落し申すかするがよい。さもないと村中が罰される……それを言外に匂わせた、やさしいお計いなのでござりまする」
そう言うと、人影はそのまま三成の前に坐って、またおろおろと泣くのがわかった。

十三

三成は黙っていた。相手のいうことを聞くだけ聞いてみたかった。この一人の百姓が何を考え、何をしようとしているのか？　それは充分に、いまの三成の生甲斐だった。
「それで、これは大事になったと……このままでは舅御も私の妻子も……いいえ、村中の難儀。それでお殿さまが助かるのならばとにかく、お殿さまを捕えさせたうえでは、村中の難儀も水の泡……お殿さま、お願いでござりまする！　どうぞ夜の明けぬうち、私と二人でここを逃げて下

さりませ。この通りでござりまする」
「なに、その方と一緒に逃げる……？　して、その方はわしを何処へ連れてゆく気じゃ」
「はい。舟で湖へ漕ぎ出すのでござりまする」
「こなたが、わしを舟に乗せてか？」
「はい。誰にも見つからず浜へ着きましたら、柴舟の底にかくしてお渡し申しまする」
「浜まで、誰にも見つからなんだらのう」
「は……はい」
「もし、見つけられたら何とする気じゃ」
「そのおりには、村の衆は誰も知らぬこと……はい。寺の方丈さまも舅御も……知っているのは私一人として、おあきらめ願いとうござりまする」
三成はまた暫く言葉を切って、相手の考え方を味わい直した。
「こなた、舅を助けたいのか」
「は……はい。舅も妻子も、助けとうござりまする」
「念のために訊くのじゃが、これはこなた一人の知恵ではないと思うがどうじゃ」
いってしまって三成は、少し皮肉に過ぎたかな……と小首をかしげた。
どうやら相手はギクリとしたらしい。
「どうじゃ。こなたは誰ぞに相談したであろう。舅がここへ連れ込むと知って……」
「は……はい。実は、致しましてござりまする」
「誰に相談してみたのじゃ」

「他に何処がございましょう。庄屋さまでございまする」
「ふーむ。庄屋が……すると、庄屋がいまのように浜へ連れ出せと申したのじゃな」
「それより他に手だてはあるまいと……」
「庄屋の申す通り、舟を浜から漕ぎ出しても、無事に対岸へ渡れるものではない」
「は……!?　何とおっしゃりまする」
「まずくゆくと、わしは湖上で敵の舟に攻められて捕われ、こなたはその場で斬られよう。さすればこの村はお構いなし……そこまでこなたは考えたか。庄屋はむろん考えてのことであろうが……」
　すると相手は藁を鳴らしてにじり出た。
「それは違いまする！　庄屋さまはそのようなお方ではない。私の舅以上に殿さまのご恩を思うて、苦心なされておられまする。湖の上で、お殿さまを敵に渡そうなどと……そんなことを考えるお人ではございませぬ」
「すると庄屋もわれ等に恩を感じているというのか」
「はい……この村で、お殿さまのご恩を思わぬ者など、一人もございませぬ」
「なぜ、三成はそのようにみなから慕われるぞ」
「それは申すまでもない。お殿さまほどご仁政を施されたお方は、未だ無かったからでございまする」
　三成はハッとして胸を押えた。それほど相手の声は真剣なひびきを持っていたのだ……

十四

（三成ほど仁政を施したものはない……）
　果してそうであったろうか？
　三成は闇の底で、次第に相手が見えだした。姿や形だけではなかった。内に流れる善良な百姓の血の息づきまでが見える気がした。
　三成はかつて百姓をいじめようと考えたことは無かった。しかし、これほど仁政を施したお方は無い……などと慕われるほどに百姓を愛して来ていたであろうか。
　三成はそっと首を振って嘆息した。
　何かひどくとまどった感じであった。面映ゆくもあり、
（百姓とは又、何というういじらしいものであったろうか……）
　そんな感慨も無くはなかった。
「お殿さま、お願いでござりまする。何とぞ……庄屋さまと私とをお信じなされて下さりませ。私は舟にたどり着いたら柴の下にお殿さまを隠して、生命のある限り漕ぎまする。はい……私は柴舟ならば、誰にも負けずに漕げるのでござりまする」
　聞いているうちに、三成はポトリと膝に涙をおとしてハッとなった。泣いていると、自分では気付いていなかったのに、ひとりでに涙が瞼をあふれていたのだ……
「すると、こなたは、村のため、舅のため……いや、妻子を救うために、生命を捨てる気になったか」

「お殿さま、そんな不吉なことはいわぬものでございまする。舟は無事に、向う岸へ着くものと思うで漕ぎとうございまする」
「それは、そうであろうなあ」
「そして、私はそのまま柴をおろして帰って来る。庄屋さまも舅も妻子も何も知らぬ……さすれば、それで、四方八方みな無事ではございませぬか」
「そうなれば、確にそなたの申すとおりじゃ」
三成はそう答えると、そっと相手の手を探した。
昂奮しているせいであろう。その手は節くれ立ってひどく固いが、しかし温い手であった。
「与次郎が婿どの……こなた、舅におとらぬ善人じゃ」
「ありがとう存じまする」
「わしは……石田治部少輔三成は……そなたに比べて何と恥しい生涯を送って来たことか。わしは、こなたにない智恵にたよって、こなたのような律義な温さを探りあてずに生きて来た……有難う、これでわしは、わしに足らなんだ、もう一つの大きなものを身につけたぞ」
「では、お出で下されまするか」
「おお行かいでか」
「ありがとう存じまする。ありがとう……この通りでございまする」
「したが、行先は浜ではないぞ」
「えっ!? ではあの山へでも……」
三成は相手の手を執ったまま、明るく笑った。

「庄屋のもとへ連れて参れ」
「そ……そ……それでは話が違いまする……」
「そうでは無い。そなたが、わしを捕えて庄屋に渡す……庄屋は田兵の居る井ノ口へ訴え出る。それでよいのじゃ。わかったの婿どの」
一瞬相手は、狂ったように手を引いて、
「それはなりませぬ！　そのようなことはなりませぬ」
喰いつくような声で身もだえした。
「そ……そ……それでは、わしが離縁になりまする！」

十五

「聞きわけよ婿どの」
三成も声をはげました。
「これが、こなたの真情に答え得るたった一つの三成が好意なのじゃ」
「じゃと申して、舅どのの匿もうたお殿さまを、伜のわしが訴え出る……そんなことが、出来るものではござりませぬ」
「では、三成はこのままここを動かぬぞ」
「それは……困りまする。それでは……明日になれば、庄屋さまが、役人と一緒にこの岩屋へも……」
「さ、それならば伴うたがよい。伴えば褒美となり、捨ておけば発見されて、こなたの一家ばか

りか、村中の難儀になるぞ」
「それゆえ舟でと申上げたのでござりまする！」
「それは成らぬ！」
三成はもう一度低く叱った。
「その方は戦を知らぬ。田中兵部大輔が井ノ口まで参っているということは、浜手にいっぱい舟の用意があるということじゃ。仮りにこなたがその眼をかすめて漕ぎ出すことに成功したとせよ。竹生島をめぐらぬうちに、それ等の兵船に囲まれて、わしもこなたも捕えられよう。わしはよい。が、こなたはそのため拷問にかけられようぞ」
「でも……そ……そ……それは、いや、そうなればわしとて覚悟を決めまする」
「そして、若しも舅のこと、庄屋のこと、方丈のことなどみな嗅ぎつけられたら何とするのじゃ。よいか、三成を、こなたの真心に応えさせて呉れ。このように手厳しい警戒が、ここまで及んでいようとは思わず、やって来たのが三成の不覚であった……」
「では、このようにお願い申しても……」
「褒美にせよ。村の難儀にはして呉れるな。三成は喜んで……自身に引導を渡そうとしているのじゃ」
相手は、じっと闇の底で動かなくなっていった。三成の言葉と心が通じかけたものらしい。
褒美か？
それとも村中の難儀か？
三成は急に全身が軽くなった。

（もう生も死もない筈――）

しかし目的はいささかも変える要はなかった。戦場を脱出して、ここまで来たのは、ただ大坂に近づくため……そして、いまは、その大坂行きを、捕われて行くと決定すればそれでよかったのだ。

それでも充分に死までの観察は続け得られる。それに人目を忍ぶ旅路の経験は、もうこのあたりで充分だった。

「最後にこなたに出会うた。三成の人眼を避けての旅は、豊かな花をつけたぞ」

しかし、その述懐は相手には通じなかった。

不意に相手は顔を蔽って泣きだした。

「かたじけない。三成のために流して呉れる涙と見た。いよいよ迷いの雲は晴れて、大空を仰いだような清々しさじゃ。こなたが庄屋を呼んで来てもよい。そして、ここで庄屋に引渡してもよい。わしは急に田兵に会いたくなったわ……田兵と言うても、そなたにはわからぬか。田中兵部大輔の愛称じゃ。昔からの親しい友……その友が敵味方にわかれて、探しあぐんだ三成を捕える。顔を見合せたら何というか……ハハ……楽しみが増えた気がする。さ、どちらとも心を決して呉れたがよいぞ」

しかし、まだ与次郎太夫の婿は動こうとはしなかった。

虜囚の駕籠

一

三成の就縛が報じられたとき、家康は大津へ来ていた。
「――去る九月二十一日、われ等家来、田中伝左衛門長吉、江州伊香郡古橋村において、逃亡中の石田治部少輔三成を捕縛致し、同郡井ノ口村にあるわが陣屋まで引立てました。治部少輔は逃亡中に生米を食し下痢甚だしく、歩行困難の様子なるも、一両日中に差立て、御手許に到着の日時は二十五日頃に相成ろうかと存じまする」
田中兵部大輔吉政からの知らせを、本多上野介正純が取次ぐと、
「――到着したらば、作法に従って扱うよう」
家康は、ただそういっただけで、南宮山から逃走していったん居城の水口城へ帰った長束正家父子の始末を、池田長吉と亀井茲矩に命じていた。
このときすでに小西行長と安国寺恵瓊は、それぞれ捕えられて大津の矢倉に幽閉されていた。
小西行長は、三成同様いったん伊吹山に逃げこんだのだが、逃れがたいことを知って同山の東山麓、糟賀部村の庄屋の許へ名乗り出たものらしい。
庄屋の知らせで竹中丹後守重門の家老がこれを受けとり、草津まで連行して来て家康の家臣、村越茂助に引き渡した。

又安国寺恵瓊は、毛利秀元の軍勢のあとに僧形で従い、近江へ出るとそのまま毛利勢を警戒して、那須の里から朽木谷へ逃亡した。

毛利秀元が東軍へ通じているとわかったので、身の危険を避けようとしたのに違いない。そして、山城坂を越え、八瀬、小原を経て鞍馬山の月照院にひそんだのだが、ここも安堵の地ではなかった。

ひそかに鞍馬山を出でて六条の辺にかくれようとして、恵瓊に私怨のある江州人楽鎮の眼にふれ、楽鎮の密訴によって、京にあった家康の婿、所司代奥平信昌の手に捕えられた。

そして、現在大津の矢倉に、小西行長は首かせをつけられ、その行長と障子を隔てた一室に、恵瓊は手縄をほどこされて置かれてある。

それだけに、彼等の主謀者、三成が到着したら、どのように取り扱われるかが、大津までやって来て、大坂をうかがっている東軍諸将の噂の種になっていった。

安国寺恵瓊は元来が僧侶なのだからと、割合問題にされなかったが、小西行長の評判はさんざんなものであった。

「――首枷をかけられてな、横になろうにもなれぬというて愚痴ばかりこぼしているそうな」

「――未練なお人よ。なぜ糟賀部村で切腹せなんだのか」

「――切腹するほどならば、戦場から逃げはすまい。切支丹の信徒は自殺を厳禁されている……そういうて腹切る代わりに捕って来たそうな」

「――笑止なことよ。切支丹信者とて、戦死は禁じられては居るまいに」

「――そのようなお方ゆえ監視の村越どのに、せめて首枷の鎖をのばして寝られるようにしてく

れと頼み出て断わられたそうな」
「──ほう、何というて断わられたぞ」
「──このあたりには、鍛冶屋は居らぬ。京まで待てというてな。ハハ……その顔が見えるようじゃ」
そうした空気の中へ、田中兵部大輔吉政に連れられて二十五日の巳の刻（午前十時）すぎ、三成は輿で大津へ運ばれた……

二

三成が到着したと聞くと、本陣の前には諸勢の侍たちが期せずして見物に集まった。家康の許で戦って来た人々にとっては、憎んでも憎み切れない三成だったから無理もない。
その日はからりと晴れ渡った小春日和で、湖面をわたる風も少く、本陣前に並んだ東軍諸将の陣幕が、勝者の誇りを整然と陽に映えさせていた。
その間を田中吉政は、虜囚の駕籠をしたがえて馬ですすみ、本陣の前に到着すると、馬から降りて出迎えの床几代、本多上野介正純に引渡した。
「石田治部少輔三成、召連れましたればお受け取りを」
「お役目ご苦労に存ずる。本多上野介、確に受取りましてござる」
それだけの挨拶で、三成は駕籠のまま本多正純に渡され、田中吉政は従者とともに、本陣の入口に並んで控えた。
その前方に松の立木を背にして、十二畳のま新しい畳が敷かれて三方幕で囲ってあった。

本多正純はつかつかと駕籠に近づき、丁重に片膝ついて、

「石田どの、われ等がお取次申す間、これなる畳の上に出でられて、ご休息下さるよう」

見物の侍たちは、顔見合せてがっかりしたように吐息しあった。

もっと激しい声と、手荒い扱いを予期して鬱を晴らせるものと考えていたからであろう。

三成は黙って小者の揃えた草履の上へ立ちあがった。よれよれの小袖にやつれ切った頬、鬢髪は乱れてはいなかったが、胸から後手に三筋、喰入るようにまわされた虜囚の縄は、本多正純が丁重に扱えば扱うほどに痛ましい敗残の姿に見えた。

歩行もまだ思うに任せぬものらしい。小者が左右から助けて畳の上に坐らせた。

「かたじけない。こうして丁重に衆目にさらして頂く。これが陣中の礼儀であろうな」

三成は坐らせられると、正純をまっすぐに見やってそう言った。わるびれた態度はみじんも見せずに、痛烈な皮肉だけは浴びせてゆく考えらしい。

本多正純は、しかしそれに何の反応も示さなかった。

「では、お取次申すゆえ、しばらくご休息を」

そして、高い空をチラリと見上げて本陣の幔幕の内に消えた。

三成は野外十二畳の雛壇に一人で飾られ、じろり、じろりと、右を見やり左を見やっている。捕われて狼狽している者の姿では無くて、それは、世にも不逞不逞しい超脱の巨人に見えた。と、見物の列が二つにわれ、彼の前へかかって馬を停めた武将がある。

本陣へ伺候のためにやって来た、三成とは犬猿の間柄の福島正則であった。

正則は三成と視線が合うと、

正則は、相手が一歩も譲らず舌戦する気と知って、フフンと笑って、そのまま行きすぎた。
「ハハ……、その方をこそ生捕って、こうしてやる気であったのが少し違うての。無念じゃ」
その声が大きかったので、見物の侍たちはドッと笑った。三成はその笑いのやむのを待って、
「その方、柄にもなく、無益の乱を起しくさってそのざまじゃ」
「治部!」と野太い声で舌打ちした。

三

恐らく諸将にしても、三成がどのような姿で曳かれて来るかは、興味の的だったのに違いない。
とにかく無類の傲岸さで、時には太閤以上の権柄をかざして生きて来た三成だった。
その三成が、いよいよ梟首はのがれ得ない捕虜として、どのような裸身を諸将の前に示して来るか……?
超然と瞑目しているか。
打ちひしがれて哀れみをそそる姿か。
それとも、依然として例の強情我慢を押しとおそうとしてゆくか?
最初に通りかかった福島正則は、その最後の、我慢をおしとおす気と見てとって、二度目の言葉はかけなかった。
かけたらきっと痛烈な皮肉で応酬する……と、見たからだった。ところが次に来かかった小早川秀秋は見事に、その手に乗ってしまった。
彼にとっては三成は、太閤の威光を笠に着た小癪な奸物に見えてならなかったのだ。

彼はわざわざ馬から降りて、
「ほう、いよいよ治部少が捕って参ったか。治部少は憎い奴じゃ。どれ見てやろう」
いいながらつかつかと三成の真前にすすんで、頭の上から膝先まで撫でるように見ていった。
「到頭、終わりはこれであったか」
「筑前！」
「なんじゃ。申し残すことでもあるか」
「わしはのう、日本一の卑怯者をこの目で見たぞ」
「なにッ!?」
「太閤の贔屓も忘れて、秀頼君を裏切って忘恩無類の二股膏薬、よく顔を見せよ！　覚えていんで、太閤殿下に話してやるわ」
逆に眼を剝いて顔を突き出され、秀秋はあわてて傍から離れていった。
屈する気のない三成は、到底、二十四歳の秀秋の手に負える人物ではなかったのだ。
「口の減らぬ痴れ者め、曳かれ者の小唄というを知らぬと見える」
秀秋はそのまま手綱を小者の手に渡して、そそくさと本陣の中へ入っていった。
三成はもう又、視線を向いの松の梢に移している。そこでは四、五羽の雀が追いつ追われつ戯れ合っていた。
人々は秀秋の姿が見えなくなると、クスクスと笑いだした。誰の眼にも、秀秋が三成にしてやられたと映ったからに違いない。
「それにしても、内府さまは、三成に会うであろうかの」

「あの分では、三成め、上様に向っても、毒づくつもりに違いない。上様はお会いなされますまいよ」
「なるほど、三成がどう出る気か、それを見るためにあの畳の上へ休ませたのかも知れぬ」
「それは決ったことじゃ。本多さまは父御に劣らぬ知恵者じゃからの」
人々が囁き合っているところへ、今度は、細川忠興、加藤嘉明、黒田長政の順で騎馬が続いた。
人々は息を詰めて、この三人が三成に何といって声をかけるかと固唾をのんだ。
細川忠興は妻子を大坂屋敷で彼のために殺されている。或いは鞭をあげて、打つのではあるまいかと……
ところが忠興も嘉明も、じろりと軽く一瞥しただけで、三成の前で馬も停めなかった。完全な無視である。
三番目の黒田長政だけが馬を停めた。

四

三成は無遠慮に顔をあげて長政を見やった。長政もそして父の如水も、家康に味方して、如水は九州を荒し、長政は関ケ原で、まっ先に三成へ馳せ向って来た強敵であった。
それだけに、周囲の人々は一瞬シーンと声を潜めて両者を見まもる。
黒田長政は馬を降りると手綱を従者に渡して、つかつかと畳のそばに歩み寄った。
逞しく精悍な彼の眉はピクピクと動き、額にはかくしがたい癇筋がほの見える。
「治部少どの」

れてお わすがよい」
それはふしぎな語調と声であった。憎悪を押えようとしているのがよくわかり、指の震えも感じとれた。
にもかかわらず黒田長政は、自分の着ていた陣羽織を脱ぐと、つかつかと畳の上にあがって行って、後手に縛られた三成の上半身へそれを着せかけてやった。
それで三成の姿の惨めさは半減した。荒い縄目が衆目からかくされていったのだ。
三成がジロリとその羽織の胸へ眼をおとした時にはもう長政は、畳をおりて逞しい具足の背を見せて本陣の方へ歩いていた。
三成が眼を閉じたのは、その次の瞬間だった。蒼白な顔は陶器のように硬ばり、呼吸があらく肩を揺った。
「どちらも大したものじゃ」
「まことにのう、あの黒田どのの怒りを押えた形相は、怒っている時よりも一入凄んで見えたぞ」
「さよう、あれが武人のたしなみと申すものでござろうて」
「さすがの治部も毒づき得なんだ。やはり骨身にこたえたのであろう」
人々が囁きだした時に、本多正純が、再び幔幕の中から姿を見せた。
「兵部大輔どの、上様は、お身に、治部少どのを御前へ引き連れよとござりました」
「かしこまってござる」

田中兵部大輔吉政は、心得て立って、
「治部どの、上様がお目にかかられるとある」
「田兵……」
と、三成は、幾分血走って来た眼をあげて、
「武蔵の内府を、わしの前で上様とは呼ばぬことじゃ。わが身の上様は、秀頼君の他にはない」
「そうか。わかった。では、その武蔵の内府さまの前へ連れて参るぞ」
「おお、行かいでか」
二人の対話は、その言葉の内容とは反対に、ひどく明るい余韻をのこした。どちらも心ではもう許し合っている故であろう。
「田兵とは、恐れ入ったの捕虜の身で」
「どこまでも譲らぬお方じゃ。それにしても、あの本多どのの表情はどうじゃ。悪口雑言など、聞えもせぬといった顔つきじゃぞ」
「さすがに上様の床几代を務めるほどある。若いがの、肚の中は胆ッ玉と知恵袋しか入って居らぬのじゃそうな」
人々の私語の中を、三成は田中吉政に引立てられ、本多正純に付き添われて幔幕の中へ入っていった。
見物の人々はむろん散らない。中の様子はうかがい得なかったが、彼等の興味は、その後の三成の処置にあるからだった……

五

家康は胴丸だけ着けた羽織姿で、ゆったりと床几にかけていた。
そして三成が引かれて来ると、
「床几を」
と、小声で傍の鳥居久五郎成次にいって、それから視線を三成に向けかえた。
三成はまっすぐ家康を見据えるようにして入って来ると、きちんと一礼して床几にかけた。
今度は三成の表情が、さっきの黒田長政の表情によく似ていた。
家康の両側には、本陣に詰めて来た諸将の顔がずらりと並んで、八方から三成の全身を刺している。
「治部少どの」
家康は笑いもしなかったが、さして怒っている様子も見せず、
「腹をこわされて苦しまれたそうな。戦のおりにはよくあることじゃが、心せねばならぬ。生米は二刻近く水につけて、ふくれたところで食さぬと必ず下痢を起して困るものじゃ」
三成は血走った眼をして家康を見つめたまま答えなかった。
答えなければならぬ相手の言葉ではない……と判断したからだった。
(この狸め、わしを、小伜扱いにしていくさる)
いや、自分を小伜扱いに出来る家康を、はじめて三成は発見したおもいでもあった。
(次には、何をいいくさるか……？)

「どうじゃな。幾分治まったかな。治まらなんだら、わしがよい持薬を持っているが」
「薬ならば、田兵から貰うてござる」
「そうか。それはよかった。兵部大輔はお許とは幼馴染、又武士の心得もある者ゆえ、さして無礼な扱いもなかったであろうと思うが……不自由なことがあったら申出られよ」
「フフン」
三成は冷笑した。何れ梟首とわかって縛られてある身に、不自由があればと平気で訊ねる。不自由ならば頭の頂きから爪先まで全部不自由とわかりきっているではないか。
「戦には勝敗がある。勝つも負くるも時の運……と、昔の人も申してあるし、お許ほどの者ゆえ、何も改めていうにも及ぶまい。ただ家康は家康の心に従うて、お許を五奉行の一人として扱うつもりじゃ」
「ご存分に」
三成はひびきのものに応ずるように答えた。
「かくなったうえは、どのように扱われようと異存は申さぬ」
「そうか。どのように扱うてもよいか」
(しまった！)
と、三成はおもった。こんなところで、こんな反問に出合おうとは考えていなかったのだ。
「そうか。それではお許の言葉に従おうか。よし、久五郎」
「はッ」
「家康にも、心にかかってならぬ事が一つある。それは、伏見の城で、治部どのに囲まれ、無念

の最期を遂げたこなたの父、鳥居彦右衛門元忠が妄執じゃ。治部どのも、それを察してああ申される。よって治部どのの身柄はそちに遣わそう」
「ははッ」
「その方自分の陣屋に伴って、折角治部どののお志を無にせぬように処置致せ。では、正純、治部どのの身柄は、鳥居久五郎に遣わすことに致したぞ」
三成は、思わず眼の前が、まっ暗になってはげしく揺れだすのを覚えた。

六

三成の考えでは、捕われても大坂までは行ける計算だった。むろんその計算に頼りきっている気はなかったが、与次郎太夫やその婿の素朴な心にふれたとき、
(自分の志は変えずに、彼等を救い得たら……)
そう思ったことは事実であった。
それに、直接捜索に来ている者が、自分と親しい田中吉政ということも、どこかで彼に一抹の安心感を与えていた。
事実田中吉政は、田兵、田兵と彼に呼び捨てられながら、その扱いは、決して粗略ではなかった。
彼の命を受けて古橋村に捕縛に来た田中伝左衛門長吉は、もと千石取りの関白秀次の足軽大将だったので、或いは三成に私怨を含んでいるのではあるまいか……？　そうも案じたのだが、岩屋で病み疲れている彼に縄も打たず、丁寧に輿に移して井ノ口の吉政の陣屋に連行してくれた。
井ノ口でも医薬の手当を受けたり、所望の韮雑炊を供されたりして、それは罪人というよりも、

親友の待遇といってよかった。
　思えば三成は、そうした吉政の扱いに馴れすぎて、家康の前でつい不用意な発言をしてしまったものらしい。
　もともと誰の前でも言葉を飾ったり、へ、り、く、だったりする気はみじんもない三成だったが、相手が無礼な嘲笑を浴びせようとしない限り、彼の方からすすんで怒りを挑発する気もなかった。
　ところが、ここでは、全く不用意に、
「――どのように扱われようと異存はない」などと無意味な反撥を口にしてしまったのだ……
　改めて考えてみるまでもなく、この言葉は大きな嘘であった。その扱いに不満があったら、それが家康であろうと、毛利輝元であろうと、大声で叱りつけようというのが、最期を前にした三成の意地であり意志であったのだ。
　それを何ぞや「ご存分に――」とは。
　そして、その言葉が洩れるや否や、すかさず、
「――それはかたじけない」
　あざやかに家康に斬り返されて、さっさと身柄を鳥居元忠の遺児にさげ渡されることに決まってしまったのだ……
「では、お疲れでござろうゆえ、すぐさま鳥居久五郎が陣屋へ参られまするよう」
　本多正純に促されて、三成は床几を立った。
　自分からいい出したのだから、素直に立つより他にない。
　といって、これほど心外なことがあろうか。少なくとも家康を相手に天下分け目の戦をした一

方の主謀者として、堂々処刑されるつもりの石田三成が、つまらぬ対抗意識の失言から、いっぺんに、鳥居久五郎成次の「父の仇——」の地位にまで蹴落されてしまったのだ。
死にはかくべつ変りはない。しかし、あれが豊家のために最後の抵抗を試みた西軍の事実上の総大将……そういわれて死ぬのと、鳥居成次に父の仇を討たれて死ぬのとでは、三成にとってはその価値に雲泥の差があった。
（三成！　これがそちの裸形なのだ。この小さな反撥心のおかげで、いつも却って自分の意志をはずかしめる……これがこなたの、ついに脱しきれなかった生涯の欠点だったぞ……）
そして、いまその欠点を見つめながら、家康の前から曳きさげられる三成だった……

七

鳥居久五郎成次はまだ若い。
恐らく伏見城で憤死した父元忠の仇敵を、なぶってなぶって、なぶり殺しにしてやりたい気持なのに違いない。
本多正純が三成を引立てると、彼はもう一度家康に無言で頭を下げて、三成のうしろからついて来る。
三成はもう何も考えまいと思った。
それはささやかな言葉の反撥だったが、取り返しのつかぬほど大きな失言であり失策であったことも事実なのだ。
事態がこうなってしまった以上、わが身の処置は従容として鳥居成次に任せてゆくより他にな

かった。
(家康に、いいたいことが山ほどあったに……)
それにしても、家康のあの、有無をいわさぬ言葉尻の捕え方はどうであろうか。
(あれは、ただの古狸のよくする術ではない……)
三成が何というかの予測など、あの場合出来得る筈のものではなく、しかもいったとたんに、すかさず自分の処置を決めた。
それは兵法の達人同士が、太刀を構えあって、寸隙ものがさず斬り込む太刀風の冴えを連想させる。
(やっぱり家康め、人としての達人なのに違いない)
本陣を出ると三成は鳥居家の人数に引き渡された。
「われ等の陣屋はほど近いゆえ、このままお歩き願いたい」
そういった久五郎成次の声も硬かったし、それを取り巻く家人の眼も、それぞれ憎悪に燃えていた。
見物の人々はまだ散らず、その中を歩かせられてゆく三成の苦痛は、肉体的なものではなくて、胸の内に熱湯をそそがれているような精神の痛みであった。
(三成の大たわけが、自分で自分を、こんなおかしな立場において……)
自嘲が口辺に洩れそうな気がして、それが二重に痛みを増した。
鳥居成次の陣屋はなるほどさして遠くはなかった。家康の大切な譜代なので、本多忠勝の陣屋と並んでいた。湖水を背景にした相当大きな家構えの商家がそのまま使用されている。

三成が到着すると、成次はきびしい声で警備をふやすように命じてから、先に立って奥の一間に案内した。
成次の居間の隣で、客間に使っている一室らしい。
そこへ通すとすぐに成次はやって来て、
「縄を解け」
こわばった声で近侍に命じた。
「兄新太郎忠政は、ただいま結城中将（秀康）と共に宇都宮にとどまってござる。そのおかげでわれらにお身柄を下された。但し、われ等のお扱いは、兄新太郎の意志と同じものと思召されたい」
三成はその切口上に、笑いながらうなずいた。そして、縄を解かれた腕をさすって、
「ご兄弟でわかれわかれのご奉公、ご苦労に存ずる」
そういってから、それを追従に取られてはと、相手の年齢を考慮に入れた。
「戦国のつねとは申せ、父御を討ったはこの三成、報復に、いささかも手心は無用でござるぞ」

八

三成の言葉を聞くと、鳥居成次はキラリと鋭い一瞥を返して、そのままぐっと唇をへの字に結んだ。
うかつなことをいうまいとする用心……というよりも、打ちとけて話を出来ない性来の口下手らしい。
（それとも、心中の怒気がはげしく、感情の整理をしかねているのかもしれない……？）

と思ったときに、
「では、ごゆるりと」
成次は千切って吐き出すようにいって、さっさと座敷を出ていった。
「……では、ごゆるりとか」
三成は思わず又笑いをうかべた。父の仇の身柄を下げ渡されて来て、ごゆるりと……とは、凡そ珍妙な挨拶……家康の旗本に、変った男がいるものだ。
この、何とも世なれない朴訥さが、いざ戦場へ出たとなると不思議な強さに一変する。そこに三河者を家臣にしている家康の強味もあるらしい。
（いや、こうした連中だけに挨拶も奇妙ならば、復讐の手段もまた……）
三成はふと裏の浜手に異様な物音を聞きつけて、そっと障子をあけてみた。
やっている。松の木の外側へ竹束と丸太をかついだ者たちが、無表情な列を作って、汀にそれを投出しては戻ってゆく。
いわずと知れた竹矢来の用意。
事によると、その矢来の中央あたりに坐らせて、自分の首を斬る気かも知れない。切腹を許すほどの寛容さは、さっきの思い詰めた成次の顔からは感じとれなかった。
ふしぎなことは、その矢来が組まれだした頃から続いた。
「風呂の用意が出来ました。垢をお掻きなされませ」
こんども家臣ではなくて成次自身であった。
「なに、風呂をご用意下されてか!?」

「されば、ひと風呂お召しなされたら、さっぱりと致しましょう」
「それはかたじけない。首根の垢をよう掻いておきましょう」
そして風呂から出ると、小ざっぱりとした小袖に下着、下帯までが添えられてあった。
(ほう、三河者にも味な芸があるものじゃ)
綺麗にしておいて斬る方が、斬り栄えがあると考えたか……
むろん以前の小袖は井ノ口で着換えていた。が、風呂までの馳走は田中吉政の許ではなかった。
三成は気分がほぐれた。着換え終ると今度は若党が出て来て鬢に櫛目を通して呉れ、顔の粗髯を剃って呉れた。
首にしたおり、見苦しくないようにという心遣いにしても、決してわるい気持ではない。
しかもその間、鳥居久五郎成次は、きちんと姿勢を崩さず、側にあって監視している。
(そうだ。そういえばこの成次の兄は太閤に鉄肘の新太郎と綽名された律義者であったわ……)
髪を整えて座敷に戻ると、そこにはもう夕餉の膳が出されていた。
そして、その膳の上から温くただよい出しているのが、腹工合も考慮に入れた三成の好物の韮雑炊の香りだとわかったときから、三成は妙な気持になっていった。
(こ奴、わしの腹まで治して、ゆっくりと斬る気らしいぞ……)

九

「鳥居どのは、それがしが韮雑炊を好むことを、何うしてお知りなされたの」
よい香りじゃ……そういって椀と箸をとりあげてから、三成は成次に話しかけた。

湯浴みのあとの爽快さが、三成を、狙われている親の仇という、殺伐な関係からふしぎな親近感へ誘い込んでいる。
「はい。上様にききました」
「なに、内府に聞かれたと……？」
「いかにも。上様は田中兵部大輔からお聞きなされたものでござりましょう」
「ほう……すると内府は、お身に、三成が好物を振舞うてやれと申されてか」
「いや、それがしの一存でござる」
「それはかたじけない。さすがは鳥居元忠どののお子だけあるのう鳥居どの」
「はいッ」
「敵とし味方として攻めもし戦いもしたのだが、この三成、ご尊父に何の私怨もあるのではない。その辺のことは、ご了解下さるであろうな」
「…………」
「いや、そう申したからとて、わしの身に手心を加えよなどというのではない。存分になされてよい。が、ただ私怨ではなかったこと、この事だけを申しおくのじゃ」
「存じてござる」
武骨に答えてから成次は、ひと息入れて、
「実は、もっと膳部を飾ろうかと存じてござるが、魚鳥は、却って心ないわざと遠慮致してござる。では、ごゆるりと」
そして、一人の小姓を給仕に残して、そのまま座敷を出ていった。

三成はまた「ごゆるり……」という挨拶に微笑した。これが成次の口癖らしくもあり、これ以外の挨拶の語彙を知らぬもののようにもおもえた。

とにかく人になじまぬ猛獣のような体臭と全くそれと反対な爽やかさとを併せもった若者だった。

何時か庭外の矢来を組む物音はとだえている。もう厳重にこの陣屋と浜手の遮断は終ったのであろう。

（遁がすまいとする……その癖、好物の韮雑炊を……）

その味付けも充分吟味したものだったし、柔さも腹具合に叶っている。誰ぞ心利いた老臣がそばにあって助言しているのだろうか。

（ともかく、ここが自分の人生の終点だったらしい……）

そう思って軽く二ぜん雑炊をすすり終って、三成はハッとした。

先刻、成次のいった「――魚鳥は却って心ないわざと存じて遠慮致した」そういった言葉の意味が、ふっと胸に通って来たのだ。

さっきは、それを腹をこわしている自分には、見て呉れだけのご馳走になるゆえ遠慮した……と受取っていたのだが、それはそうではないらしい。三成の父も妻子も死んでいるのだ……それで魚鳥は却って心ないわざ……そう思って膳につけなかったのだという意味ではなかったろうか……？

それだったら、三成は、完全に、あの若者に虚を突かれたことになる。自分の腹具合にとらわれて、父や妻子をはじめ、討死した一族郎党の供養のことを忘れている……

「小姓どの、膳をさげたら、今一度鳥居どのにお目にかかりたい……そう取次いでくれまいか」
三成はそういわずにいられなかった。

十

死の瞬間まで、人間の心の動きだけは自他ともに正確に見てゆきたい三成だった。
美しいものも醜いものも……
その三成が、若し鳥居久五郎成次という、自分の最期を託す若者の心を見誤ったり勘違いしたりしたままであっては、やりきれなかった。
（問うて見よう。無心に問うたら、あの口下手な若者も、かくさずおのれを語るであろう）
小姓が退ってゆくと、三成は、どうして巧みに成次の口を開かせようかと思案しだした。
それだけでほのぼのと心のうちが温まる気がするのは、魚鳥の解釈が、次第に供養の精進と受け取れて来るかららしい。
間もなく成次は茶をささげて入って来た。
茶器はさして珍しいものではない。利休好みで長次郎に焼かせた新茶碗の黒であった。
それを武骨な手つきで三成の前におくのを待って、
「鳥居どの、どうやらお許の言葉が、この三成の導師の言葉になりそうじゃ。そのこころで、わしの問いに答えてくれまいか」
成次は、キッとした表情で膝に手をおいた。いかにも若く気負った、「――聞こう！」という姿勢であり眼つきであった。

「先程お許は、魚鳥は遠慮したと申された。その意味は？」

「ご一族が、佐和山にお果てなされて初七日……と心得てござれば」

「やはりそうであったか。かたじけない。三成はすんでのことに、腹をこわしてあれば……と思い込むところでござった」

正直にいいながら、三成はこの若者が、いちどに自分の胸の中へ飛び込んで来そうな親しさを覚えた。

「鳥居どの、お許の好意に甘えてたずねる。ぶしつけは許されよ。お許は、さぞわしが憎かろうな」

「いかにも」

「では、もはや、この身の処分や方法は決めてござろう。むろん存分になさるがよい。どのようになさろうと三成はお許に会えて嬉しかった……風呂を貰うた。髪を整え、衣服を恵まれ、初七日の心遣いまで受けた。毛頭お許を怨みはせぬ。いったいお許は、この三成に切腹を許す気か許さぬ気か」

三成が問いかけると、成次は又きっと姿勢を正していった。

「切腹などは、許せませぬ」

「では、斬られるお気か。それとも……」

もっと惨酷な処刑を考えているのかと、言外に意味を含めて微笑すると、

「治部少どのを、わが手で処分など致しましたら、それこそ上様に叱られまする」

「え、な……なんといわれた!?」

「わが手でご処分など思いも寄らぬこと」

「でも、お許はわが身柄を内府の手から……」
「預けられたと心得まする」
「預けられた……貰うたのではない……？」
「上様はお言葉の少ないお方……ご貴殿が一々諸将に反撥なさる。このままでは誰かがご貴殿を斬ろうとなさろう。そういう不心得者の現われるのを警戒して、私怨ならばいちばん深いそれがしに預けられた……そう存ずるゆえ、念のため矢来を組ませ、見張りをふやして警戒してござる」
三成はあまりのことにわが耳を疑った……

十一

「すると、するとこの三成をお身の手に渡したのは、勝手に成敗せよという意味ではないといわれるのじゃな」
三成が急き込んで訊ねると、
「そう受取ってござる」
鳥居久五郎成次は依然姿勢を正したまま、切口上で答えた。
「するとあれは、内府がお許に謎をかけたといわれるのか」
「いかにも」
「お許に……お許にそれが、どうしておわかりなさるのじゃ」
「これはしたり……われ等は、父祖代々の主従でござる」
「いかに主従なればとて……三成にはそうは受取れなんだ。これは大切なことじゃ。お許から、

お許の受取り方に、間違いがあるか無いか、家人を出して確められては如何であろう」
　すると成次は、はじめて微かな笑いを見せて首を振った。
「それには及びませぬ。われ等が、上様のお心を誤って受取るようではご奉公はなり申さぬ。いや、もし又それが誤りであってもよい」
「誤りであってもよいとは……？」
「武士には武士の一分がござる」
「いよいよ腑におちぬ。そこ許の一分とは？」
　問いかけられて、成次はちょっと軽蔑のいろを見せた。
「治部少どのは、われ等の父の仇敵ではござらぬ。もっと大きな、東軍すべての公敵の大将でござる」
「なるほどのう」
「それゆえ、たとえ上様が、われ等にお身柄を下さるゆえ、存分に成敗せよと、ご本心から仰せられてもお請けは罷りなりませぬ。治部少どのをわれ等の手で成敗しては、父の死が卑小なものになりまする。父は一人の石田治部少輔三成と争って死んだのではござらぬ。天下のために、孤塁を死守して果てたもの……されば、治部少どのをわれ等だけに賜るは筋違い」
　そこまでいって成次は、自分の態度の不遜さに気付いたと見え、また表情を緊め直して言葉を続けた。
「むろん、そのような理非のわからぬ上様ではない。それゆえ、大切な敵の大将を汝に預くる。笑われぬよう、また心得の足りぬ狼藉者に無礼を働かさせぬよう、丁重におもてなし申せと、命

じられたものに相違ござらぬ」
三成は聞いているうちに、次第に唇が白くなった。
（負けた……）
自分の魂のどこかで、本当にそう洩らしているものがある。
「すると、あの湯あみも、雑炊の饗応も、みな内府の命と思うてか」
「もちろんでござる。敵とはいえ同じ武将、その扱いに手落ちがあっては、上様の武士道もわれ等の武士道も立ちませぬ。後々まで笑われまする」
「笑われる……」
三成はもう一度呟き返したあとで訊ねずにはいられなかった。
「すると、われ等はここから何者の手に渡されてゆくと思うぞ」
「されば、都から所司代奥平信昌どのが受取りに参られよう。それまでは、先ずごゆるりと」
三成はもう笑い得なかった。肚の底から、成次を家臣にもった家康が羨しかった……

新しき地図

一

石田三成が、大津から京へ差立てられる頃になると、日本中を蔽っていた戦雲は次第に青空をのぞかせだした。

思えばまことに、複雑にして、かつ単純な歴史の歩みであったといえる。
見方によれば、関ケ原の一戦こそは、天正十二年に開始された家康対秀吉の小牧の合戦の終盤戦でもあったのだ。
あのおり四十三歳だった家康は、今年五十九歳になっている。その間十六年、秀吉と家康とは表面あるいは譲り、あるいは結び、あるいは助け合いながら、智略で競い、戦力で競い、人心収攬で競い、忍耐で競った。そしてついに人間の価値を決定する歴史の方向の見透しをひっさげて、関ケ原に相対した。
秀吉はすでに生きてはいない。しかし秀吉の心中に深く根を張っていた「家康不信――」の念がそのまま三成に引継がれ、三成の手によって西軍に結集されたのだといってよい。
秀吉は決して家康を許してはいなかった。というよりも、家康だけはついに征服し得なかったのだ。
彼は小牧で家康を討ち得ないと知ると、その妹を与え、母を質としてまで家康に上洛を求めた。そして家康を、駿・遠・三から関東に移し得たとき、一応勝利は成ったかに見えた。が、それはどこまでも成ったかに見えたのに過ぎず、秀吉の心はそれに依っていささかも安らぎ得なかった。
その証拠に彼は、家康を関東に移封すると、防禦にかけては日本一の評判を得ている中村式部少輔を駿河において、その進路をさえぎり、掛川、浜松、吉田、岡崎、清洲、岐阜と、みなそれぞれ腹心で固めていった。
東海道だけではない。中山道方面には、信州小諸に仙石権兵衛を封じて碓氷の嶮を守らせ、真田安房守父子を味方とし、川中島、木曾などの要所要所に代官をおいて、家康西上に水も洩らさ

ぬ備えを固めた。
蒲生氏郷を会津に封じたのも、更に、その子秀行が家康の婿になったというので、そのあとへ上杉景勝を移したのも、上杉の旧領越後へ堀久太郎を封じたのも、みな家康を警戒し、家康を怖れての配置であった。
その点秀吉は、家康恐怖の、ふしぎな分裂症にかかっていたといってよい。
むろんそれもこれも、彼の理想、「日本国の泰平――」という、第一義の目的のためであったのはいうまでもないのだが……
こうして、家康恐怖、家康不信の念が、秀吉に最も近侍していた石田三成にそのままそっくり引き継がれたとしても不思議はなかった。
三成は秀吉の心中深く秘めてあった憎しみと怖れとを、知らず知らずに身につけて、それを秀吉の感化とは考えず、むしろ自分の達見と受け取った。
そう思ってみると、家康の警戒すべき理由を知らず、これと懇親を求めてゆくものは、みな不見識な、許すべからざる豊家の敵に見えて来る。
言葉を換えていえば、三成は秀吉の弱点、家康不信の一面を受け継ぎ、家康は秀吉の第一義の目的「日本国の泰平」を希う心を引き継ぐ結果になったのだ。
その意味からすれば、関ケ原は秀吉自身の中に住まう二つの心の対決の場であって、ここにこそ見のがし難い歴史の興味と、教訓がひそんでいる……

二

三成は決して凡庸ではなかった。むろんその豊家想いも嘘ではない。

しかし、秀吉から受継いだものの価値を比較すると、家康とは雲泥の差があった。

その受継いだものの差異が、関ヶ原の決戦で、まざまざと露呈して来たのに過ぎない。

歴史の流れの意志は、人間同士の不信や憎悪をかき立てることにはなくて、一時も早く磐石の安定を欲することにあったのだ……

したがって、三成が個人としては家康に数倍する器量人であったとしても、やはり、この見えない流れを味方にはなし得なかったであろう。

その証拠に、秀吉が、家康を牽制しようとして打った布石のほとんどすべてが、家康の側に流れ寄った。

駿府の石も、掛川の石も、浜松、吉田、岡崎、清洲の石も、始めから家康と共にこの流れを守る石堤になっていた。

その流れは岐阜を押し流し、大垣を押し流し、佐和山も、敦賀も押し流して、いま大津の浜から京・大坂をめざしている。

そうなればもはや日本中の勢力地図が一変するのは当然だった。

中山道を進んで来た秀忠勢も途中で抵抗らしい抵抗に出あったのは、上田の真田昌幸位のもので、九月二十日に近江の草津へ着いて家康の軍に合した。

彼等が関ヶ原の決戦に間に合わなかったので、家康はひどく不機嫌だったと伝えられている

が、この方には、榊原康政以下の精鋭のほかに、老巧な本多正信がついている。
正信は、途中で秋の出水が多かったせいで遅参したとまことしやかに詫びていたが、これは最初から家康と打合せてあった予定の行動だった。
家康はみごとに自身の主力は温存しながら、豊家の遺将を指揮して、彼等に歴史の流れの方向を指呼してみせたのだ……
そして──
家康が、東軍に従わせてあった大野治長を大坂に遣わして、淀君と秀頼に、こんどの戦の結果を報告させたのは、秀忠の中山道勢と合し得た九月二十日のことであった。
(もはやこれで峠は見えた……)
無言のうちにそれを確信したからに違いない。
家康は淀君あてに一書を認めたうえ、懇々と治長に口上を伝えていった。
「──よいか。この度びの事変は、三成、恵瓊等の徒輩が、口に秀頼さまの命を藉るも、幼い秀頼公が、もとよりこのような事に関わりある筈もなく、且つまた、淀殿は女性のお身なれば毫もあずかり知らぬところと了解する。されば、家康においてはみじんも異心はない。一切は無かったこととしてご安堵あるように申上げよ」
聞いている大野治長の眼が赤くなるほど、それは何のこだわりもない懇ろな口上だった。
したがって二十五日には、大野治長は、淀君と秀頼の使者を従えて、また急いで大津へ戻って来た。
その口上で淀君母子がどのように家康の度量に感謝しているかが、まざまざと見えるような悦

び方だった。

秀吉の理想を継いだものと、その不信を継いだ者との相違が、ここでも大きなひらきを見せて来たのである。

家康はまだ大津を発そうとしない。描き変えねばならぬ新地図の構想に余念がなかった。

三

大津にある家康の許へは、各地からの注進、訪客がひきもきらなかった。

この事変の導火線となった上杉景勝は、その後伊達氏、最上氏等の挑戦をうけて、これが応接のために、結城秀康とは対峙のままで、いま、豊光寺承兌が、裏面からしきりに上杉家へ働きかけている。

結城秀康に降参して和を乞うように……と、いうのである。

九州では黒田長政の父如水が、この時こそと、平生蓄えてあった金穀をもって大いに浪人どもをかり集め、わが領分の中津の近くはいうまでもなく豊後・筑前・筑後と思うままに侵略の手を伸している。しかも彼は家康の信任厚い藤堂高虎に、

この度び、加藤主計（清正）と拙者が攻め取った分を、そのまま拝領致すように肝いりをお頼み申す。甲斐守（その子長政）には上方にて御知行を頂き、拙者は隠居の身ではあるが、こちらで別に家を建てたい。どうぞ呉々も肝いりお頼み申す。貴殿と数年来、懇ろにご交際を願って来たのも、要するにこういう時のためでござればお忘れなく……

如水が、これほど露骨な手紙を寄こすほどなのだから、小西行長と境を接している加藤清正がじっとしている筈はなかった。

彼もまたせっせと小西領を侵して働いている。

北国筋は前田利長が着実におさえて来ているし、細川忠興の父の幽斎も、六十七歳の老齢ながらよく孤軍奮闘して、ついに丹後の細川領はまもりぬいていた。

南宮山からいったん水口の居城へ逃げ帰った長束正家と、その弟伊賀守は、すでに自殺寸前の危機に追い込まれていたし（正家は三十日に自殺）九州の柳川から西軍の味方としてやって来ていた立花宗茂は、毛利輝元にも増田長盛にも、大津すら守ろうとする決意がないと知ると、さっさと柳川へ引きあげて行ってしまった。

ただ関ケ原で伊勢路へ血路を求めた島津義弘だけは、その後大坂屋敷にたどり着き、そこから本国の薩摩へ船で引きあげたらしかったし、宇喜多秀家がまだ捕縛されていなかったが、その他はすべて明瞭になりつつあった。

すでに大勢は決したと見てとって、京・大坂から公卿や大商人等の「戦勝祝賀――」の使者が陸続と大津へやって来る。

家康が、それ等の情報を検討しながら大津にとどまってあるのは、出来得れば大坂で一滴の血も流すまいという思案であるのはいうまでもない。

彼は二十日のうちに、伏見にあった西軍諸将の屋敷はことごとく焼かせてあった。

そして二十二日に、福島正則、池田輝政、浅野幸長、藤堂高虎、有馬豊氏等を葛葉に至らしめ

て、大坂を牽制させている。
大坂の西の丸にあって、甚だ態度曖昧だった西軍総帥の毛利輝元が、どのような出方をするかを監視せしめたわけである。
輝元は葛葉に東軍諸将が進出して来たのを知ると、井伊直政、本多忠勝、及び、福島正則、黒田長政にあてて、
「――西の丸をしりぞいて、二心のないことを示したい」
そういう意味の誓書を送りとどけて来た。
その誓書の提出をきき、家康ははじめて、福島、池田、浅野、黒田、藤堂の五将に西の丸をおさめるように厳命した。

四

毛利輝元が、大坂城西の丸を退いて、木津の自邸に引き移った旨の知らせが大津に届いたのは、二十五日の暮れ方だった。
家康はその知らせを仔細に検討すると、はじめてホッとした表情で連行して来ている女房たちに腰を揉むように命じていった。
傍には、本多正純、岡江雪、板坂卜斎などのほかに、遠山民部、永井右近大夫、城織部正などが、まだ昂奮の去りやらぬ表情で控えていた。
彼等はすぐさっきまで、毛利輝元が、果して素直に大坂城を渡すや否やで、それぞれ意見を異にしていたのだ。

——今度の事変の張本人は三成だったが、三成には武力がない。
西軍を結集せしめた武力の中心はどこまでも毛利輝元であり、輝元の時勢の見えない愚昧さが、この事変を誘発したものであることは、動かし得ない事実であった。
したがって、輝元にその間の確たる自覚があれば、素直に西の丸を退く筈はない……というのが一部の見方であった。
少なくとも、徳川家に匹敵するほどの武力、財力を持っている毛利輝元である。その家中に吉川広家、福原弘俊などのような、東軍贔屓の者を抱いていたとは言え、その大勢力が三成とともに敵として起ったのだ。
家康がこれをそのまま許す筈はない……そう悟れば、当然大坂城に立籠り、秀頼を擁して動くまい。
戦うか否かは別のこととして、大坂城内にあって家康と交渉しなければ、交渉の基盤も立場も無くなってゆくではないか……
ところがその反対の見方もあった。
というのは、毛利方では主として吉川、福原等を通じて、井伊直政、本多忠勝の両人と、更に、黒田長政、福島正則等を相手として裏面工作を続けている。
毛利側の吉川広家や福原弘俊の言い分は、
「——今度のことは輝元の与り知らぬことで、みな安国寺恵瓊にだまされたものゆえ、内府におかれて、本領安堵の保証さえして下さるならば、きっと毛利勢に敵対は致させませぬ」
と、言うにあった。

そして、関ケ原ではとにかく彼等は戦列には加わらなかったのだ。
それを実行し得たものゆえ、今度もまた吉川広家等が、無事に大坂城の西の丸から、輝元を退去させるように、取計らうであろうという見方であった。
家康はその何れにも与しなかった。同時にその何れになっても勝ち得る備えは怠っていなかった。
彼の手許には、勝ちに乗じた豊家諸将の軍勢の他に、ほとんど無傷のままの秀忠勢が加わっている。関ケ原でさえ勝利を収め得たのだ。毛利勢が、たとえばどのような反抗を企てたとしても、もはやそれは家康の敵ではあり得なかった。
「せめて輝元が吉川ほどの者であったらのう」
しばらくぶりで小袖一枚の姿になり、長々と伸した腰を二人の女たちに揉ませながら、家康はかたわらの本多正純をかえりみた。
「どうじゃな正純は、安国寺恵瓊と輝元と、どちらの器量が上と思うぞ」
不意に話しかけられて、期せずしてみんなの視線は家康の上にあつまった。
外はしずかに時雨れている……

五

本多正純は、家康に問いかけられると、チカリと一座を見やって、
「されば、何れも甲乙の差はつけがたい人物かと」
「違う。輝元の方がぐっとたわけじゃ」

吐きだすようにいわれて、正純は小首を傾げた。
「そんなに、大差がござりましょうか」
「大ありじゃ。一方は高々七、八万石の身軽な坊主、その坊主に百二十万石もの大身がだまされるというたわけたことがあるものか」
「なるほど、だました方と、だまされた方……ちと値打ちが違うかも知れませぬなあ」
「大違いじゃ。このようなたわけでは、わしとて信用がなるまいが。又誰にだまされるやら知れぬ者とあればのう」
いわれて正純はまた、あわただしく一座を見回した。
（上様は、輝元をそのまま許す気ではないらしい）
その本心がキラリと冷い光りを描いて虚空を切った気がしたのだ。
家康は直接輝元にも吉川広家にも西の丸退去のことでは誓書は与えていなかった。裏面工作は、どこまでも井伊、本多（忠勝）を介して、黒田長政、福島正則などがやっている。
しかし、輝元が西の丸を退去したというのは、それ等の裏面工作で、
「――毛利家の所領は安堵」という見透しをつけての退去に違いなかった。
そう思って正純は一座を見回したのだが、一座の人々はまだそこまで気付いた様子はない。
（これは、おかしなことになりそうだぞ）
「正純、小牧の戦のおりのわしの立場はのう、こんどの輝元によく似ていたぞ」
「は？　小牧のおりの上様が……」
「そうじゃ。わしも信長公の遺児信雄どのに味方して太閤の敵になった」

「なるほど、輝元は、しかし頑是ない秀頼君を」
「それゆえ、なおさらわしに勝たねばならぬところじゃ。いや、勝つまでは行かずとも、互角の戦はしてみせねば、意地の立たぬところであろうが」
「御意、にござりまする」
「ところがあのざまじゃ。よいか、勝ってさえわしは太閤に、あらゆる難題の追撃ちをかけられた。わしが太閤の敵にまわる程の力を持っている限り、太閤の新しい地図は出来上らぬ。太閤はそれで、ご自身の母御まで質に出された……」
家康はそういうと、ごろりと躰を反転させて女たちに背を向けながら、
「輝元が、厖大な本領をそのまま所有したくば、もうちっと悧巧でなければのう……いかにわしじゃとて、気狂いに刃物を持たせて、これで事は片付いたと済まして居れるものではない。いや、景勝とて同じことじゃ。器量に過ぎたものを持つと、すぐに火遊びをしくさるものじゃ」
こんどは一座の人々もみな一様に顔を見合せてうなずき合った。
もはや家康の本心はわかり過ぎるほどにわかって来た。
「明日は早々にここを発って、淀どまり、二十七日には西の丸に入る。一切はそれからじゃが……」
そして、間もなく家康の口からは快さそうな寝息が洩れはじめた。
やはり血を見ることなく大坂城へ入城出来ると決って、肩の荷がおりた想いなのに違いない……

六

家康は翌朝輿で大津を発った。

捕われている、石田三成、小西行長、安国寺恵瓊の三名もむろん引き立てられた。
はじめは京の所司代奥平信昌がやって来て引き立てる筈であったが、信昌は都を離れがたい用事があって、柴田左近、松平淡路守の両奉行によって護衛され、首にはかせをはめ、駕籠に乗せられたまま先ず大坂と堺を引きまわし、それから奥平信昌に引きわたされることに決った……
大津を出ると、家康は、人が違ったように尊大になった。
それまでは身辺の誰彼に、気軽に話しかけていたものが、以後は直答は許さぬといい出して、御奏者奉行を決めていた。
遠山民部少輔、城織部正、山口勘兵衛尉、永井右近大夫、西尾隠岐守の五人が選ばれて、彼等の手を経ずには面接も叶わぬ旨をいいわたした。
さすがに本多正純には、おぼろげながら察しはついたが、他の者はただとまどうばかりだった。
(いったい何をお考えなされておわすのか？)
「――それはその筈よ。以前は太閤殿下のご大老だったが、こんどは違うのだ」
「――そうだ。こんどは天下人として入城なさるのだからの」
「――すると、秀頼さまを二の丸に移して、ご自身で本丸へ入るお気であろうか」
そうした噂はしかし噂に過ぎなかった。
二十六日には予定の通り淀に泊り、二十七日に堂々と行列を整えて大坂城に入ると、まず、秀頼母子に挨拶して、西の丸へ入っていった。
同時に二の丸へは秀忠が入城した。
入城したと聞くと、先を争うて戦勝祝賀の訪客が殺到した。

そして、家康がまっ先に西の丸で迎えたのは勅使であった。

「——天下泰平、貴賤万民の安泰これに過ぐべからず……」

またまた乱世に逆転かと思われた庶民の不安は、この勅使の言葉の中に、無量の感慨をこめて反映しているといってよい。

その日の有様が太田牛一の慶長記には、次のように認められている。

「——（前略）叡慮より御勅使をなされ、叡感斜めならず、則ち征夷将軍に任ぜらる。摂家、清華、諸門跡、城、都、奈良、堺五畿内の大仁大家馳せあつまり、金銀、珍奇その数をつくす。御奏者奉行（中略）これ等を上覧にそなえ奉り、きびしく粧い、中々下臈の身にて、筆頭には述べがたき次第なり……」

家康が正式に征夷大将軍に任ぜられたのは慶長八年の二月なのだが、この時もう勅使は征夷将軍という呼称で、武将の棟梁という意味をあらわそうとしたものらしい。

家康はこうした訪客の殺到を予期して、ことさら尊大に構えを変えたのであろうか……？

そうではなかった。

戦に勝つのはいわば事業の半ばに過ぎない。問題はその後の経営にあった。勝者の統制と敗者の処罰に領土問題がからんで来て、一歩をあやまるとすぐさま次の乱の芽生えに移行する。

関ヶ原で、全軍を指揮した武将は、ここではもはや、自ら描く新地図にいささかも異議をさしはさませない威令の執行者でなければならなかったのだ……

七

老人の眼には稀有の出来事に見えたかも知れない。とにかく江戸を発したのは九月一日。その時には東西に敵を受けて、家康麾下の者の中にも、行末何うなることかと賽を投じかねる者が多かったのだ。

それがわずか一月たらず、二十七日に再び大坂城へ入ったときには、天下のことはすでに決してしまっていたのだ……

奇蹟か？

幸運か？

しかし、家康にとっては、それは、計算し尽した日常の当然の進展に過ぎなかった。したがって、これからも又神仏の付託のままに予定の歩みを進めるばかりであった。

目標は「戦乱の追放――」それ以外に何も考える必要はなかった。

わが家の繁昌も、諸将の帰服も、その一事に付随する余慶にすぎない。

――家康はかつて鎌倉幕府瓦解の原因となった、元寇の役の勝利を心に思い返していた。

あの折りは日本中国民が心を一つにして外敵に当った。物ある者は物を、人ある者は人をささげ、全力を出しきって戦った。

全国の寺社はことごとく「敵国降伏――」の熱禱をこらし、北条時宗は陣頭に立ち、亀山上皇は宸筆の御書を八陵に献じて勝利をご祈念なされた。

文字どおり上下をあげて戦って、そしてついに勝利を得たのである。

ところが、その勝利が、間もなく幕府瓦解のもとになったのは何故であろうか？
北条時宗の逝去によって戦後の処理に威厳を欠いたからであった。
人々は戦のために貧窮をきわめていた。しかもなお、戦の続いている間はその貧窮の奴隷にはならなかった。
ところがいったん勝利をおさめたとなると、貧窮はそのまま不平不満を育ててゆく、怖るべき怪物だった。
「――あれほど真剣に戦ったのに！」
「――勝利は、われ等の奉公があったればこそではなかったのか」
寺社も、地侍も、大名も庶民も、みなこの不平不満の虜になった。
いや、その貧窮の怪物を制御して、彼等を怪物の手にゆだねぬだけのきびしい用意が幕府になかったからであった。
戦後の貧窮は、より長く戦の続いた場合の貧窮とは比ぶべくもない。そして、その結果の敗戦に比較したらそれこそ雲泥の差でなければならない。
にもかかわらず人間は、この不平不満の怪物には手もなく喰い散らされる弱さを持っている。
家康はその事を心に刻んで、いま、その怪物の忍び寄る隙間を封じようと、これも考えぬいてあった戦後処理の道へ踏み出す姿勢を取ったのだ……
家康は続々と大坂へ集る諸将の引見がひと通り済んでゆくと、九月三十日に至って、井伊直政、本多忠勝、榊原康政の三人を呼んで、福島正則と黒田長政に、入城後初めての命令書を伝えるように申し渡した。

「さ、お許等三名、それに署名して、福島と黒田に渡すがよい」
その文面に眼を通して、さすがに彼等は顔色を変えた。唇の色をなくし、息を詰めて顔を見合った。

八

それは祐筆の手になって、もはや三名連署すればそのまま福島正則と黒田長政に渡せるよう、日付まで「九月晦日」と書き込まれてあった。

一、薩摩への手だてについて、広島まで中納言（秀忠）を出勢致さすべく候条、太閤様のおきめのごとく、路次すじの諸城へ、番手入れおかるべきこと。
一、御家中年寄衆、質物差出さるべきこと。
一、輝元御内儀、前々のごとく、当地上屋敷へお移りあるべきこと。
一、薩摩ご陣先へ輝元ご自身、ご出陣あるべきこと。
一、このたびの上りの衆（東軍諸将）の質物（人質）急ぎ返上なさるべきこと。
右の旨相済み候うえ、藤七郎どの（毛利秀就）に対面申さるべきよしに候。以上。

九月晦日

羽柴左衛門大夫殿

黒田甲斐守　殿

いうまでもなく、これは、今まで毛利家と東軍の間をあっせんして来ていた、福島正則と黒田長政宛に、徳川家の三老臣、井伊直政、本多忠勝、榊原康政の連署で、家康の命令を伝えようと

いうことなのだ。
しかし、これは井伊にとっても本多にとっても、全く思いがけない難題だった。
もしこれを、福島正則や黒田長政に見せたら、彼等は何というであろうか。
「――こんなとぼけたことがござるものか。これでは内府さまは大嘘つきじゃ！」
恐らく烈火のようになって怒り出すに違いない。長政にしても正則にしても、毛利家の所領には手はつけぬ。又、処罰はしないという約束で、輝元におとなしく大坂城を明け渡させたのに違いないからだった。
そういえば確に家康はその事を承知したとも、許すとも、いっていなかった。その交渉には井伊と本多忠勝が直接あたり、家康は自身で誓書は出していない。
しかし、井伊と本多が、黒田、福島の両将を通じて、毛利家の吉川、福原などと交渉して来た経過は、一々家康の耳に入れてあることだった。
それなのにこの命令書を見ると、そうした事は一切無視されている。
「――秀忠に薩摩征伐を命じたゆえ、広島の城は明け渡せ。家中の者や重臣には人質を出させ、輝元の奥方も当地の上屋敷に移し、輝元自身は薩摩の先手をせよ。そして、今迄に取ってあった人質を、それぞれ諸家へ送り返したならば、家康は秀頼と同年輩の嗣子の藤七郎秀就に、目通りを許してやろう」
と、いうことではないか。
「上様いかになんでも、これは、福島や黒田の許へは持参致されませぬ。これでは、彼等の面目がまるつぶれでござりまする」

しばらくして年長の忠勝が口を開くと、家康は、間髪を容れずに問い返した。
「そうか。すると、こんどの戦を、お許は、福島や黒田の面目が立てばよい戦と思うていたのか」
「いや、そうではございませぬが……」
「そうでなくば持参せよ。輝元は西軍召集の檄を天下に飛ばした、大老であり張本人じゃ」

九

忠勝はギクリと語気に詰って、あわてて井伊直政をかえりみた。
理屈は家康のいうとおりだった。しかし、実際に毛利勢は関ケ原では動いて居らず、こんどもまたおとなしく西の丸をあけ渡しているのではなかったか。
「恐れながら……」
忠勝が口を閉してしまったので、井伊直政は、何かいわなければならなくなって来た。
「輝元には確に不都合がございましたが、これを説き伏せ、敢えて戦わせず、西の丸を退散させたは福島、黒田のご両人……ご両人の面目相立ちまするようご再考のほどを」
家康はこんどは直ぐには答えなかった。
輝元の不都合は認める。が、福島正則と黒田長政は本気で輝元の所領安堵を信じて交渉しているものゆえ、顔の立つようにというのだから、本多忠勝のいい分とはひらきがあった。
「直政、お身はこの家康が、両人のことを考えて居らぬと思うか」
「それは、上様の御ことゆえ……」
「そうじゃ。充分に、あれこれと思いめぐらした結果なのだ。よいか、輝元へは上杉征伐に大坂

を発するおり、何事によらず兄弟のごとく致すべき旨、この家康から誓書を与えた。それをお許も知っていよう」
「されば、ここでその兄弟のごときご度量をもちまして……」
「黙らっしゃい」
「はッ」
「わしの方で兄弟のごとくと誓書を書き与えて出発したのに、すぐそのあとで『内府ちがいの条条――』につけて、輝元は日本国中へ何を宣言し何を布令たと思うのじゃ。わしはその文章までハッキリと覚えて居る。去年来内府おん置目にそむかれ、上巻誓紙にたがわるるほしいままの働き、奉行年寄一人ずつ相果て候ては、秀頼さまいかで取立てらるべく候や。その段に存じ詰め、今度合戦に及び候。お手前もご同然たるべく候……と熱心に西軍加担を勧誘して居るのじゃ。何も考えず、うっかり、安国寺や治部少の手に乗せられたなどと申して済むことと思うてか。その段存じ詰め……とは、思案の限りを尽したという意味であろうが。それに堂々と秀家と連署して、日本中に配布したのだ。その責任を取らねば輝元自身の武士が立つまい。それが労らねばならぬほどの兄弟か。どうじゃ直政」
直政ははげしい家康の怒声にあって、口を噤んだもののまだ承服は出来なかった。
誓書など、今の世では誰もさして重要視していない。問題は、あの関ケ原で毛利勢が敢えて反抗しなかった……いや、させないようにあっせんした黒田や福島の功績を認めよと、直政はいっているのだ。
「直政、腑におちぬな」

「はい。輝元の不都合は相わかりまするが、それがしのお願いは……」
「聞くに及ばぬ。では両人にこう申せ。輝元は天下に向って許しがたき檄をとばし、わざわざ地上に乱を招いた不届者、それゆえ、その所領は、これを召上げて、吉川と黒田、福島の三名に加増するつもりであった。だが、輝元の本領を安堵せねばみなの顔が立たぬと申すなら、加遠慮してみなで輝元をかばうか、どうじゃと申せ」
いわれて、井伊直政の額には、ムクムクと癇筋が浮きあがった。
「上様！　それで、そのような小理屈で、天下のお仕置がなると思召されまするか」

十

井伊直政に喰ってかかられると、はじめて家康はニヤリとした。
始めからこうなることを予期していたらしい。
「今の申しようはお許が正しい。しかし兵部、ここで輝元の所領をそのままにしておいて、天下の人心が改められると思うてか」
井伊直政は気勢をそがれて咄嗟に返事が出来なかった。家康はただの憎悪や感情だけでものをいっているのではないらしい。それが薄ら笑いの奥にはっきりと読みとれるからであった。
「輝元をこのまま許したら、景勝も許さねば相成るまい。輝元・景勝を許したうえは、秀家も行長も義弘も罰せるものではない。筋が通らぬからの。さすれば、罰し得るものは三成と恵瓊だけか……」
「さあ、それは……」

「この二人だけの所領で、どう献身して来た人々の功を賞してゆくのだ。すでにあちこちと現地で地図は変っている。それを改めて返還させ、何も論功行賞を行なわずに、それで味方した人々が納得してゆくと思うか。それこそ日本中は不平の渦にまき込まれ、蜂の巣をこわしたような私闘の巷に変ってゆこうぞ」

家康はそういってから、こんどは本多忠勝をかえりみて、

「ここでは、一応日本中を白紙に還す。そして、信長、秀吉、家康と、三代を通じての悲願であった日本国統一と泰平招来の鏡に映し直し、器量と働きに応じて所領の分配を仕直すのだ。この鏡に誰がどのように映ってゆくか、誰がどれだけ熱心に、三代の悲願に献身して来たか……これを決めるのは家康では無うて、その鏡なのだと思うがよい」

忠勝は頷いて直政を見やった。

榊原康政だけははじめから感情のうごきは見せずにいる。彼は関ヶ原の戦に加わらず、秀忠と共に中山道をすすんで来ているので、直政や忠勝ほど、毛利方の者と密接な交渉を持たずに済んでいるからだった。

「わかったの、兵部どのも」

家康はこんどは直政にどのをつけて、若い者を説くときの口調になった。

「以前のわれ等は、わが家の足許を固めてかからなければならなんだ。わが家が無うては、理想も悲願もあり得ない……しかし今は違うのじゃ。わが家第一の観点から、日本国の安泰第一の立場にわが身をおき替えて物事を見ねばならぬ。そして欣求浄土の工夫をきびしくこらしてゆく気なのじゃ。むろん毛利とて、あとかたもなくする気はない。事実、吉川広家には手柄があった。

それゆえ、黒田、福島などが激昂した節は、吉川の手柄分として……そうじゃ、周防、長門の二国、凡そ三十五、六万石がほどは残してつかわす家康が肚づもりじゃと申せ。それを懇々と説き聞かせて、若し聞き入れなんだら是非に及ばぬ。毛利はこの際踏みつぶすと申してやるがよい」

直政は、一度うなだれ、それから又じょじょに頭を挙げて家康を見つめていった。

（これは並の決心ではないらしい……）

そういえば、小山にあったおりの、不利な情報まで、いちいち丹念に豊家の旧臣たちに通報していった、あの立場と同じ決意らしかった。

いや、それよりも、三成や恵瓊の所領を没収するだけで、東軍全体の行賞が成ろうか……そういわれた事実も強く了解出来た。

「わかったらしいの。わかったら今日のうちに手筈をせよ」

家康はまた口調をはげしくした。

十一

もはや井伊直政も本多忠勝も、家康の命のままに動くより他になかった。

彼等は早速差し出された命令書に連署して、井伊直政が、これをささげて、先ず福島正則に示し、それから黒田長政に通達した。

両人が眼のいろ変えて抗議したことはいうまでもない。

「――これは島津攻略に名を藉りた征伐ではござらぬか。かかる命令を取り次ぐことなど思いも寄らぬことでござる」

しかし、福島正則や黒田長政の場合まだ味方のうちゆえ説きよかった。
これを、ひたすら吉報を待ちうけている毛利の家中へ取り次ぐ責めを負わされた福島、黒田の立場は、いいようもなく苦しいものであった。
家康に、前の約束などは知らぬといわれると彼等が、井伊や本多と打ち合わせて、毛利一族を欺いたことになってくる。
しかしまだ輝元と家康の間は和議以前の戦争状態なのだ。命令とあれば、これを取り次がぬわけには行かなかった。
「わしはご免蒙る。これは、甲斐守どのに頼もう」
福島正則は例の一徹さで、その伝達を黒田長政におしつけた。長政は使者を立ててこれを吉川広家のもとに届け、自身では、広家からの詰問に、何といって答えようかと、頭をかかえて自邸にこもった。
案のごとく、広家のもとから、早速お目にかかりたいといって来た。一度は不在だといわせ、二度目はまだ戻らぬと返事をさせた。
しかし三度目の使が来ると、長政はもう筆を取らずに居られなかった。
(天下のことはむごいものじゃ……)
長政にすれば友情も交えた取りなしだったが、終ってみるとそれはささやかな情の繫りなど、介在を許さぬ非情な条理が先立っていた。
「天下のため」
その前では人情など抹殺してゆくより他にない。

一、輝元ご身上の儀は、福島正則と申し合せ、いろいろ取りなし申候得ども、何分、奉行共に一味なされて西の丸へ移られ、諸方への廻状の数々に御判を確に押され候うえ、四国まで兵を出されてあれば、かたがた以て是非に及ばぬ儀に候。

一、貴所さま御律義のことは、兵部少（井伊直政）も、残るところなく御前にお取りなしあって、中国のうち、押え取った一、二国は、お方さまへ下さるべきの旨、ご議定候よしに候。この上は内府様直々、お墨付を取り候てすすむべきの由、兵部少堅く請合い申され候。

一、兵部少より呼ばれ候得ば、早速おいでこれ有るべく候。御供は馬廻りばかり三、四人召連れられるが然るべくと存じ候。槍などは無用に候。拙者儀貴所さまに対し、全く、お身をハメ（欺く）る意あってのことにはこれなく、その段よろしくご分別のため申し含め参らせ候。

恐々謹言。

右を偽るにおいては、日本国中大小の神祇御罰たちどころに蒙るべきものなり。

長政

広家様　人々

口ではいい得ぬことも筆ではいい得た。それを使者に渡して、長政は、広家が、自分の立場と同様、家康の悲願の不退転さを理解してくれるようにと、ひそかに祈った……

十二

吉川広家は黒田長政の手紙を見ても、さして驚く様子はなかった。

すでに前回の命令で、家康の肚は読めていた。いや、何度使いを出しても会おうとしない長政

の態度が、次第に彼に冷静な判断の時を与える結果になっていたのだ。

感情の上ではいいようもなく無念であった。輝元が西の丸へ入っていたことも、廻状や檄文に署名捺印していたことも、家康はじめ、みな知り尽していたに違いない。

が、それまでの往復文書にそうした記載はして無かった。輝元の無計算さがはずかしく記すに耐えないからであり、当然相手も知っていることだという油断もあった。

（巧々と虚を突かれた……）

しかし、立場を変えて、広家が家康だったとしてもこうするより他にあるまい。

それほど輝元の行為は不用意であり軽率であった。とにかく西の丸に入って、秀頼のそばに幼い秀就まで出仕させ、自身は西軍の総帥として命令した形になっている。

今にして考えれば、関ヶ原で南宮山から下るべきだった。そして東軍のために一戦してあれば、それまでの過去は白紙に還ったに違いない。

いや、関ヶ原では動き得なかったとしても、大津で東軍に合すべきであったが……今はそれも死児の齢を数える愚痴にすぎない。

広家は長政の手紙を見ると、そのまま机に向かって嘆願書の筆を執った。

一、案外の逆乱、とほうに暮れ候について、先達てお願い申し上げ候ところ、ご両所様（福島・黒田）お心遣いにより、私、身の上の儀を聞し召しわけられ、かたじけなき御恵みのご内意、今生は申上ぐるに及ばず、後生まで忘却仕るまじく候こと。

一、この度びの儀、輝元心底より出で申さざる儀、安国寺の調義をもって、奉行衆の申分に任せ、西の丸にのぼり、秀頼様に対しご忠義のように相心得候段は、輝元心のねれたる分別ご

ざ無く候ゆえのこと、各々さまご存知の如く、是非もなき次第にござ候。然りといえども、向後内府さまに対し、野心なく御忠節仕るべき段は全く別異ござあるまじく候。毛利と申す苗字ばかりとも御立て下しおかれ候よう、御心遣い頼みたく存ずるまでにござ候。輝元をさしおき、私儀のみ御恩を蒙り候ては、私一分の身の上を気遣うて、本家を見捨て候ようにて、この段本意にあらず候。輝元心底は申すに及ばず、他人の見聞にも面目これ無き次第なれば、輝元同様、罰仰せつけられ候よう、幾度もおことわり申上ぐべき覚悟、他事ござなく候。

一、この度びお恵みをもって、毛利一家御立置下され候においては、向後逆意の残党候とも、輝元において全く此度びの御恵み忘却仕らず、万一にも不届の心底きざし候わば、その節は私一分の才覚をもって、本家の儀にござ候とも、相果し候て、しるし（首）差上げ、一途に御忠義仕るべく候こと……

書いてゆきながら、何度か広家は、唇を噛んでは眼を閉じた。この一文に祖父元就以来の、毛利家の運命すべてがかかっている……そう思うと、泣くまいとしても涙が出て来てとまらなかった……

十三

吉川広家は、家康の代理として、井伊直政から呼出しのある前に、この嘆願書を黒田長政と福島正則の許へ届けさせた。

むろん宛名は両人で、自署の下には躊躇なく血判を据えて送った。

黒田長政と福島正則は、これを直ちに井伊直政に見せ、更に、本多忠勝を加えて、四人で家康の前へおもむいた。その時家康は、卜斎に写させた日本地図をひろげ、べっこう縁の眼鏡をかけて熱心にこれを覗き込んでいた。

地図にはそれぞれ国の名と主要な城下町の名はあったが、領主の名はまだ空白であった。

家康は、黒田長政の短い説明のあとで、吉川広家の血判した嘆願書を差し出されると、一度額にあげた眼鏡をおろして、ジーッとそれを睨んでいった。

四人は一様に息を詰めて家康を見詰めていった。そして家康があわてて眼鏡をはずすとホッとした。家康の眼鏡はすでに濡れている。眼鏡をはずすと眼のふちがまっ赤であった。

「同じ元就の孫でのう」

と、家康はいった。

「本家のほうが、このような器量の劣る場合がある……みなにとっても、これは大きな訓えじゃ。よし、卜斎、起請の用意を」

そして卜斎が筆を執ると、家康は眼の前の地図の、周防と長門の二国に朱で「毛利――」と書き込んで口述した。

一、周防・長門両国進めおき候こと。

一、御父子身命、異議あるまじきこと。

一、虚説等これにあるに付ては、糾明をとぐべきこと。

「宛名は……」

と、訊かれると、

「いうまでもない。安芸中納言（輝元）殿、毛利藤七郎殿（秀就）そして日付は十日にしておくのじゃ」

その日はまだ三日であった。黒田長政は小首を傾げて、

「日付は、十日でござりまするか」

家康はコクリとした。

「この七日間は家康から広家への贈りものじゃ。これがすぐ届くと、輝元はまだプリプリしていよう。事によると、その位のものを貰うほどならば切腹したがよいなどというかも知れぬ。が、七日後には涙を流して広家を有難がろう。毛利家を救った者は吉川広家だったと、はっきり眼がさめ腹に入るのには、七日はかかる輝元じゃ」

そういってから又何かを思い出したように、

「そうじゃ。これだけ思慮のある男じゃ広家は。この誓書だけではなく、秀忠の墨付も欲しいというやも知れぬ。が、それは出さぬゆえお許から、よくよく安心するように申してやるがよいぞ」

黒田長政にいって、それから誓書に署名と華押を加えていった。

「これで所領が決り出したぞ。よし、この両隣から書き込みにかかろうか」

これは独り言のようでもあり、充分四人を意識したうえのねぎらいのようでもあった。

家康はかんたんに太い指さきで眼鏡をふいて、それをかけると、周防の東隣の安芸の広島の近くに、朱で福島と書き入れ、それから海を距てた筑前に黒田と書いた。

いよいよ毛利の処分が決って、家康の構想の夜明けがやって来たのである……

女の意地

一

京都三本木にある秀吉の北政所、高台院の許へは関ケ原の合戦以来、さまざまな訪客が絶えなかった。

甥の小早川秀秋はいわずもがな、これも甥の浅野幸長、福島正則、黒田長政などが次々に戦況を知らせて来る。いや、そうした豊家子飼いの人々だけではなく、徳川家から所司代の奥平信昌が見舞いといってやって来たり、茶屋四郎次郎はじめ、淀屋、本阿弥、納屋、今井などの京、大坂、堺の商人から茶道衆まで、何かにことよせて立ち寄るのだった。

みなそれぞれ「見舞い――」という名で何程かの情報をもたらして来るのだが、高台院はつとめてそれ等の人々に会わなかった。

丁重な挨拶は孝蔵主に受けさせ、軽い相手には慶順尼に代理をさせた。

したがって九月十五日の決戦以後の出来事は手にとるようにわかっていった。

わかればわかるほど、高台院は人々に会うのがうとましかった。

よくよく高台院の心を知る者でない限り、人々は高台院が三成を憎み、淀君を憎み、したがって淀君の子の秀頼をも憎んで、家康に加担したものと解しているようすであった。

中には露骨に、

「――お芽出度う存じまする」
そういう者さえある。
そして、その頃から、一度下火になっていた、悪性（あくしょう）の噂がまた邸内に立ちだしていた。
「秀頼君の、ほんとうの父親は誰であろうか？」
もともと秀吉には子種（こだね）がなかったのだ。それなのに淀の方だけ二度も孕（はら）み、他の者には一度もその例がなかった。そのような奇蹟（きせき）はあり得るものではない。鶴松君と秀頼とまことの父親は一人であろうか。一人とすれば、大野治長であり、二人だったとすれば、大野治長と石田三成ではなかろうか……そんな噂が、高台院を慰め得るかのように囁（ささや）かれる空気は、勝気な高台院にとってはたまらなくやりきれない不快さだった。
それにもう一つ、次々にやって来る訪問客の目的があらわに見えだした。
それは高台院の口添えによって、家康の天下に生き残ろうとする、私心（ししん）の見え透（す）いた日和見（ひよりみ）の旧臣たちであった。
（このままでは、豊家を売ったは高台院……）
そんな答えさえ出されそうであった。
その日も安国寺の知己（ちき）だったという東福寺の僧侶が訪ねて来たと取り次がれて、
「慶順尼に会うように」
取り次ぎに来たお袖（そで）に命じた。
九月三十日の朝で、もうその訪客の用件はわかり過ぎるほどにわかっている。
二十六日に大津を発した安国寺恵瓊（えけい）と、小西行長、石田三成の三人は、大坂から堺を引きまわ

された後、京都に引立てられて所司代のもとで処刑の日を待っているのだ。

若しこれらの人々の助命を、家康に乞い得るものがあるとすれば高台院の他にはない……そんな気持でやって来るのだろうが、今更そうしたことが出来る筈のものではなかった。

三成を助けようとすれば、秀頼の罪が加重するし、安国寺に助言すれば、毛利は許しがたいものになろう。

「もはや、処刑のすむまでは誰にも会わぬぞ」

立ちかけたお袖にいって、ふと高台院は、お袖の眼がまっ赤に泣き腫れているのに気づいた。

二

気がつくと、高台院は、黙っていては済まぬ気がした。

「そうじゃ、こなた、慶順尼に取り次ぎ終ったら、またここに戻ってたもれ。ちょっと話しておきたいことがあるゆえ」

お袖は顔をそむけるようにして出て行った。

こんどの戦のことで、敗れ去った諸将の感慨は別にして、いちばん大きな打撃を受けたのはお袖だったかも知れない。

お袖はふしぎな女であった。

ひと一倍、深い情けを持っていながら、生涯それと反対の立場にばかり立たせられて来た女であった。

（もしもわらわが、お袖のように、遊女にされていたとしたら……？）

高台院は幾度かそうしたことを空想して、自分でびっくりしたことがある。お袖の気性や生れつきの中に、時おり高台院自身の姿を見るからだった。勝気で、強情で、淋しがりやで、理想家で。その上もう一つよく似ているのは、何としても他人が憎めず、会う人、見る人に、それぞれ曳かれてゆくことだった。

お袖は小女郎と言われた遊女時代にも、次々客に惚れたらしい。むろんそうしたお袖の捧げものは、そのまま酬われる性質のものではない。したがって、結果はいつも、より深く哀れな孤独であったに違いない。

（惚れては裏切られ、裏切られては又惚れる……）

その結果が、神谷や島屋から、石田三成の許へ間諜として送り込まれることになり、更に、三成から高台院のもとへ行けと言われる原因になったらしい。

そして、誰も深くは憎み得ず、次々に悲しいまごころを捧げてさすらう……

高台院には近ごろのお袖の望むもの、欲するものが何であったかよくわかる。

彼女は三成の妻子の生命乞いをしたかったのだ。

もうすっかり成人している者の生命は助け得なくとも、その奥方や、まだ幼い二人の姫位は、高台院の口から助命の申し出がありさえすれば助けられると思っていたのだ……

いや、高台院も、実は、それを許ろうてやる気であった。家康は、それほど狭量な人物とは思えなかったし、高台院の嘆願があったとなれば、むげにしりぞけもすまいという自負もあった。

ところが事情は急転直下、関ヶ原はあっという間に片付いて、その飛火がそのまま佐和山城を焼き尽してしまったのだ。

その間に、高台院などの口をさしはさむ余裕もなければ時間もなかった。

三成の兄の木工頭であろうか、それとも父の正継の性急さからであろうか、家康自身がびっくりするほどの素早さで、自から一族を焔の底へ葬り去ってしまったのだ。

恐らくお袖は、その幼い者の助命によって自分自身の良心を慰撫するつもりであったであろうに……

お袖が、取次を果して戻って来た。

「慶順尼に、お言いつけの通り、申上げてござりまする」

「ああご苦労でした。さ、もそっと前へ出るがよい」

高台院はそう言って、思い出したように、

「そうじゃ。まずその香炉に火を添えて……これからわらわは、こなたと二人、高貴なこころで話し合いたいことがあるゆえ……」

わざと気軽に笑いかけた。

三

お袖はいわれるまま、香盆を引きよせて浮牡丹の香炉に蘭麝を燻じていった。

「これはまた、なまめいた気になった……」

高台院はもう一度声に出して笑ってから、

「こなたほどの者が、今日はまた、何故あって眼に紅までさしたものじゃ」

「はい。これで何も彼も決りました……そう思うと残りの涙が我儘な……お羞しゅう存じまする」

「お袖、こなたとわらわは、似たところがたんとあるぞえ」
「もったいない。上様などと比べる身ではございませぬ」
「こなたもわらわも、強情者の弱虫じゃ」
「もったいのう存じまする」
「でも、こなたもわらわも、たった一つだけ誇れるものを持っている……こなたそれに気付いてか」
「はい……いいえ、そのようなものは、私には」
「そうではない。女子としてはこなたもわらわも同じこと。いつもただ一つ、いちばん正しいことをして死にたいと希うて来た」
お袖は不意に面を伏せた。近ごろめっきり薄くなった肩が小さく震えている。
「そうであろうが、なあお袖……これが正しい！　そう思うとそなたもわらわも、誰にも譲らず、それを通した。いさかいもした。喰ってもかかった。裏切られても憎まずに、また、おのれに矛をむけては、正しいことをと追い求めた」
「上様！」
「泣くがよい。思うさま泣くがよい。わらわもな、こなたのために、生命乞いしてやる人のあることには、とうから気付いて居ったのじゃ。しかし、それも叶わなんだ……」
「上様！」
またお袖はうわずった声で呼びかけると、
「私に……お袖に、お暇を……下されとう存じまする」

高台院はハッとして息をのんだ。

まだ、そこまでいい出すとは思ってもいなかった。

「それはならぬ。まだ早い」

「いいえ、早くはございませぬ。もうすべてが終ってございまする」

「お袖……」

高台院は語調を変えて、

「こなた、治部どのの処刑の日を聞きやったな？」

「はい。明日と……いま、東福寺の長老さまがおっしゃってでございました」

「それで暇が欲しいというのか。なりませぬ。治部どのがこうなることは、こなた前から知っての筈じゃ」

「は……はい」

「それどころか、こなたは以前に何というたぞ。治部は太閤殿下と離れては、生きられぬ争い好きな生まれつき、それゆえ意地を立てさせて、一時も早よう殿下のお側へやらせたいと」

「………」

「その治部が意地を通して捕われた。治部とて決して悔いてはいまい。笑うて処刑の座に直ろう。その折りに、そなたがここから暇を取って、もし殉死でもしてのけたら、治部の意地に傷が付こうぞ……女子はの、じっとこらえて陰の供養をするものじゃ。その方が死よりも遥かに辛いのじゃ。こなたほどの者が易きに付こうとは思うまいぞ」

四

お袖はしばらく、嗚咽をこらえて、全身を固くしていた。
何も彼も高台院に見透されている。
殉死――とまでは考えてなかったが、彼女の力では、生前の三成にも、これからの三成にも何も餞けてやれなかったと思うと、生きている気力がなくなっていた。
自分でハッキリと意識はしていなかったが、若し遺族の手から幼い姫の一人でも救い得たら、その幼い者のそばに馳せつけ……そんな希いが生きる望みになっていたらしい。
(何も彼もなくなった……)
そう思ったときに、お袖は、今日まで張りつめていた心の弦が切れてしまった。
高台院はいま、自分とお袖をふくめて、強情な弱虫と表白した。その強情の支えの弦は断ち切られて、お袖に残されたのは「弱虫――」だけになった気がする。
この弱虫を鞭打って、果してこれから高台院の求めるような、辛さに耐えてゆけるであろうか。
「なあお袖……」
高台院はまた、おどけていると見えるほど砕けた親しさを語韻にこめて囁きかけた。
「わらわだの、こなただのという女子は、自分の殿にはきびしいものじゃ。いちいち相手に抗うて、底意地わるくいじめるものじゃ。な、こなたも覚えがあるであろう」
「は……はい」
「それが、いったん殿のお側を去ると大きな悔いになってくる。憎うて抗うたのではない。愛お

しくて愛おしくて、誰にも非を打たせとうない……その一心でいじめたのじゃ」
「ほんに……そう、らしゅうござりまする」
「それが、果して相手に通じているであろうか。若し逆であったらどうしよう……何か心に含むところがあり、いちいち抗うたと受取られているのではなかろうか……そう思うと、それ、死んで臓腑の底まで見せとうなろう」
　高台院はそこまでいって口をすぼめて笑いだした。
「ホホ……太閤に亡くなられたおりのわらわがその地獄に落ちた。だがのう、よう考えてみると、これはわが身のひとり相撲じゃ。朝夕殿のいうままにおのれを殺して仕えていたらどうであろうぞ……？　それこそ悔いは二重三重……殿御じゃとて誤り多い人間じゃ。その誤りは、みなわが身が口を噤んで、まことの忠告をせなんだせいではなかろうかと……この悔いの方が、どれほど切なく身をさいなむか」
「…………」
「ホホ……やはり人は、人おのおのの気性を生かしてゆくより他に生きようはない。こなたも今は、わらわが覗いたとおなじ地獄のふちにある」
　お袖は頷くより他になかった。
　この屋敷に来た頃はまだお袖は、自分が三成を愛していたとは気付かなかった。
　それゆえ本阿弥光悦に、
「――私の好きな殿御はあなたのような……」
　戯れではなく、そんなこともいい得たのだ。

ところが、三成が大垣へ出陣したと知ったころから、お袖の心はぐいぐい三成に手繰り寄せられた。
（三成の刺せといった高台院は刺しもせず、このまま石田一族を滅亡させていったとしたら……）
その怖れは的中した。いまこの世にただ一人生き残った三成が、明日はいよいよ旅に立つ……

五

三成をこの悲劇の中へ立たせた原因は、無数にあった。決してお袖ひとりの責めではない。
しかし、お袖が三成のそばにあって、その決心を煽ったことは事実であった。
いや、三成はそのようなことに依って、微塵も動かされはしなかったと信じているに違いない。今でもきっと、何を婦女子の知ったことかと、例の気性で胸をそらしているであろう。
それだけにお袖は一層切なかった。
装われた男の強さの裏の裏まで見て来ている。三成は人一倍こまかい神経を持った男なのだ。
（その三成をひとりで黄泉の旅に立たせてやる……）
そう思うだけでお袖はたまらなくなって来るのだ。
「お袖……」
高台院は、また呼びかけて、
「こなたは、まだ危い地獄をのぞいていやる。そこから眼をそらすことじゃ」
「は……はい」
「治部に抱くこなたの情は美しい。それはの、女子だけに恵まれた母の心じゃ。しかし、同じ

母、同じ妻女の心の中にも上品・下品の差はあろう。こなたはその心を上品の座に据え直し、治部の菩提を弔うこころになりなされ」
「はい……」
「そうじゃ。明日処刑と決ったならば、そなたの目で処刑のさまを見て来ることじゃ。さすれば治部が、何をのぞみ、どのような心根で旅立ったか、それがこなたに分かるであろう」
「………」
「そのうえで、治部の墓を建てておやりなさるがよい。治部はたしか、東福寺とはかくべつ深いゆかりを持つ筈……そこへこなたの手で墓を建て、香華を手向けてやるがよいのじゃ」
「ありがとう存じまする」
お袖はそっと両手を突いて涙をこらえた。
高台院が、何を案じていてくれるか……それのわからぬお袖ではなかった。
その癖心では、少しもそれに慰められてはいなかった。納得しているのではないからだった。
（いわずとも見送らずにいられるものか）
そんな反撥が、小さな虫を刺戟する。
「わかったような……わからぬような……と、いうところじゃなあお袖。無理もあるまい。よい。退って休め。そして明日は治部を見送って、そのまま此処へ戻るのじゃ。これはこの尼の命令じゃぞえ。暇をやるやらぬはそれからのことと思うがよい」
「は……はい」
お袖はもう一度静かに頭を下げて高台院の居間を出た。

そして別棟の自分の部屋へ戻って来ると、ぼんやり手を束ねて坐りつづけた。
すでに中秋もすぎようとして、めっきり空気は冷えて来ている。が、その冷えが、お袖には季節の冷えとは受けとれなかった。
体中の意志や気力が燃え尽し、灰だけの自分になった……そのための冷えのような気がして来た。
その夜お袖は、自分がほんとうに眠ったのか眠らなかったのかわからなかった。ただ気がつくと朝であり、庭で小鳥が囀りだしている。
お袖は起き出すと、慶順尼に外出のよしを届けて憑かれたように七条河原へ向けて歩いた。

六

街は何となく殺気立っていた。
平素より人出の多いのは、堀川出水の所司代の邸から、一条の辻に出て、室町を下って寺町に入り、それから洛中を渡して七条河原という……告示された三成等の通路だけで、その他はふだんと大して変りはなかった。
それなのに、どの小路で出会う人も、何か妙に殺気立っている。何れも今日、この都で何があるかを知っているからでは無かろうか。
お袖はなるべく人影の少ない路地を選って寺町まで出ていった。
そして、そこから三成のあとについて七条河原へ出てゆく気であったが、着いてみると、まだそのあたりはひっそりしていた。

と、いって、このあたりにそう長く腰のおろせる所も無かったので、山沿いにそろそろと四条の方へ歩いてはまた引っ返した。

今日の処刑はいうまでもなく、三成だけではない。安国寺恵瓊も、小西行長も一緒であった。

三人とも車に乗せられ、都のうちを引き廻されて一緒に斬られる筈なのだ。

（どのような姿で引き廻されて来ることか……）

それが見たくもあり、見るのが恐ろしくもあった。

こんな筈はない。三成以上に人世の苦を舐めて歩いて、はげしい叱撻をあびせたほどのお袖ではなかったか……？

お袖は、到頭寺町に人波があふれだし、

「あ、来た来た、やって来たぞ」

「ほんに、ひどいほこりじゃ。ぞろぞろと車のあとはいっぱいの人ではないか……」

「みな七条河原までついてゆく気の見物じゃぞえ」

そうした会話を聞いていると、たまらなくなって、また一人先に川下へ向ってしまった。

空はからりと晴れている。何事もない日であったら、そぞろ歩きに申分のない日和なのに、何故か咽喉がカラカラに乾いて困った。

（どうせあの人波では、近づいて見ることは叶うまい……）

やはり先に七条河原へ着いていて、よく見える場所から唱名をしてやろう……若し相手が自分に気付くようなことがあったら、静かに笑いを返してやって……いや、果してその時笑って見

せる余裕が自分にあるかどうか……
もう、車は寺町へ着いたらしい。そのあたりはいっぱいの人で、その人々の捲きあげるほこりが白い煙のように、あたりの空気を濁して東へ流れている。
お袖は刑場までもう振返るまいと思い、かつぎをささげた両肘をおろして足を早めた。
と、うしろからこれも続いて来た四、五人の足音の中から、
「それへお出やるは、お袖どのではないか」
声をかけられて、お袖はギクリと足を止めた。
「おお、やはりそうじゃ」
つかつかと寄って来て、かつぎのうちを覗き込んだのは本阿弥光悦であった。
「きっとこなたも見送りに来ると思うていた。いや、わしもそうせずにいられなかったのじゃ」
「まあ……」
「お袖どの、歩きながら話そう。今迄わしは心の中で治部さまを軽蔑していた。ところが、今日は見直した。わしの誤りだった。治部さまは、哀れな時勢の犠牲だったのだ」
ひどく昂ぶった表情でいいだした。

七

それが、三成ぎらいの光悦の述懐でなかったら、お袖は軽い会釈で行き過ぎさせていたに違いない。
だが、徹頭徹尾三成をきらっていた光悦の口から、三成を見直したと言われると、歩調を合わ

せて聞き返さずにいられなかった。
「哀れな時勢の犠牲者……とおっしゃりましたなあ」
　光悦は大きく頷いて肩を並べた。
「時勢の犠牲者……と言うてわるければ、太閤殿下の犠牲者と言い直してもよい。とにかく治部さまは並のお方ではない」
「どうして、そうご意見をお変えなされたのでござりまする」
「実はな寺町の休息所で、治部さまは、警護の者に、咽喉が乾いたゆえ湯が欲しいと仰せられた」
「まあ、咽喉がかわいて……」
　お袖はそこで、思い出したように唾をのみこんだ。彼女の咽喉もカラカラに乾いている。
「ところが近くに湯も水も無いようだった。そこで警護の侍は自分の腰から、甘干しを取り出して治部さまの前に差出した」
「甘干しとは……？」
「柿の甘干しよ。まだ水分を含んでいかにも柔く美味そうな柿であった。咽喉が乾いておわすならば、湯の代りにこれを一つ召上られよ。これで咽喉はうるおいましょうと」
「それは、ご親切な」
「ところが治部さまは、柿は痰の毒ゆえいらぬと素ッ気なくおことわりなされた」
「まあ……」
「すると、相手もムッとした顔になり、間もなくご処刑にあうお方が、食養生の毒断ちでござりまするかと言い返した」

光悦は、自分の言葉の反応をお袖の表情から読み取ろうとして視線を横顔に近づけながら言い続けた。
「すると治部さまは、その者をはげしい声で叱りつけられた。何を笑うぞ、大丈夫というものは、息をひきとる瞬間までわが身を大切に扱うものじゃや。覚えておくがよいと」
「まあ……」
お袖はがっかりした。
もう三成はそうした詰らぬ対抗意識から解放されて、悠々と自分の生命の最後のありようを客観していると思っていたのだ。
「わしはしみじみ頭が下がった。これは並みの者に掴みとれる心境ではない。大抵の者ならば、もう運命に負けた姿で、茫然としているものじゃや。叱りつけるだけの自信を持って今日を迎える……それだけのすぐれた素質を持って産れた治部さまが、何で、今度のような騒動を起されたのか……」
こんどはお袖の方から、まじまじと光悦の顔をのぞき込んだ。光悦はお袖と全く反対の、三成の傲岸さにひどく感心している様子なのだ。
(嘘ではないらしい。心底から感心している眼ではないか)
光悦はまだ昂ぶりの去らぬ様子で、
「これはやはり、太閤さまが悪かったのじゃや。あれほどすぐれた治部さまゆえ、太閤さまは、きっと治部さまの前で、内府のわる口……いや、愚痴をこぼしたのに違いない。それが度重なると、治部さまほどのお方でも、太閤が内府を憎んでおわすと錯覚する……こんどの騒動はその錯

覚から起ったことであった……」

お袖は返す言葉がなくて、そっと躰を光悦から離していった。

八

光悦の述懐は、まだお袖が考えてみたこともない方向からの三成観であった。

（そんな見方もあるのだろうか……）

「なあお袖どの、世間にこれはよくある例じゃ。他人の目には仲のよい夫婦がある。ところが、その母親は愚痴な性質で、良人の前では言われぬ不満を子供の前で繰言する。すると子供は、それは母親想いであればあるほど自分の父親を仇敵のように想い込む。そのためこんどは父と子のいさかいになって、母親の方がうろうろしてゆく場合がの」

「それは、無い、こともござりますまいなあ」

「いや、よくあることじゃ。この場合、子を誤らせたは母の愚痴……これが、太閤と内府と治部さまの関係だったとわしは悟った。太閤は決して内府とお仲は悪くはなかった。しかしどこか愚痴な母親のように、内府の存在に圧迫されておわしたのだ。わしが太閤をもの足りぬお方と思うのはここのところじゃ。太閤は自分に甘い。自分だけには鍛えの足りぬ鈍刀じゃ。それゆえ治部さまの前できっと繰言を洩していたに違いない。その太閤も今ごろは地下でウロウロしているであろう。治部、そのような無茶なことをして、わが家を潰して呉れるなよと……治部さまは、その繰言が真実で、平素の太閤と内府の仲のよさは取繕った嘘の姿と錯覚させられた。錯覚させたのは太閤の愚痴……何であのように、最後まで誤りあれば叱りつけるほど、きびしく自分を持ち

続け得るお方に、このような錯覚をさせていったのか……わしは今更、太閤が憎い気がする。いや人間の愚痴が憎い！」

そう言ってから光悦はお袖の耳に口を寄せて、

「こうなっては万事休す。ねんごろに心の中で弔うてやりましょう」

お袖は、その時まだ光悦の言葉の意味は半ばわかって半ばわからぬままであった。

ほんとうにそれがわかり、そこからはげしい狼狽を摑みとったのは、二人が刑場の矢来の外にたどり着き、その中に曳かれて来た三成の姿を見たときからだった。

三成は水色の小袖を着せられ、手を後手に縛られて傲然と胸をそらして矢来の中に入って来た。視線もそらさなければ、足許もみなかった。嘯くように前方を見やって、そのまま首の座についた。

頰はやつれて尖っていたがバラ色の紅がさし、唇も異様なまでに赤かった。せいいっぱい最後の気負いを見せた、眼を伏せたくなるような姿であった。

続いて曳き出された小西行長は、眼を閉すような形で平静そのものだった。彼は、切支丹信者なのだ。じっと瞼の裏に天帝の姿を描いて、すべてを神に任せきった落着いた姿に見えた。

第三番目の安国寺恵瓊は、案外平気な顔でキョロキョロと四方を見ながら入って来た。どこか飄々とした悟り切った姿に見えた。

と、又耳許で光悦がささやいた。

「ご覧なされ。みなニセ者じゃ。小西どのはほんとうに虚空のどこかに天帝でもいると思って縋りきってござるし、安国寺どのは、とぼけて苦から遁れようとなされている。どちらも生命の、

ほんとうの貴さを知らぬのじゃ。それに引きかえ、治部さまだけは、全力をそそいで自分の生命をみつめておわす。一分のごまかしもないまことの姿……あ、あのお方だけは死なすに惜しい」

そこへ、七条道場の上人、時宗金光寺の遊行上人が、最後の経を手向けるために入って来た。

九

お袖はもう光悦に合槌を打つまでの余裕がなかった。

光悦の見方は、みなお袖のそれと逆であった。お袖には小西行長も安国寺恵瓊も、それぞれ静かな悟りの境地にたどりついているのに、三成だけがまだ妄執の業火の中を怒りながら踏み歩いているように見えた。

(どちらの見方が正しいのか……)

そう考える余裕よりも、光悦から話しかけられるのがいとわしかった。

バラバラとどこからか矢来の中へ石を投じたものがある。その一つが、恵瓊の肩と三成の足にあたった。恵瓊はふり返ってニヤリとし、三成は見向きもしなかった。

警護の者は知って知らぬふりを装い、かくべつ見物を叱りもしなかった。

逆に見物の中から、はげしくそれをたしなめる声が聞えた。

中央に荒むしろが三枚敷かれ、そのそばに一つずつ白い手桶が水を入れておかれてある。首斬役人はその手桶のそばに片膝ついて、これは申合せたように陽の光りに眉をしかめている。

三人が定めの場に近づくと、七条道場の上人は一礼して読経をはじめた。

上人とそのうしろに弟子の僧が二人ついている。

と、そこまで宙を睨んでやって来た三成が険しい表情で立ちどまった。
「何れの僧か存ぜぬが、経の手向けは要らぬことじゃ」
その声が大きかったので矢来の内も外もシーンとなった。
「お心にかけさせられまするな。われ等が心任せの供養でござれば」
上人が、温和な表情で言うのと、
「ならぬ！」
三成の赫怒に近い叱声とが同時であった。
「他人の施しを受けて喜ぶわれ等ではない。われ等が宗旨は法華、余計な邪魔は措かせられよ」
見ていてお袖は全身が震えだした。到頭三成は自我の鬼になりおおせた。
（そう成れとすすめたのは誰であったろう……）
それはお袖自身ではなかったか……
（恐ろしいことになった……）
そう思ったときに、三成の激怒は、更に、他の二人の受刑者をも混乱させた。
今迄平静だった小西行長も、安国寺恵瓊もギクリとした表情で立ちどまってしまったのだ。
恐らくここに曳かれるまでの三人は、それぞれの間の憎悪に苦しめられてバラバラだったに違いない。
恵瓊に言わしむれば、三成は歯がゆい主謀者であり指揮者であったろうし、三成に言わせると恵瓊は毛利を裏切らせた無責任な大言壮語の徒であったろう。
小西行長にとっては三成は策戦の途中から意見を異にした怨みの対象だったのだ。

ところがその三人が、ここでは完全に一つになりそうな気配なのだ。
「そうじゃ」と、行長は言った。
「われ等もご免蒙りたい。われ等はデウスの御許に参る身なれば……」
「愚僧もご免じゃ。わしは禅宗じゃからの」
三成の一喝が、これ程見事に戦場で彼等を動かし得ていたら何うなっていたであろうか……？
七条道場の上人は、悲しそうに三人を見まわし、それから弟子をうながして去っていった。

十

上人が去ってゆくと、三人はそれぞれむしろの上に坐った。
陽は高く輝いていたし、川の音はチロチロと耳につくし、見物はシーンと静まり返ってゆくし……お袖は次第に自分が夢の中にいるような錯覚にとらわれだした。
（実はこの人生が夢であって、これからあの人々が斬られてゆく、その先にあるのがほんとうの人生なのであるまいか……）
若しそうだとすれば、彼等を孕んだこの七条河原の大地は、いま産屋に入ったところかも知れない。
竹矢来のうちでは奥平信昌が役人に何かいっていたが、それももはや、春の野に立つ陽炎よりも淡いもののように思えた。あの人たちは、ただ産屋の近くに居るというだけで、人の生死などには何のかかわりも力も持ち得ない人々なのだ。
首斬役人に至っては更に更に小さな存在で、彼等は彼等が何をしているのかさえ、知りようの

ない奇妙な場所をうろついているのに過ぎまい……
矢来の中では太刀がきらめいた。
三成、行長、恵瓊の順で首と胴がガクリと前へ垂れてゆくと、同時にお袖は、別の世界へ次々にあがってゆく産声を聞いた気がした。
近くの人々がガヤガヤと動きだした。矢来の中にはすでに首も胴もない。下人たちが、あたりに散った血を水で流している。
お袖はフラフラッと立ち上った。まだ耳の底では愛くるしい赤児の泣き声がひびいている。
それからしばらくお袖は、どこをどう歩いたのか記憶になかった。
人波に押されながら三条大橋へ出て、そこに架けられた三つの首を見た。しかし、それはもはや、刑場へ曳かれてゆく彼等とは何のかかわりもないただの首人形を見ている感じで、さして悲しみも哀れさも湧かなかった。
昔住んだ空家の前へ通りかかったような想いで、それから再び七条河原へ引返したものらしい。何故引っ返したのか、それもよくわからない。首のあとを追って三条大橋の橋詰めまで行ってみたのだが、その首の中には三成はいない気がして、また先刻の場所へ戻ってみたものかも知れない。
もうそこに矢来もなく、血のあともなかった。
人影はあちこちにあったし、それ等がみなこのあたりを指さして何か話し合っているのも眼に映ったが、それはただ眼に映るだけのことであった。
陽が傾いた。もう間もなく暗くなる。川の水に夕空が赤い帯を流している。しかしその「時

間――」もいまのお袖にとって白々しい他人に思えた。
（私は三成を探してここへ来たのだろうか……）
若しそうであったとしたら、自分は、三成に会って何をいう気なのだろう……？
何の役にも立たなかったと詫びる気なのだろうか。
それとも、何故あのように死ぬまでまっ赤になって怒っていたのか？　そのわけを訊こうとしているのだろうか……
いや、それよりも、三成は死んだのだろうか。それとも往生したのだろうか？　往生という文字に、ほんとうの意味があるのだったら、どこかに往って生きている筈であった。
そのどこかとは何処であろうか。
ぼんやりと河原に坐って考えているお袖の頬へ、不意に涙が堰をきってあふれだした。

十一

あたりはついに暮れおちた。
だがお袖はまだ七条河原を立とうとしない。次第に脚下の石が冷え、東山から夕靄がのびて来る。その靄に頬の涙をひたしながら、お袖はいま、三成のそばで憑かれたように反覆反芻し直している。
三成が、事を起さずには済まない人間だと暗示したのも、何うせそうとわかったら、迷わず実行出来ないのかと詰め寄ったのもお袖であった。
そして、彼女は、今日、そうしたお袖の言葉のままに首の座に直ってゆく、昔のままの三成を

この眼で見たのだ。
たとえそれが本阿弥光悦の見方のように、行長や恵瓊よりもはるかに立派な態度であったとしても、そのためにお袖の心が安らぎそうな気はしなかった。
（あの人の決意の蔭で、その父も、兄弟も、妻子も、みなこの世から去っていった……）
いや、肉親だけではない。前後の戦を通じて何万という人々が、或いは泣き、或いは呪詛しながら、とにかくこの世から姿を消していったのだ……
それなのに、お袖は、その事実から眼をそらし、耳を蔽って、平気で生きてゆける女だったのだろうか……？
若し淡々と悟りすまして、みんなの菩提を弔うといい出したら、もう一人のお袖がこれを許しておくであろうか。
お袖が起ちあがったのは、空の星が美しく北風に洗い出されて来てからだった。時刻は考えてもみなかったし、もう頭の中に、自分の帰りを案じていて呉れるであろう高台院の姿もなかった。
あるのは、胸を張って首の座に近づく三成の顔と、その三成が、案外おとなしく教えを聞いていた、大徳寺三玄院の宗園和尚（後の国鑑国師）の顔であった。
和尚の顔を何うして一緒に思い出したのか？　思い出した時に、しかしお袖は起ちあがってぃた。
覚悟が決った……というよりも、それは当然そうしなければ、お袖の中に棲まうもう一人のお袖の意地が許さないからであったが……

お袖は三玄院に和尚を訪ね、三成の影塔を建てて呉れるように頼んで、寺内の片すみで、自分も三成の後を追う気であった。
三成はそれを叱るかも知れない。いや、無視してさっさと一人で歩いてゆくかも知れない。それでもよいとお袖は思った。お袖も又、黙ってツンととり澄して、あとをついて歩いてみせなければ意地が立たないのだ。
どこをどう通ったか？
とにかくもうお袖の目から三成は消えないものになっている。彼女の前をいまも現に胸をそらして歩いている。お袖はそのあとをどこまでもついてゆく……
大徳寺のある大宮村に来たときにはもう道の草に露がおりていた。山門の金毛閣の扉はきびしく閉されて、あちこちに棟を並べた子院も堂塔も墓も草木も眠っている。その閉した門の中へ、すーと三成は煙のように吸い込まれた。
と、お袖は急に考えを変えた。もはや三玄院の長老に会う必要はない気がした。そんな小さなことよりも、自分は三成を追わねばならぬ……そう思って、急いで扉の前に坐って、懐剣の紐をといた。
そして、それを豊かな乳房の下に突き立ててから、これが「愛――」なのであるまいかとかすかに思った……

淀君日記

一

淀の君は、大蔵の局から三成たちの処刑のことを聞かされたが、何と言って答えたのか、自分でもよくわからなかった。

「――治部さま、摂津さまのお首の次に、水口のお城を出て、日野でご自害なされた長束正家さまのお首がおかれ、次に安国寺さまの首と、都合四つ三条大橋にさらされてあった由にござります る」

大蔵の局は、淀の君に、彼女の幸運を想わせようとして言っているらしかった。

幾分わが子大野修理亮治長の手柄を忘れさせまいとする気持もあったであろう。

大野治長が、家康の許から、秀頼母子は何もご存知ないのだから、ご心配なく……そう言って使いにやって来たとき、淀の君の喜び方は文字どおり「狂気――」に近かった。

その筈である。当時の大坂城内の空気は戦場さながらの緊張ぶりで、誰もすぐに平和が立返って来ようなどと思う者は一人も無かったのだ……

関ケ原で敗れた兵が、惨めな姿で次々に帰って来るし、大津から引返して来た立花宗茂は毛利輝元に籠城を迫っていた。

七手組の面々で城に残ってあった者も殆んどが主戦論であったし、現に当の淀の君までが、す

でに戦を覚悟していたようであった。
淀の君の育ちから考えて無理もなかった。伯父の信長をはじめとし、浅井家の祖父も父も、そして、更に義父の柴田勝家も生母の小谷の方も、みな戦火の中で非業の死を遂げている。
（こんどはわれ等母子の番が……）
そうした覚悟は、ありありと大蔵の局に見てとれた。もう少し家康の許から大野治長のやってくるのが遅れていたら、或いは淀の君も、秀頼を刺して、自分で本丸の指揮を執るなどと言い出していたかも知れない。
そこへ治長がやって来て、家康は、この騒動を秀頼母子の毫も与り知らぬところと解している旨を告げたのだ。
その時淀の君は、しばらく信じられないもののようであった。彼女のかつて見て来た戦の中にこのような寛大な処置は例がなかったからであろう。それだけに、懇々と治長が、
「――お案じなさりまするな。それがしも内府と共に戦して来ています。決してご生母さまや若君さまに他意はないと見きわめました」
そう告げられたときに、ワーッと声をあげて泣き伏した。そして、それからすぐに片桐且元を呼び出して、使者を選ばせ、家康の許へ治長と共にお礼の使者をさし向けたのだ。
そして、家康が城に入って来るまで、淀の君は気性に任せて、あれこれと表のことに口出ししたり、主戦論の侍たちを呼びつけてたしなめたりしていた。
それが、家康が西の丸に入り、秀忠が二の丸に入って来ると、急にがっかりして何をする気もなくなった。

大蔵の局が、三成たちの処刑のことを話しだしたのも、こうして無事に納まったことの裏では治長の骨折があったのだと、それを話題にしたいらしい……とわかっている。

が、淀の君は口を利くのがもの憂かった。視線では、これもぼんやりひとり遊びをしている秀頼を追っているのだが、いま、秀頼のことを考えているのでもなかった。

誰かが、何ものかが、淀の君の躰から何かをごっそりと抜きとっていった感じであった……

二

「もし、上様、何と遊ばしたのでござりまする？」

大蔵の局に又声をかけられて、

「え、何といわれたのじゃ？」

ふり返った淀の君の眼のいろは妙にとまどった放心ぶりであった。

「ご処刑なされた治部さまは、何も彼も投出され、無一物に近かった……それなのに、長束さまのお城には、金銀が山のように蓄えてあったと申し上げたのでござりまする」

淀の君は気まずそうに頷いた。

「死ぬほどならば金銀も不要であったろうに」

「その事でござりまする。これから、戦後のご処分がはじまりますると、さまざまなことが聞えて参りましょう」

「ほんに、聞かずに済ませられたらよいものを」

そういってから、ふと思い出したように、

「そういえば、十五日まで大津の城に籠って、内府のために働いてあった京極宰相はどうなさったことやら」
大蔵の局は、ちょっとがっかりした顔になった。ここらで伜の大野治長の話を出して貰いたかったのであろう。が、京極高次の話が出たのではやむをえなかった。
高次は淀の君の次の妹を娶っている。したがって淀の君にとっては義弟にあたるのだ。
その高次が関ケ原の戦の前日まで家康のために大津城を固守してありながら、到頭戦勝を待たずに城を開いて高野山へ落ち伸びたという話が、いま城中で、
「――ご運のない人」と、噂にのぼっている。
「ご案じなされまするな」
と、大蔵の局はいった。
「ご舎弟の高知さまがはじめから内府のご陣中でご忠節を尽された……その手柄により、宰相さまもおとがめは受けず、逆にご加増があろうと片桐さまのお話でござりました」
淀の君はまたふっと聞いていない顔になった。恐らく、そんなことを訊く気で高次のことを口にしたのではなかったらしい。
「ほんに上様はご幸運にわたらせられる。いいえ、上様ばかりではない。こんどの戦では、上様のご姉妹お三人、何の障りも受けさせられぬ。これも、ご両親さまの霊のご守護でござりましょう。上様はこの通りご安泰、お末の秀忠夫人は江戸におわし、京極さまもご加増とは、敵味方にわかれた戦国の世に珍らしいことでござりまする」
「大蔵の局」

「はい。何ぞご気分でも……」
「しばらく一人にしておいてたもらぬか」
大蔵の局は不満そうに淀の君を見返したが、
「では、ご用の節はお呼び下されまするよう」
意地のわるいほど丁寧に頭を下げて出ていった。
淀の君は、又しばらく黙ってかたわらの秀頼を見やっている。
秀頼はさっきから一人で双六盤の前をはなれて、机に向っている。筆をとっては何か書いているのだが、手習いでないらしい。
(二人だけになった……この城で……)
淀の君がしみじみと身にしみてそれを感じだしたのは、戦の混乱が治って、侍どもも大名たちも、ぴたりとここへは顔を見せなくなったからであった。
もはや、淀の君や秀頼は、太閤の後家であり遺児ではあっても、現下の日本とは何のかかわりもない……不必要な人間になり下ったというのであろうか。
ポツンと秀頼がいった。
「母上さま、藤七郎は見えませぬなあ」

三

秀頼は、近ごろずっと遊び相手であった、同じ年頃の毛利輝元の子の藤七郎秀就のことをいっているのだ。

「もう見えますまい。父の中納言に従うて城から去っていったゆえ」
「負けたのでござりまするなあ、藤七郎も」
「いいえ、藤七郎は負けても、若君は負けたのではござりませぬ。江戸の爺が、そうご挨拶なされたではありませぬか」
「ウン、それはわかっている。でも……」
いいかけて、秀頼もすぐに口を噤んだ。どこか母の様子が異様に見えたからであった。
淀の君は又ホッと大きく吐息した。
あの勝気な淀の君が、急に元気を失くしたのは、三成や行長の処刑と反対に、加藤清正や、福島、黒田など、所謂北政所派の人々が、大きく加増されるという噂を耳にした時からだった。
そうした事情は、彼等と同輩だった片桐且元が、逐一彼女に報らせて来た。
それによると、高麗で散々淀の君の推した小西行長と、功を争って秀吉に叱られた加藤清正は、肥後の熊本で、二十四万石増しの五十四万石の大身になるということだったし、福島正則は、清洲から安芸の広島に移されて、四十九万八千二百石の大大名になるということだった。
黒田長政も十八万石から一躍福岡で五十余万石になろうという噂であったし、細川忠興も、十七万石から四十万石近い出世をするだろうという風評だった。
そうした噂が、このように大きな打撃を自分に与えようと、淀の君は考えても見なかった。
秀吉の生前は、むろん彼女の方が北政所よりも優位にあった。表面はとにかく、内実では北政所より淀の君の申出の方が、ずっと秀吉を動かす力で立ちまさっていた。
淀の君が、小西行長の肩を持ったり、必要以上に三成に接近したりしたのも、自分の勢力を張

ろうとか、小西や石田に格別見込みがあると見たからでもなかった。

いわば北政所を軽く揶揄してみたいいたずら心で、秀吉がどちらを採るかと試した程度のものであった。

ところが世間はそれを、秀吉の閨房に北政所派と、淀の君派とがあり、その二つの暗闘は当然あるべき筈のものとして、ついにあらしめてしまったのだ。

そしてその結果はどうなったであろうか……？

淀の君派といわれる人々は、みな三成に担がれて処刑されたり、家を滅したり……そして、その反対に、北政所派といわれた人々は、いまや、すべて国持の大大名にのし上ってゆくのではなかったか……

これだけで対比されると、愚かな女と賢しい女の差が、はっきりと亡国と興国興家の差をつけてしまったことになってゆく……それに気付いた時の淀の君の愕きはたとえようもなかった……

（うかつであった！）

よく考えてやったことならば、こんなに惨めな悔いは湧くまい。ところが、彼女は、まじめな思案もせぬうちに、三成たちの手でさっさと「愚婦」の烙印を押されたうえ、当の家康にまで、

「――淀殿は女性のお身ゆえ、毫もあずかり知らぬところ……」

と、憐まれてしまったのだ。

性格が人一倍勝気ではげしいものだけに、この屈辱も尋常ではなかった。側近の者にももらし得ないその苦悶が、いま淀の君の胸中で、青白い炎をあげて燃えだしている……

なかった。

四

秀吉の寡婦と子供……それで世に忘れられて行く日を待つつもりだったら、何も苦しむことはなかった。

しかしこの寡婦と子供は日本のあるじの居城と思い込まれている大坂城の本丸に住んでいる……

しかもそれは、世にも愚かな女、自派の人々すべてを滅亡に追い込んだ女……として、生涯世間の嘲笑を浴びながら飼われてゆかなければならないのだ……そう思ったら、たとえ淀の君ならずとも愕然とする筈だった。

そして、そのおどろきと狼狽とは、当然のこととして人間をその対策に駆り立てる。

淀の君が、側近の言葉などと全く別な所で、宙を見つめ、秀頼を見やっているのはそのためだった。

(この汚名をそそぐ力が果して自分にあるであろうか……?)

彼女を、こうした破目に追い込んだ三成はもう世になかったし、他の奉行たちもことごとく彼女の身辺から消えうせた。

いちばんたよりにしていた毛利輝元さえ、百二十万五千石のところを、三十六万九千石とかに減封されて生き残ろうとあがいている……

おそらく彼の家臣たちは輝元がもっと淀の君に近づかなかったことでホッとしているのであろう。近づいたら三十六万石も残らなかったと計算して……

（厄病神というが今の自分であろう……）
いや、その自分に残されている汚名返上の道は？　力は？
そう考えて来ると、自分に残っているものは秀頼と、そして、やがてはしぼむであろう若さだけであった。
淀の君は、はじめてそれに気付いたときにも狼狽した。
家康の肥満した体軀と、ぼそッとした風貌がのしかかるように想い出されただけではなく、その家康を夫にせよといった誰かの言葉と、
（家康は、いまでも自分を望んでいるのであろうか？）
ふっと湧き上った疑問とであった。
（ここで家康の女になる……）
今の家康には正室はない。こちらでその気になりさえすれば、それは実現出来る夢かも知れない。そうなれば彼女は、秀頼を見まもりながら、再び天下人を操縦出来る女性となり、少なくとも愚かな女の汚名から脱し得られる……
人間の夢想はつねに奔放だった。時にはその奔放さに自分自身で唖然とすることさえあった。
いまの淀の君も実はその夢想のとりこになりかけている。いや、はじめは、家康に、いまだにその気があるであろうか？　そう考えてみたことが、今では、その気があるゆえ、
「――淀殿は女性のお身なれば……」
という、あの罪状不問の言葉が出たのに違いないと思えて来たのだ。
（謎だ。あれは……）

そうだったら、いったい淀の君はどうすべきか？　こんどの騒動では本心から「秀頼さまの御ため……」と思って死んだ人もたくさんある。それ等の人々よりも、秀頼の生母が、秀頼に冷淡であってよいものであろうか……？

　そこへ、今日もまた片桐且元が何かの情報をもってやって来た……

五

「おおこれはお手習いでござりまするか」

片桐且元は、いつも淀の君より先に秀頼に声をかける。今日も彼はよく机上ものぞき込まずに、うやうやしく秀頼に一礼してから淀の君に向き直った。

「西の丸では、いよいよ京極さまのお扱いが決ったようにござりまする」

侍たちがぴたりと来なくなってから、且元の知らせは重要な情報源であった。

いやそれより、家康と、巧みにつかず離れずの距離を保って信頼されているのは、秀頼の側近では且元一人といってよい。それだけに家康が、自分のことで、何か且元に内談でもなかったかと、それが気になる淀の君だった。

「ほう、すると宰相は大津開城の罪を問われずに済みましたか」

「はい。むろんご内室が、お方さまや、江戸中納言さまの奥方とご姉妹という点もご配慮なされてでござりましょう。大津から、こんどは若狭の小浜へ転封、以前の六万石が、九万二千石に決る由にござりまする」

「まあ、では三万二千石ものご加増……」

「むろんご舎弟さまや藤堂どののお口添えでござりましょう。そうそうご舎弟の高知どのは、別に信州飯田の八万石から丹後の宮津十二万石……これもご出世でござりまする」
且元がそういうと、淀の君は眉根を寄せて、
「片桐どのも、わらわを怨んでいるであろうな」
「これはしたり、何で私がお方さまを……」
「こなたとて、わらわの側に居らなんだら、三十か五十の大身にはなれたであろうに」
且元は苦笑しながら首を振った。
「且元には、禄に代えられぬ若君がおわしまする」
「その若君やわらわに近づいた者どもはみな消えた……さっきもしみじみと思うたのじゃ。太閤の後家と子供は二人だけになったとなあ」
「ご冗談にも、そのようなことは仰せられまするな。加藤どのにせよ、福島、黒田さまにせよ、みな若君やお方さまの行末を思うて内府へお味方なされたもの。今度のことは、どこまでも治部が描いた不都合な夢……若君のお味方は決して減っては居りませぬ」
「もうよい。そのような気休めは……」
「ハハ……、まこともう止しましょう。悪夢は忘れ去ったがよろしゅうござりまする。実は今日内府とも、ちらりと話が出ましたが……」
「話が出た。それを聞きましょう。どのような話が出ました」
淀の君が身を乗り出すと、且元は眼を細めて秀頼の方を見やった。
「若君さまと、お千姫さまのことでござりまする」

「まあ……お千がこと……」
「はい。このご縁談にお心変りがあってはと、そっと話してみましたところ、内府さまは眼を細められて、お千も江戸で大きゅう、愛らしゅうなっていたぞと仰せられました。この縁談も正式に世間に発表したがよい。その方が人心の定まることにもなろう。何れ汝、骨を折れよと申されました」
「まあ……」
「内府は若君をわが子のように思うておわす……ご母堂さまと若君とたった二人になったどころか、真実はこれで、徳川家もその一族もみな若君のお味方に同化なされた……ものを悪い方には思わぬものでござります る」
「他に話は？」
淀の君はホッと小さく吐息をして、
さりげなく探る眼つきになっていた。

六

「他に話は……？」
と鸚鵡返しにつぶやいて且元は膝をたたいた。
「そうそう、そう仰せられて思い出しました。昨日、西の丸へは、内府さまの女房衆がお戻りなされました」
「女房衆が……」

「はい。お気に入りの於亀の方はご懐妊なされておわした。それを内府さまは、まだよく確めずに関東へお発ちなされたとかで、殊の他にテレておわしました」
淀の君は何故かひどく狼狽した。ツーンと胸に疼きを覚えて、眼のやり場に困っていった。
（そんな話を、何と思うて且元はしだしたのか……？）
且元に自分の肚をのぞかれそうな気がしてやりきれなかった。
「ホホ……それは芽出度い。それでは、内府も太閤殿下と同じようなご経験をなさるわけじゃ。内府は幾つになられたやら」
「はい。そのお話を御自身でなされました。五十九歳でまた新しく子が出来る。太閤さまが若君を設けられたにうえ越すお子、それも左腹なればどうやら男のようじゃと」
「ホホ……で、お産は何時のことじゃ」
「十一月と申されました」
「ホホ……いっそ年を越して、六十のお子になればよいものを」
「その事でござりまする。表面はひどくテレておわしましたが、内心は限りなくおよろこび……お産れなされましたら、お方さまからも、是非とも心をこめさせられたお祝いを……」
且元はそういうと、再び眼を細めて秀頼を見やり淀の君へ視線を返した。
秀頼のためにも、相手の喜びを心から祝してやるようにという意味らしかった。
淀の君はうなずき返した。何うやら且元は秀頼のこと以外には念頭にないらしい。それもこれもこんどの、豊家の旧臣たちの出世と無関係とは考えられなかった。
秀頼や淀の君の側にあったばかりに、同輩の出世から取り残された且元は、一途に秀頼を想う

ことで、自分の孤独をまぎらわそうとしているらしい。
そうなると淀の君ももうこのあたりで話題を変えなければと心であせった。
しかし、口を衝くことは逆になった。あるいは自分の存在を忘れている且元への無意識な不満であったかも知れない。
「そうそう、まだ聞かなんだが、浅野幸長どのはどうなされたぞ。これもご加増であろうな」
「はい。浅野のお伜は、紀州和歌山、三十九万石の由にござります る」
「すると加賀の前田どのは」
「はい、ご舎弟の利政どのは能登の所領を没収され、その分利長どのの本領は、百十九万五千石とかに」
そこまでいうと、淀の君はあわてて身を乗り出して口を早めた。
「そうそう、こんど所領没収された人々の名をまだ聞かなんだ。治部や奉行衆は当然ながら、その他で家を滅した人々は？」
淀の君はふくれ上った前田家の話は聞くに耐えなかったのだ。彼女もよく知っている芳春院が、江戸まで質に出向いてゆき、家康の機嫌をとった効果を連想するのは息が詰るようないとわしさだったのだ。
且元ははじめて淀の君の昂ぶり方の異常さに気がついた。

七

（女性の心の動きは掴みにくいもの……）

しかし且元はそれが、芳春院に対する淀の君の、いかにも女らしい無意識の妬心であろうとは察し得なかった。
前田家と豊家の関係は、利家の犬千代と、太閤の藤吉郎時代から続いて来た水魚もただならぬ交りだった。
芳春院の産んだ娘を、有無をいわさず貰いうけて育てた養女は宇喜多秀家の正室になっていたし、その下の加賀の局は、太閤の最も若い側室になっていた。
その加賀の局は、今ではもう、権大納言万里小路充房に再嫁していたが、とにかく二重三重に懇親を重ねて来ている両家の間柄であった。
その前田家の当主利長が、家康側について、百万石以上の大身になるというのだ。当然淀の君は、それに不快を覚えたもの……と、且元は判断した。
「これは、申上げずとも事を申しましたようで。では、このあたりで私は……」
「いいえ、わらわは訊いておきたいのじゃ。治部や、長束、大谷などのほかに、家を破った者の名じゃ」
「それは、もうあらかたご存知かと……」
「知りませぬ。いいえ、知っていても、ここで、若君の前で、その名をハッキリ肝に銘じておかねばならぬ」
淀の君は、いってしまって自分でもびっくりした。自分で制御しきれない、もう一人の女性が、またしても頭をもたげて来たようだった。
「では申上げまする。上杉家のご処置はまだハッキリ致しませぬが、これは近く降伏して来るら

しく、そうなれば、毛利同様、家名だけは残るのではござりますまいかと……」
「家の残る者を訊いているのではない。お取潰しになる者の、名をハッキリと確めておきたいのじゃ」
片桐且元はちょっと小首を傾げて、又チラッと秀頼を見やった。秀頼は相変らず、双紙をひろげて何か楽書している。飛び跳ねている馬の絵のようであった。
「それならば、先ず備前の宇喜多秀家、岐阜の織田秀信、宇土の小西行長、土佐の長曾我部盛親、筑後柳川の立花宗茂、加賀小松の丹羽長重、若州小浜の木下勝俊……」
と、指を繰りながら名を挙げて来て、
「ご母公さま、いったいお方さまは、これを訊かれて、何となさるご所存でござりまする」
この質問は更に淀の君の昂ぶりかけた感情に鋭く触ったものらしかった。
「何で訊くとは知れたこと……それ等の人々はみな若君のためと思うてすべてを捧げた犠牲ではないか。忘れてよいものではあるまい」
「しかしそれは治部たちの……」
「いいえ、治部の名で起った人々ではない。みな若君さまご大切と思えばこそ……」
且元は狼狽して手で制した。
「それはご口外なされてはなりませぬ。折角そうではないと、内府さまが仰せられているのでござりまする」
「片桐どの」
「はいッ」

「そういえば、伏見からこの本丸に運んで来た、黄金はどれほどあったぞ」
且元は再び小首を傾げた。
「それは、三百六十駄、約一万八千貫がほどにござりまするが、しかし……それが何と致しましたので？」

八

淀の君は且元の問いに答える気で、またしても、全く逆なことをいった。
「では、その一万八千貫は、無いものと思うてよい余分の黄金じゃ。そうであろうな」
且元は、こんどはすぐには答えなかった。
淀の君のいちばん悪い一面が、むき出されて来ているのに、彼も気付いたからであった。
「そうであろうが。もともと天下のためのお入用は大坂のご金蔵に用意がある筈……さすれば伏見から運んだ三百六十駄は余分のものじゃ。わらわはそれを、秀頼君の名で、こたびの犠牲者……憐れな牢人どもに分けてやってよい筈じゃ。それとも、お許は、そうではないと申されまするか」
「ご母公さま……」
且元は熱湯をのみ込まされたような狼狽を感じながら、
「理屈だけを申しますれば、それとは全く違う理屈も成りたちまする」
「ほう、どのような理屈であろう。承りましょう」
「仮りに、内府が、それはこのたびの軍費のつぐないに申し受け、その代りにご母公や秀頼さまには累は及ぼさぬ……そう仰せあったら、渡さねば済まぬ黄金でござりました」

「ホホ……片桐どのとしたことが、内府はそのようには仰せなかった。わらわはその事実を踏まえて考えてみているのじゃ。そのように、若しも内府がいうてあったら……などという仮定は無用、おくがよいぞ」
「そうではござりませぬ」
且元は泣きたくなった。折角無事に済みかけている今の空気を、黄金の話などで壊す必要がどこにあろう。
家康が処分した人々に、秀頼が黄金を贈る……それではわざわざ治った喧嘩をぶり返すだけではないか。
「その黄金の儀だけは、何とぞしばらくお口になされませぬよう」
しんけんに頭を下げて、且元はふっと笑った。彼が生真面目に意見をすればするほど強く反撥するであろう、淀の君の性格に気付いたからであった。
「ハハ……ご母公さまもお人がわるい。ご自分で、そうした事が出来ることか、出来ぬことかよくご承知の上でおからかいなさる……いや、しかし、そのお心を牢人どもが伝え聞いたらどのように有難く思うことやら……」
淀の君は虚をつかれて息をのんだ。
確に且元のいうとおりであった。
(出来ないこと……)
と、わかっていながら、口にしてみただけにすぎない。その位のことのわからぬ淀の君ではなかった。

「ホホ……これは片桐どのに見破られた。わらわは、やはり淋しいらしい」
且元は黙って又頭を下げた。
「いや、わらわだけではない。若君もあのように……そうじゃ片桐どの、若君のお側の者が早よう日々出仕出来ますよう、お許からよう内府に話しては下さるまいか。このような世捨人同様の身のまわりの淋しさが、あれこれと、詰らぬ思案のもとになるのじゃ」
「それならば、ようわかってござりまする。今しばらくお任せおき下さるよう」
且元はホッと胸を撫でおろす想いで頷いた。
庭でしきりに鵙が鳴いている。

九

且元は、それからも、しばらくあれこれと世間話をして帰った。
いまは、みな戦後のことがどう決るかと、それに心を奪られている。しかし、それが一段落しさえすれば、若君のお顔を見ずにいられぬ者がいっぱいある。
「――私が案じて居りますのは、事件落着の後、若君さまのご機嫌奉伺に出て来ても、西の丸へは立ち寄らぬ……そうした頑固者が出て来はすまいかということでござりまする」
且元は、こうなった以上、秀頼と家康の区別をせず、双方へ同じ親しさで近づくことが、結句豊家のためだといい添えた。
淀の君も、それには何の異存もない。
それが若君のためとあれば、いっそ家康の正室になってもよい……とまで考えている。しかし

且元は、ついにそれには触れなかった。
　且元が触れないのは家康が話し出さなかったからであり、家康に話し出させなかった裏には、於亀の方の懐妊があるからかも知れない。
　淀の君は、於亀の方にははじめから好意を持てなかった。どのような女性かよくは知らなかったが、せいぜい寺侍か神社の御師か……そのようなものの娘が、わが身の出世に感激して、いそいそと家康にかしずくさまを想像すると、虫酸のはしる想いであった。
　かといって、淀の君がかくべつ家康に好意を抱いているというのでもない。いや、むしろその反対に、いとわしさの方が先立つのだ。それでいて、その家康が他の女のものと思うと不快であった。
（女性には、すべての男を拝跪させたい、かくれた意志があるのであろうか……？）
　そうでない……と、淀の君は自分自身にいいきかせた。
（それもこれも母の愛のあらわれに過ぎないのだ……）と。
　淀の君は、両親や祖父母だけではなく、伯父の信長、義父の勝家と、みんなの夢の凝って孕んだ「秀頼――」を産んでいる……
　その秀頼に、父祖代々の執念を遂げさせてやろうとするのは自然であった。ただそのために家康を征服したいと考える……
（それなのに、且元もまだそこまでは気付いていない……）
　それが淀の君の口からは、どんなことがあってもいい出し得ないことだけに、いっそう惨めな侘びしさに変って来る……

且元が退ってゆくと、淀の君は又ぼんやりと坐り続けた。

（若しこのまま、誰も彼もが、秀頼母子を忘れ去る時があったら何うなろうか……？）

とにかく三成があせって天下を家康の手に献じてしまったのだ。そして、太閤の枕辺で、秀頼が十六歳になったら天下を渡すという約束に、署名したり立ち合ったりした人々はことごとく葬り去られてしまったのだ……

上杉や毛利が、黒田や福島の下風に立つ大名として残っていたとて何になろう。

もはや五大老もなければ五奉行もなく、むろん三中老もあり得ない。世をあげて家康の味方と家臣になりおわった。

若しその変化の中で、ただ一つ家康を意のままに征服し得るものがあるとすれば、それは淀の君の若さと母性愛だけなのだ……

そう思って来て、再び淀の君はハッとなった。

（もう一つあった……太閤の残していった黄金が……）

又してもそれに気付いて息を詰めた。

十

（そうだ。黄金という味方は、まだ残っている……）

すぐさっき、それを口にして、且元に注意されたときとは全く違った考え方だった。

さっきはただの思いつきであり皮肉に過ぎなかったが、今度は真剣だった。

家康とて、むろんそれに気付いていない筈はない。と、すれば、この味方をどう生かすかにつ

いては冷静な用意と計算が必要だった。

若し万一、それを天下の所用に引き渡せといわれたときには何と答えるか……？

且元は当方から口にしなければ、家康はそのまま捨てておくものと判断しているようだったが、果してそれで済むであろうか？

淀の君は急に躰が熱くなった。

今まで、さして考えてもみなかった黄金が急に大きな翼をもって、淀の君の身辺を駆けめぐりだしたのだ……

あれだけの黄金があれば、何万人の牢人も養い得ようし、どのような城塞も、寺院も購い得よう……いや、その使途によっては、天下の人心を改めて摑み直すことも不可能な額ではない。

仮りにこんどの戦で加封された大名達とて、内実は戦費のために四苦八苦の者がたくさんある。それ等のものにそっと貸与してやるだけでも、淀の君は救世主のように感謝されてゆくかも知れない。

そこまで考えて来て、淀の君はさっさと京の三本木に引きあげていってしまった北政所高台院の姿を思いうかべた。

高台院には無いものが、自分の背後でひっそりと金色の後光を放ってあったのだ。

（秀頼の名で、これを生かして使うこと……）

思い立つとじっとしていられなかった。

淀の君は手を鳴らして大蔵の局を呼びかけ、又考え直して吐息を吐いた。自分一人の胸につつんでおくには、余りに大きな黄金の威力であった。

ない。

といって、うかつにこれが世上へ洩れたら、それこそ逆にどのような誤解のもとにもなりかね

（やはり呼んで、少しは意見を聞いてみよう……）

淀の君はこんどは自身で居間を出て、さりげなく大蔵の局を呼んで来た。

「片桐どのは、ご退出でござりまするか」

「それじゃ。それについて、ちと、こなたに訊いておきたいことがある。もそっと近う」

「は……はい」

「大蔵の局はな、この城に、若君の名で使える金がどれほどあるかご存知か」

「さあ……どれほどあるか存じませぬが、とにかく、みなそれは若君さまのものゆえ……」

「内府に出せといわれた節は、こなたならば何とするぞ」

大蔵の局は眼を丸くして、

「お断り致しまする。ご成人なさるにつれて、どのようなご入用があるかわかりませぬ。これは豊臣家の私財ゆえ、差出しませぬと申上げて、充分筋は通ろうかと」

淀の君はまた胸もとが燃えて来た。若し出せといい出されて、そのようないいわけが通ろうとは思えなかった。

「ホホ……わらわはまた、これを内府に取られぬ工夫はただ一つ……と、考えてみたのじゃが」

「ただ一つ……でござりまするか」

「そうじゃ。その黄金を持参して、わらわが内府の許へ嫁いでいったらどうなるかじゃ」

淀の君は蓮葉にいって、またとぼけた声で笑ってみせた。

十一

大蔵の局は一瞬息をのんで淀の君を見返した。戯れ言なのか本気なのかと、しんけんに探ろうとする眸であった。

「どうしやったのじゃ。そのように眼を丸うして」

大蔵の局はそれには答えず、

「では、黄金を差出すようにというお話がございましたので？」

頬を硬ばらせて訊き返した。

淀の君はあいまいに笑った。

「あったとしたら、何とするのじゃ」

「実はそれを修理も案じて居りました。物吝しみの強い内府さまのことゆえ、必ず黄金にはお目をつけておわそうと……」

「修理か。こなたにそのような話をしたのなら、なぜ早くわらわの耳に入れなんだのじゃ」

「はい。何れは申上げようと存じながら、まだそのようなことまでいい出しは致すまいと……」

「ホホ……いい出したのではない」

淀の君はわざと明るく笑っていったが、心のうちでは狼狽していた。

大野治長が案じていたほどなら、早晩それは現実の話題になるかも知れないのだ。

「それならば安堵致しました」

大蔵の局は大仰に吐息をして、

「私は又、ほんとうに黄金も、ご母公さまも……などと内府さまが仰せ出されたのかと、いちどに心が凍る想いでございました」
「安堵は早い」
と、淀の君はいった。
「まだいい出さぬからといって、何時いい出されても答えの出来る用意はなければなりますまい」
「それは……そうでござりまするなあ」
「それゆえ、こなたの思案を訊いてみたのじゃ。ただ差上げられませぬとだけで済むかどうかじゃ」
大蔵の局は、再び不安そうに口を噤んで、探る眸つきになっていった。
彼女の観察では、淀の君は、家康を嫌っているらしい。その淀の君が、金もわらわも欲しいといったら、何というか？　そう問いかけて来ている気がしたのだ。
「ご母公さま、これは尋常一様のご決断では済まぬことかも知れませぬなあ」
「尋常の決断では……？」
「はい。内府さまに、そのようなことを仰せ出させぬよう……こちらから先に手を打つより他にござりますまい」
淀の君は何となくがっかりした。
やはり局にも、寡婦の心は覗ききれないのかも知れない。
「いったいそなたの、その決断とはどのようなことなのじゃ」
「はい……まずご母公さまに髪をおろして頂きまする」

大蔵の局は宙を見据えるようにして、真剣にいいだした。
「髪を……このわらわにか」
「はい。そして、太閤さまの残しおかれた黄金で、菩提を弔うため、大仏再建をなさる……とでも申出でられたらいかがなものでござりましょう。さすれば、髪をおろしたご母公さまを欲しいともいわれず、黄金も差出せともいい出しかねる……」
淀の君は、話の終らぬうちに、腹を抱えて笑いだした。
笑いながら何故か涙がとまらなかった。
(他人のこととなると、局までが、このような冷酷なことをよくもまあ……)

預かる者

一

近侍を遠ざけて膳に向うと、家康は妙にうつろな孤独を感じてびっくりした。
膳の上には二汁五菜の見なれたものが載せてあったし、給仕の小姓も於亀の方も、平素と同じ姿ですわっている。
(何でこのように淋しい気がするのか……?)
自分で自分に問い返してみても的確な答えは出そうにもなかった。
世間から見たら、幸運そのものの大坂入城だったが、決して彼が裁いたのではない。

人間がそれぞれの未熟さに従って、それぞれ大きな尻尾を出して浮沈し去ったのだ……いちばん滑稽なのは、増田長盛の存在だった。彼は三成にくみしていながら、三成のためにはほとんど何もしてやらなかった。

逆に城内には、

「――長盛は内府に内通……」

そうした噂が立っていて、それが毛利輝元の足を引き、到頭彼を主将などとはほど遠い一個の木偶に化せしめてしまったらしい。

したがって家康は一兵も損せず、一発の銃丸も放たずに、ノコノコとこの城門をくぐり得たのだ。

そして、一応新しい日本国の配置もすでに八分どおりは終っている。誰も彼の眼がねに依る配置に不平を洩らすものもなく、身辺へは思いもかけぬ贈物の山さえ築かれているのであった。

それなのに、家康は妙に淋しい。間もなく産まれると知った於亀の方の胎の子のことで、嬉しがってみようとしたがそれもすぐさま空々しい苦笑に変った。

若しここで男の子が産まれて来たらまた一つ荷がふえる。

その荷がどんな荷になるかは太閤とその子たちの関係でよくわかっていた。頑健な子が賢しいとは限らず、弱い子が愚かとも決っていない。人の親に許されていることは、その子に夢をつないで、ただハラハラと心を労することだけらしい。

（男と女を産みわける力すら親には与えられて居らぬのじゃ）

家康は苦笑して飯椀を嗅いだ。

六十年近く感謝しつづけて来た飯の匂いまでが、妙に今夜は空々しかった。
これを三度ずつ、おし頂いて食べるために、人間は生まれて来たのであろうか……?
家康がまだ「三河の宿なし」と呼ばれた頃も、いよいよ天下を預かった……そう思って摂る今夜の食膳も、汁の数、菜の数とも同じであった。
誰が、こうせよと命じたからでもない。それがわしの生き方だったからに過ぎない。
そう思うと急に胸がふくれて来て、軽く二椀で食欲が無くなった。
家康はその椀に湯を注がせ、うやうやしく呑んで「南無阿弥陀仏……」といってみた。
いった瞬間に、ギクリとしたのは何故であったろう。
人間の力の卑小さが、風のように胸もとをかすめたからであろうか……?
(わしは疲れている……)
いや、天下を預けられた者として、今このように疲れていてよいのであろうか……?
家康はことりと強く椀をおくと、
「片桐市正を。まだ、本丸に居るはずじゃ」
そして、心の中でもう一度唱名をくり返し、そっと丹田に息を入れた。

二

人間は、健康でありすぎたり、得意すぎたりする時にも警戒を要するのだが、疲れたおりの消極性もまた厳に戒めなければならない。
家康は何気なく唱名してみて、ふっとその疲れに気付いた。気付くとそれは、いかにも家康ら

しい反省と自戒になった。
仮りに日本中が、いま唯々として家康の布石を承認するとしても、それで安心したり、疲れたりしていてよい時ではなかった。
本能寺へ赴くおりの信長の油断や、文禄の役での、和議は成立したと信じたあとの秀吉の安堵などがそのよい例であった。
彼等は何れも神仏に選ばれて、日本の指導者の地歩を恵まれた人々だった。しかし、その彼等に、ほんのわずかな隙と油断を発見すると、神仏は彼等から用捨なく、彼等に与えてあった地歩を取りあげてしまっている。
そして、二人ともある期間の指導者ではあったが、泰平の世の建設者には成り得なかった。
(二人の後に生き残ったわしが、同じ過ちを犯してはならない……)
それは二人の友情を裏切ることであり、遺志に不忠実な所以でもあった。
(預けられる者の務め……)
それは荷の大きいほど苦しく、時には非人間的な忍耐を要求されるものなのだ……はっきりとそう自覚しているつもりの自分が、こんなところで疲労のために人生を灰いろに感ずるようで何うするものか。
膳が下げられると間もなく本丸に泊り込んでいる片桐且元が呼ばれて来た。
且元が呼ばれて来ると城織部正や永井直勝は当然のこととして、本多正純とともに家康の前へやって来る。
その顔ぶれを見て、且元の表情は蒼ざめかけた。

（夜中に何の用であろうか？）
そうした疑問よりも、彼もまた秀頼側に起つ者として、さまざまな未処置の問題が、行手に山積してあると考えているからに違いなかった。
「今宵はの、若君のお傅りのことなどで、あれこれ市正と雑談がしたかっただけじゃ。みなみな退いてよいぞ」
家康はおだやかにみんなを退けると、
「寝酒でも喰べるかの」
と、且元に笑ってみせた。
「いいえ、それがしはご城内にある折には」
「それはお堅いことじゃ。実はの、わしも少しばかり疲れたゆえ、休もうかと思うたが、考えてみるとそうもならぬ。まだまだ弓、鉄砲は、側に懸ったままじゃほどに」
「仰せの通りでござりまする」
「どうじゃの。今夜は二人だけの話ゆえ、どちらも一切他言せぬことで……」
「かしこまりました」
「わしが最初にお許にききたいのは、秀頼君の傅役じゃ。加賀の大納言は亡く、さりとてわしでは忙しすぎる。毛利や上杉はあの体じゃし、小早川の倅では若すぎる……」
家康はそういったあとで、不意に語調を落して、
「お許の見られたところ、若君のお出来はどうであろうかの」
「お出来……と、仰せられると？」

「鳶であろうか、鷹であろうか。それとも鶴であろうか、百舌鳥か雀のたぐいであろうか」
　且元は咄嗟にぐっと姿勢は正したが、返事は口に出なかった。

三

「それを、私の口から、申し上げねばなりますまいか」
　しばらくして且元は切り返した。その一語の反応に、充分気を配り、心を労しているさまがよくわかった。
「片桐どの、家康にはお許の心がわからぬではない。主君なれば賢愚は問わぬ。足りぬところがあれば生命を賭けても補佐し参らす……それは立派なお心掛けじゃ。しかし家康は、それを知っていて、敢えて訊くのじゃ。というのは、ご気性により、出来によって傅役の人物を選ばねばならぬ……という眼先の必要からばかりではない」
「ごもっともに存じまする」
「これが十五万石や二十万石のあと取りと言うのならばそれでもよかろう。仮りに太閤の遺児として大坂城の主なのじゃ。この人物の出来不出来によって事を計らねば、あらゆる才覚も砂上の楼閣……いや、それが、信長公から太閤へ、太閤からわしへと三人かかってようやく築きかけた泰平を一朝の夢にも化せしめまい」
「お言葉中ながら……」
　且元はもう一度、用心深く押し返した。
「若し、若君を鷹ではない……と、申上げましたら、お千姫さまとのご婚約は取消しでござりま

しょうか」
「片桐どの！」
「はいッ」
「お許は家康を誤解なされているようじゃの」
「私は、ただご両家の不和を怖れるだけでござりまする」
「わしは、お千と若君の婚約は、お許と決めたのではない。これは、太閤と決めたのじゃ。仮りに若君が雀であろうと百舌鳥であろうと、そのため婚約を破棄する気などはみじんもない。たとえ若君は器量人ならずとも、太閤の子とわしの孫じゃ。二人の間に産れる者が、みな雀であろうとは思うまい……人間というは、カナメカナメの約束は破らず、その後に夢も祈りも繋げるもの……とは思わぬかの」
　且元はホッと大きく息をした。
　いま、自分の一語一語が、豊家ばかりか秀頼の運命に大きく関わるものだと思うと、躰の節々まで痛いほどに硬ばって来るのである。
「内府さま、とてものことに、もう一つだけ、この且元にお聞かせおき下さりますまいか」
「ああ、今宵は二人だけの話と言うた筈、何なりとお訊ねなさるがよい」
「若君が十六歳になりましたる節は、天下をお渡し下さる約束……あのお約束はどうお考えでござりましょうか」
　こんどは家康が大きくため息した。
「むろん忘れてはおらぬ。忘れてはおらぬゆえ、若君の出来を訊ねたのじゃ」

「では、ご器量さえ充分ならばお渡し下さるご所存で」
「片桐どの、お許は話の順序を転倒させてござるぞ。ご器量が抜群ならば、誰が渡さずとも天下の権は執るものじゃ。反対に、この家康が渡したとたんに、器量不足ならば大乱を招くであろう。それゆえ、大乱を招くとわかっていては渡せるものではない。渡しては太閤のまことの約束にそむく道理じゃ」
家康は一息いれて、それからまたつけ加えた。
「よいかの、太閤の最後のお言葉には、正念と妄念と二つござった。正念のおりには、この家康を枕辺に呼ばれて、秀頼をよく見て、器量相当の扱いを頼むぞと、涙を流して仰せられた……」

四

片桐且元は、又しても、きびしい鞭を全身に感じた。
たしかに死ぬ頃の太閤は正気とばかり言いきれなかった。且元自身も、昨日と今日の言葉ががらりと変っているのにびっくりした覚えはある。
（なるほど内府は、はじめからそう考えておわしたのか……）
それは今の時勢を理性で眺めた場合の当然の受取り方であるかも知れない。がしかし、太閤の妄念が何であるかを知る者には、感情のうえでは堪らないことであった。
「片桐どの」と、又家康は言った。
「浮世が意のままになるものか、ならぬものかは互いに知り尽して来ているわれ等とお身じゃ。ここでは腹蔵なく話合おうぞ……」

「は……はい」
「われらも嫡男の三郎信康を、信長公に詰腹切らせられたおりには、いっそここで堪忍袋の緒を切ろうか……と、幾度も思った。しかしこらえた。何のためにこらえたか……わしが信長公の日本統一を助けなんだら、同じ悲劇が日本中へ無限に続くと思うたからじゃ。応仁以来の乱世がのう……若君のこととてその例外ではあり得まい。その事は正気におわした頃の太閤が、わし以上によくご存知であった筈……したがって、ここでは太閤の正念に従うがわれ等のつとめじゃ」
「申上げましょう」
片桐且元は、もう真情を吐露して家康の翼の下へ秀頼をおくより他にないと思った。
「不肖の眼には、若君さまは、鷹とも鶴とも映りませぬ。が、ただそのあたりの雀であろう筈もございませぬ……」
「なるほどの。では、傅役の人選如何によっては、鷹に育つまいものでもあるまい」
「それが……」と言いかけて、且元はいきなりその場に両手を突いた。
「それが……何となされたのじゃ」
「その、傅役の人選をなされましても……ご母公さまが……ご母公さまが、お任せはなさるまいかと存じまする」
家康は次の言葉を呑み込んで、しばらく息をひそめていった。
家康にもまるきり想像出来ないことではなかった。嫡男の信康が、信長に詰腹切らせられなければならなくなった原因の中には、その母の築山御前の影響が大半……平岩親吉が、どう厳格に育てようとしてみても、母の口出しで思うままには育て得なかったのだ……

「そうか。淀のお方が口出しなさるか」
「口出しの程度……ならばよろしゅうござりまするが、まだ、打物のお稽古も」
「無理もない。母一人、子一人になられたものゆえなあ」
「はい。鶴松君のご夭折で、いっそう気弱うご心配なされて」
片桐且元はそこまで言って、自分の頬の濡れているのにはじめて気付いた。
彼の憂えているのは実は、その一点にあったのだ……
秀頼は格別俊鷹とも見えなかったが、さりとて愚昧な生れつきでもなかった。言わば可もなく不可もない十人並みの器量らしい。ところが生れたおりの条件と環境が悪かった。
老年の父の溺愛と、長子の鶴松を失った勝気な寡婦の偏愛にあっては、どのようにすぐれた質の出生でも、そのまま鷹にはなりにくい。秀頼は、幸福すぎて不幸なのだ……

五

人間の幸不幸は、或る場合にはふしぎな皮肉と同居してあるものだった。
現に同じような不幸が、淀の君のうちにあった。
且元の眼に映る淀の君は、勝気で、美貌で、才気煥発の稀に見る才媛だった。
若し彼女がそれを意識せず、ひたすら良人に献身していったとしたら、おそらく北政所にまさるとも劣らぬ内助の賢夫人になるであろうと思われた。
ところが彼女は、何よりも先ず、自分の賢さを知り、美貌を知っていた。家格のよさも、太閤の権力の大きさも知っていた。

そのゆえに、彼女は彼女の方から燃え立ってゆく切ない思慕や恋情は知り得なかった。彼女の場合、世の男どもは、みな彼女に慕い寄って来るための存在で、彼女の方から身をこがす対象ではあり得なかった……

（不幸なお方……）

且元は今までにもよくそれを思ったことがある。人生の仕合せは惚れることの中にあって、惚れられることの中にはない。淀の方は恐らく生涯その仕合せを味わい得ないお方ではあるまいかと……

そうした淀の君だけに、秀頼を自分以外の者の手には渡し得まい。たとえ渡してもいちいち干渉するであろうし、不満はそのまま怒気にもなろう。

格別すぐれた性質でもなく、しかも大坂城の主という重荷を背負うて生れて来た秀頼。その秀頼がこうした母の手許で……女性ばかりの中で育つとしたら、いったいどれだけの武将になれるというのか……？

「フーム。そうか」

と、家康はまた唸った。

「すると、これは、家康がひとり相撲であったかの」

「と、仰せられまするると……」

「わしは、お許と腹蔵なく今後のことを話合うて、お許を傅役にあげたかったのじゃ」

「それは……」

「さすれば、太閤の正念を奉じての、とにかく持って生れただけの器量は充分に伸してやれるで

あろうとの。人間、十六歳にもなれば、そろそろおのれの力量もわかりかける。あっぱれな者ならばそのように。百万石の者ならば百万石。五十万石の者ならば五十万石……器量次第に預けられてあるものを預けるまで……と思うていたが、お身はそれを引受けかねるか」
　且元はまたあわててさえぎった。
「いいえ、決して、引受けないなどとは申しませぬが、何分にも……」
「淀のお方が、お身の思うままにはならぬといわれるのであろうが」
「こ……この儀は、しばらく……しばらく、且元に、考えさせて頂けますまいか」
片桐且元は、これで家康の心の底はわかった気がした。たしかに家康のいう通りと思う。この世は、決して一家や一族の野心や妄執で左右さるべきはずのものではなかった。
　預けられるだけの実力のある者が、しばらく預かるだけのものに違いない。
　いや、たとえどのようにあがいてみても、必ずそうしか成り得ていないのが厳然とした事実ではなかったか。
（といって、傅役のことをいまこの場で断っていったとしたら、秀頼はいったいどうなるのだ……？）

六

　淀の君が果して何というか？
　とにかく且元は、家康からこうした話のあったことを適当に匂わせながら、その意見を聞いてみるより他になかった。

「そうか。では傅役のことはしばらくおこう」
家康は話題を変えた。
「さて、その話はおくとして、次に家康が、こなたに含んでおいて貰わねばならぬのは、この城にある黄金のことじゃが……」
且元は又狼狽して視線を伏せた。
（到頭、話が出てしまった……）
家康が忘れている筈はないと思っていたものの、いきなりここで、話が出ようとは予期していなかった。
「どれほどあろうと、それは豊家の私財ゆえ、わしはその額などを知ろうとは思わぬ」
「私財……と、お認め下さりまするか」
「私財に相違ない。又、わしは、こんど戦事では一切若君や淀のお方の責任は問わぬといった……それゆえ、決してそれにこだわるのではないが、しかしその量が、莫大なものであることもよう知っている」
「仰せの通りにござりまする」
「それでとにかくお身にたずねてみたいのじゃが、お身はこの黄金が使途によっては、天下争乱の原因に充分なり得るものと考えてみたことがあろうか」
「は……はい。それはもう……」
「そうか。では、何う使えば、どのような結果になるかは申すまい。が、問題は、その威力に、淀のお方がお気付きなされておわすかどうかじゃ」

「それは……」
「いずれはお気がつかれよう。お気のつかぬお方ではない。したがって、前々から、この使途を、お側の者がそれとなく暗示してあらねば一大事にもなりかねない」
「一大事……と仰せられまするると？」
旦元は、わかっていながらわざと家康に訊き返した。すでにその話が、淀の君と旦元の間に出たことがあるだけに、とぼけてみせずに居られなかったのだ。
「こんどの戦で、日本中へ牢人がたくさん出ようでの」
「なるほど、それは確に……」
「第一等の器量人は、それぞれ諸大名が拾い取ろうが、拾いきれない者もたくさん残ろう」
家康はいよいよ声をおだやかにして、
「この拾い残りは、大体三通りの人物に分けられる。相当な器量を持ちながら、人とは和せない狭量な偏屈人。次には全く器量の劣る無能の者。そしてもう一通りは器量は並みながら律義すぎて世渡り下手な正直者じゃ」
旦元は、又まじまじと家康を見つめだした。まだそんなことまで考えてみたことはなかったが、大ぜいの失業牢人が世にあふれると、たしかにそうしたことになりそうだった。
「今までは、槍一筋の手柄にものをいわせて歩けた戦国だった。しかし、これからはそうあってはならぬ。泰平の世に向く者と向かぬ者とが自然に選りわけられてくる。そして前にあげた三者が多く取り残される」
「ごもっともに存じまする」

「取り残された者どもに、若し莫大な黄金をバラ撒いたとしたら何うなろうか。彼等は不平満々ながら戦う以外に能力を持ち合わさぬ律義者ども……片桐どの、わしが警戒するのはその一点じゃ。おわかりでござろうな」

且元は息を詰めてうなずくより他になかった。

七

「仮りに……」

と、家康は言葉を続けた。

「淀の君は女性のお身じゃ。女性は賢いお方でも感情のおもむくままに激し易いもの。もしも何かを誤解なされて、われ等と気まずくなったおり、黄金をもって、牢人どもを召し集める……というようなことをお考えなされたら、それこそわしも捨ておけぬ……そこでお身との相談じゃが、お身に何かよい思案はなかろうかの」

それは、どこまでも柔い物いいながら、且元には、一種凄愴な脅迫にも感じ取れた。磨ぎすまされた短刀をやんわりと咽喉笛につきつけられて、私語されている気持なのだ。

「なるほど、これは……一大事の意味……相わかってござりまする」

「それゆえ、そのようなことのないように致すには……何かよい思案はあるまいかの」

「むろん、よく内府さまのお心を、ご母公さまに通じさせてはおきまするが……」

「そうじゃ。むろんそれが第一じゃ。しかし、ただそれだけでよいものであろうかの」

且元の額も襟もとも、びっしょりと汗になった。

（いったい家康は、自分に何をせよといっているのか……？）
わかっているようでわからなかった。
ハッキリと私財は認めるといい、こんどのことでは淀のお方は一切責めぬといい切った上での、黄金談義なのだ。
怪しからぬ黄金ゆえ、捨てさせましょうとも、埋めさせましょうともいいようがなかった。
家康は、眼を細めるようにして、且元を見まもっている。
且元に、そこまで深い思案があるかどうかを、冷静に見抜こうとしているような皮膚に痛い視線であった。
「片桐どの」
「はい」
「お身にも覚えがあろう。強い家臣を持つと戦がしてみたくなるものじゃ」
「覚えがござりまする」
「黄金とて同じこと。持ってあれば使うてみたい。そして、その使途に満足すると、黄金はかかるところへ使うものであったかと納得する」
「仰せの通りと存じまする」
「淀のお方とてその例外ではあるまい。どうじゃな、淀のお方に、太閤のお志で建てられた方々の神社仏閣などの修理やら再建やらをおすすめ申してみては」
且元は、思わずポンと膝をたたいて、
「なるほど、これは……」

と、あとの言葉をのみ込んだ。
「わしはの、天下を預けられたうえは、三つのことを怠るまいと思うて居る。その第一は教学の道をつけてゆくことじゃ。実は今日もそれで藤原惺窩という朱子学をやる者に、わざわざ京から来てもろうて意見を聞いたのじゃ。南北朝以来、一日として平和な日がなかったのは、足利幕府に、何が正しく、何が正しくないかのけじめを教える筋金がなかったせいじゃ。この事は円光寺の元佶もしみじみと申している。それゆえ、学問の普及とともに神社仏閣の尊崇をすすめて礼を正させる……さすれば、太閤のご菩提を弔うことにもなり、且つはまた世のために役立ちながら豊家の安泰を祈念してゆく道にも叶う……どう思うぞ」

八

片桐且元は、次第に自分が太く粘った蜘蛛の糸で、がんじがらめに取りこめられてしまいそうな気がして来た。
（何という肌理のこまかい思慮であろうか？）
莫大な黄金をもって牢人集めなどをやられてはたまらない……その辺までは且元も考え得た。考え得ればこそ、何をいい出されるかと、ハラハラしながら聞いていたのだが……
しかし、その遺産を神社仏閣の修復や建立に使わせたら、無駄にして無駄にならず、しかも、淀の君も善行を施したという満足感で危険な火遊びはすまいというのだ。
（いったいどうしてこんなことまで気が付くのであろうか……？）
驚嘆すると同時に、いいようもない薄気味わるさがつきまとう。事によると、これは古往今

来、類のない大奸物なのではなかろうか……？

　ここではすでに諸大名の武力は豊家の味方とは限らなかった。もし味方があるとすれば、それは莫大な黄金だけ……その黄金を根こそぎ費消させてしまったあとで、秀頼の器量は常人に劣るなどといい出されたら、何うなるのか？

「なるほど、仰せは、よく相わかってござりまする」

「わかったといわれると、ご納得なされたという意味かの」

「内府さま、この話は私は、ご母公に、お千姫さまのご婚礼の話と一緒に切り出しとうござりまするが、如何なもので？」

　それが今の且元に斬り返せる唯一つの口実だった。

　家康が、初孫の千姫をなめるように可愛がっているというのは、秀頼の側近でも充分噂の種になっていた。

　それゆえその千姫を秀頼母子の許へ人質に出す気があるかどうか、それで家康の心の奥を覗いてみるより他になかった。

「――それは延せ」といわれたら、且元も今の話を、その時まで淀の君の耳には入れずにおこうという気であった。

　家康はニコリと笑った。且元の思案に気付いたのか、それとも、千姫のことをいい出されてその愛くるしい姿を思い出したのか。

「よいよい」

　家康は案外素直にうなずいた。

「太閤のご遺産を、日本国に背骨を通す教学の一助に使って貰おうというのじゃ。淀のお方に、あらぬ疑念など起させては相成らぬ。なるべく早くお千を若君のお側へ移そう」
「と、仰せられると、それまでご母公には……」
「そうじゃ。黙っていて、すべてがうまく行くように、和んだ空気にしておくのじゃ」
そういってから、家康はすぐまた話題を次へ移した。
「片桐どの、若君のお傅役じゃが、これもわしは口出しはすまい。お身からよく淀のお方にご相談申し上げて下され」
「は……はいッ」
「そして、大蔵の局の伜のう、大野修理……あれもお側へお返し申すゆえ、局とともに充分豊家の先々を考えてご奉公あるように、お身からよく申し含めて下され」
且元は、また口を半開きにしたまま黙ってしまった。
(家康とはいったい悪魔なのか仏なのか……?)
これが悪知恵だったら、それこそ、且元などの想像も及ばぬ極悪人に相違なかった……

政略婚略

一

「兄上は、それをご承知なされたのか」

ここは二の丸の秀忠の居間であった。

秀忠の前に坐って嚙みつくように問いかけているのは、関ケ原で負傷した右腕を、まだ首に吊っている弟の下野守忠吉だった。

同じ西郷局の腹から産れたこの兄弟は年齢もさして違わず、顔だちもよく似ていたが、その気性は雲泥の差であった。

秀忠はどこまでも温厚な長者の風格をそなえているのに、忠吉は結城秀康におとらぬ激しさを持っている。

「お父上の仰せじゃ。わしが抗う理由はあるまい」

秀忠はきちんと坐ったまま眉ひとつ動かさずに答えてゆく。

「それが腑に落ちぬ！」

と、忠吉は膝をすすめて舌打ちした。

忠吉のわきに坐っている本多佐渡守正信は、困りきった表情で黙っていた。

つい先頃までは、本多正信は、家康の側を離れぬ執事であったが、こんどの戦で江戸を発つとき、家康の用は伜の正純が代って、老巧な正信は、秀忠に付せられたのであった。

「兄上は、お父上のなされることには一切意見をさしはさまぬ。是も非も問わずに服従なさると決めてあるのか」

「下野どのは、そうせぬがよいと思われるか」

「事によりけりじゃ！」

「ならば、これは従うてよいことじゃ」

「わしはそう思わぬ。お父上は秀頼君母子をお許しなされた……それでもう充分に太閤への義理は果たした筈……この上、なんでお千姫まで秀頼君に人質に差出す要があろうぞ」
「人質ではない。太閤ご生前からのご婚約じゃ」
「人質じゃ！」
と、忠吉はまたいい返した。
「頑是もないものを質に取られて、無法ないいがかりをつけられたおり、黙って見殺しにする……それで悔いはないといわれるのか……いや、それも当方に弱味があるならやむを得まい。が、いったいそのようにして秀頼君母子の機嫌をとる必要がどこにあるのだ。ここではハッキリとお断わり申すが、天下の諸侯にわが家のけじめを示すところと思されませぬか」
「下野どの」
秀忠は怒りもしなかったが、笑いもしなかった。
「お身は、お父上が、お身に清洲の城へ入れというたのが不服なのであろう」
「い……いま、そのような、話をしているのではござらぬ」
「お身は、この大坂城に入りたかった……江戸にはわし、大坂にはお身で、東西を押えようと思うていた……それでお千のことに異を唱える。もしそうであったら慎しむべきことじゃ」
「なに、この忠吉が不謹慎だといわれまするか」
「お父上のご思案はもっと深い」
「どう深いといわれるのじゃ」
「もう戦国は終らせねば相成らぬ。戦国の終りを天下に示すに、争うてみせて何とするのじゃ。

先ずもって、堪忍第一に和してみせるが先決じゃ。まだまだ下野どのや、わしの思案は、お父上には遠く及ばぬ。よいかの、江戸と大坂が和してゆくためには、中間の清洲がいちばん大切な場所になるのじゃ。尾張一国をあてがわれて、下野どのは不足なのか……」

二

下野守忠吉は言葉に詰って、小刻みに膝をたたいた。

尾張の清洲が、どのように重要な位置にあるかなどいわれなくともわかっていた。それならばこそ太閤も、子飼いの剛直者、福島正則をおいて固めていたのだ。

その正則を安芸の広島四十九万八千二百石に移封して、そこへ下野守忠吉をおき、五十二万石を与えようというのだから、それに対する不平などは口にしてよい事ではなかった。

ただ不満は、秀頼と千姫の婚約を、改めて確認した事にある……と、忠吉は思っていた。ところがいま、兄にハッキリと指摘されて自分の本心が、はじめてわかった気がして来て忌々しかった。

（そうか。兄はそう取るのか……）

忠吉はこの取澄した兄を、何か一言でやり込めてやりたかった。

「――姫が可愛くないのか」

などといってみても無駄らしい。この兄は父のいうことには絶対服従するように、すっかり馴らされてしまっている。

「兄上、兄上は、この忠吉を警戒しておわすようじゃな」

「戯れ言はいわぬものじゃ。何で秀忠が下野どのを警戒などしているものか」

「でなくば、わしが大坂の主になりたいなどという妄想はなさらぬ筈じゃ」
「ほう、すると、これは、秀忠の妄想であったというのか。それならば嬉しい。安堵致した」
　忠吉は又はげしく舌打ちした。
「兄上は、いったいわが家と豊家の間が、永遠に仲よく続くと見通されてか」
「下野どの」
「われ等はそうは思わぬ。こちらで情誼を尽し、頭を低くしてゆけばゆくほど、相手の姿勢は高くなる。三成がよい例ではござらぬか。お父上が伏見でお助けなされ、結城どのにわざわざ大津まで送らせた……それがいったい何うなったと思召す。逆に彼を増長させせただけではなかったのか……」
「下野どのはまだ若い。三成などは例外、もの事はすべて努力が第一じゃ。わが家と豊家の間が仲よく行くか行かぬかではなくて、どうすれば仲よう行けるか、その努力が先になされなければ意味はない」
　秀忠の答えは、口調までが父に似ていた。何の遅滞もなく、頭から忠吉の意見など容れようとする気のない流れるような老成ぶりであった。
　本多正信が、たまりかねて口を出した。
「下野さま、このご婚約を破棄なされて、次にどうせよと仰せられるので？」
「爺には、それがわからぬのか」
「はい。とにかくご婚約は破棄……と、中入れましたら、何うなりましょうかな」
「むろん向うは落胆しよう。問題はそのあとじゃ」

「なるほど……」

「わが家に敵意ありと知って、不平の徒が策動しだす。つまり尻っ尾を出したところで、それ等の狐どもを狩っておくのじゃ。むろん出方によってはそのまま城を収めも出来よう」

正信はケロリとした表情で、

「下野さま、そのような事は、他の席ではお口になさりまするな。お父上が羞かしがりましょうでの」

「なんだと!? お父上が羞かしがる……」

到頭忠吉は血相変えて正信に向き直った。

三

正信は相変らず淡々とした顔つきでいってのけた。

「はい。下野さまの仰っしゃることは、二、三千石取りの侍どもの申すことで」

その突き離すようないい方は、忠吉の怒りに冷水を浴びせかけた。

若しこれが結城秀康だったら、恐らく手にした茶碗をたたきつけ、刀の柄に手をかけていったに違いない。何れも激しい気性ながら、秀康と忠吉の違いは、激怒を発したあとにあった。

「ふーむ。そうか」

忠吉は、自分の思案を二、三千石取りの侍の分別といわれたことで、もはやこのまま引きさがれなかった。声の静かさに反比例して怒りは底に燃えひろがって行っているのだ。

「すると、清洲を預かるほどの大名の分別とはどのようなものじゃ」

「それならば、先刻から中納言さまが仰せられてござりまする。お父上さまのお言葉どおり、千姫さまを能うかぎり早く秀頼さまの許へ差出し、日本中の諸大名に、泰平の御代になったぞと、そのあかしのお花見をさせてやるのでござりまする」

　正信は孫でも説くような口調でいって眼を細めた。

「いま、日本中では、まだ戦のあとの殺伐の気が納まっては居りませぬ。よく考えれば、誰もご当家に敵し得るものはない……と、わかっていながら、まだこの先何が起るかとソワソワしています。そこへお千姫さまと、秀頼君を並べて見せてやる……何れもまだこの世のけがれを身につけた人ではない。雛壇に飾られた美しいお伽話の中のお方じゃ。二人並べてご覧じろ。そのまま生きた花でござりましょう」

「ふーむ」

「その花を見て、はじめて諸大名はホッとする。御両家が一緒ならば、争う種はもう無いのだと、改めて世の中を見回しまする。ハハハ……改めて世間を見直すと、いよいよもってご当家の実力が身にしみる。泰平とは、そのようにして招くもので、血ばかり流すものではない……と、かようにお父上さまはご判断なされてのお指図にござりましょう。なあ中納言さま……」

　秀忠は、きちんと坐ったままで、かくべつ頷きもしなかったが、異議もさしはさまなかった。それがまた忠吉には許せない偽の装いに見えて来る。

　父にはさからうまい……というのは、若しさからって家督のことでも云々されてはという保身の偽装に通じそうな気がするのだ。

「一応！　忠吉うけたまわった。では、忠吉の存念を申し上げよう」

「ほう、まだ、ご異見がござりまするか」
「無くて何としようぞ。昔、平清盛は、その母池の禅尼の乞いを容れ、頼朝が亡弟の面ざしに似ているからとて、これを助け、その頼朝のために滅亡の憂き目を見たのをご存知か」
「承知いたしてござりまする」
「世間でこの故事を何と見るかは問うところではない。忠吉はこのおりの清盛入道は慢心してあったと思うのじゃ。もはや勝った！　誰も平家に歯の立つ者は居らぬ……その慢心が仏ごころに姿を変えて頼朝を助命させたと……」
そこまでいうと、こんどはピシリと強い秀忠の言葉であった。
「下野どの、あとはいうまい。不謹慎じゃ」

四

「ほう、清盛と頼朝の例が不謹慎……」
忠吉の頬は蒼白だった。声はいよいよ刺すような静かな冷さを帯びている。
「では、お兄上は、清盛入道は慢心してはいなかったとご覧なされてか」
秀忠はまだ眉毛ひとつ動かそうとしなかった。
「清盛入道は慢心していたであろう」
「それならば、その轍を踏まぬよう用心なされたら如何であろう」
「充分用意致してある」
秀忠の風貌には頭脳の冴えは感じられなかったが、その返事は刻み込まれてある経文を誦する

ように淀みなかった。
「下野どの、お身の言葉がそのままお父上を責める言葉になってゆくのにお気がつかれてか」
「なに、お父上を……？」
「そうじゃ。清盛入道は慢心してあるゆえ、頼朝を助けて伊豆へ流してやった。これはどこまでも憐憫じゃ。お父上のなさることと比較するのは不謹慎と心づかぬか」
「……」
「お父上は、秀頼君を立てていこうとしておわす。力と力の世界から、道の世界へ新しく踏み入ろうとしておわす。いわばお千はその新しい道の世界に赴く最初の使者じゃと思われぬか」
「思われませぬ残念ながら……やはりこれは政略じゃ。それも気の弱い、必要以上に頭を下げた政略じゃ」
「そう見えるかのう下野どのには」
「見えまする！　これ以上豊家の旧臣に騒がれては拙い。ここではひとまずみなの感情をなだめておくが得策……そう考えて差出す人質じゃお千姫は」
秀忠ははじめて大きく吐息した。
「お許と論争は好まぬ。では、それとなくお許の意見をお父上に告げてみよう」
「そう願わしゅう……決して忠吉は、自分で大坂城が欲しいからでもなければ、格別お千姫に同情しての事でもない。ただ、この位で易々と泰平の風が吹く……などと思うていては甘すぎると申すのじゃ。お千姫を遣わすと、先方では人質を取った気で、一層強くなる場合がある……さすれば姫は悲しい犠牲になるであろう……と存ずるゆえに申したのじゃ」

どうやら兄弟の論争は、表面忠吉の勝ちになった。
といって秀忠が敗れたともいい得ない。彼は論争をきらって口を噤み、一応敬虔に舎弟の意見を父に取次いで見ようと思ったまでなのだ。
忠吉は秀忠が沈黙すると不安になった。
「お兄上、先ほどわれ等は清盛入道の話はしたが、かくべつお父上と比較など致したのではございませぬゆえ、その点誤解なきように」
「わかって居る。お身の言葉のままには取次ぐまい」
これで漸く忠吉は面目が立った気がした。面目は立ったものの、兄がこれで婚約を破棄するように進言するとは思えなかった。
（この兄にとって、父はそのまま神仏であり真理なのだ……）
「江戸にある姫君が、今宵のこの話を、大きゅうなられお耳になされたら、さぞ心打たれることでござりましょうて。よいお父上、よい叔父御を持たれたことを……」
本多正信が、他人ごとのようにいって、二人の前へ葡萄酒の壺とグラスを差出したのはその時だった……

五

兄弟はそれ以上千姫のことにはふれなかった。
江戸と大坂を結ぶ街道筋の、新しい配置について、別の思惑を語り合った。
箱根以西では駿府の中村一忠が伯耆の米子へ十七万五千石で移されて、そのあとに、伊豆の韮

山にあった内藤三左衛門信成が入れられた。これは所領は僅かに三万石で、その付近の沼津には大久保治右衛門忠佐がおかれ、興国寺には天野三郎兵衛康景、田中には酒井与七郎忠利と一族や譜代の者が用心ぶかく配置された。

遠州浜松の堀尾忠氏は雲州松江で二十三万五千石、同じく掛川の山内一豊は二十万石の大身になって土佐の高知に移封され、そのあとへは松平左馬允忠頼と松平三郎四郎定勝が入り、三河の吉田城にあった池田三左衛門輝政は五十二万石の大大名になって播州の姫路城に入り、そのあとへはこれも一族の松平与次郎家清が三万石を分け与えられて入ることになった。

参州岡崎の田中兵部大輔吉政は筑後久留米で三十二万五千石に加封されて移され、そのあとへは、本多豊後守康重が五万石で入れられた。

こう見て来ると、他所へ移された豊家の旧臣たちはみな莫大な加増を受けているのに、一族や譜代のものは、岡崎の五万石が筆頭で、他は殆んど三万石以下であった。

「その中で、下野さまだけが、清洲五十二万石を頂く。ありがたいことで」

話の途中で、又ちらりと本多正信が笑いながらいってみたが、その時にはもう忠吉はかくべつ怒りもしなかったし、関心も示さなかった。

そういえば忠吉の舅であり後見でもあった井伊直政さえ、石田三成の居城の佐和山を与えられたが、その禄高は十八万石に過ぎなかった。

むろん本多正信は、忠吉に皮肉をいったのではない。人物では決して福島や池田に劣らぬほどの人々がどうして譜代なるがゆえに、三万石、五万石の小禄に甘んじているのか？

それに忠吉が果して気付いているかどうかと思って口にしてみたのだが、まだ忠吉は、そこま

で考え及んでいる様子はなかった。

　実は、そういった本多正信自身、家康父子二代にわたって執事の重責を果していながら、その所領は上州の八幡でようやく二万二千石にすぎなかった。

　家康が、どうしてそれほど味方の忠臣たちに酬いることが少ないのか？

　何うしてそれで正信以下の人々が納得してせっせと忠勤を励んでいるのか……？

（その辺のことに思い至るようになったら、下野さまも一人前になられるのだが……）

　そう考えていい出してみたのだが、それ以上の説明に入る前に、又新しい訪客のあることが取次がれた。

「本丸のご母公さまのもとから、大蔵の局がお見えになりました」

　小姓にそう取次がれると、秀忠と忠吉は顔を見合せてグラスをおいた。

「私がご用を承りましょうか」

　本多正信は口をはさんだ。

「夜中、何ごとでござりましょう？」

　秀忠はちょっと暫く考えてから、

「いや、わしが会おう。お許先ず、丁重に客間へご案内申しておいて呉れ」

　そういってから、忠吉に向き直って、

「お千がことであろう、会うて参る」

　と小さくいった。

六

秀忠は、忠吉にしばらく待っていて呉れるように告げ、相手に、土井利勝を呼んでおいて居間を出た。

そしてきちんと衣服を改めて客間へ出てみると、客間ではもう本多佐渡守正信の前に、大蔵の局が、美しい御所人形を並べて、何か楽しそうに談笑しているところであった。

「これはこれは中納言さま、わざわざお目通りには及びませぬと、ただいま佐渡どのまでご辞退を申し入れていたところでござりまする」

大蔵の局は、恐縮しながら、しかし晴れ晴れとした表情で秀忠に挨拶した。

「いや、ご母公からのご使者とあれば、お目にかからぬは失礼。して、若君もご母公さまもご機嫌は……」

横から正信が、

「いやもう、内府さまからのお話で大変なおよろこびと、今その話を伺って居りましたので」

「それは重畳、まずおくつろぎ下され」

「ありがとう存じまする。実はこれなる御所雛は、小野のお通と申す女性が、都でわざわざ人形作りの上手をたずねあて、作らせて若君に献上致したお品でござりまする」

「なるほど、これは美事な肌に塗りあげられている。生きているような愛くるしさじゃ」

「はい。若君さまもお気に入らせられて、時おり出しては眺めておわしたもの……それが、江戸の姫君のお話をお耳になされ、では、あれをお千どのにやろうと仰せられて……」

「ほう、秀頼どのがのう」
「はい。何と申しましてもお従兄妹同志、やはりなつかしくお思いなされるのでございましょう。明早朝、ご使者が江戸へ発たれると承り、ご母公さまも、折角の思召ゆえ、是非ともそのおりお持ち下さるようお届け申して来いと申されましたので」
「それはかたじけない。お千もさぞ喜ぶことでございましょう」
いいながら改めて秀忠は盤上の人形に眼をおとした。内裏雛ではなくて、これは、童子と童女が、螢でも追っているような自由な姿勢で向い合っている六寸あまりの大きさの人形だった。
それを見ていると、秀忠はふっと淋しくなった。
秀忠にとっても最初の子である姫はひどく可愛い。それが成人する姿も見られず、やがて自分は江戸に帰り、姫は大坂へやって来る……
忠吉にいわれるまでもなく、この婚姻のことで、すべてが済むほど甘い世の中でないことはよく知っていた。
(二人が果してこの人形のようになごんだ空気の中で育ち得るものかどうか……)
「中納言さま、よくご覧なされませ。この人形は若君さまにお顔がそっくりでござりまする」
「なるほど、そういえば、この女の童は、お千によう似ているわ」
「ホホ……それで、若君さまも、どうしても今宵のうちに届けよと申されましたので」
秀忠は笑いながら頷いて、改めて人形を見くらべた。作らせた小野のお通が、或いは二人に似せるように人形師に命じたのかも知れない。
「では、これでお暇申し上げまする。呉々も若君さま、ご母公さまから、江戸の御台所さまへも

宜しゅうお伝え下されまするようにと……」
大蔵の局が帰ってゆくと、
「佐渡、その雛を下野どのに見せてやろう」
秀忠はそういって居間へ戻った。

七

居間では土井利勝と下野守忠吉が、家康の外様大名の優遇について思惑を語り合っていた。どちらもまだ若いので、聞きようによっては論戦かとも受け取れそうな声になった。
「するとそなたは、あの莫大な豊家旧臣への恩賞増封は、ご機嫌とりではないというのか」
忠吉は、兄の側用人が、兄同様、成人ぶった様子で忠吉をたしなめようとするので、その利勝の言葉から、逆に秀忠の思案や父への見方を探し出そうとする気になっていた。
「もちろんでござりまする。内府さまが、何で豊家の旧臣などを怖れましょうや。内府さまを怖れさせるほどのご器量人は、今の世にはござりませぬ」
「ほう、すると、お父上は当然、賞すべきものを賞した。それだけのこと……と、思うのじゃな」
「まず、一応はその通りで」
「まず一応……とは、必ずしもそれだけではないと申すのか」
「はい」
「ふーむ、すると、もう一つ、どのような意味があるのじゃ」
「されば、地位も財力も、みなこれ天よりの預かりもの……と、お考え遊ばされる内府さまの御

事ゆえ、今度の戦功により、一応は充分それぞれにお預けなさる……但し、預けられただけの領地領民を、立派に生かしきる器量のない節には、人手は藉らずに預け直す……そのお考えは、当然あるものと拝察致して居りまする」

忠吉は、思わず利勝を見直した。利勝は色白の、銀鱗に包まれて今にも跳ね出しそうな生気を見せている。

「うむ。すると器量次第では、また、さっさと取り潰すと申すのか」

「器量に添わぬものに預けおかれては、預けられた者も、預けた者も天譴を蒙りましょう。これは天下を預かるほどの者の当然具備せねばならぬ覚悟であり、見識かとも心得まする」

「そちは弁舌の立つ男じゃ。ならばもう一つ応えてみよ。譜代の者にかくべつ薄いは何としたのじゃ。譜代のものはもはや試験済み。何れもみなどんぐりの背比べゆえ、二万石五万石の大名にはしてやっても、それ以上に取り立てるほどの器量人ではないというのか」

「これはしたり……」

と、土井利勝は笑った。

「もともと天よりの預かりもの、されば、内府さまがみなに代ってお預かり下さる。めいめいに多くお預けなされては、中に預かりものなることを忘れ、これを私有と勘違い致して、浪費する者や油断する者が現われましょう。よって、その大半は内府さまにお預け申し、ただ身辺の所要だけを自からの手で弁じてゆく。そのためご譜代の団結も用心も二重三重に相成りましょう。この辺が内府さまのご政道の基かとも……」

そこまでいったときに、秀忠が戻って来たので、二人は姿勢を正して秀忠を迎えた。

「何やら話が、はずんでいたようじゃの」
秀忠はそういうと、うしろに人形をささげて従って来ている本多正信をかえりみて、
「佐渡どの、その品、下野どのにお目にかくるがよい」
「ほう……これは愛くるしい雛じゃ。何となされたので」
「されば、本丸の若君から江戸にあるお千に届けてくれよとの贈物……どうじゃな下野どの、この女の童はお千に似ては居らぬかな」
そういわれると忠吉はわざと雛から眼をそらした。

八

忠吉は、兄が何をいおうとして、この人形をわざわざ自分の前に持参して来たかがわかると、たまらなくいとわしかった。
「——どうじゃ。若君もこのようによろこんでおわす。これで両家の間は巧くゆくだろう」
そういいたいのに違いない。が、それは逆の不安にも通じてゆくのだ。
この人形のように、何も知らぬ無邪気な者まで、大人たちの思惑の犠牲にしてかえりみない。
それが許しがたい大人の「不正——」であり「悪業——」でもあると、なぜ反省しないのか。
(いや、反省するのが怖ろしいので、悪業を重ねながら、その悪業にあらぬ希望を托してゆく……)
その人間の悲しさを、兄は何うして理解しようとしないのか。
「何か腑におちぬような顔をなさっているの、下野どのは」
「お兄上には申し上げまい。それがしはこの人形を見て悲しゅうなった」

「ほう、何故であろうかの」
「この人形のように、幼い二人を、自由の世界に放してやれたら……ふっとそれを思うてしもうた」
秀忠はハッとしたようだった。
しかしすぐに、それを平静ないつもの礼儀正しい表情の奥におし包んで、
「そうか。下野どのは見とうないそうな。よし、明朝出発の者が持参出来るよう、よく荷造りさせておいて貰おう」
こんどは土井利勝に命じておいて、それから更につけ加えた。
「よいのう、お千をあまり我儘に育てぬよう、御台所へ呉々も伝言させよ。まだまだ我儘に育てられた子たちが、そのまま仕合せになれるほどの世ではない」
最後の一句はいうまでもなく忠吉への抗議であった。
「かしこまりました。では、早速に」
土井利勝が人形をささげて退ってゆくと、あとへは暫く白けた沈黙が流れていった。
下野守忠吉は、兄を冷い父だと思い、秀忠は忠吉を、むごい舎弟だと思っている。
なるほど千姫と秀頼の将来に、仕合せばかり待っていようとは思えない。といって、この場合それを無理に喜ぼうとし、喜ぶことによって、自分を慰め、この婚約を納得しようとしている秀忠の心が忠吉にわからないのだろうかと……
「下野さま、利勝と何の話をなされておわしましたので」
本多正信が気詰りな空気を解こうとして、また葡萄酒を忠吉にすすめた。

しかし忠吉は一度伏せたグラスを取ろうとせず、
「もう充分じゃ」
軽く手を振ってから、
「利勝は兄上のよいご家来じゃ」
と、笑っていった。
「考え方も、頭の切れ味も、そっくりそのまま兄上になりきっている。それに比べると、忠吉はわがままな武辺者じゃ。お千姫に似た人形など見ていると、ワーッと大声あげて本丸へ斬り込んでゆきたいような気がして来る……」
「ハハ……これはおっしゃることが大仰じゃ」
正信は笑ったが、秀忠は笑おうとしなかった。
と、そこへ又、あわただしく廊下を踏む足音が近づいた。

九

三人は溶け合わない感情のまま、近づく足音に耳をすました。
もうかなり夜は更けている。あるいは下野守忠吉に何か急用でも出来て迎えが来たのかも知れない……本多正信はそう思ってふと立っていた。
足音は一人ではない。
「何誰じゃ」
正信が声をかけて廊下へ出ると、

「おお父上、中納言さまはまだお眼ざめでござりまするか」
廊下の声は西の丸からやって来たらしい本多正純の声であった。
続いて別の男の声が聞えて来た。
「下野守さまも、こちらと承り、急いでお知らせにやって来ました」
その声は永井直勝らしかった。
室内では秀忠と忠吉がチカリと鋭く顔を見合った。
(何か変事があったのでは……?)
当然、その不安が二人の胸をかすめ去った。
廊下での正信の声は聞きとれない。それが一層二人を不安にした。
と、とつぜん、全く思いがけない、明るくのどかな正信の笑い声であった。
「そうか、そうか、それは芽出度い。早速お二人に言上しよう。まあよい、お目にかかってゆくがよい」
正信は正純と直勝を従えて入って来ると、
「申し上げます」
と、いって又ニコニコと笑った。
「何事じゃ佐渡どの」
正信の笑顔にホッとして秀忠が問いかけた。
「上野介も右近大夫も、額に汗しているではないか」
正信はそれには答えず、わざと間をおいてゆっくりといった。

「実は、西の丸にて、芽出度く男子ご出生の由にござりまする」
「なに、われ等に弟が生まれたとか!?」
「はい。ご連枝がふえました。玉のような……と、申しましても、この正純が、直接お目にかかったのではござりませぬが」
正純が昂ぶった様子で後を引きとると、永井直勝も競うように言葉を添えた。
「上様ひどくてれておわしましたが、とにかくお知らせ申せと仰せられました。内心は上々のご機嫌らしゅう拝察したことにござりまする」
「ハハ……これはよい。お父上の顔が見えるようじゃ」
忠吉はあけすけに笑ったが、秀忠は笑わなかった。
「そうか舎弟誕生とは芽出度い。では、その方たちも、それにて祝盃を仕れ」
「そうじゃ。これは葡萄の酒じゃが、とにかく頂いてお祝い申すがよい」
正信がグラスを取って二人に渡すと二人は改めて姿勢を正して、
「お芽出度う存じまする」
うやうやしくおし頂いて、口へ運んだ。
「ハハ…御母子ともお変りはないのだな」
忠吉はまだ笑いがとまらぬといった様子で、自分も一度伏せたグラスを取り上げた。
「よし、わしも祝おう。これは愉快じゃ。どんな顔をしているかの」
その子が、やがて彼のあとを継いで、尾張藩の基礎を固める者に育とうなどとは想像も出来なかったが、とにかくこの朗報は忠吉を明るくした。

忠吉は眼を細めて又ニヤニヤと笑っていった。

十

人間の出生はどんな場合にも陽気を伴うものらしい。
五十九歳で父親になった家康は、考えように依れば又一つ厄介な荷物を殖されたことにもなりかねない。
現に太閤は晩年の愛児のために、死の床でいじめ続けられて逝ったのだ……
しかし、今夜は誰もそうした連想をするものはなかった。若し連想したとすれば秀忠なのだが、彼は仮りにそう思ったにしても口に出す男ではなかった。
「いよいよ御家はご繁昌じゃ」
正信は、秀康、秀忠、信吉、忠吉、忠輝と指を繰っていって、
「今度の和子で男子六人……これはまだまだ後がお出来なさるかも知れませぬなあ」
腹の底から嬉しそうにいうのであった。
実際、戦国時代の男子の出生は、それがそのまま一族に「力――」を加えてゆくのだから、後世の二三男の価値判断とはまるで違っていた。力は生活を戦い取る……という考え方はまだ根深い。
「これで上様もぐっと若返った気分におなりなさろう。この上は中納言さまにも、早くお世継ぎをあげて頂かねば……」
何時かみんなの頭をしめていた千姫の姿は、まだ見ぬ嬰児の上におきかえられてしまっていた。

とつぜん又忠吉が、何を思い出したのか声をたてて笑い出した。
「これはしたり、何となされましたので」
正信がわざとびっくりしてみせて問いかけると、忠吉は兄の方を見やって、
「叱られる。言うまい言うまい」
と、手を振った。
「はて、ひとりでお笑いなされて、言うまいとは聞えぬことじゃ。是非とも承りたいもので」
「ハハ……いや、わしはの、この世の男女の結ばれ方を思うてみたのじゃ」
「というと、色恋のことでござりまするか」
「若返るな爺……婚姻、縁組のことを申したのじゃ」
「なるほど、それで……」
「到頭いわせる気か。お兄上に叱られても知らぬぞ。わしはの、うかつにもこの世には、醜い政略婚略しかないもののように思うていたのじゃ」
「ほう……」
「それでお千姫のことも無性に腹が立ったのじゃ。ところが、よく考えてみると、この世には政略婚略以外の結ばれもあった……それに気付いたら楽しくなったわ」
「お話しなされませ下野さま、どこにそのような結ぼれがござりました」
「ハハ……お父上よ。お父上の周囲には政略婚略による女子など一人も居らぬぞ」
じろりと秀忠は忠吉を睨んだ。しかし、忠吉の口はもう閉されはしなかった。
「ハハ……自分の好きな女子を所望する。そして、その女子に何の気遣いも屈託もなく子を産ま

せる。お父上は、つまらぬ世界の呪縛の外で悠々と営んでおわすわい」
「下野どの！」
「ハハ……もう言わぬ。ただ、お父上が羨しかったのじゃ。いや、そうした営みゆえ、或いは生れた舎弟は大人物かも知れぬぞと、ふと思うた迄なのじゃ。ワッハッハ……」

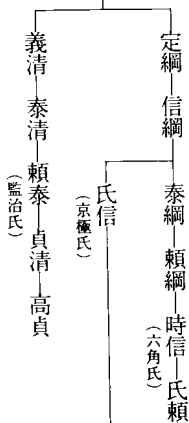
十一

秀忠も到頭笑いだしてしまった。
忠吉の無邪気な喜びに引入れられたせいもあったが、それ以上に、秀忠をホッとさせたのは忠吉の関心が千姫と秀頼の婚約からそれていったことであった。
忠吉にはまだ子供はない。子供を持たぬ者の子供への愛情は、得てして純粋な観念論でありすぎる。
忠吉にここで妙な反対をされると、弟の信吉や忠輝もまた何か口出ししそうな気がするのだ。
それに阿江与の方は、肉親の姉ながら淀の君の性格を、あまり信頼はしていないようであった。
「――どこかに虚無の匂いがします」
北の庄の落城のおりにも、太閤の側室になる時も、どこか捨鉢に近い自暴自棄の感じがあった。もっと沢山子供を産むか、もっときびしく甘やかさぬ良人を持つかすればよかったのに、何れもその逆で、しかも若くて良人に死別した。
それ等の条件の重なりが、淀の君の運命を破るのではないかとこころ秘かに案じている。そうした伯母の許へ千姫をやれというのだから、これとて周囲の情勢次第では迷い出さないものでも

なかった。
（新らしく生れて来た弟が、忠吉を救うて呉れたわ……）
忠吉はその後も上機嫌で、父が何という名をつけるであろうかとか、何日目になったら兄として面会を申し込んでよいものかとか、そんなことを楽しそうに話合って帰っていった。
みんなが帰ってゆくと正信も引きさがった。すでに四ツ半（十一時）近く、淀川を上下する船の櫓音までが聞えてきそうに静かになった。秀忠は一人になると、きちんと正坐して西の丸の方へ向き直った。
「お父上、お休みなされまするよう」
そういってから、あわててまたつけ加えた。
「本日、舎弟の誕生、お芽出度う存じまする」
挨拶しながら、それがいささかも形だけの虚礼でないことを反省し、それから臥床に入った。
臥床に入っても、毎日同じことを念じながら眠りに入る。
それが自分の器量が遠く父に及ばぬということへの詫びであり自戒であった。その自戒を失ったら秀忠は劣等感の虜になり、見るに耐えない姿勢の崩れを露呈しよう。
彼はそれをよく知っていた。知っているだけに、忠吉のような自由な考え方に憧れることはしなかった。
彼は今日、忠吉の話が父の閨房のことに触れたとき、狼狽し困惑している自分を見た。
（わしには創業者の器量はない……）
あるのはただひたすらに父業を守る慎しみだけなのだと、日々夜々の自戒はそれであった。

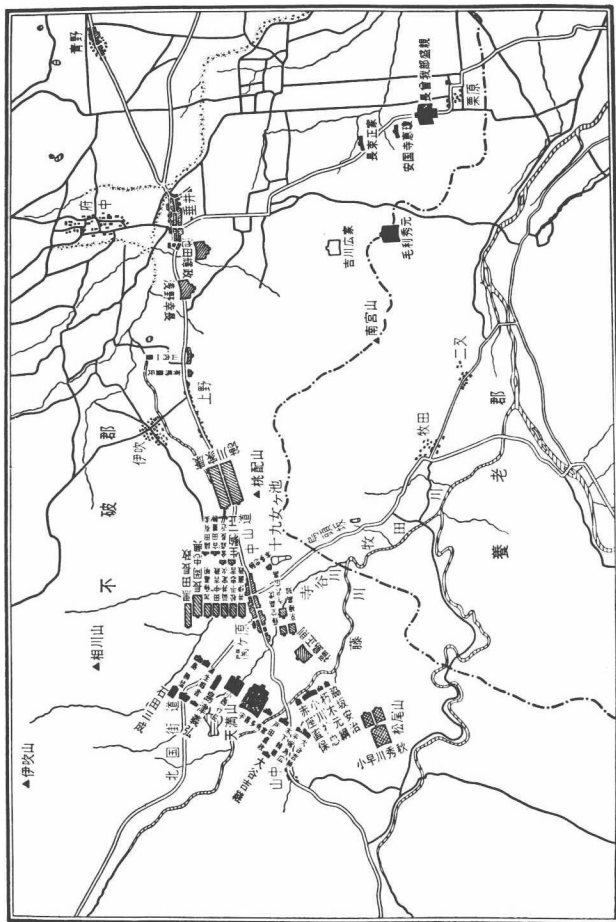
もし彼の姿勢が崩れたら、ただに父業を失うだけではなく、父もまた後継者を育てる労を惜しんだものとして、大きな欠陥を指摘されることになろう。
(わしは父の影でなければならぬ……)
それも美しく偉大な面の父の影で。
秀忠はいつものように、その事を念じながら、瞼に亡き母の姿を描き、わずかの間ながら切ない愛情を注いで呉れた義母の朝日姫を思い描いているうちに、その映像は何時か千姫になり秀頼になっていた。
(どうぞあの二人をも……)
善意そのものの秀忠は、臥床の中でも姿を正したままで夢路へ入った……

佐々木・六角・京極氏系譜

（—は直系或は直系編入の別の明らかでないもの。‖は同族・異族よりの編入）

関ケ原の戦参考図

伊吹山
相川山
不破郡
北国街道
天満山
関ケ原
中山道
山中
黒田長政
長岡忠興
桃配山
十九女ケ池
寺谷川
藤川
牧田川
小早川秀秋
松尾山
伊吹
上野
浅野幸長
府中
垂井
青野
吉川広家
南宮山
長束正家
毛利秀元
安国寺恵瓊
長曾我部盛親
牧田
二又
栗原
養老郡

徳川家康 18
山岡荘八

定価480円

慶長五年九月十五日、家康の軍勢七万五千と三成の同盟軍十万八千の大軍は、ついに関ケ原で激突、未明から申の下刻にかけて血闘の結果、東軍の勝利に終り、三成は京の七条河原で斬られた。大坂城西の丸に入った家康は、諸侯に厳しく賞罰を行い、天下人を目前にした。

SBN4-06-131218-9 C0193 ¥480E (3)